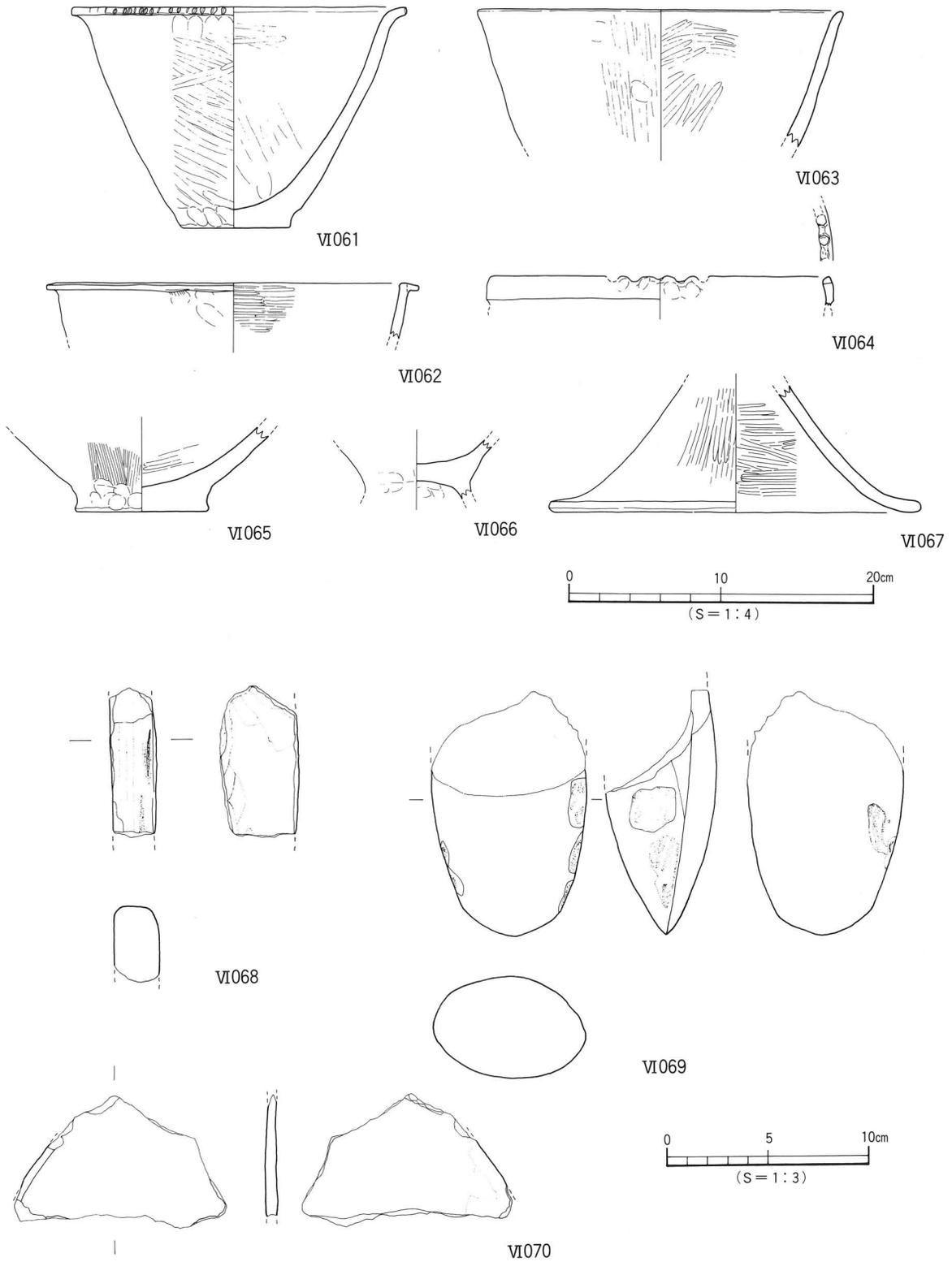


VI 区



第204図 S D VI104中層出土遺物実測図(3)

SD VI104上層出土遺物（第205～209図－VI071～125、図版74）

SD VI104上層からは甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器のほか、棒状の土製品と縄文土器が1点出土した。石器は、石庖丁1点と伐採斧2点が出土した。

甕形土器（VI071～090）VI071～078は折り曲げにより口縁部を成形する。折り曲げが弱いもの（VI071～077）と、折り曲げが強く逆「L」字状を呈するもの（VI078）とがある。口縁端面には刻目を施すもの（VI072～077）と、刻目を施さないもの（VI071）とがある。なお、VI078は押圧を施す。胴部文様は、無文のもの（VI071・078）、沈線文だけのもの（VI072～074）、沈線文と刺突文が組み合うもの（VI075・076）、沈線文と山形文、刺突文が組み合うもの（VI077）の四種類がある。なお、VI072とVI074の沈線文及びVI077の山形文は2条1組の工具で施されている。

VI079～086は粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形する。口縁外面上端に接するもの（VI079～084）と、口縁端部よりやや下がる位置にあるもの（VI085・086）とがある。前者は、口縁部の断面形態が三角形状を呈するもので、口縁端面に刻目を施すもの（VI079～081）、連鎖状刻目文を施すもの（VI082・083）、押圧を施すもの（VI084）がある。胴部文様は、沈線文を施すもの（VI079・080・082・083）、沈線文と刺突文が組み合うもの（VI081）、沈線文と山形文が組み合うもの（VI084）の三種類がある。なお、VI081の沈線文とVI084の山形文は2条1組の工具で施されている。

口縁端部より下がる位置に凸帯をもつもの（VI085・086）は、口縁上端面に刻目を施すもの（VI085）と、押圧を施すもの（VI086）とがある。VI086は凸帯上には連鎖状刻目文を加える。

VI087・088は胴部片である。VI087は沈線文と刺突文が組み合うものである。VI088は沈線文と山形文（2条1組）を施す。VI089・090は底部片で、やや上げ底になる。

壺形土器（VI091～111）VI091は口径35cmを測る大型品である。短く外反する口縁部をもつ。口縁内面には断面三角形状の凸帯と、口縁端面には刻目を施す。VI092～095は短く外反する口頸部をもつ。VI092・093は頸部に沈線文を施す。VI092は口縁端面にヘラ描き沈線文と刻目を施す。VI096～102は外傾する長い口頸部をもつ。VI096を除き、いずれも口縁部内面に凸帯をもつ。VI101は凸帯は全周せず、一部が注口状になる。口縁端面には刻目をもつもの（VI097・099・100）と、刻目をもたないもの（VI096・098・101）とがある。VI103は頸部片である。沈線文と凸帯をもち、凸帯上に連鎖状刻目文を施す。VI104は肩部片。沈線文（2条1組）と斜格子目文を施す。VI105・106は頸胴部片である。VI106の肩部には突起状の浮文が付く。VI107～111は底部片である。VI107～110は中央部がわずかに凹む上げ底、VI111は平底となる。

鉢形土器（VI112～117）VI112～114は口縁部が緩やかに外反するものであり、VI115は貼り付けにより口縁部を成形する。VI116は直口口縁で、口縁端部は丸く仕上げる。沈線文と刺突文2列を施す。VI117は底部片で、くびれをもつ上げ底になる。

コシキ形土器（VI118）VI118は所謂「コシキ」への転用品である。甕形土器の底部を焼成後に穿孔したものである。

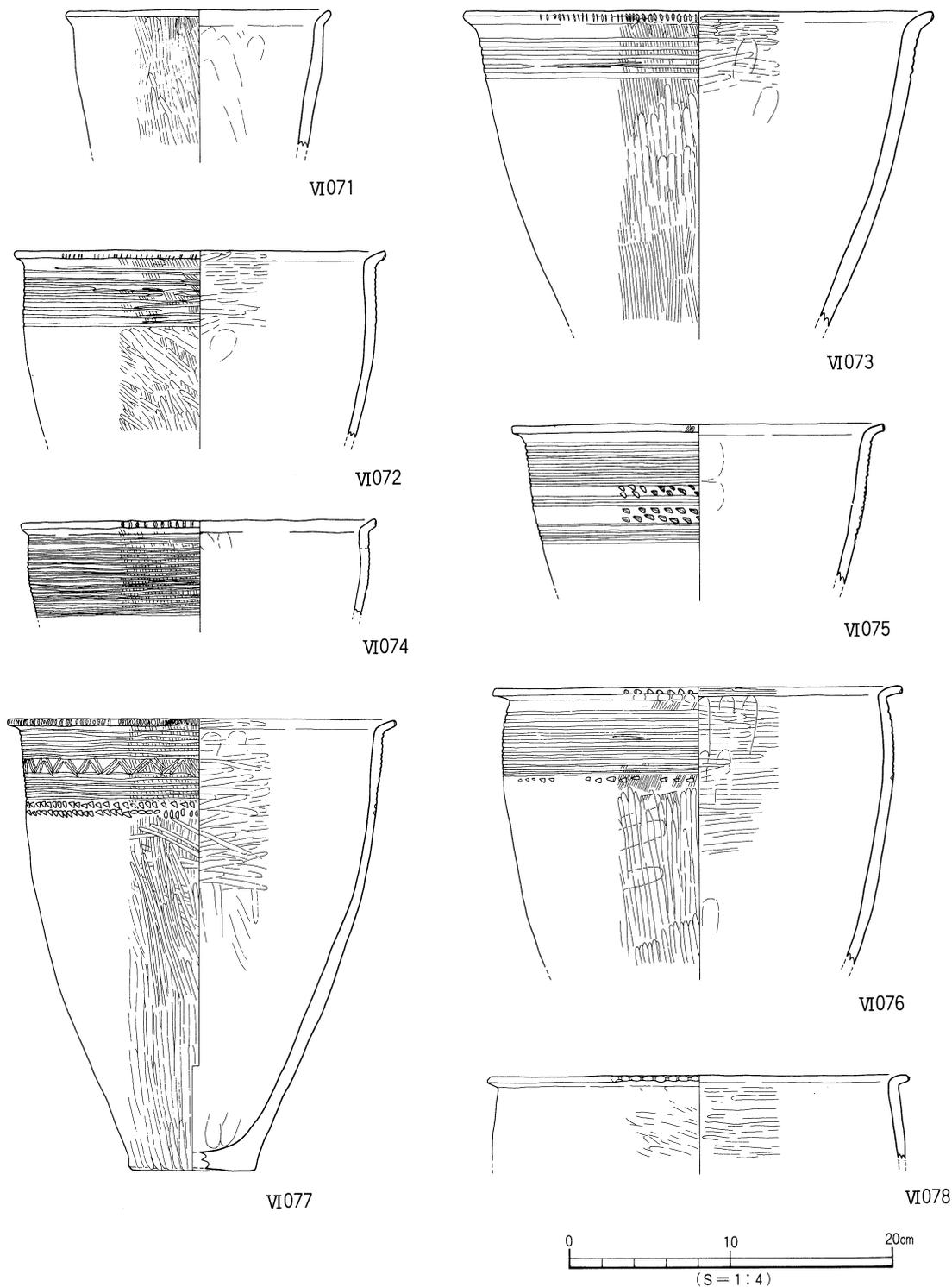
蓋形土器（VI119・120）VI119・120は蓋形土器である。口縁部は緩やかに開き、口縁端部は丸く仕上げる。VI119は天井部の中央部がわずかに凹む。

不明品（VI121）VI121は用途不明の土製品である。両端は欠損する。断面形態は長方形を呈する。

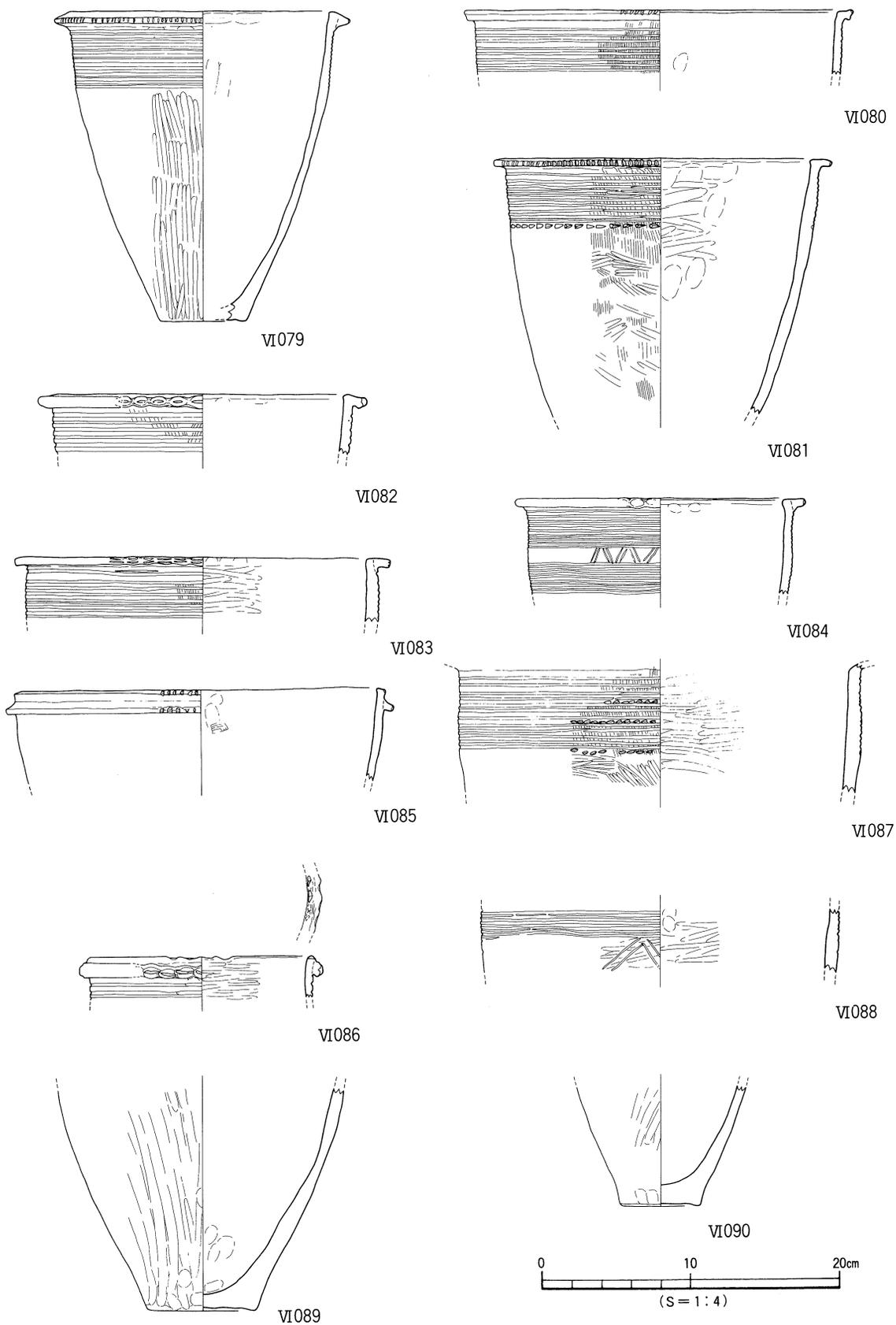
縄文土器（VI122）VI122は縄文時代晩期の深鉢である。口縁端部に刻目、口縁部に2条の平行沈線を施す。

石庖丁 (VI123) VI123は緑色片岩製の石庖丁である。平面形態は隅丸長方形を呈するものと思われる。a面は鑄が明瞭であるが、b面はわずかにみられるだけで、偏両刃である。

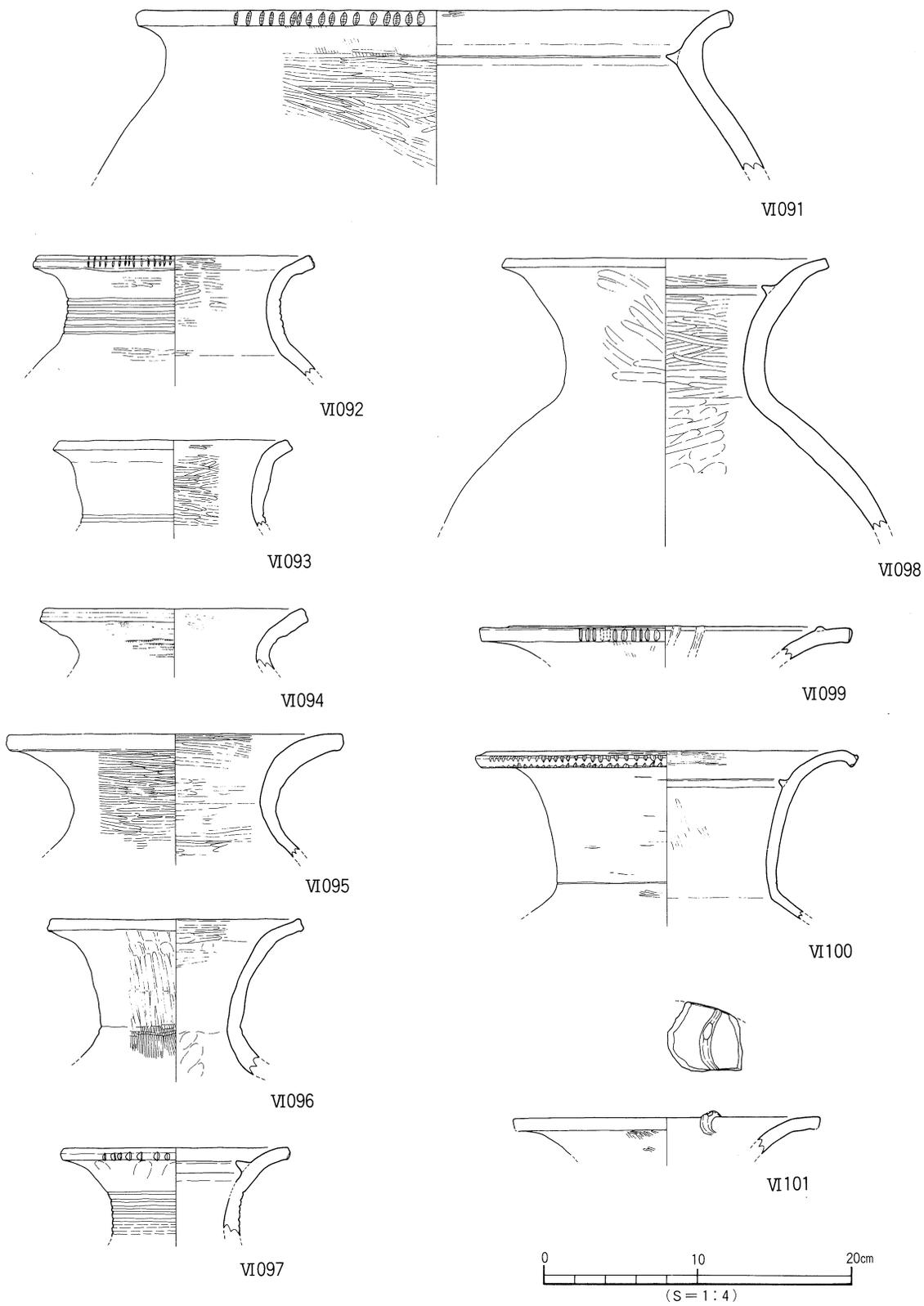
伐採斧 (VI124・125) VI124・125は伐採斧である。VI124は小型の伐採斧で、刃部は破損している。基部の一部に敲打痕が認められることから、破損した後、くさびとして使用されたものと推測される。VI125は変成岩製の伐採斧である。断面形態は楕円形を呈するものと考えられる。



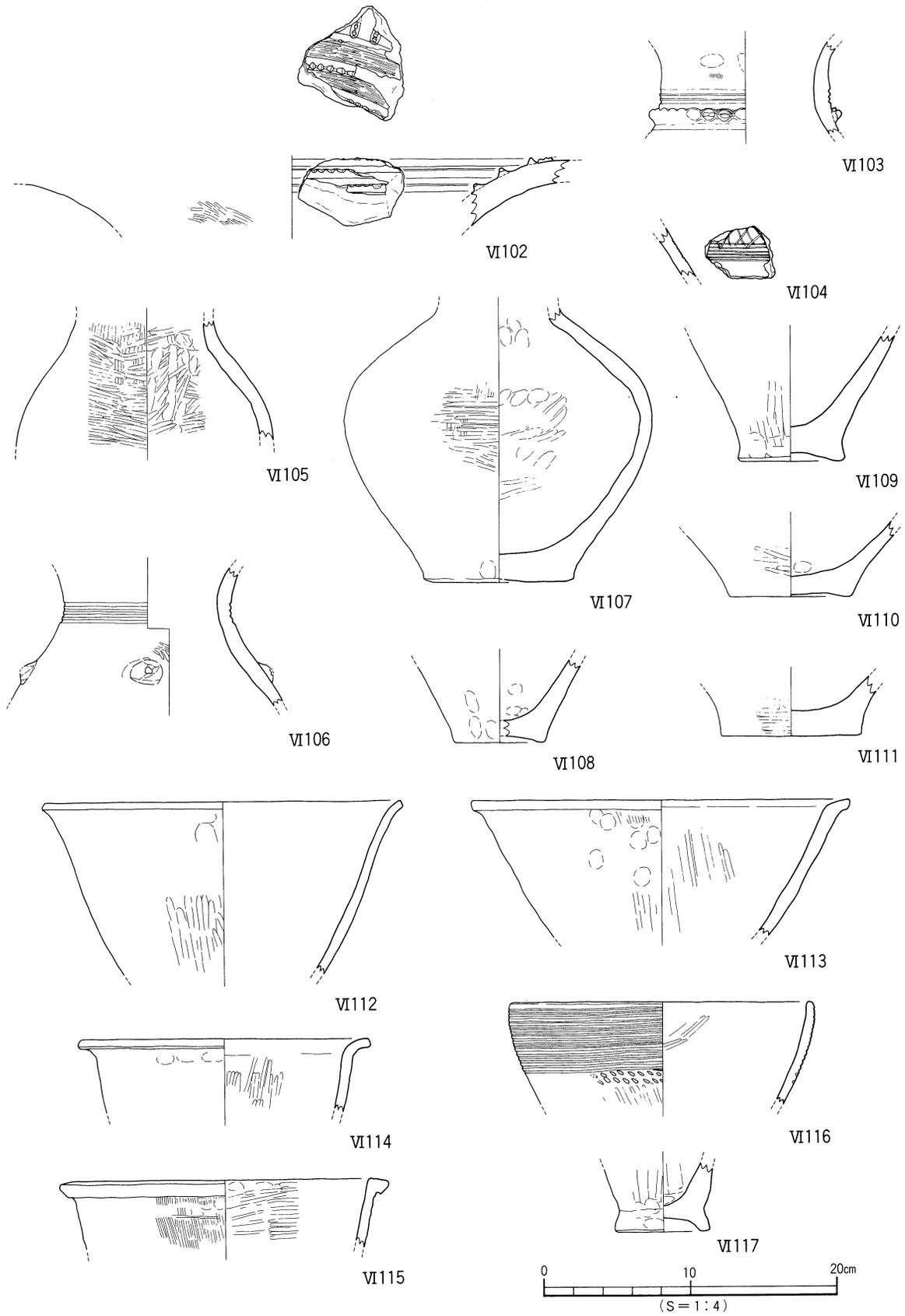
第205図 S D VI104上層出土遺物実測図(1)



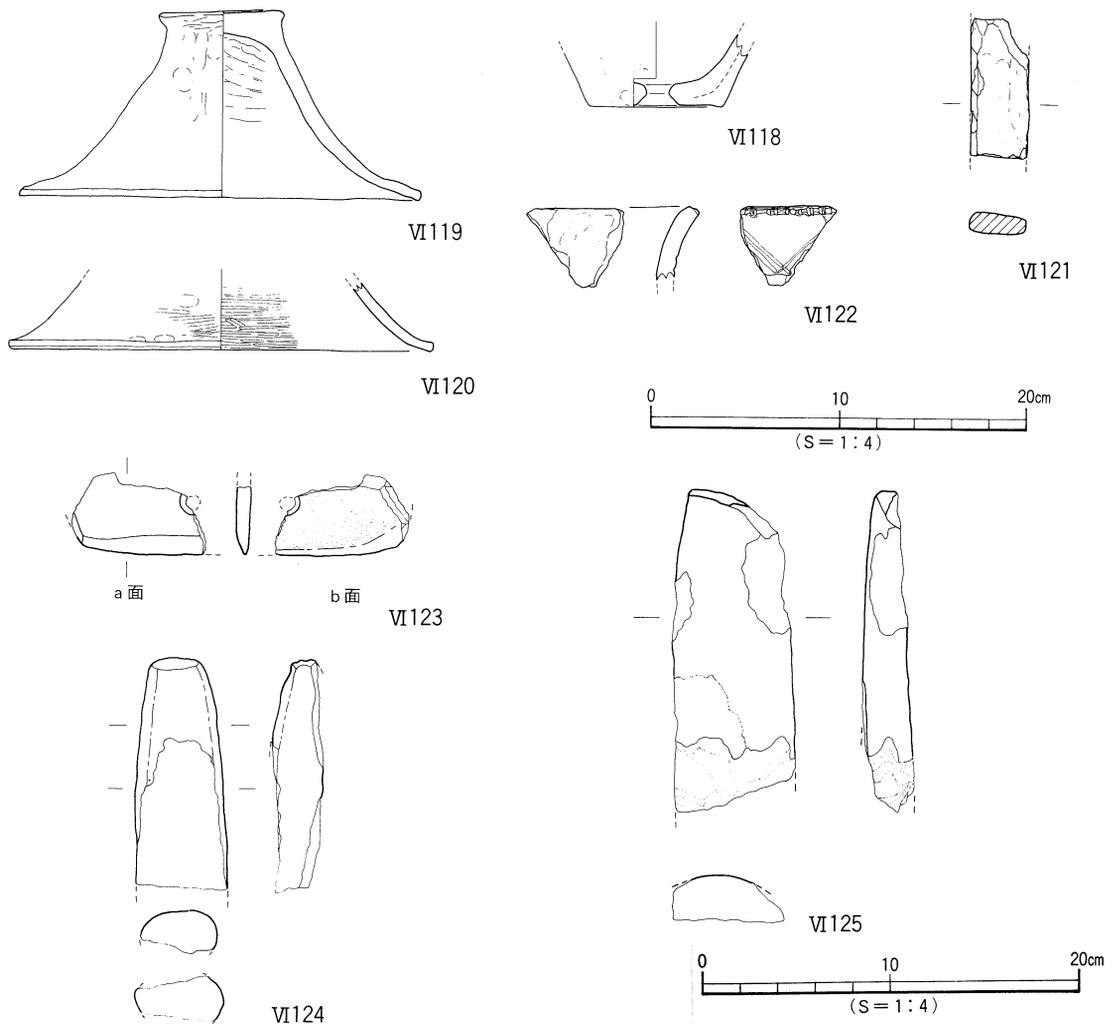
第206図 S D VI104上層出土遺物実測図(2)



第207图 S D VI104上層出土遺物実測图(3)



第208図 S D VI104上層出土遺物実測図(4)



第209図 S D VI104上層出土遺物実測図(5)

## S D VI104地点不明出土遺物 (第210図-VI126~131)

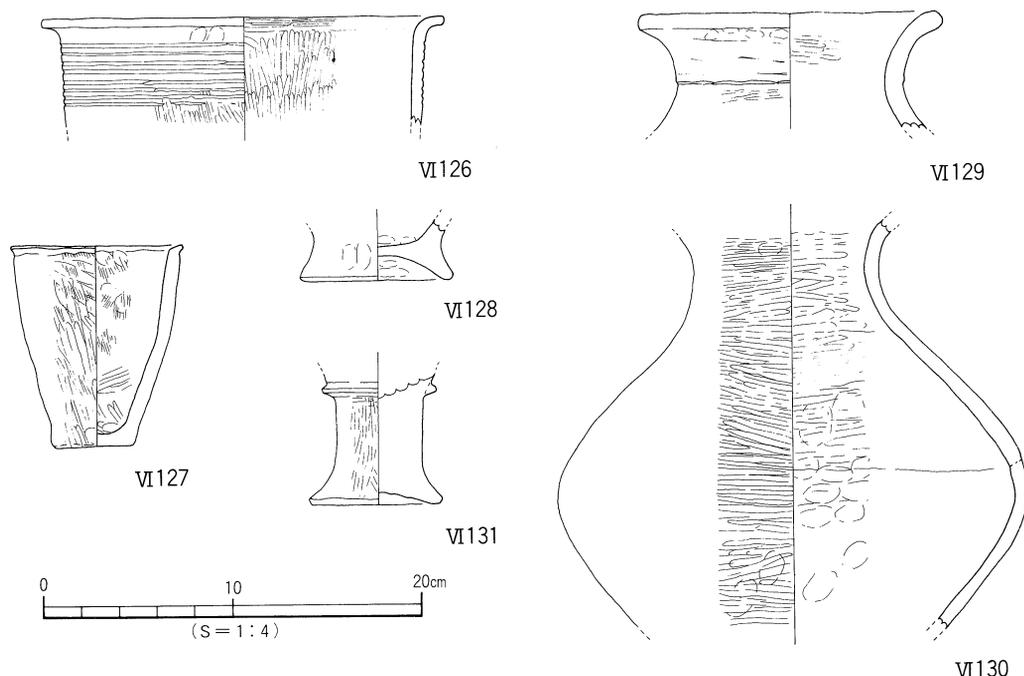
S D VI104からは、溝掘り下げ時に設定したトレンチ内より遺物が出土した。ただし、層位や出土地点が不明であるため、ここでは地点不明出土遺物として扱っている。

甕形土器 (VI126~128) VI126は折り曲げにより口縁部を成形するものである。胴部に沈線文 (2条1組) を施す。VI127は小型品。内外面共に煤が付着する。VI128は底部片である。くびれをもつ上げ底である (弥生中期)。

壺形土器 (VI129・130) VI129は短く外反する口縁部をもつもので、頸部に削り出し状の凸帯をもつ。VI130は胴部片である。内外面共に丁寧なヨコ方向のミガキ調整を施す。

高坏形土器 (VI131) VI131は高坏形土器の脚部片である。上げ底で、坏部接合部付近に断面三角形の凸帯を貼り付ける。

時期：出土した遺物の特徴より、S D VI104は弥生時代前期末~中期初頭の溝とする。



第210図 S D VI104地点不明出土遺物実測図

S D VI105 (第211・212図、図版61・62)

第1地区の南側、D 3～F 5で検出した溝である。第Ⅶ層上面での検出であり、第Ⅵ層が一部覆う。溝の北側壁体は、前期末～中期初頭の土坑 S K VI119・122・132 (土坑A)、南側壁体は S K VI114 (土坑A)、弥生時代中期後半の土坑 S K VI115にそれぞれ切られている。また、溝の南側壁面にて S K VI160・162・163 (土坑C) を、西側基底面にて S K VI125 (土坑D) を検出した。ここでは、発掘調査時の工程をふまえて、S D VI104同様、溝の構造や溝内から出土した遺物の説明を行う。

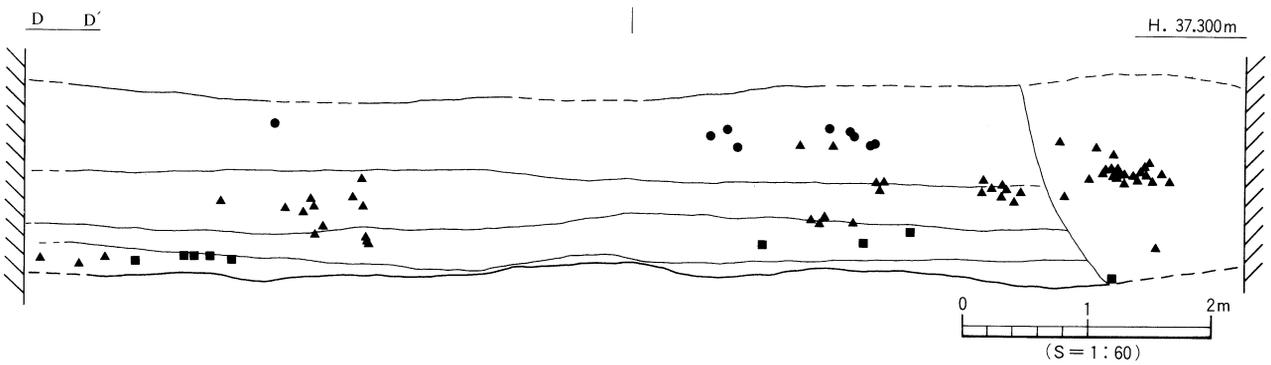
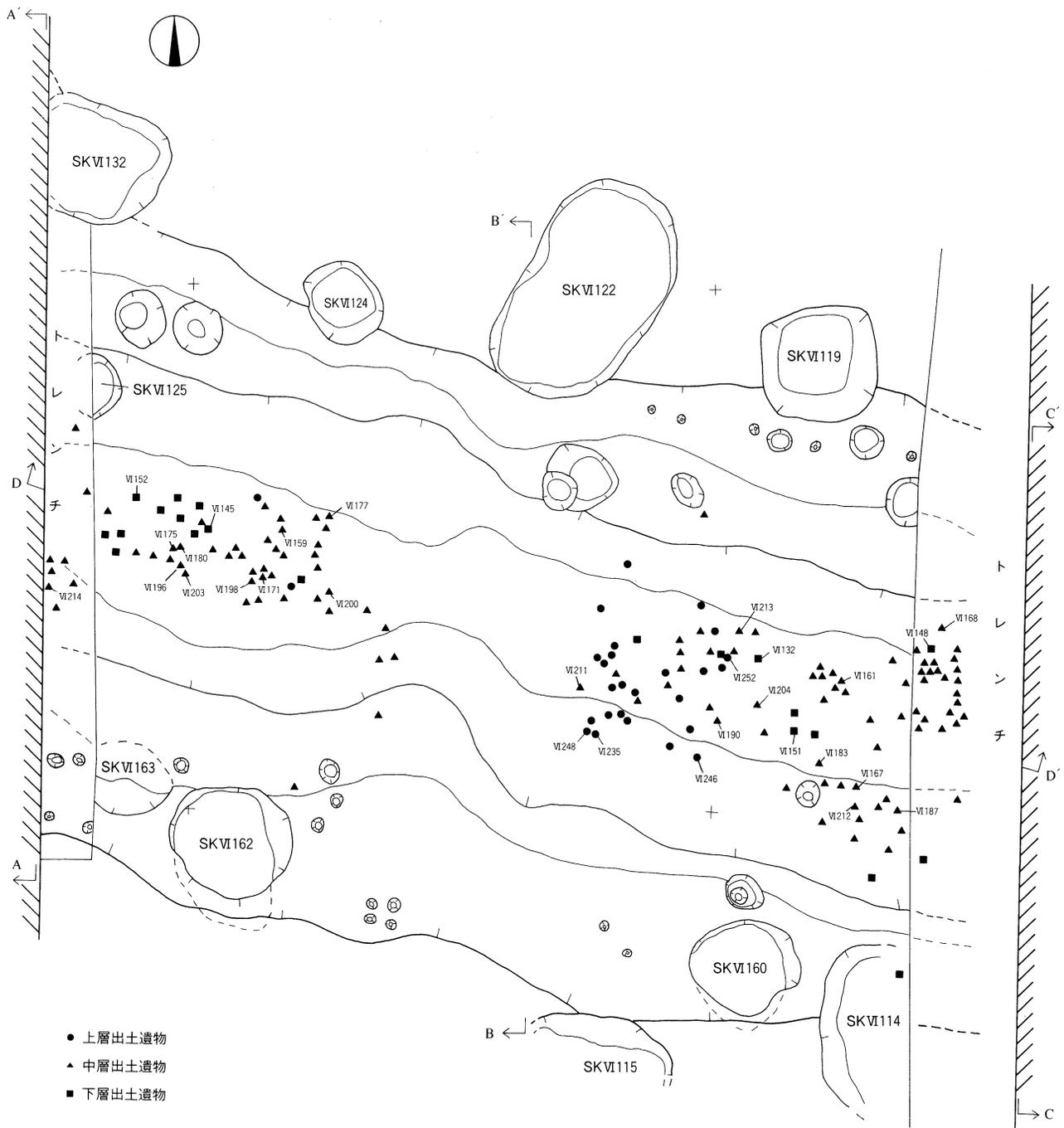
① 調査工程

調査では S D VI104と同様、第Ⅶ層上面にて溝の平面プランを確認した。

まず、調査区東西壁沿いに幅50cmのトレンチと、溝の中央部付近に、溝に対して直交するような南北方向のトレンチ (幅50cm) を設定した。東西壁及び南北トレンチの土層観察の結果、溝の埋土を26層に細分した (①～⑳層)。さらに、土色や土質の違い、堆積状況などから上層・中層・下層に大別し、層ごとに掘り下げと遺物の取り上げを行った。掘り下げでは、中央部に南北方向の幅50cmのベルトを設定し、ベルトを残した状態で上層部分の掘り下げをした。続いて、中層部分の掘り下げでは、炭化物が層をなして検出された地点があった。ただし、時間的に余裕がなく、炭化物の広がりは図化せず、掘り下げを進めた。

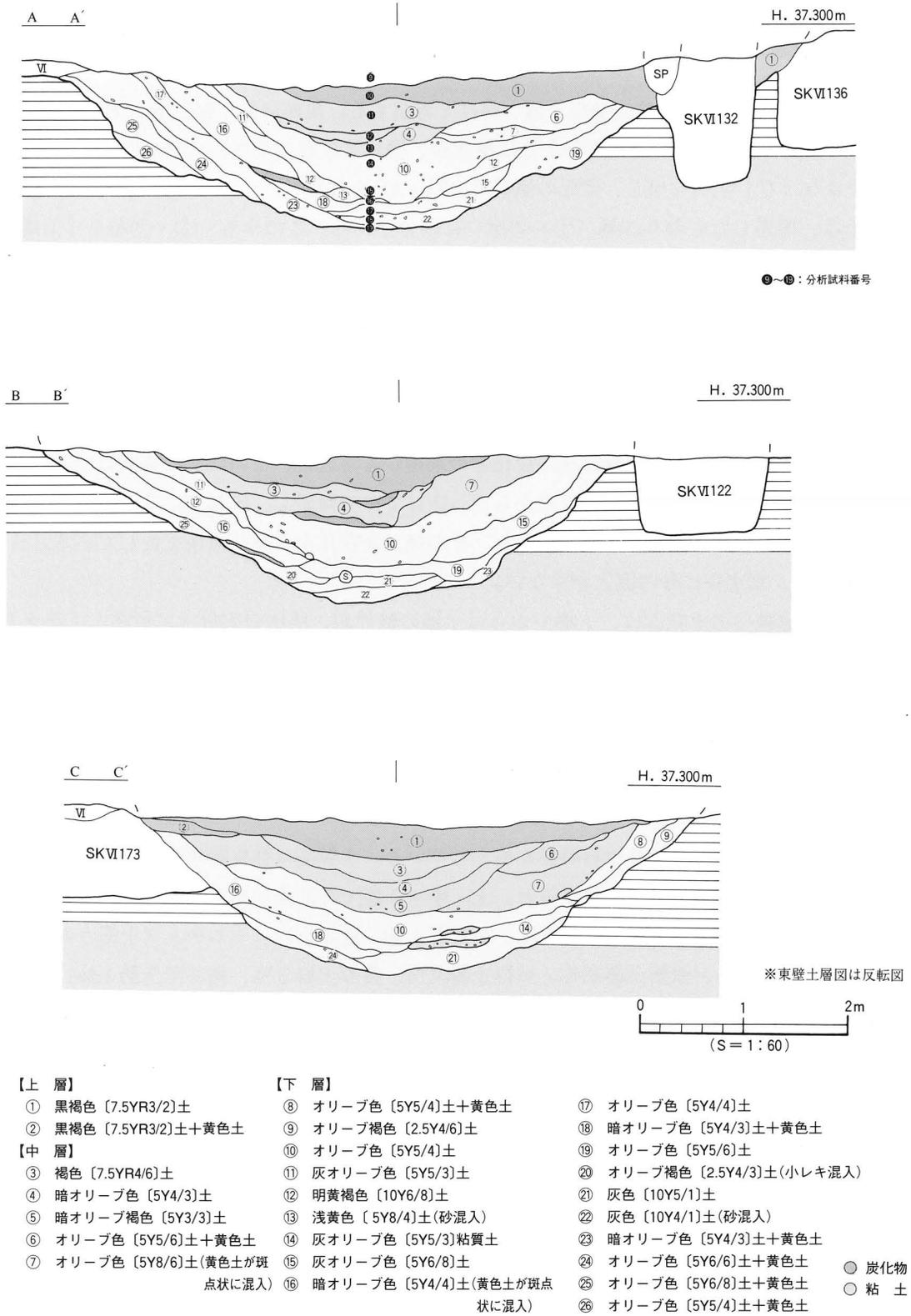
中層の掘り下げが終え、下層上面を検出した。下層は溝全域に堆積がみられた。下層掘り下げ時にも中層と同様、炭化物が一部検出された。ただし、時間的な余裕がなく、図化せず、掘り下げを進めた。下層の掘り下げを終了し、溝の壁体及び基底面を検出した。溝の壁体中位付近から基底面にかけては、第Ⅶ層ではなく第Ⅷ層が検出された。

VI 区



第211図 S D VI105測量図

弥生時代前期末～中期初頭の遺構と遺物



第212図 S D VI105土層図〔上：西壁、中：ベルト、下：東壁〕

溝中央のベルトを残した状態で、完掘状況の写真撮影を行った。平成10年2月21日、現地説明会を行う。その後、溝埋土のサンプルを採取し、(株)古環境研究所に土壌分析を依頼した。また、溝の西壁土層の剥ぎ取りを行った。

## ② 概 略

S D VI105検出時の平面形状は、やや北側へ向けて湾曲する。規模は最大幅6.0m、最小幅5.5m、深さは検出面下1.35～1.40mである。壁体上位は第Ⅶ層、壁体下位及び基底面は第Ⅷ層に達する。断面形態は緩やかな「U」字状を呈し、壁面の傾斜角は25～30°を測る。

溝の埋土は、前述したとおり26層(①～⑳層)に細分される。このうち、①・②層を「上層」、③～⑦層を「中層」、⑧～⑳層を「下層」として、掘り下げや遺物の取り上げを行った。上層は、色調が黒褐色を呈し、粘性の強い土壌である。上層上面では検出幅3.0～5.0m、層厚10～30cmを測り、北西-南東方向に堆積する。中層は、色調が褐色～オリーブ色を呈し、粘性の強い土壌で、土壌内に黄色土が斑点状に混入する。中層中位では、厚さ5cm前後の炭化物の堆積がみられた。下層は、色調が灰オリーブ色～オリーブ色を呈する。土壌内には黄色土がブロック状や斑点状に混入する。下層中においても、中層と同様に、厚さ5cm前後の炭化物の堆積がみられた。このほか、東壁にて灰色の粘土が厚さ3～5cmみられた。溝の基底面は東から西へ向けてやや傾斜し、比高差は7cmを測る。土層の堆積状況は、溝の南側壁体側から土砂が流入し、その後、両壁体から傾斜堆積をなしている。S D VI104と比較すると、埋土中に砂の流入が少ない。

各層における遺物の出土状況は、下層中からは土器の破片が、溝中央部付近に散在して出土した。中層では大型の土器片が多数出土し、復元すると完形品になるものが多数ある。中層中からは、貝殻施文土器や搬入土器も出土している。石器類は中層からの出土が大半で、石庖丁や扁平片刃石斧のほか、石剣の破片が1点出土している。上層では、溝東半部に遺物が集中しているが、大半は破片である。出土量は中・下層に比べるとやや少ない。このほか、地点は不明であるが、S D VI105内より分銅形土製品が1点出土している。

遺物は上・中・下層から土製品や石製品が出土している。土製品は弥生時代前期末～中期初頭に時期比定されるものである。土器を観察すると、上・中・下層で時期差はあまり認められない。土器の器種構成は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、蓋形土器、ミニチュア土器がある。器種構成比は、甕形土器42%、壺形土器33%、鉢形土器21%、蓋形土器2%、高坏形土器1%、ミニチュア品1%である。また、山口県からの搬入品や外来系土器(東北部九州)の出土もある。

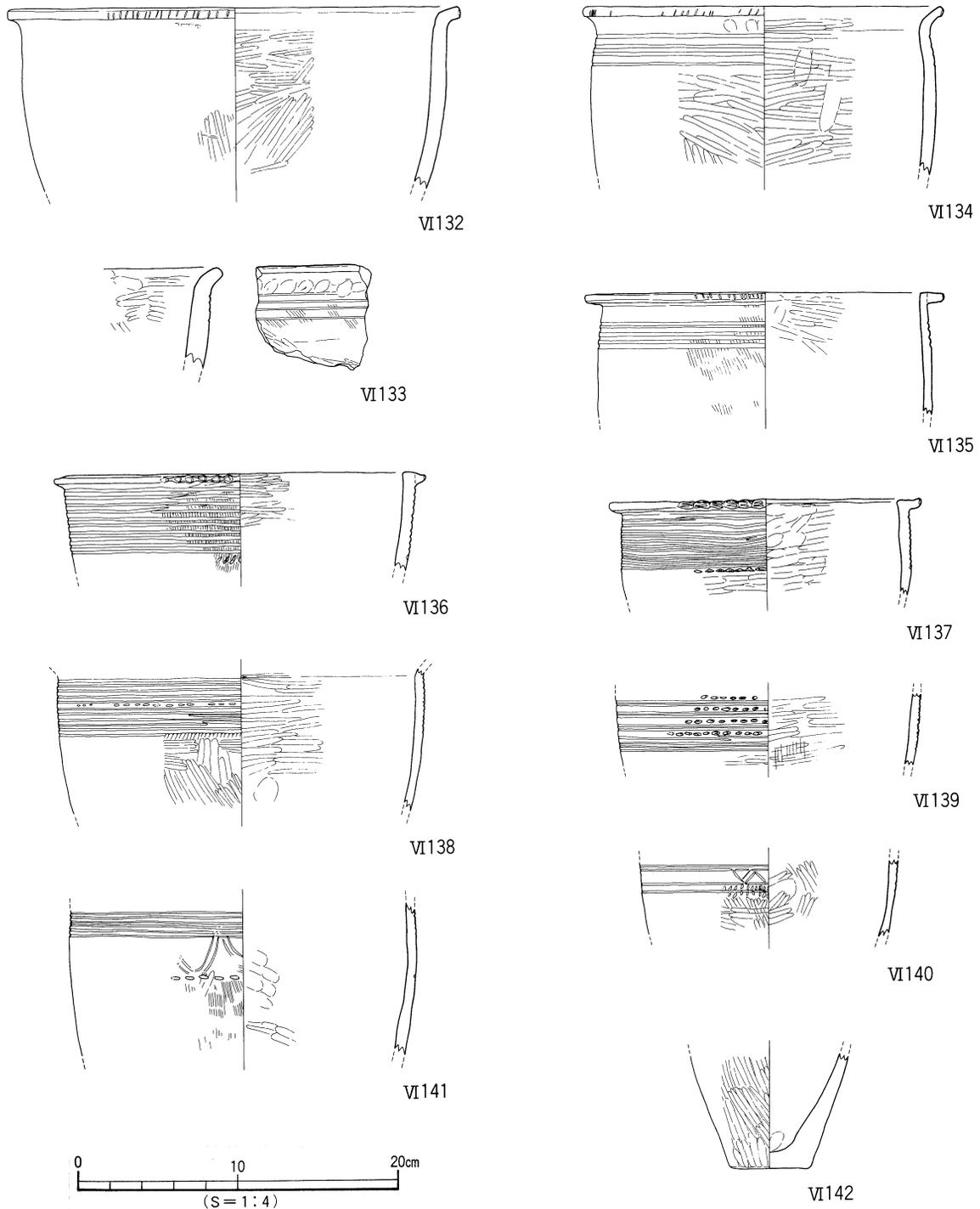
### S D VI105下層出土遺物 (第213・214図-VI132～158、図版75)

S D VI105下層からは甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、ミニチュア品が出土した。

甕形土器(VI132～142) VI132～134は折り曲げ、VI135～137は貼り付けにより口縁部を成形する。口縁端面には刻目を施すもの(VI132・134～137)と刻目を施さないもの(VI133)とがある。なお、VI137は連鎖状刻目文2列を施すものである。胴部文様は、無文のもの(VI132)、沈線文だけのもの(VI133～135)、沈線文と刺突文が組み合うもの(VI136・137)の三種類がある。なお、VI137は5条1組の工具による沈線文10条を施す。

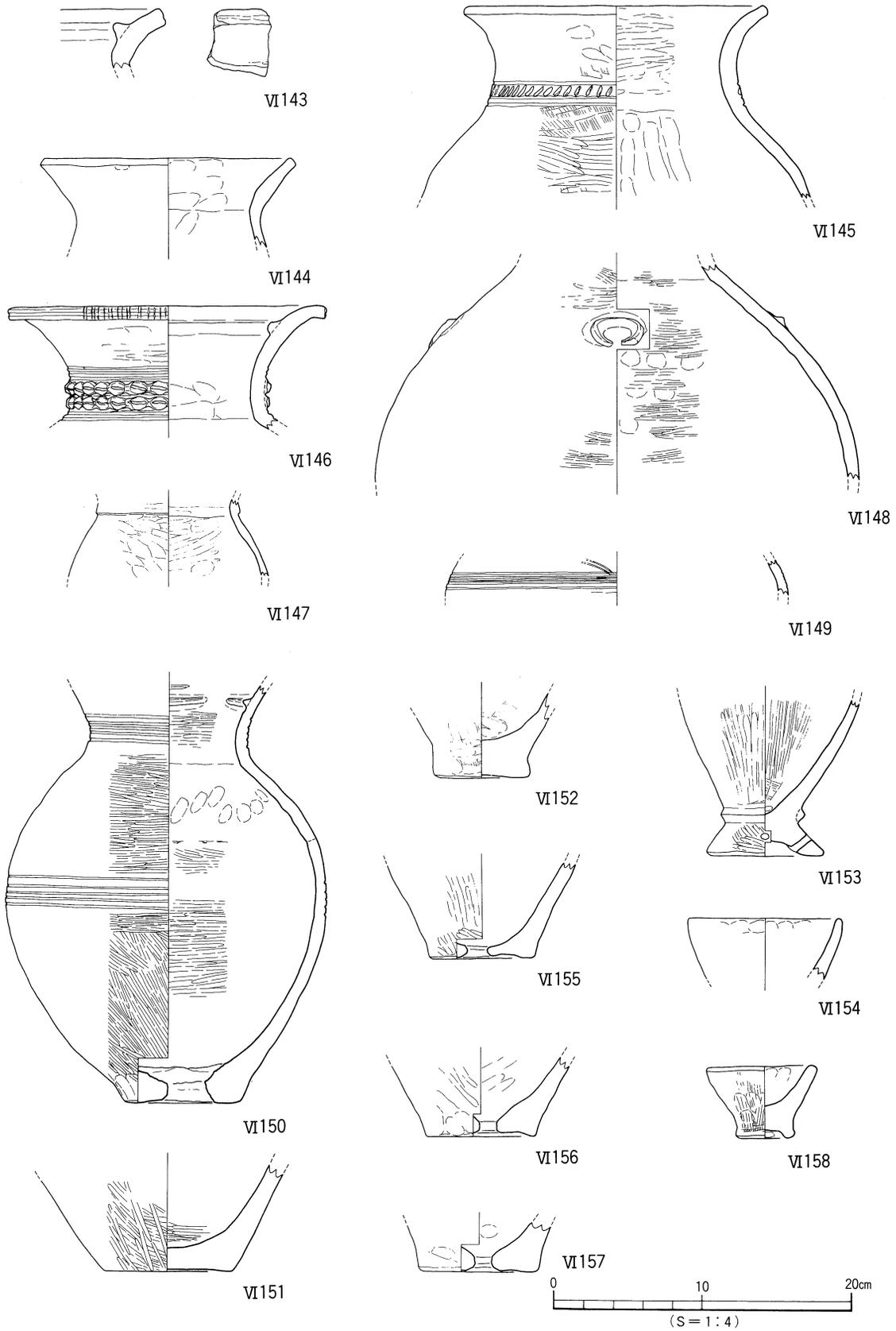
VI138～141は胴部片である。文様は沈線文と刺突文が組み合うものであり、VI140は2条1組の山形文、VI141は弧文を加えるものである。VI142は底部片で、平底となる。

壺形土器（VI143～152）VI143は大型品で、短く外反する口縁部をもつ。口縁部内面には断面三角形の凸帯をもつ。口縁端面にはヘラ描き沈線文を1条施す。VI144～146は外反する口頸部をもつ。VI145は頸部にヘラ描き沈線文と刺突文を施す。VI146は口縁部内面に凸帯をもち、頸部には沈線文と凸帯文2条（連鎖状刻目文）を施す。VI147～149は胴部片である。VI147は頸胴部境に段をもつ。VI148は肩部に輪状の浮文を3ヶ貼り付ける。VI149は沈線文と弧文が組み合う。



第213図 S D VI105下層出土遺物実測図(1)

VI 区



第214图 S D VI105下層出土遺物実測図(2)

VI150は頸～底部である。頸部内面には凸帯を貼り付けるが全周せず、一部分が注口状になる。頸部と胴部にはヘラ描き沈線文を施す。底部には径1.5×2.5cmの楕円形の孔を穿つ（焼成後穿孔）。コシキへの転用品である。VI151・152は底部片。わずかに上げ底となる。

高坏形土器（VI153）坏脚部接合部に、断面三角形の凸帯を貼り付ける。脚部に径4.5mm大の孔を2ヶ穿つ（焼成前穿孔）。

鉢形土器（VI154）小型品。口縁部は内湾し、端部は丸く仕上げる。

コシキ形土器（VI155～157）VI155～157は所謂「コシキ」への転用品である。VI155は甕形土器、VI156・157は壺形土器の底部を焼成後に穿孔したものである。

ミニチュア土器（VI158）VI158は上げ底の底部。器壁は厚い。

#### S D VI105中層出土遺物（第215～221図－VI159～234、図版75～77）

S D VI105中層からは甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、用途不明品のほか、石庖丁2点、石斧2点、石剣1点、独鈷石1点が出土した。このうち、搬入品（山口県）と外来系土器（東北部九州地方）が出土している。また、壺形土器に貝殻施文を施したものが3点ある。

甕形土器（VI159～188）VI159～166は折り曲げにより口縁部を成形する。折り曲げが弱いもの（VI159・161～166）と、折り曲げが強く逆「L」字状を呈するもの（VI160）がある。口縁端面には刻目を施すもの（VI159・160・163・165）と、刻目を施さないもの（VI161・162・164・166）とがある。胴部文様は、無文のもの（VI161）、沈線文だけのもの（VI159・160・162・165）、沈線文と刺突文が組み合うもの（VI163・164）、沈線文と山形文が組み合うもの（VI166）の四種類がある。なお、VI166の沈線文と山形文は2条1組の工具による。

VI167～181は粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形する。口縁部の外面上端に接するもの（VI167～178）と、口縁端部よりやや下がる位置にあるもの（VI179～181）とがある。前者は口縁部の断面形態が三角形を呈するもの（VI167～169・172～178）と、方形を呈するもの（VI170・171）とがある。口縁端面には刻目を施すもの（VI167～170・173～176・178）と、刻目を施さないもの（VI171・172・177）とがある。なお、VI174は連鎖状刻目文2列を施す。胴部文様は、無文のもの（VI171・172）、沈線文だけのもの（VI167～170）、沈線文と刺突文が組み合うもの（VI173～176）、沈線文と刺突文、山形文が組み合うもの（VI177）、沈線文と凸帯文が組み合うもの（VI178）の五種類がある。なお、VI176は所謂「コシキ」への転用品であり、底部に径1.6cm大の孔を穿つ。このうち、VI168・177は2条1組、VI167・169・176は3条1組、VI173は4条1組の工具による沈線文を施す。口縁端部より下がった位置に凸帯をもつもの（VI179～181）は、凸帯上に刻目を施す。口縁端面は面をもつもの（VI179）と、丸く仕上げるもの（VI180・181）とがある。

VI182・183は胴部片で、VI182は沈線文と竹管文、VI183は沈線文間に山形文（3条1組）を施す。VI184～188は底部片で、VI184・185は平底、VI186～188は上げ底となる。

壺形土器（VI189～214）VI189は口径35cmを越える大型品である。短く外反する口縁部をもつ。口縁部内面に断面三角形の凸帯をもつ。頸部には沈線文5条、口縁端面にはヘラ描き沈線文1条と刻目を施す。VI190～197は外反する口頸部をもつものである。VI192～196は頸部に沈線文を施す。VI197は口縁部の内面上端に断面三角形の凸帯をもつ。搬入品（山口地方）。

VI198～202は外傾する長い口頸部をもつ。いずれも口縁内面に凸帯をもち、VI198・200・201は凸

帯が全周せず、一部が注口状になるものである。VI199・202は凸帯上に刻目、VI201は押圧を施す。VI202は横方向の凸帯に加え、縦方向の凸帯を2条施し、口縁端面上端と下端にそれぞれ刻目を施す。VI203・204は頸部片である。沈線文と凸帯文を施す。

VI205～210は胴部片である。VI206・207は貝殻腹縁による弧文、VI208は貝殻腹縁による木葉文を施す。VI209・210は幅広の凸帯をもち、VI209は凸帯上にヘラ描きのヨコ沈線文と刻目を施す。VI210はM字状凸帯の下段のみに連鎖状刻目文2列を施す。

VI211～214は底部片で、VI211は平底、VI212～214はやや上げ底となる。

鉢形土器（VI215～224）VI215・216は口径40cm前後の法量の大きなものである。VI216は口縁部の折り曲げが強く、東北部九州地方に同じ形態がみられる（外来系）。VI217～220は口縁部が緩やかに外反するものである。VI219は口縁端面に刻目を施す。VI221・222は粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形するものである。VI223・224は直口口縁の鉢である。VI223の口縁端部はやや内側に肥厚する。

コシキ形土器（VI225）VI225は所謂「コシキ」への転用品である。壺形土器の底部を焼成後に穿孔したものである。

蓋形土器（VI226）VI226は蓋形土器の口縁部片である。口縁部は緩やかに開き、端部は「コ」字状に仕上げる。

不明品（VI227・228）VI227・228は用途不明品である。VI227は把手と思われるものが貼り付けられる。VI228は円盤状の土製品。甕形土器の胴部の転用品と思われる。

石庖丁（VI229・230）VI229・230は緑色片岩製の石庖丁である。VI229は大型品で、平面形態は外湾刃半月形態を呈する。厚みがあり、径5mm大の孔が2個、敲打により両面から穿孔される。刃部に植物珪酸体が付着する。VI230は平面形態は隅丸長方形を呈するものと考えられ、河原石を打裂なしで、そのまま研磨している。鏑はあまい。

扁平片刃石斧（VI231）VI231は緑色片岩製の扁平片刃石斧。断面長方形を呈し、鏑は明瞭である。全面に丁寧な研磨を施す。比較的厚手の仕上げである。

石剣（VI232）VI232は石剣である。a面は自然面、b面には初剥離面を残す。b面に剥離面を残すことや、a面に敲打痕がみられることから製作途中で破損し、石庖丁に転用した可能性がある。

柱状片刃石斧（VI233）VI233は緑色片岩製の柱状片刃石斧で、刃部、基部共に大きく破損している。

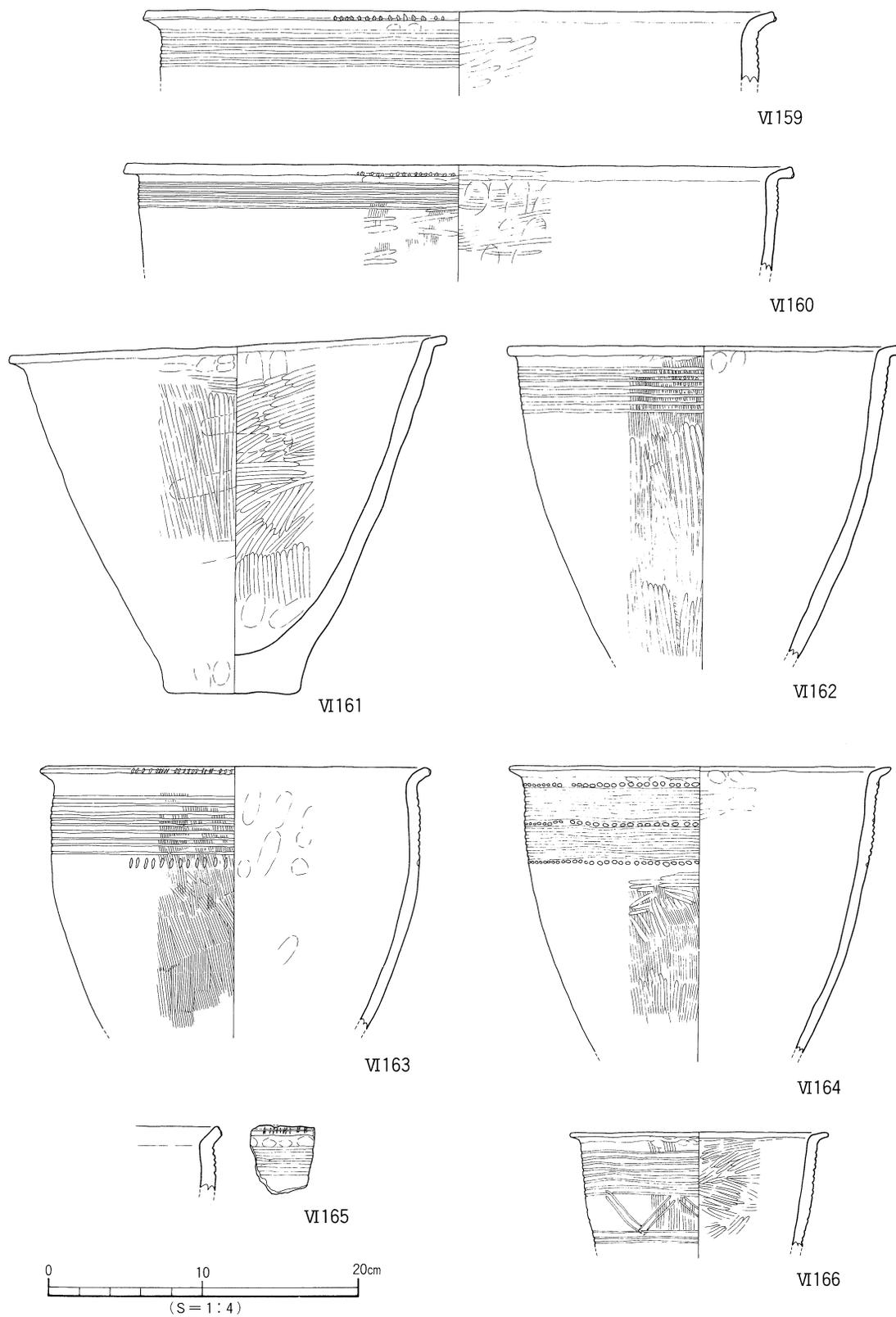
独鈷石（VI234）VI234は安山岩製の独鈷石である。中央に節をもたず、帯状に敲打により凹ませて、突起状の高まりを作っている。

#### S D VI105上層出土遺物（第222～224図－VI235～262、図版77）

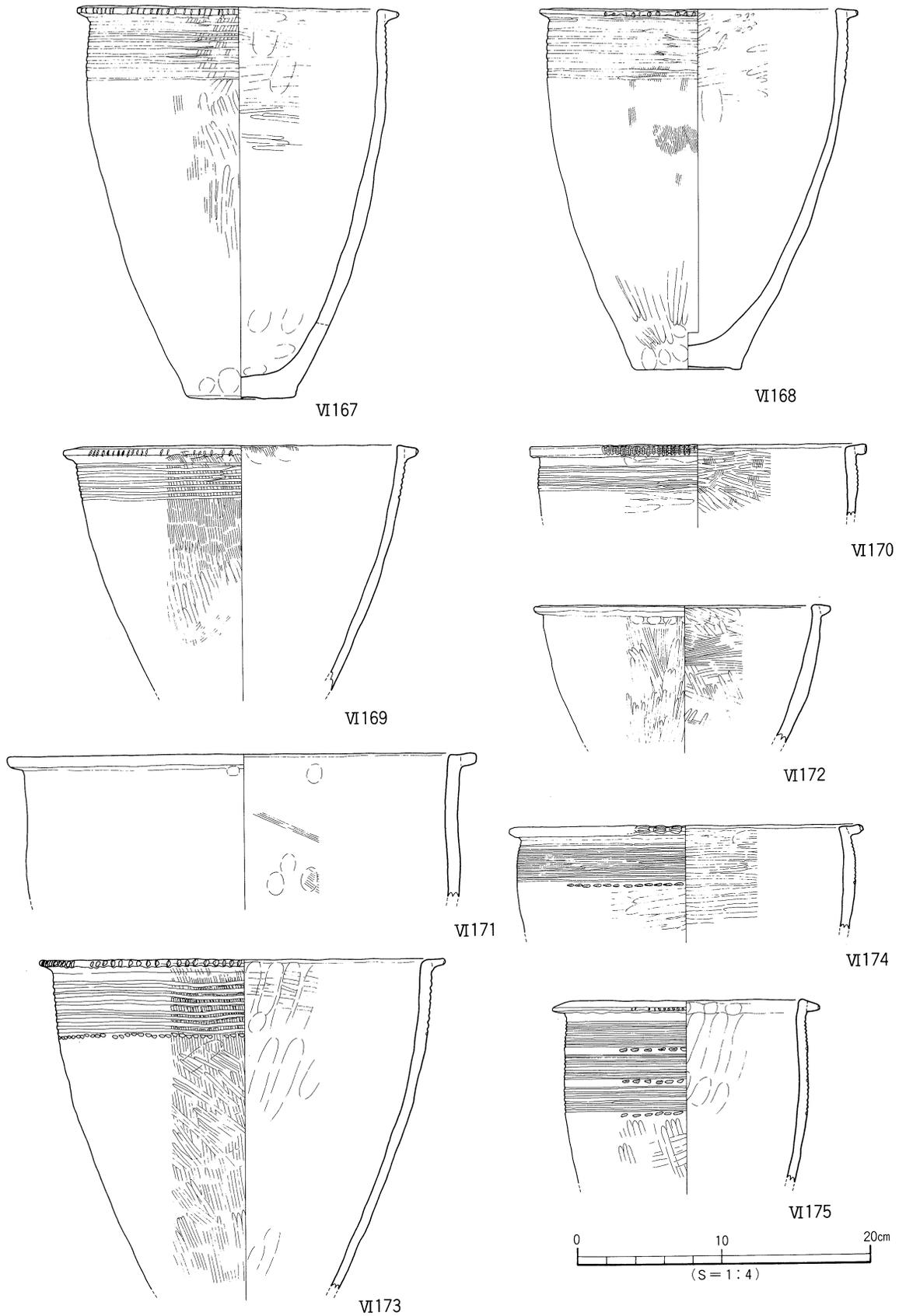
S D VI105上層からは甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器が出土した。

甕形土器（VI235～242）VI235～239は折り曲げにより口縁部を成形する。折り曲げが弱いもの（VI235～238）と、折り曲げが強く逆「L」字状を呈するもの（VI239）とがある。口縁端面には刻目を施すもの（VI236～238）と、刻目を施さないもの（VI235・239）とがある。胴部文様は、無文のもの（VI235）、沈線文を施すもの（VI236・237・239）、沈線文と刺突文が組み合うもの（VI238）の三種類がある。なお、VI239はクシ描きによる沈線文12条を施す（単位不明）。

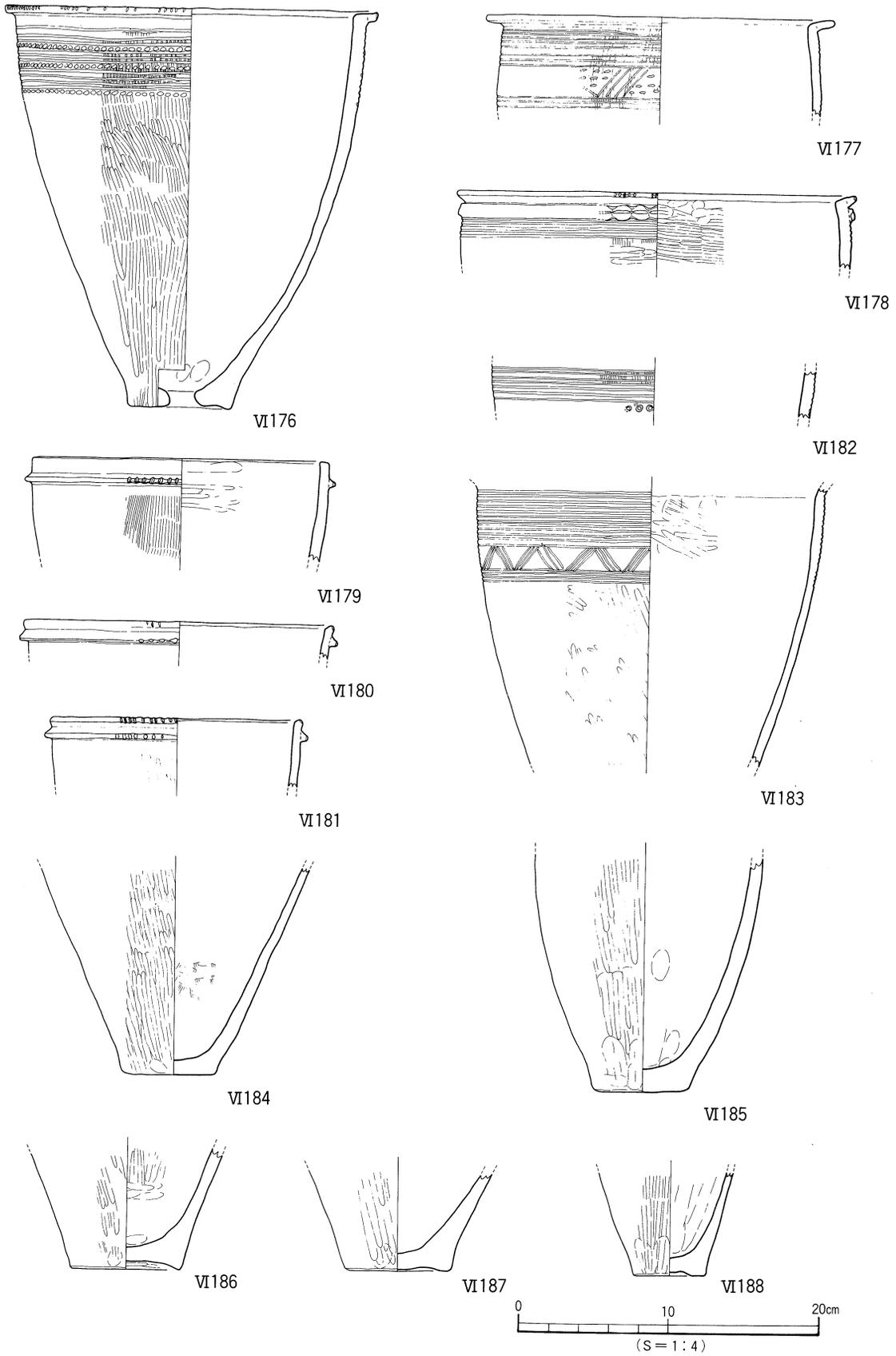
VI240・241は粘土紐を貼り付けることにより口縁部を成形する。胴部文様は、無文のもの（VI240）と、沈線文と刺突文が組み合うもの（VI241）とがある。VI242は底部片で、わずかに上げ底となる。



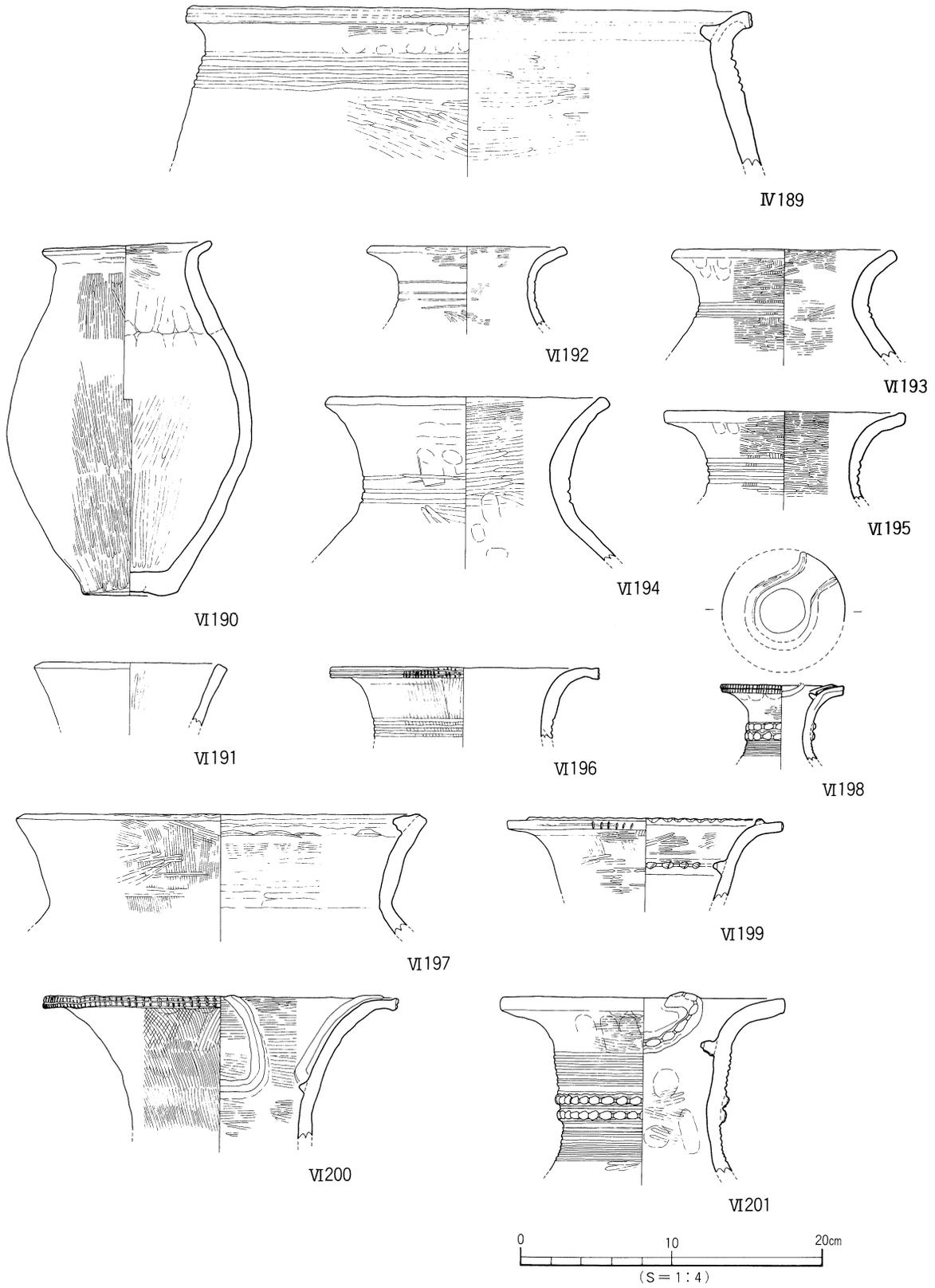
第215図 S D VI105中層出土遺物実測図(1)



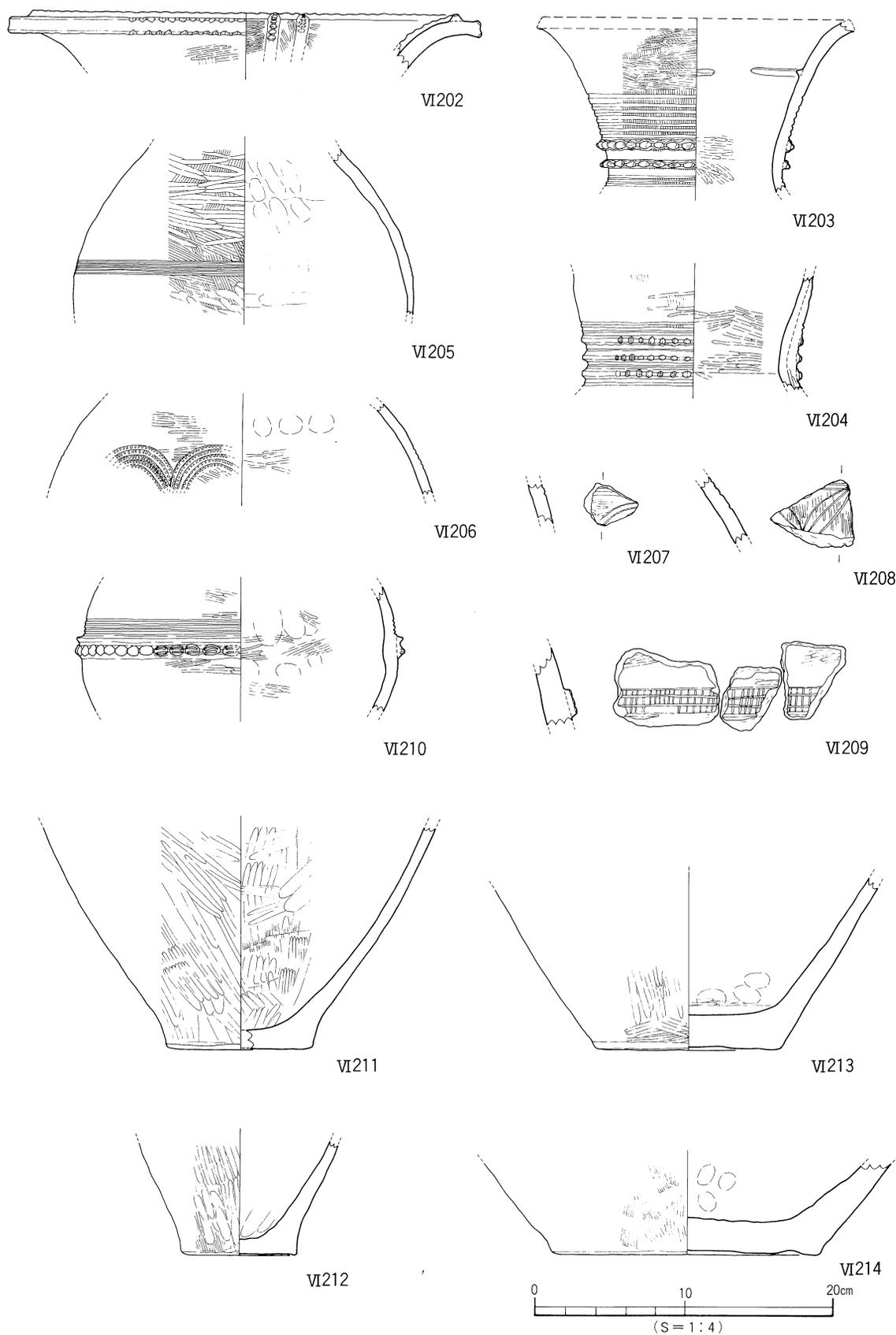
第216图 S D VI105中層出土遺物実測図(2)



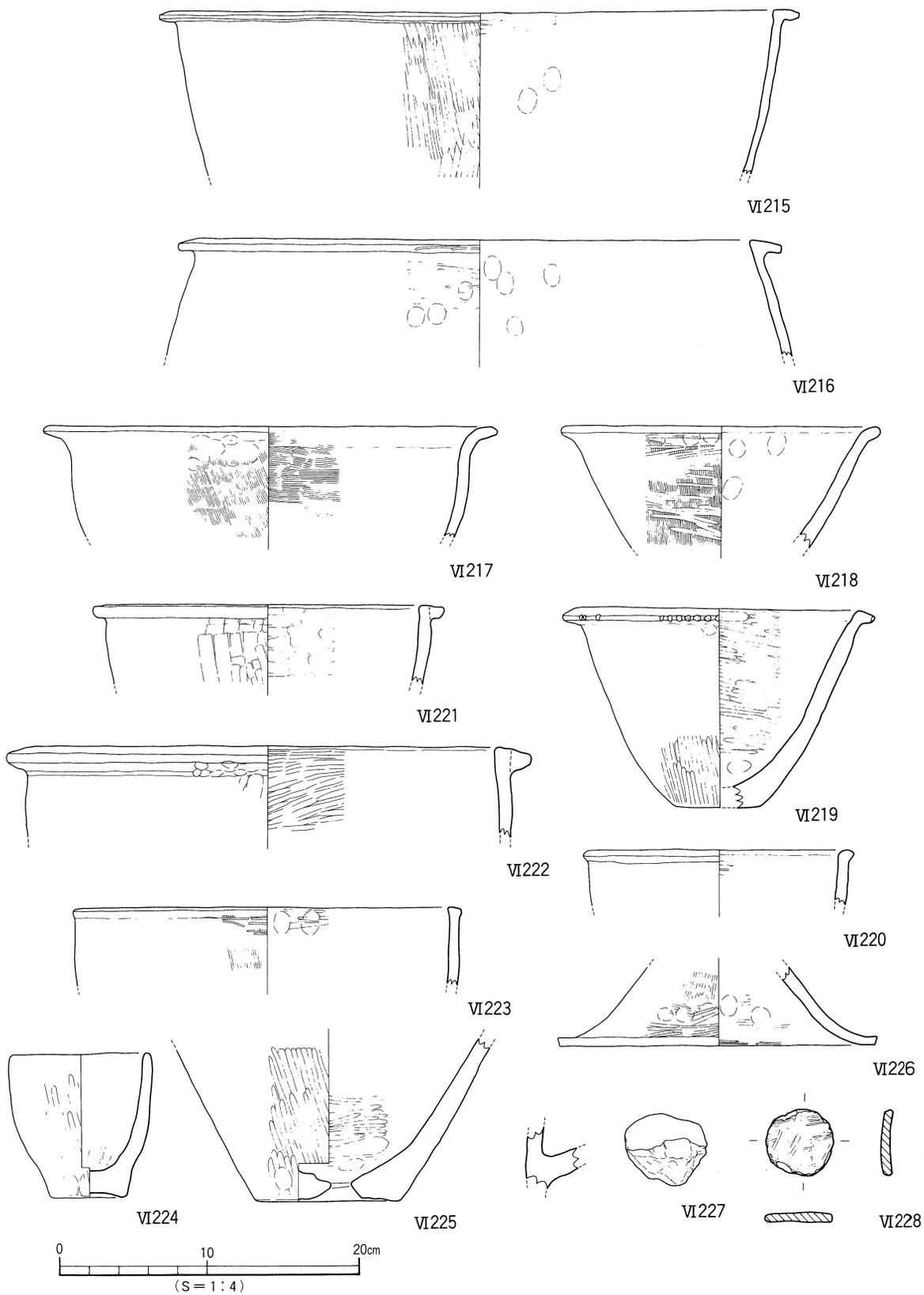
第217図 S D VI105中層出土遺物実測図(3)



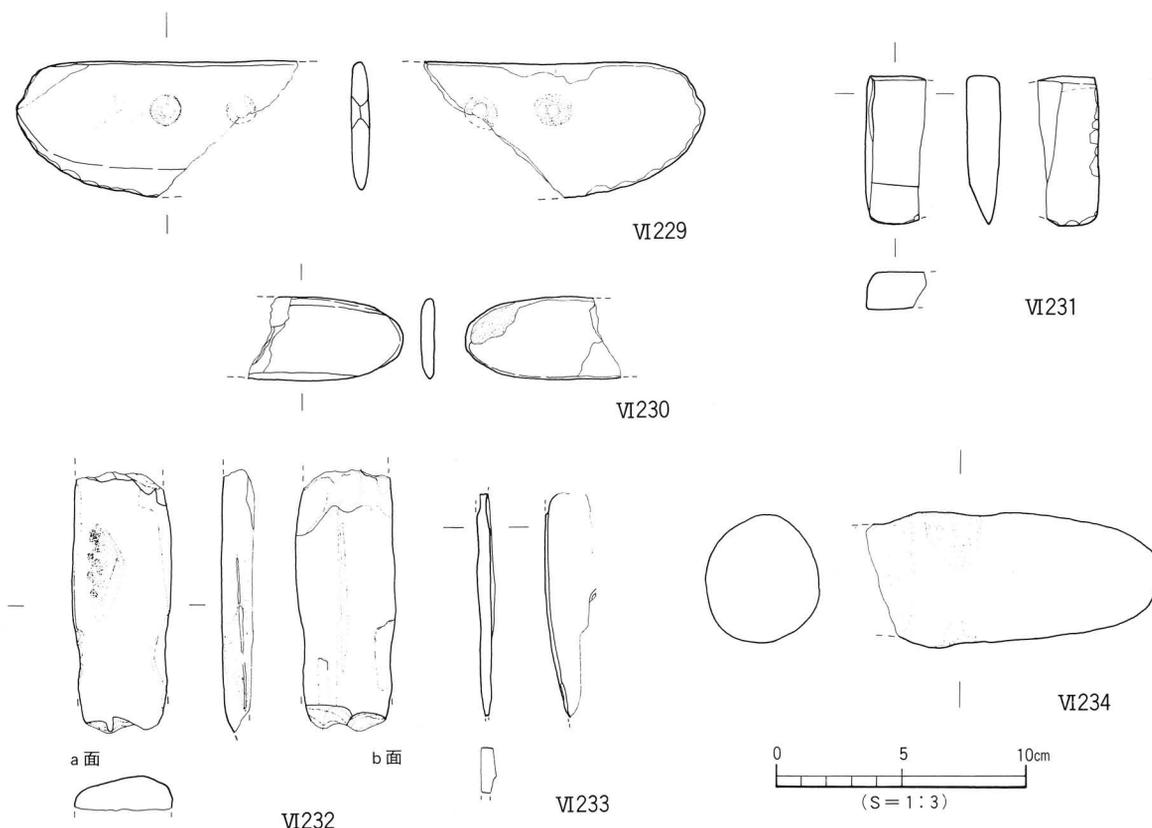
第218图 S D VI105中層出土遺物実測図(4)



第219図 S D VI105中層出土遺物実測図(5)



第220图 S D VI105中層出土遺物実測図(6)



第221図 S D VI105中層出土遺物実測図(7)

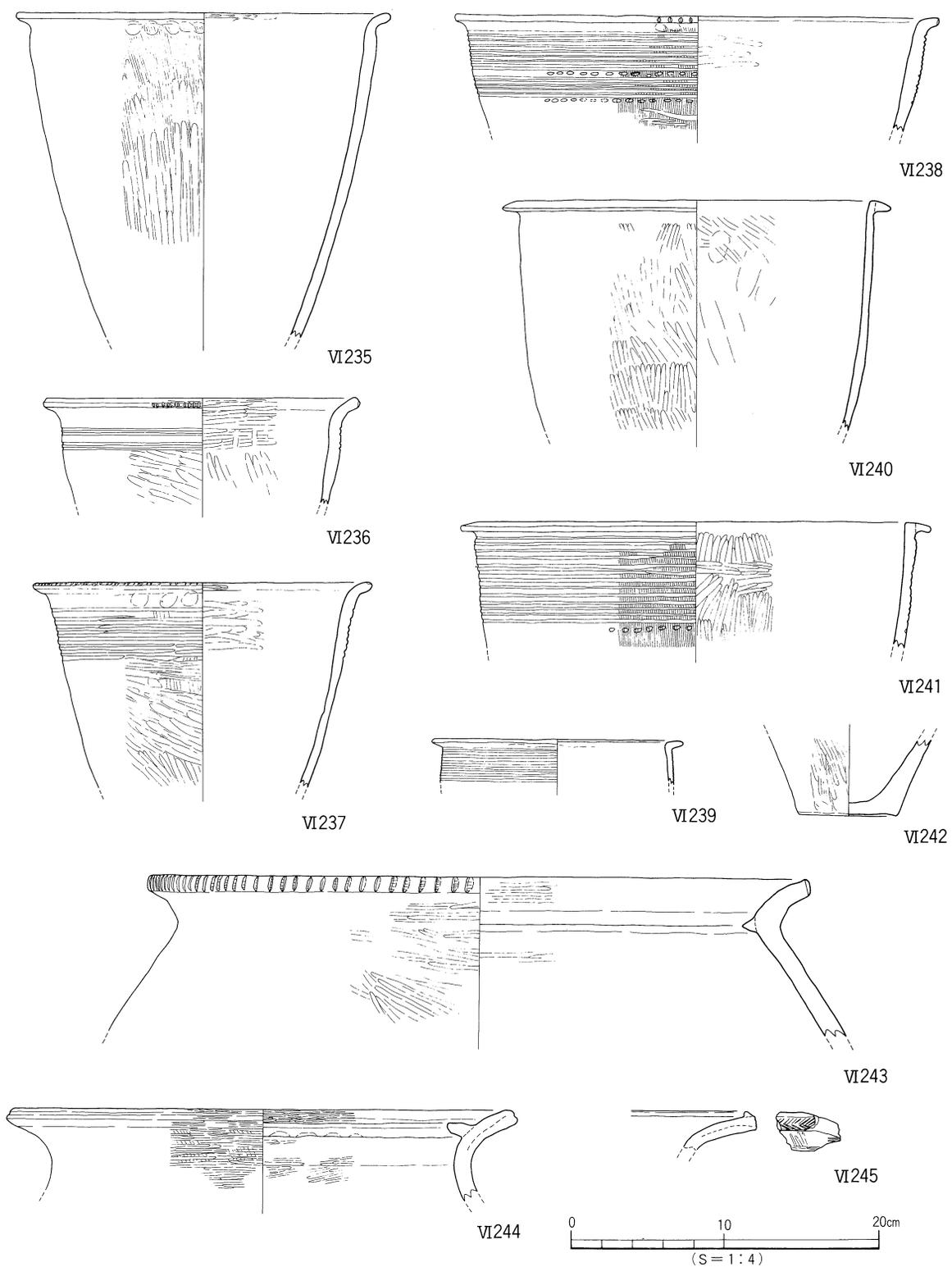
壺形土器（VI243～252）VI243～245は大型品で、短く外反する口縁部をもつ。口縁部内面には断面三角形の凸帯を貼り付け、口縁端面には刻目を施すもの（VI243）、へら描き沈線文を施すもの（VI244）、羽状文を施すもの（VI245）がある。なお、VI245は凸帯上に刻目を施す。

VI246～248は短く外反する口頸部をもつ。VI246は頸部に沈線文を施す。VI248は口縁端面が沈線状に凹む。VI249は外傾する口頸部をもつもので、頸部には沈線文を施す。VI250・251は頸部片で、沈線文と凸帯文を施す。VI250は凸帯上に刻目、VI251は押圧を加える。VI252は底部片で、やや上げ底となる。内外面共に丁寧なヨコ方向のミガキ調整を施す。

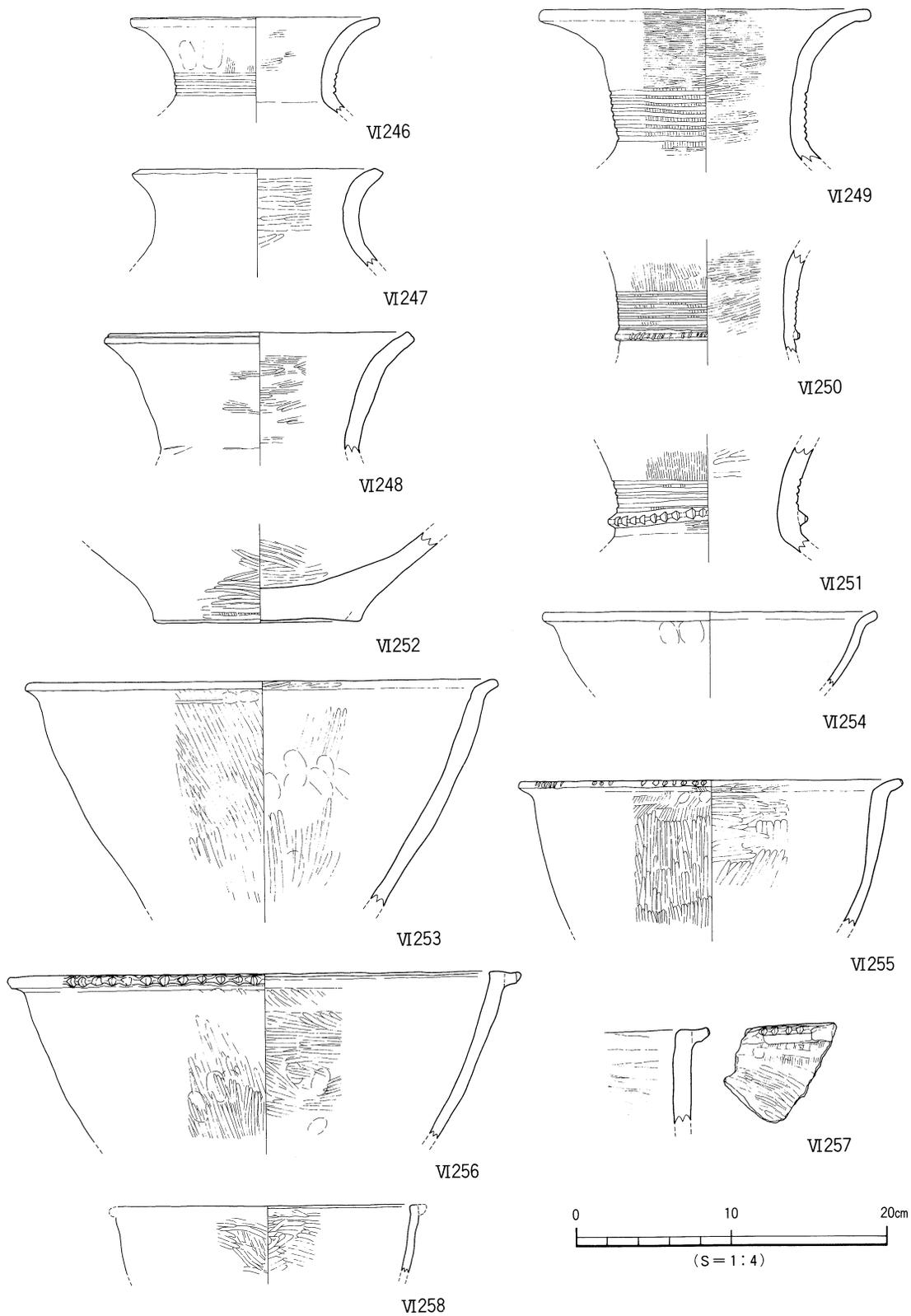
鉢形土器（VI253～258）VI253～255は折り曲げにより口縁部を成形する。口縁端面には刻目を施すもの（VI255）と、刻目を施さないもの（VI253・254）とがある。VI253は台付鉢の可能性が有る。VI256～258は粘土紐を貼り付けることにより口縁部を成形する。VI256・257は口縁端面に刻目を施す。

コシキ形土器（VI259～261）VI259～261は所謂「コシキ」への転用品である。VI259・260は甕形土器、VI261は壺形土器の底部を焼成後に穿孔したものである。

蓋形土器（VI262）VI262は蓋形土器である。口縁部は緩やかに開き、端部は丸く仕上げる。口縁部内外面共に煤が付着する。

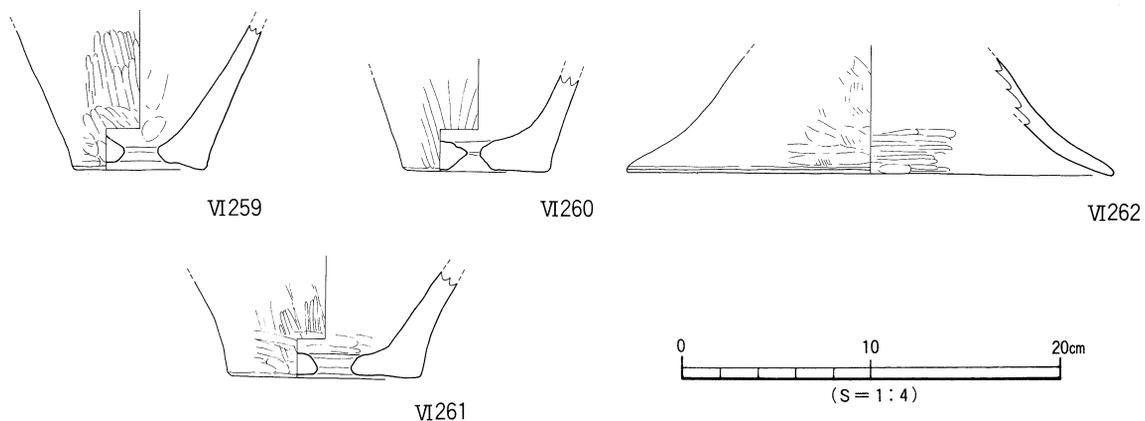


第222図 S D VI105上層出土遺物実測図(1)

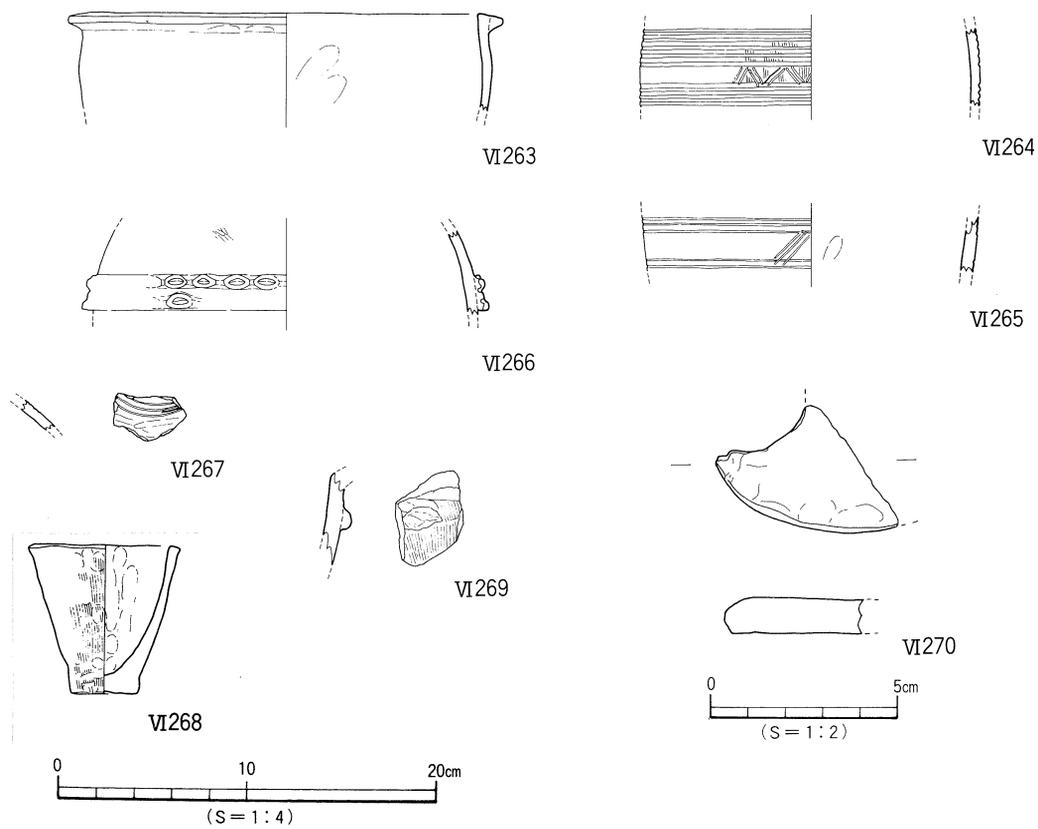


第223図 S D VI105上層出土遺物実測図(2)

VI 区



第224图 S D VI105上層出土遺物実測図(3)



第225图 S D VI105地点不明出土遺物実測図

S D VI105地点不明出土遺物（第225図－VI263～270、図版77）

S D VI105からは、掘り下げ時に設定したトレンチ内より遺物が出土している。ただし、層位や出土地点が不明のため、ここでは地点不明出土遺物として扱っている。この中には、分銅形土製品が1点含まれている。

甕形土器（VI263～265）VI263は粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形するものである。VI264・265は胴部片で、VI264は沈線文と山形文（2条1組）が組み合うものである。

壺形土器（VI266・267）VI266は胴部片である。幅広の凸帯を貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文を施す。VI267は肩部片で、ヘラ描きの弧文を3条施す。

鉢形土器（VI268・269）VI268は直口口縁の鉢形土器である。小型品。底部はわずかに上げ底である。VI269は三角形の浮文を貼り付ける。

分銅形土製品（VI270）VI270は分銅形土製品である。顔面表現がないため、下半部と考えられる。平面形態は円形を呈し、くびれ部をもつ。表・裏面共に手捏ねであり、厚みは1.0cmを測る。文京遺跡11次調査出土の分銅形土製品に、形状や法量が類似している。

時期：出土した遺物の特徴より、S D VI105は弥生時代前期末～中期初頭の溝とする。

(2) 土 坑

VI区で検出した弥生時代前期末～中期初頭の土坑は85基である。内訳は第1地区で80基、第2地区で3基、第3地区で2基となる。平面形態で分類すると、円形が35基、楕円形が28基、方形が6基、長方形が16基となる。断面形態では7種類に分類され、逆台形状が40基、皿状が30基、舟底状が4基、フラスコ状が3基、袋状が3基、筒状が4基、播鉢状が1基となる。また、堆積状況では単一層で埋まるもの（単一堆積）76基、2層以上の土層が水平に堆積するもの（水平堆積）1基、放物線を描くように堆積するもの（放物線型凹堆積）7基、土層が盛り上がるもの（凸堆積）1基の5種類に分類される。

土坑埋土は表25のとおり5種類に分類される。本稿では、埋土がEである土坑を「土坑E」とし、DからAの埋土をもつ土坑も、土坑Dや土坑Aと呼称する。発掘調査時の切り合い関係と、埋土の色調より、土坑の新旧関係は時期の古いものから順に、土坑E→土坑D→土坑C→土坑B→土坑Aとなり、土坑Aが最も新しい時期（段階）の土坑となる。

ただし、2基以上の重複がみられる土坑や、土坑の基底面から別の土坑を検出した場合などもあり、出土した遺物は取り上げの際に混在している可能性がある。前節で説明した溝S D VI105と、これらの土坑との関係は、土坑A・C・D・Eと溝とが切り合い関係にあり、溝が土坑C・D・Eを切り、土坑Aに切られている。ただし、土坑Bとの切り合いはない。つまり、少なくとも土坑C・D・Eは溝S D VI105が掘削される以前に構築されたものであり、土坑AはS D VI105埋没以降に構築されたものと考えられる。

本稿では土坑埋土と切り合い関係を考慮し、埋土別に土坑Eから土坑Aの順で、それぞれの遺構と出土遺物の説明を行うことにする。また、埋土別に土坑を説明するが、貯蔵穴の形態をなす土坑と、それ以外の土坑とは区別して報告する。後者の説明では、平面形態別に円形・楕円形・方形・長方形の順で、測量図と遺物実測図を掲載している。

表25 埋土別土坑一覧

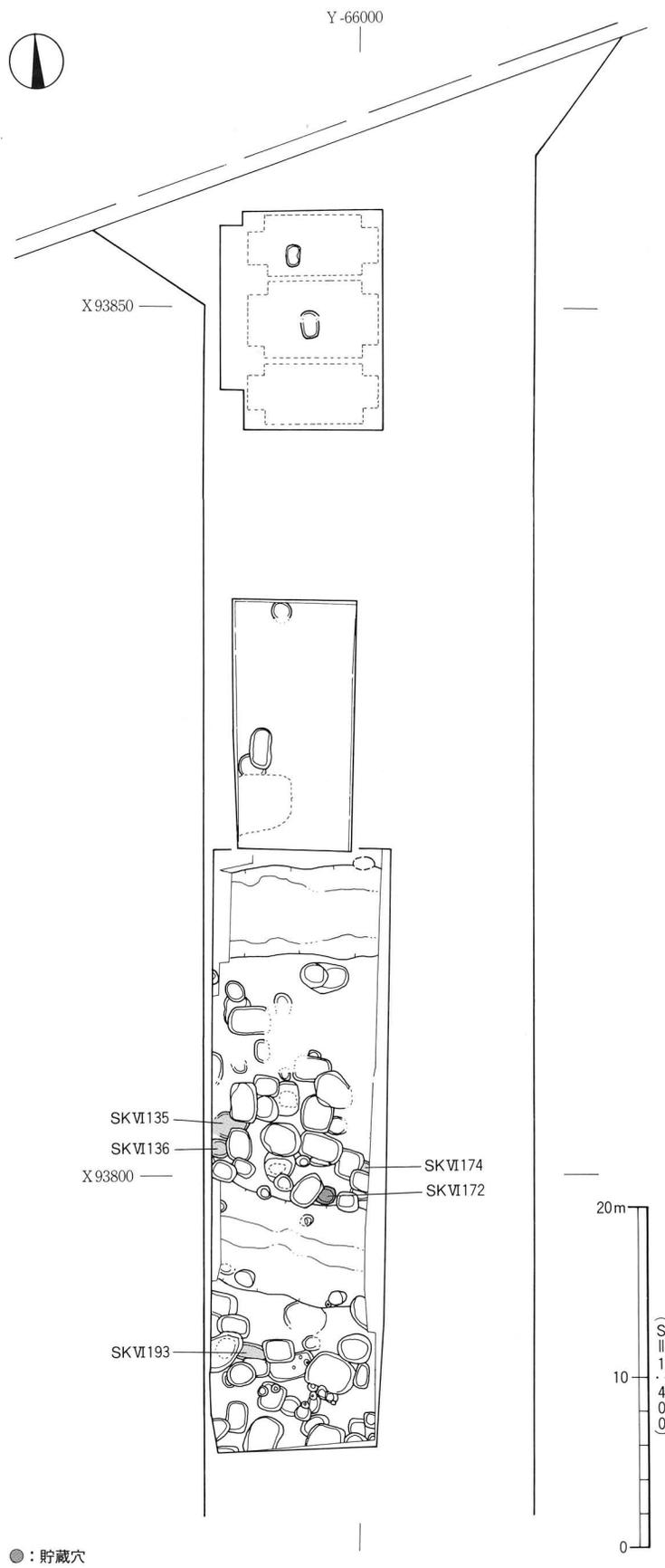
埋土	色 調	土 質	検 出 個 数 (基)			
			第1地区	第2地区	第3地区	計
A	黒褐色 (7.5Y R 3/2) + 明黄褐色 (10Y R 6/8)	粘質土	18	0	0	18
B	褐色 (7.5Y R 4/3)	粘質土	23	1	0	24
C	オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) + 明黄褐色 (10YR 6/8)	粘質土	19	1	0	20
D	オリーブ褐色 (2.5Y 4/4)	粘質土	14	1	2	17
E	灰オリーブ色 (5Y 5/2) + 明黄褐色 (10YR 6/8)	粘質土	6	0	0	6
計			80	3	2	85

## 1) 土 坑 E (第226図、表26)

土坑Eは6基あり、すべて第1地区の第Ⅶ層上面で検出した。平面形態では円形4基、長方形2基の二種類がある。ここでは、4基の土坑の測量図と3基の土坑から出土した遺物の実測図を掲載した。なお、S K VI172は貯蔵穴の形態をなす土坑である。

表26 土坑E一覧

S K 番号	平面形態	断面形態	堆積状況	遺構測量図	遺物実測図	グリット	備 考
S K VI129	円形	逆台形	単一	○	○	E2・3	
S K VI135	円形	皿	単一			E・F5	
S K VI136	円形	逆台形	単一			F5	
S K VI172	円形	筒(一部フラスコ)	凸	○	○	D・E4	貯蔵穴
S K VI174	長方形	逆台形	単一	○		D5	
S K VI193	長方形	逆台形	水平	○	○	E・F3	



第226図 VI区 土坑E分布図

① 貯蔵穴

SKVI172 (第227図)

第1地区の中央部、D・E4区に位置する。遺構の西側はSKVI122(土坑A)に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は南北長1.00m、東西検出長0.94m、深さ63cmを測る。断面形態は筒状を呈するが、東側壁体はフラスコ状となる。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は大きく4層(①~④層)に分けられる。②・③層は茶褐色土に黄色土が混入するものであり、④層は黒色土を基調として、黄色土がブロック状に混入するものである。遺構東側の③層中にて径5×20cm、厚さ3cmの炭化物のブロックを検出した。堆積状況は③層にて、一部凸堆積がみられるが、①・②層は水平堆積であることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。基底面は遺構北側が南側に比べ20cm高く、二段掘り構造となっている。また、基底面中央やや南寄りに径5cm、深さ5cmの小ピット1基(SP①)を検出した。ピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は埋土中から弥生土器片が少量出土した。このうちの1点を図化し、掲載した。

出土遺物

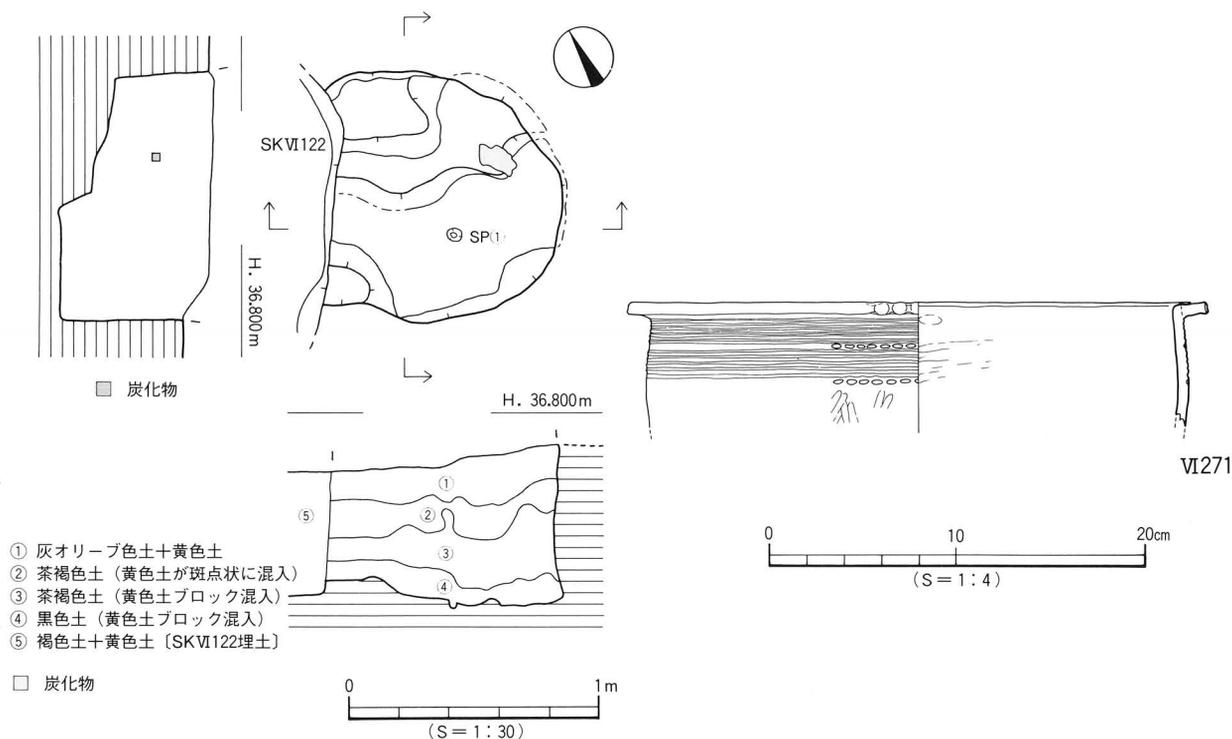
VI271は甕形土器である。貼り付けにより口縁部を成形するもので、胴部に沈線文5条と刺突文を施し、口縁端面には押圧文を施す。

② その他の土坑

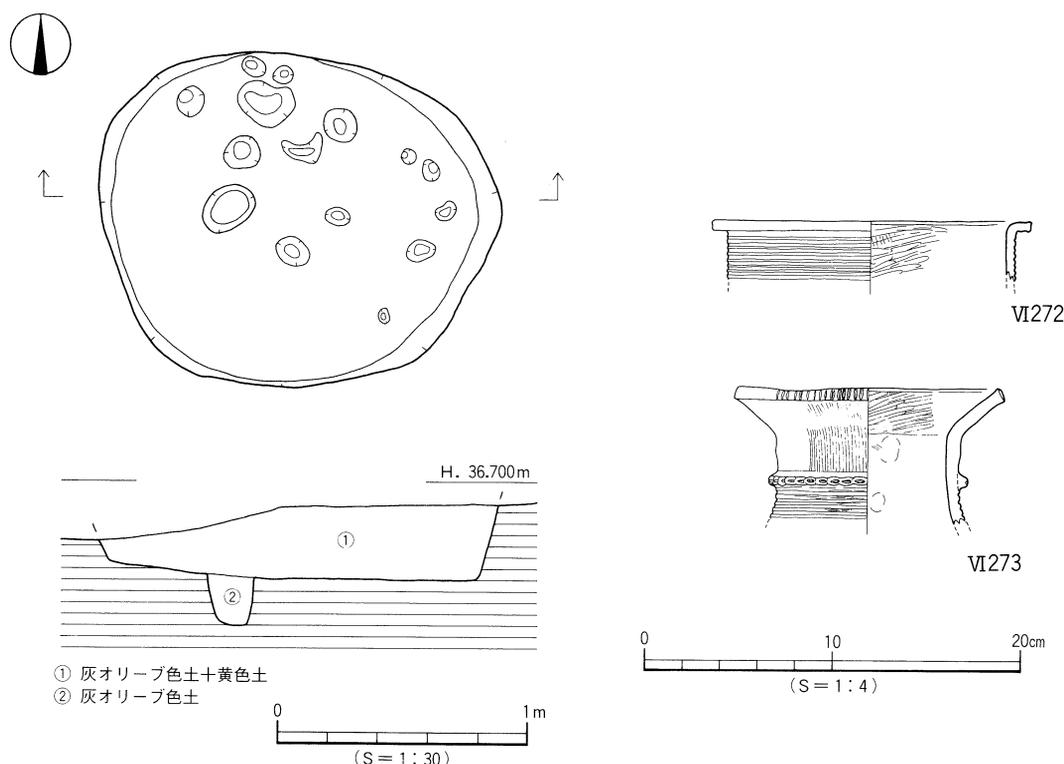
i) 円形土坑

SKVI129 (第228図)

第1地区の南部、E2・3区に位置する。SKVI189とSKVI190(土坑B)、SKVI192(土坑A)に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は東西長1.60m、南北長1.30m、深さ42cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は単一層で埋まることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。



第227図 SKVI172測量図・出土遺物実測図



第228図 SK VI129測量図・出土遺物実測図

掘り方最終面は第Ⅶ層になる。基底面は西から東に向かって緩傾斜する（比高差3cm）。基底面南西部を除く地域からは径5～15cm、深さ5～20cmの大小15基のピットを検出した。ピット埋土はいずれも灰オリーブ色土である。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量出土した。

#### 出土遺物

VI272は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。胴部に沈線文を施す。VI273は壺形土器。頸部に沈線文4条以上と断面三角形の凸帯を施し、凸帯上に連鎖状刻目文を施す。口縁端面には刻目。

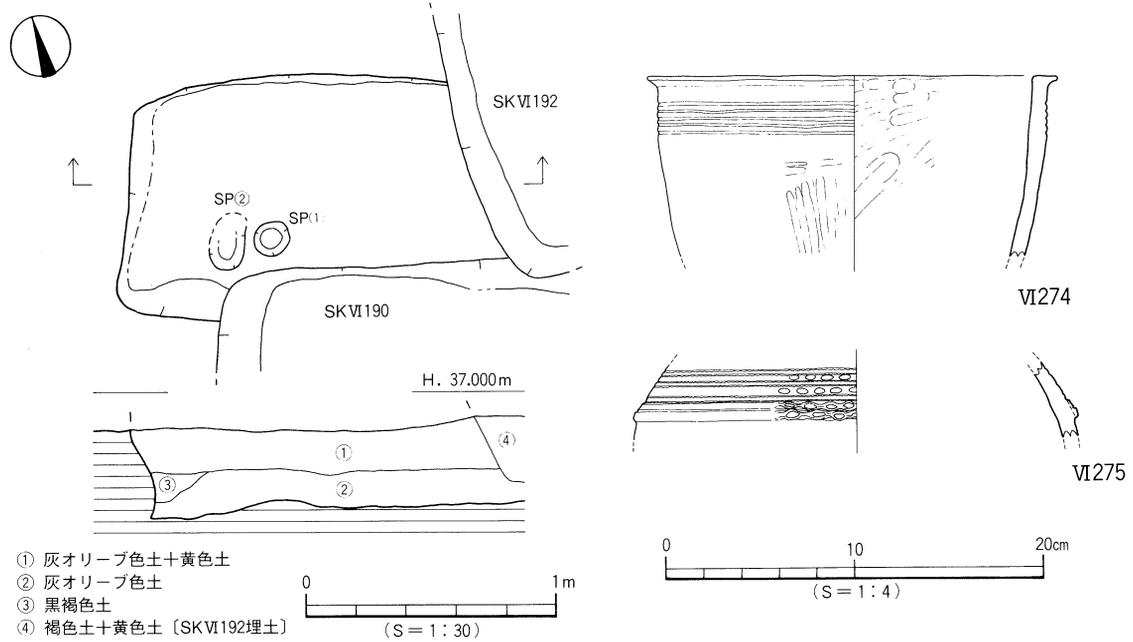
#### ii) 長方形土坑

##### SK VI193 (第229図)

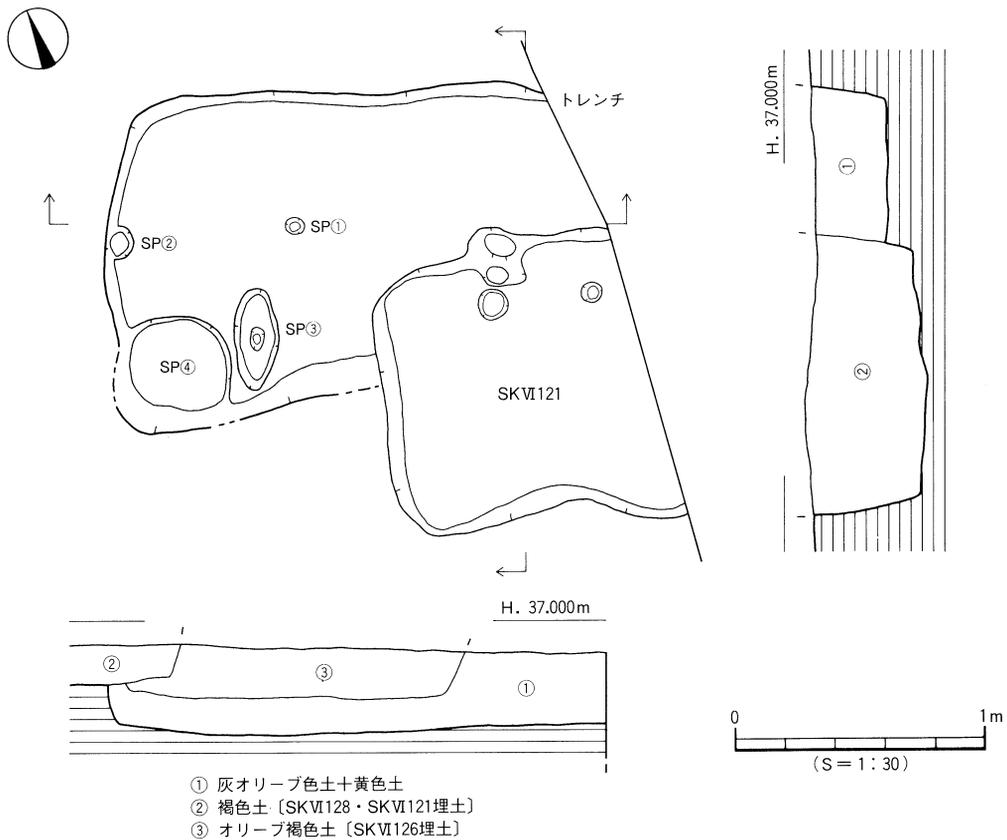
第1地区の南部、E・F3区に位置する。遺構の東側はSK VI192（土坑A）、南側はSK VI190（土坑B）に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は東西検出長1.50m、南北長0.96m、深さ36cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は大きく2層（①・②層）に分けられる。②層は①層に比べ、やや暗い色調の灰オリーブ色土である。遺構西側の①層下面にて、③層を検出した。黒褐色を呈するブロック状の土壌である。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。堆積状況は水平堆積である。基底面の中央部はほぼ平坦であるが、西側はやや凹む（比高差5cm）。基底面南西部では径10～15cm、深さ5cmのピット2基を検出した（SP①・②）。ピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は埋土中から弥生土器片が少量出土した。

出土遺物

VI274は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。胴部に沈線文5条を施す。VI275は壺形土器の胴部片。凸帯を2条貼り付け、凸帯上に押圧を加える。凸帯上位に貝殻腹縁による直線文3条を施す。



第229図 SKVI193測量図・出土遺物実測図



第230図 SKVI174測量図

SKVI174 (第230図)

第1地区の中央部、D5区に位置する。遺構の南側はSKVI121(土坑B)、西側と中央部はそれぞれSKVI126(土坑D)・SKVI128(土坑B)、東側はトレンチに切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は東西検出長2.00m、南北長1.20m、深さ35cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は単一層である。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。基底面の中央やや西寄り、西壁沿いから径5～10cm、深さ5cmの小ピット2基(SP①・②)を検出した。また、土坑南西隅の基底面にて径20×40cm、深さ5cmの楕円形状のピット(SP③)と、径40cm前後、深さ3cmのピット(SP④)を検出した。ピット埋土は、いずれも土坑埋土と同様である。土坑内からの遺物の出土はない。

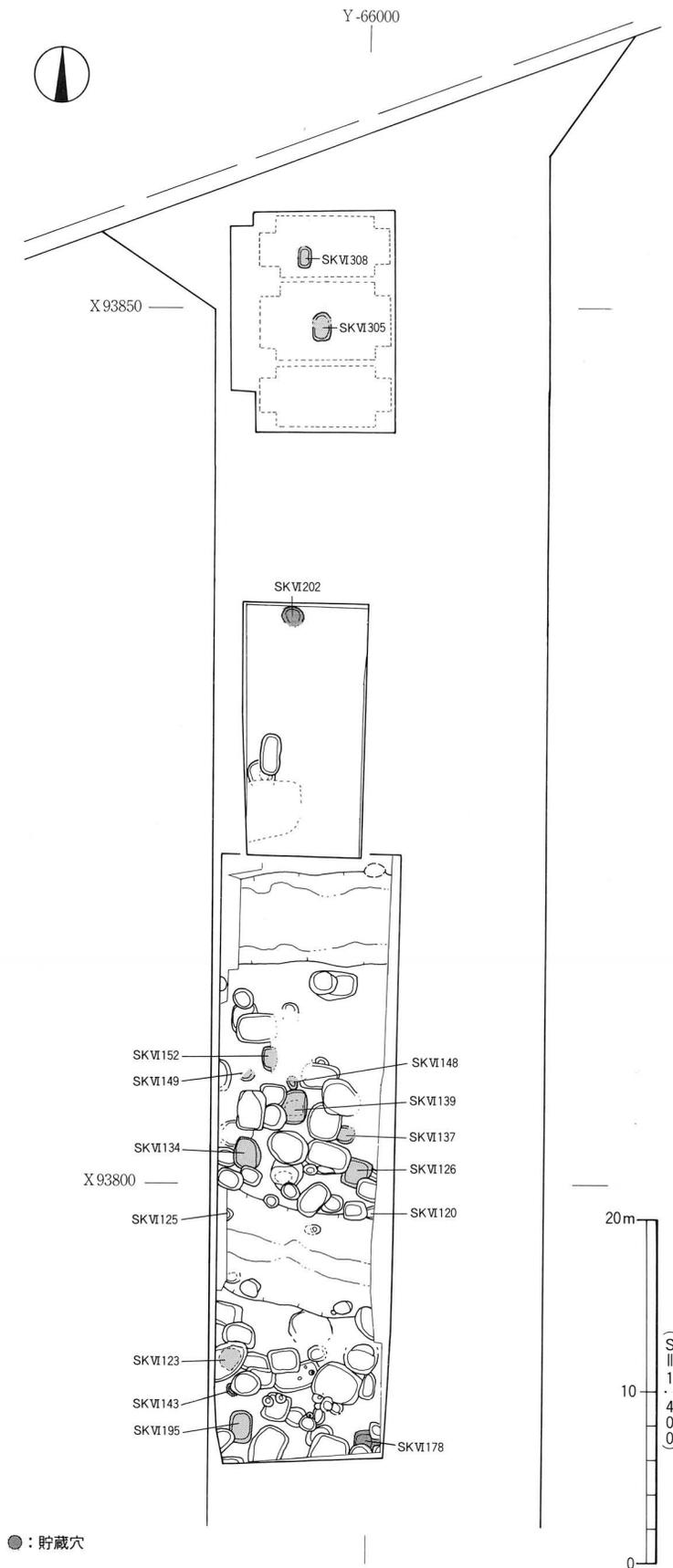
2) 土坑D (第231図、表27)

土坑Dは17基ある。第1地区で14基、第2地区で1基、第3地区で2基を検出した。すべて第Ⅶ層上面での検出である。平面形態では円形6基、楕円形1基、方形2基、長方形8基の四種類がある。このうち10基の土坑の測量図と6基の土坑から出土した遺物の実測図を掲載した。なお、SKVI143・SKVI178・SKVI202の3基は、貯蔵穴の形態をなすものである。

表27 土坑D一覧

SK番号	平面形態	断面形態	堆積状況	遺構測量図	遺物実測図	グリット	備考
SKVI120	方形	皿	単一			D4	
SKVI123	不整円形	皿	単一	○		E・F3	
SKVI125	円形	皿	単一			F4	
SKVI126	不整長方形	舟底	単一	○	○	D5	
SKVI134	長方形	皿	水平	○		E・F5	
SKVI137	円形	皿	単一			D・E5	
SKVI139	長方形	皿	単一	○	○	E5・6	
SKVI143	円形	筒(一部フラスコ)	単一	○		E・F2	貯蔵穴
SKVI148	長方形	皿	単一			E6	
SKVI149	円形	皿	単一			E・F6	
SKVI152	長方形	逆台形	単一			E6	
SKVI170	方形	皿	単一			F3・4	
SKVI178	楕円形	フラスコ(一部逆台形)	単一	○	○	D2	貯蔵穴
SKVI195	長方形	逆台形	単一	○	○	E・F2	
SKVI202	円形	フラスコ(一部袋)	単一	○		E11	貯蔵穴
SKVI305	長方形	皿	単一	○	○	E14	
SKVI308	長方形	逆台形	単一	○	○	E15	

VI 区



第231图 VI区 土坑D分布图

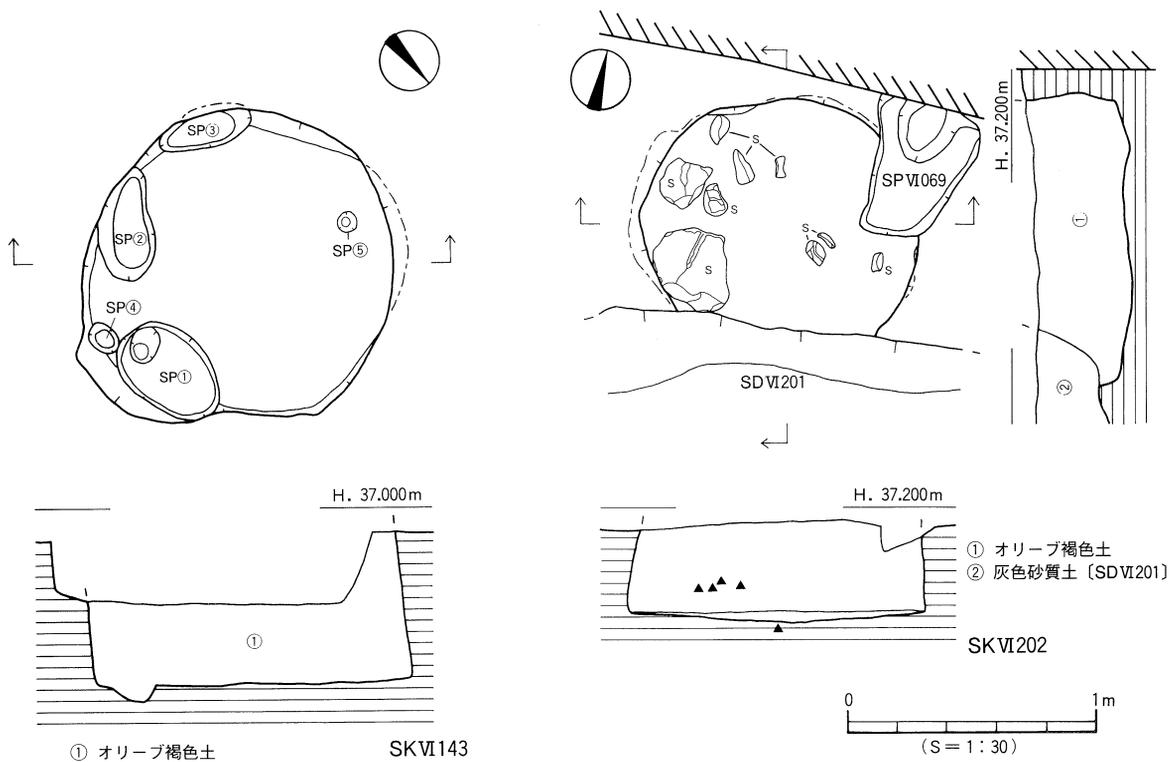
① 貯蔵穴

SKVI143 (第232図、図版63)

第1地区の南西部、E・F2区に位置する。遺構の東側はSKVI190(土坑B)、SKVI191(土坑A)に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は径1.24~1.30m、深さ60cmを測る。断面形態は筒状を呈するが、北壁はフラスコ状となる。埋土は単一層であることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。基底面はほぼ平坦である。基底面の南側から径10×40cm、深さ5cmの楕円形ピット3基(SP①~③)と、径10cm、深さ3cmの小ピット2基(SP④・⑤)を検出した。ピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は埋土中にて、弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

SKVI202 (第232図)

第2地区の北部、E11区に位置する。遺構の南側はSDVI201(中世)、北東部はSPVI069に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は東西長1.17m、南北検出長1.16m、深さ40cmを測る。断面形態はフラスコ状を呈し、北壁に限り袋状となる。埋土は単一層である。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。基底面は南側がわずかに凹む(比高差4cm)。西側の基底面から10cm上の地点で、径10~30cm大の角礫が出土した。遺物は埋土中にて、弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。



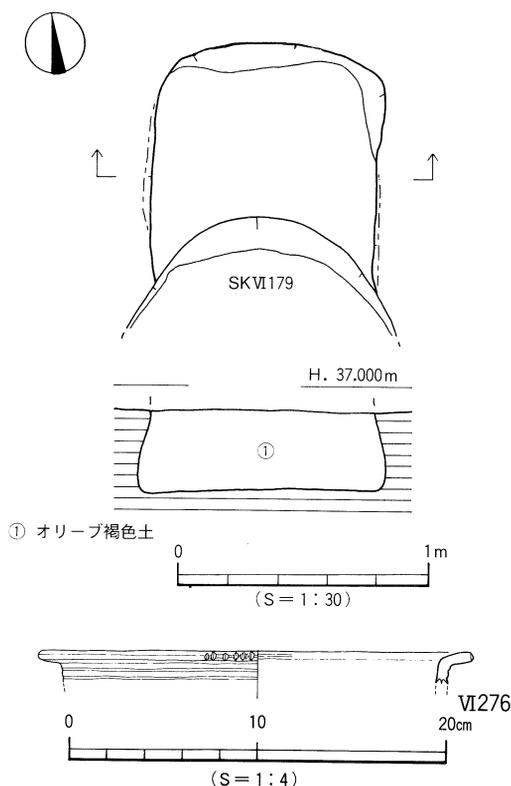
第232図 SKVI143・202測量図

S K VI178 (第233図)

第1地区の南東隅、D2区に位置する。遺構南側はS K VI179 (土坑B) に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は東西長0.90m、南北検出長0.70m、深さ35cmを測る。断面形態はフラスコ状を呈する。埋土は単一層である。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中から弥生土器片が少量出土した。

出土遺物

VI276は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。胴部に沈線文2条以上、口縁端面には刻目を施す。



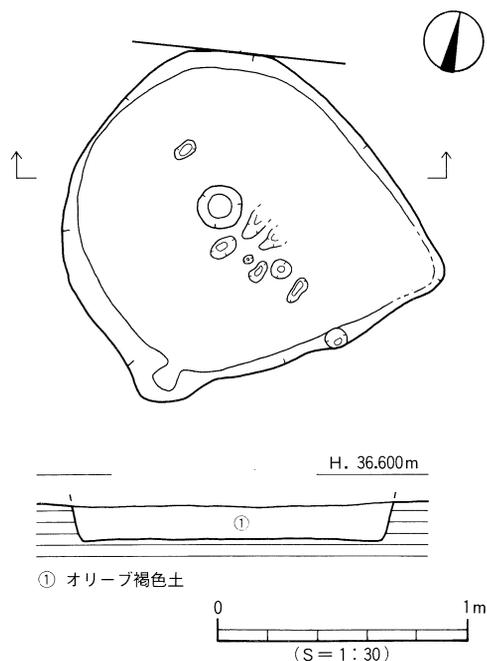
第233図 S K VI178測量図・出土遺物実測図

② その他の土坑

i) 円形土坑

S K VI123 (第234図)

第1地区の南西部、E・F3区に位置する。遺構の上部はS K VI194 (土坑A) に切られる。平面形態は不整形円形を呈し、規模は径1.30m、深さ15cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は単一層である。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。基底面はほぼ平坦である。基底面の中央部付近にて径6~15cm、深さ8cmの小ピット10基を検出した。ピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は埋土中にて、弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。



第234図 S K VI123測量図

ii) 長方形土坑

SK VI126 (第235図)

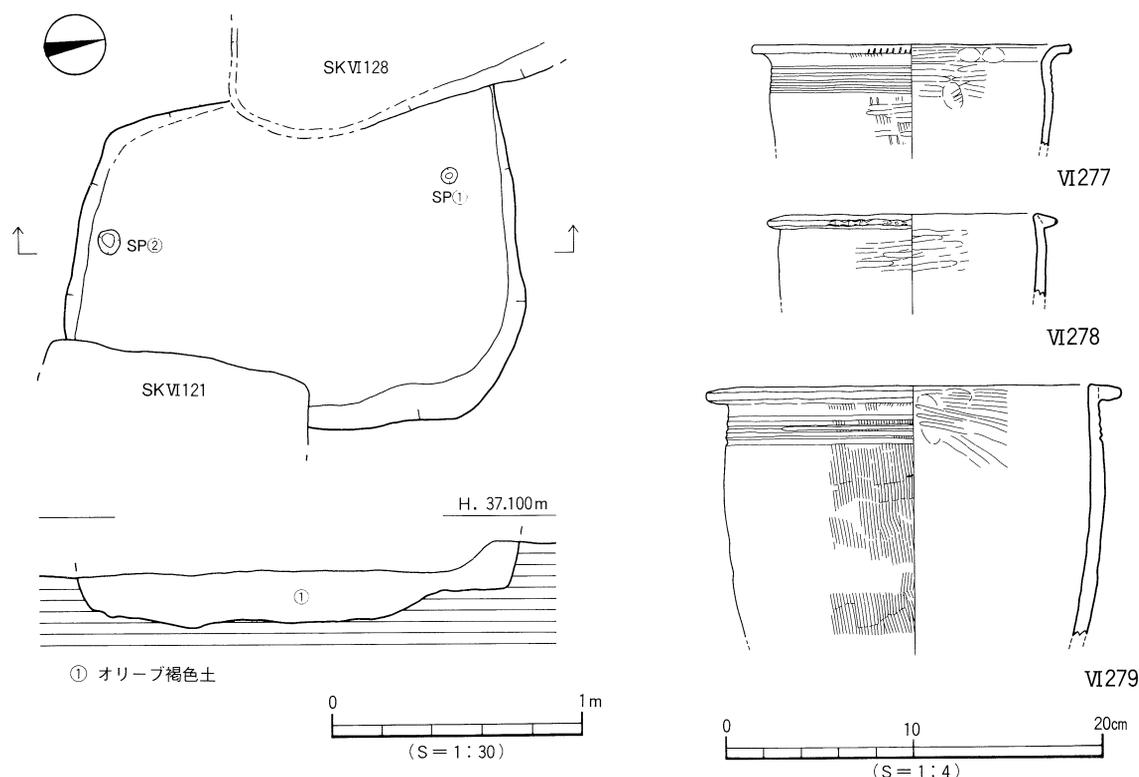
第1地区の中央部、D5区に位置する。遺構の東側はSK VI121(土坑B)、西側はSK VI128(土坑B)に切られる。平面形態は不整の長方形を呈し、規模は東西検出長1.30m、南北長1.80m、深さ30cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は単一層である。掘り方最終面は第VII②層になる。基底面の北側は幅30cmのテラス状の段をなし、二段掘り構造になっている(比高差12cm)。基底面中央部はわずかに凹凸がみられ、北側と南側からは径5～10cm、深さ5cmの小ピット2基(SP①・②)を検出した。ピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物

VI277は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。胴部には沈線文5条、口縁端面には刻目を施す。VI278・279は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。VI278は口縁端面に連鎖状刻目文、VI279は胴部にヘラ描き沈線文4条を施す。

SK VI134 (第236図)

第1地区の中央部、E・F5区に位置する。遺構の南側はSK VI133(土坑B)に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.70m、幅1.30m、深さ30cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は上下2層(①・②層)に分層され、②層には炭化物が混入する。掘り方最終面は第VII層になる。堆積状況は水平堆積である。基底面の中央部からは径25cm、深さ6cmのピット1基(SP①)と、北西隅及び南側で径4～10cm、深さ5cmの小ピット5基(SP②～⑥)を検出した。ピット埋土は②層と同様である。遺物は埋土中にて、弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。また、遺構北西隅の②層上面付近にて、径10×20cm大の円礫が1点出土した。



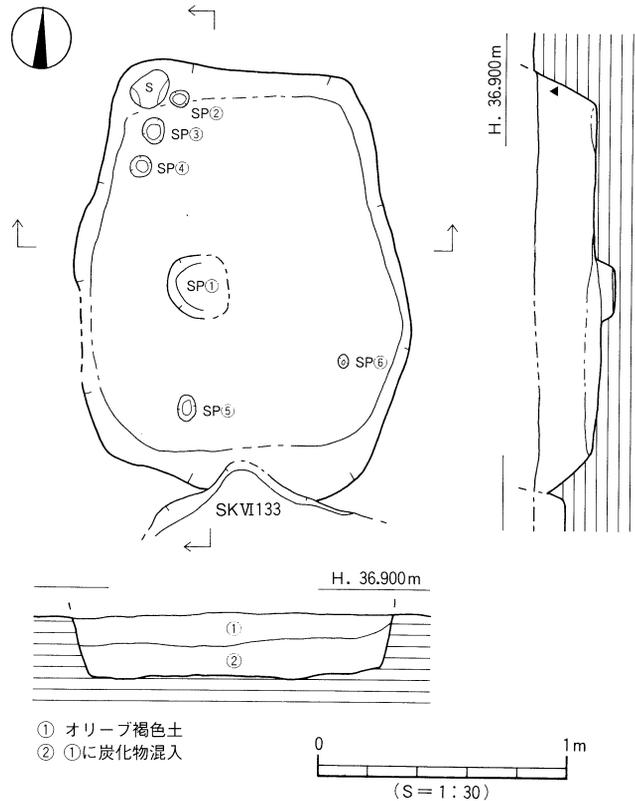
第235図 SK VI126測量図・出土遺物実測図

SKVI139 (第237図)

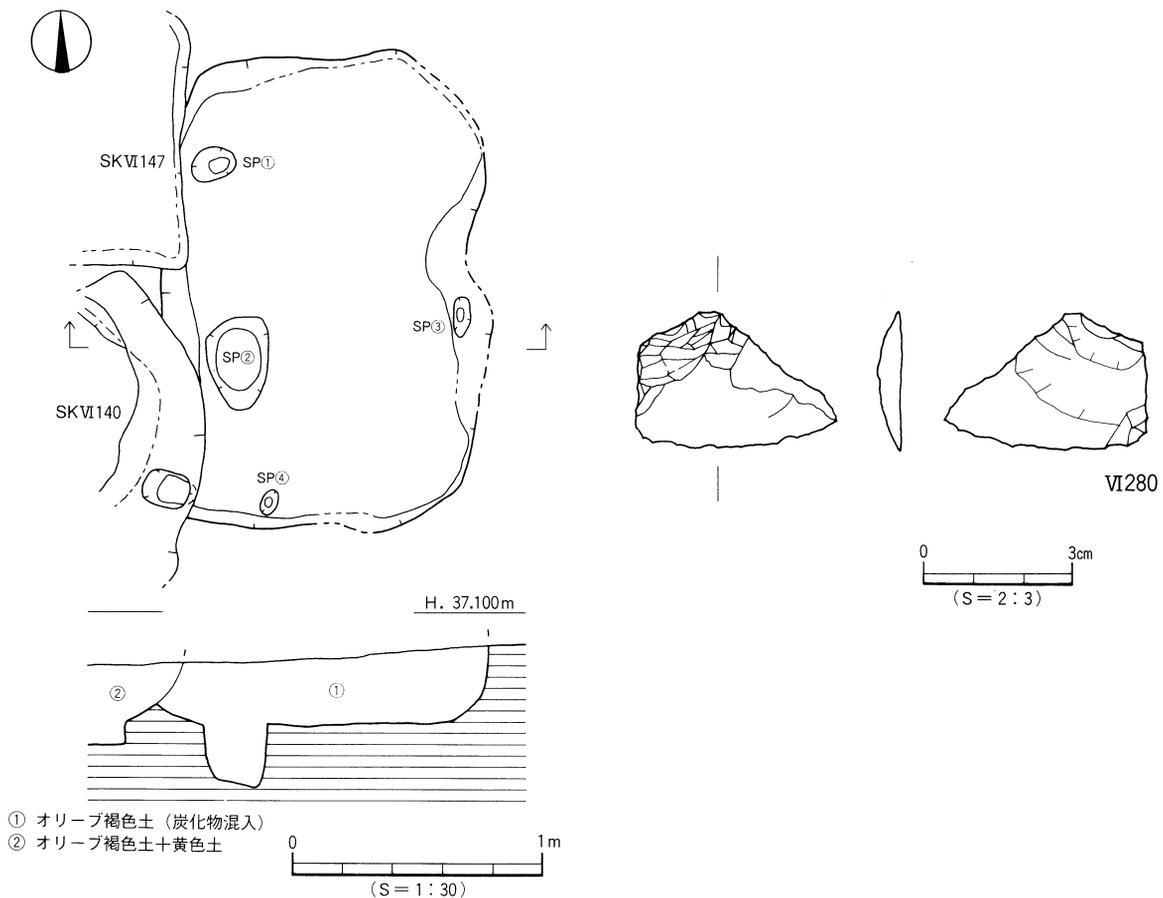
第1地区の中央部、E5・6区に位置する。遺構の西側はSKVI140・SKVI147(土坑C)に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.90m、幅1.50m、深さ50cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は単一層である。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。基底面中央部はほぼ平坦であるが、北側はやや凹む(比高差4cm)。基底面からは径10~40cm、深さ5~20cmの大小のピット4基(SP①~④)を検出した。ピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は埋土中から石器片が1点出土した。

出土遺物

VI280は使用痕の残る横長剥片である。サヌカイト製。



第236図 SKVI134測量図



第237図 SKVI139測量図・出土遺物実測図

SK VI195 (第238図、図版63)

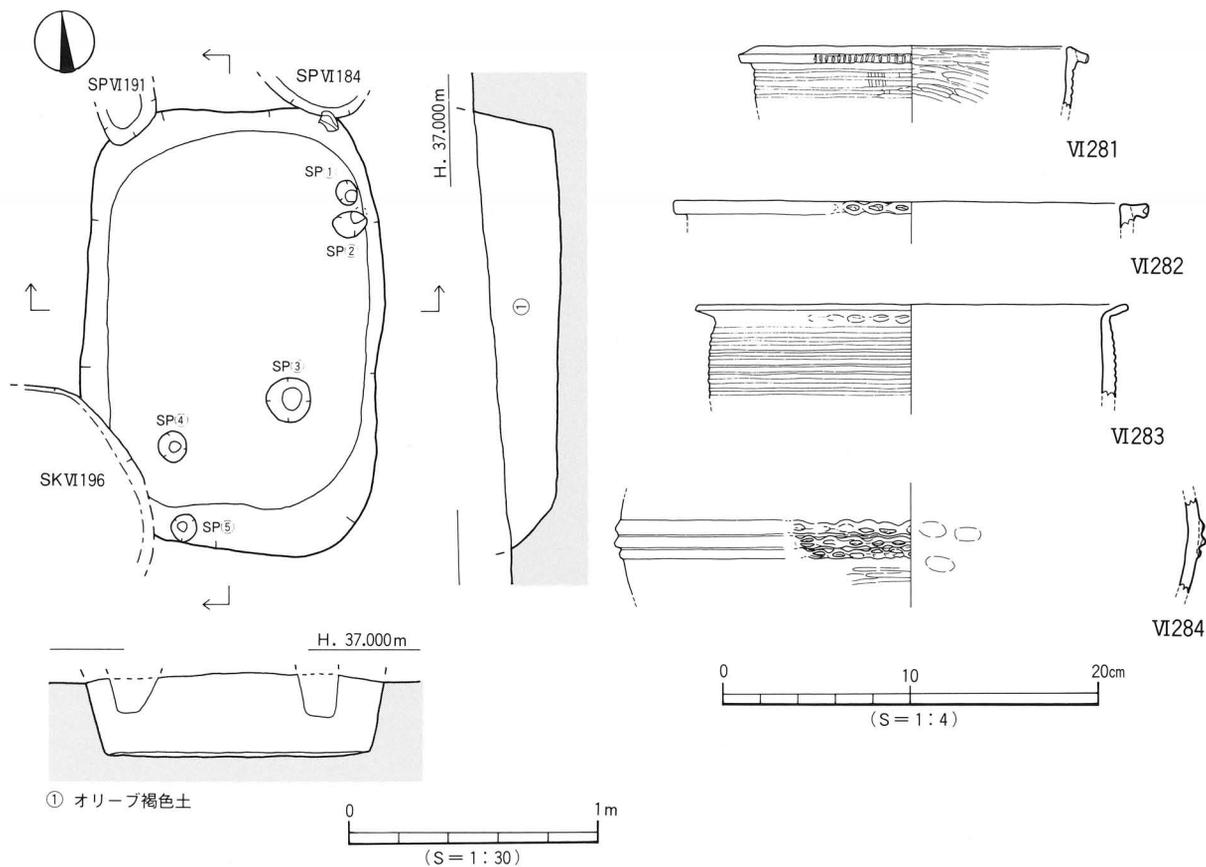
第1地区の南西部、E・F2区に位置する。遺構の南西部はSK VI196(土坑A)に、北壁はSP VI184・191(中世)に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.80m、幅1.20m、深さ34cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。東西及び北側壁体は垂直に近く立ち上がるが、南側壁体はやや緩やかに立ち上がる。埋土は単一層である。掘り方最終面は第Ⅷ層におよぶ。基底面からは径10～20cm、深さ5～10cmの小ピット5基(SP①～⑤)を検出した。ピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は埋土中から、弥生土器片が数点出土した。

出土遺物

VI281・282は貼り付け、VI283は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。VI281・283は胴部に沈線文を施す。VI282は口縁端面に刺突文を施す。VI284は壺形土器で、胴部中位に凸帯文3条を貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文1列を施す。

SK VI305 (第239図、図版63)

第3地区の中央部、E14区に位置する。遺構の北壁はSP VI045(中世)、西壁はSP VI054(中世)、南壁はSP VI046(中世)、中央部北寄りにはSD VI301(中世)に切られている。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.57m、幅1.00m、深さ15cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は単一層である。基底面は北側から南側に向かって緩傾斜する(比高差8cm)。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。基底面からは径18～22cm、深さ5～16cmのピット3基(SP①～③)を検出した。ピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量と、南側から径10cm大の角礫が1点出土した。



第238図 SK VI195測量図・出土遺物実測図

出土遺物

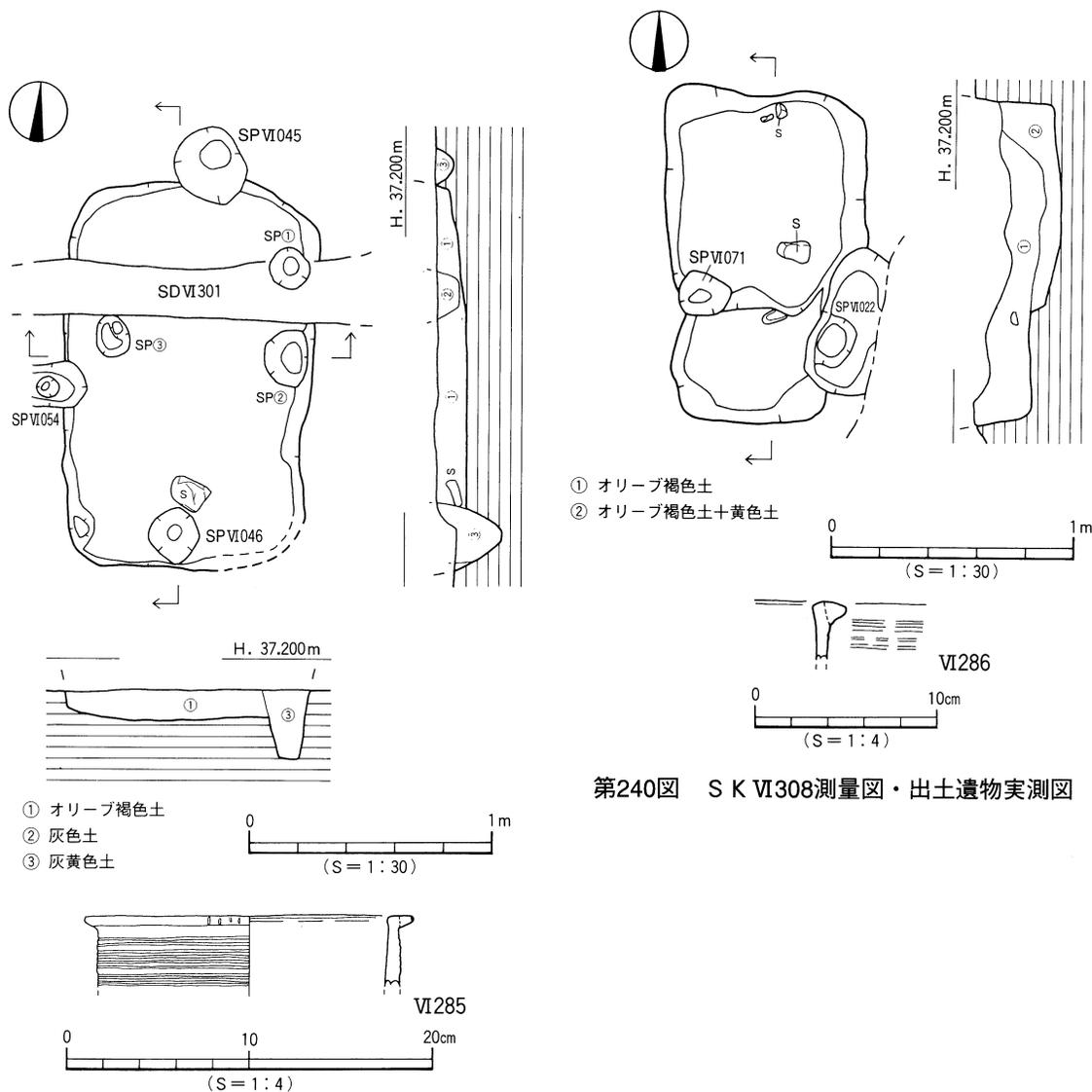
VI285は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。胴部には沈線文（3条1組）、口縁端面には刻目を施す。

S K VI308（第240図、図版64）

第3地区の北部、E15区に位置する。遺構の東壁はS P VI022（中世）、西壁はS P VI071に切られる。平面形態は不整の長方形を呈し、規模は東西長0.36m、南北長1.32m、深さ36cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層（①・②層）あり、②層は黄色土が斑点状に混入する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。基底面は南側が高く、二段掘り構造となる。検出状況から、2基の土坑が重複している可能性がある。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物

VI286は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。胴部には沈線文2条以上を施す。



第240図 S K VI308測量図・出土遺物実測図

第239図 S K VI305測量図・出土遺物実測図

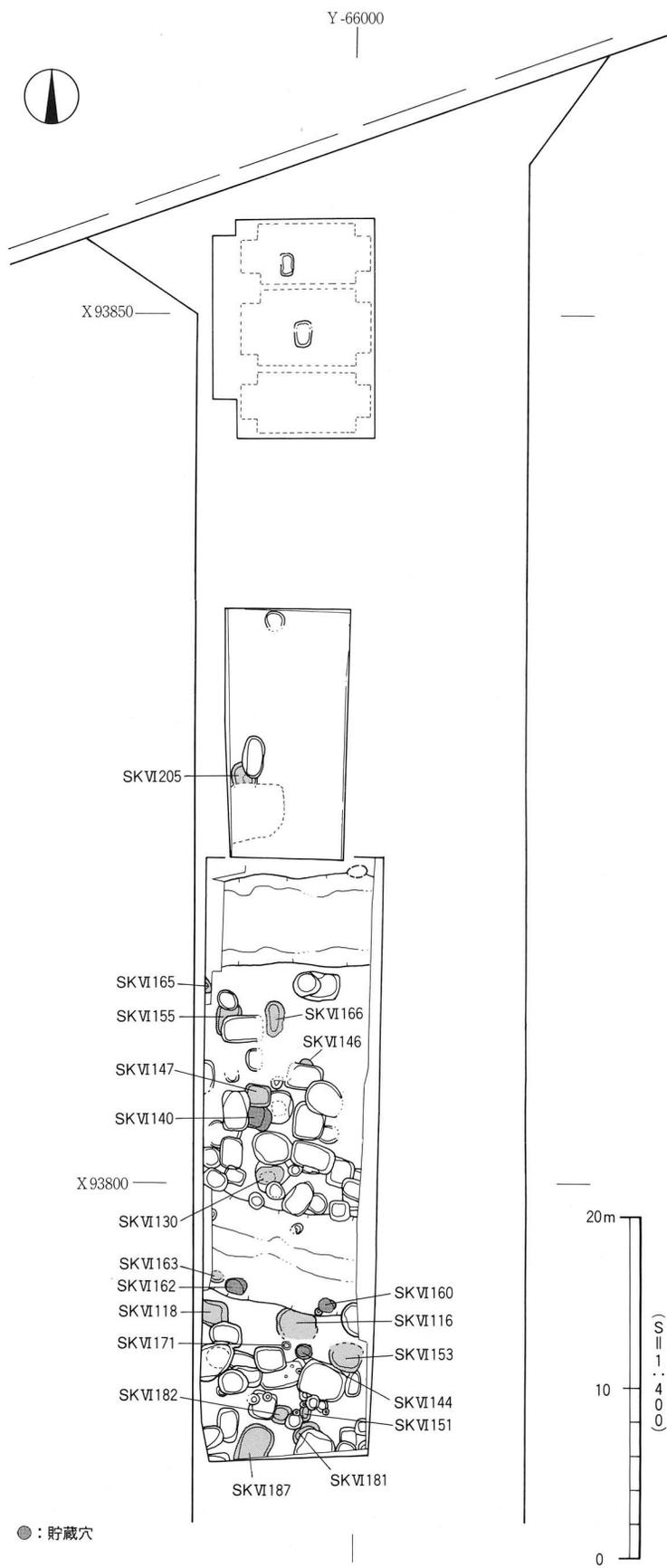
3) 土 坑 C (第241図、表28)

土坑Cは20基ある。第1地区で19基、第2地区で1基を検出した。すべて第Ⅶ層上面での検出である。第3地区では未検出であった。平面形態には円形が10基、楕円形が7基、方形が2基、長方形が1基の四種類がある。11基の土坑の測量図と、8基の土坑から出土した遺物の実測図を掲載した。このうち、SKVI140・SKVI144・SKVI160・SKVI162は貯蔵穴の形態をなす土坑である。

表28 土坑C一覧

SK番号	平面形態	断面形態	堆積状況	遺構測量図	遺物実測図	グリット	備考
SKVI116	楕円形	逆台形	単一			E3	
SKVI118	長方形	皿	単一			F3	
SKVI130	円形	舟底	単一	○	○	E5	
SKVI140	不整円形	袋	単一	○		E5・6	貯蔵穴
SKVI144	不整円形	筒(一部フラスコ)	単一	○	○	E3	貯蔵穴
SKVI146	円形	皿	単一			E6	
SKVI147	方形	逆台形	単一			E6	
SKVI151	楕円形	皿	単一			E2	
SKVI153	円形	逆台形	単一	○	○	D2・3	
SKVI155	楕円形	逆台形	単一			E6～F7	
SKVI160	不整円形	袋	単一	○	○	D・E3	貯蔵穴
SKVI162	円形	袋(一部逆台形)	放物線型凹	○		E3～F4	貯蔵穴
SKVI163	楕円形	挿鉢	単一	○		F4	
SKVI165	円形	皿	単一			F7	
SKVI166	楕円形	舟底	単一	○	○	E6・7	
SKVI171	方形	皿	単一			E3・4	
SKVI181	楕円形	皿	単一			E2	
SKVI182	円形	皿	単一	○	○	E2	
SKVI187	楕円形	逆台形	単一	○	○	E2	
SKVI205	円形	逆台形	放物線型凹	○	○	E・F9	

VI 区



第241图 VI区 土坑C分布图

① 貯蔵穴

SKVI144 (第242図)

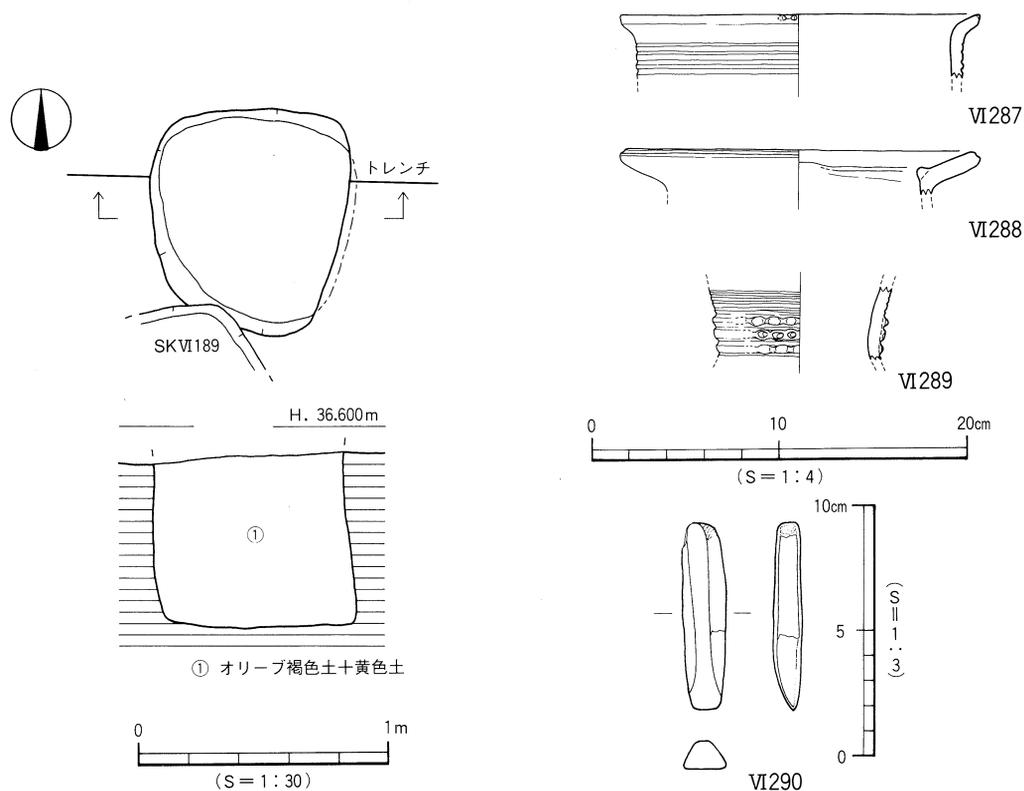
第1地区の南部、E3区に位置する。遺構の南側はSKVI189(土坑B)に切られる。平面形態は不整円形を呈し、規模は径0.80～0.90m、深さ70cmを測る。断面形態は筒状を呈し、埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。遺物は埋土中から、弥生土器片と石器が出土した。

出土遺物 (図版78)

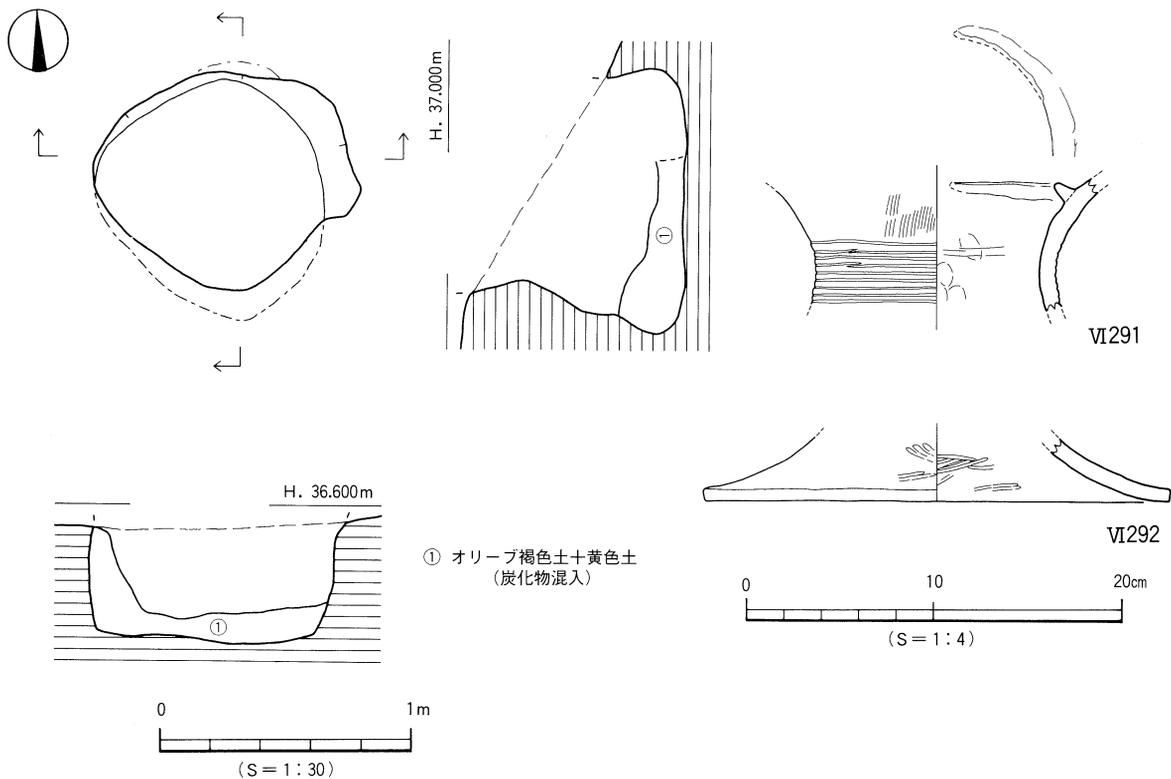
VI287は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。胴部には沈線文4条以上、口縁端面には刻目を施す。VI288・289は壺形土器である。VI289は胴部に凸帯を3条貼り付け、凸帯上・下段には指頭押圧、中段には連鎖状刻目文を施す。VI290はノミ形石斧である。偏両刃で刃部はやや丸味を帯びる。断面形態は台形状を呈する。前主面と後主面の幅が異なる。基部に研磨を施すことから、製作途中に折れて、そのまま研磨に移行したものとみられる。緑色片岩製。

SKVI160 (第243図、図版64)

第1地区の南部、D・E3区に位置する。SDVI105完掘後、溝の南側壁面で検出したもので、遺構上部はSDVI105に削平されている。平面形態は不整円形を呈し、規模は径0.90～1.00m、深さ90cmを測る。断面形態は袋状を呈するが、東西壁体に比べて南北壁体が大きく袋状になる。基底面はほぼ平坦である。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。SKVI160の埋土はSDVI105の埋土と類似していたこ



第242図 SKVI144測量図・出土遺物実測図



第243図 SK VI160測量図・出土遺物実測図

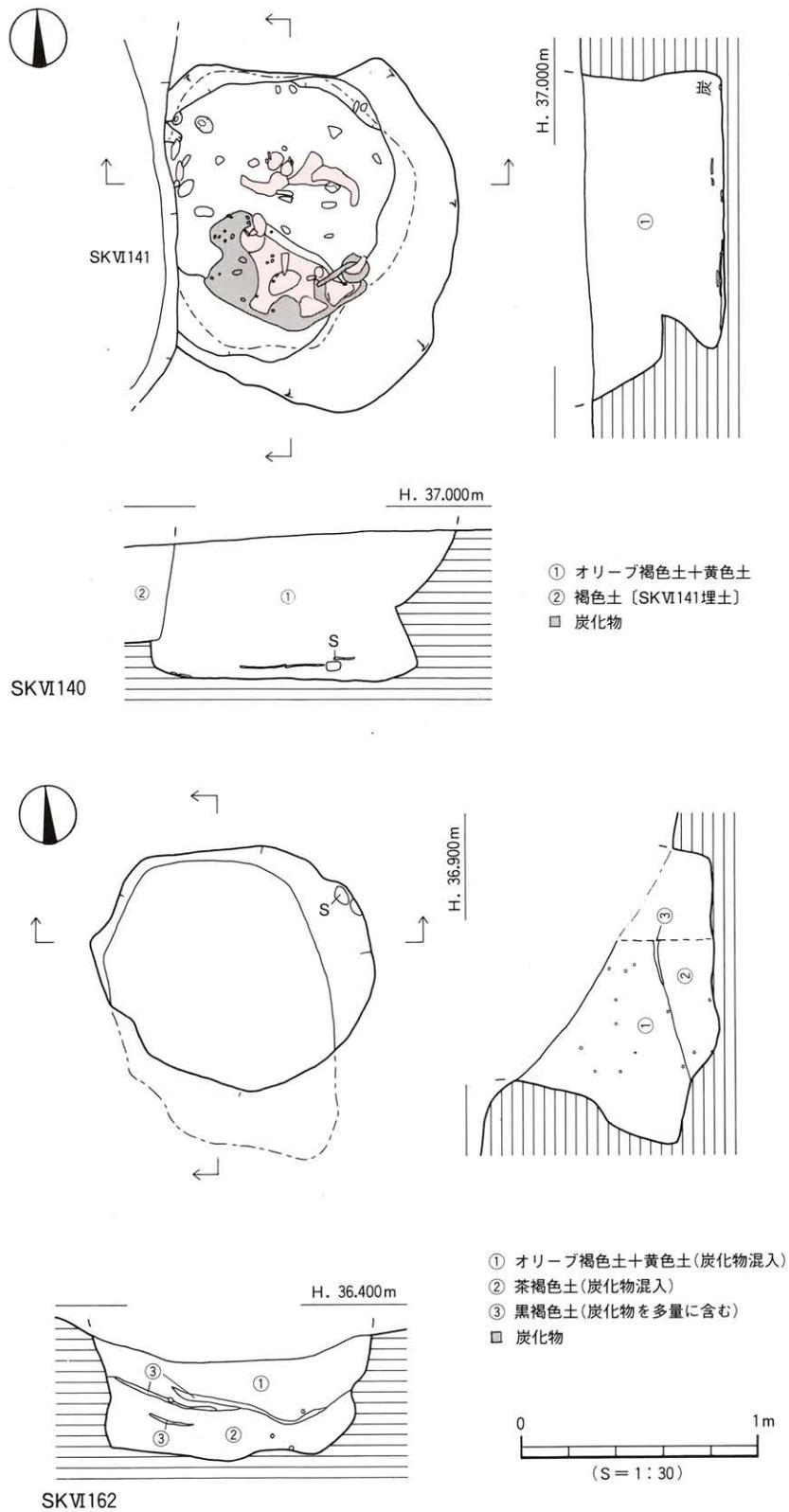
とから、S D VI105と認識してS K VI160の掘り下げを行ったため、埋土上位部分の確認ができなかった。埋土は、現状では単一層である。埋土下に炭化物が混入することや、後述するS K VI162と検出状況が類似することから、土坑内で火を使用した可能性がある。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量出土した。

#### 出土遺物

VI291は壺形土器の口頸部片。頸部内面には断面三角形の凸帯を貼り付け、頸部外面には沈線文9条（2～3条1組）を施す。VI292は蓋形土器の口縁部片である。内外面共に煤が付着する。

#### S K VI140（第244図、図版64・65）

第1地区の中央部、E 5・6区に位置する。遺構の西側はS K VI141（土坑B）に切られる。平面形態は不整円形を呈し、規模は東西検出長1.30m、南北長1.40m、深さ60cmを測る。断面形態は袋状を呈する。北側壁体は基底面付近でやや袋状を呈した後、垂直に立ち上がるが、東・南側壁体は大きく袋状を呈した後、緩やかに立ち上がる。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。基底面南側からは焼土と炭を検出した。基底面が焼けて炭が覆った状態であったことから、土坑内で火を使用した可能性がある。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。遺物は弥生土器の小片が少量出土したが、図化しうるものはない。



第244図 SKVI140・162測量図

SKVI162 (第244図、図版65)

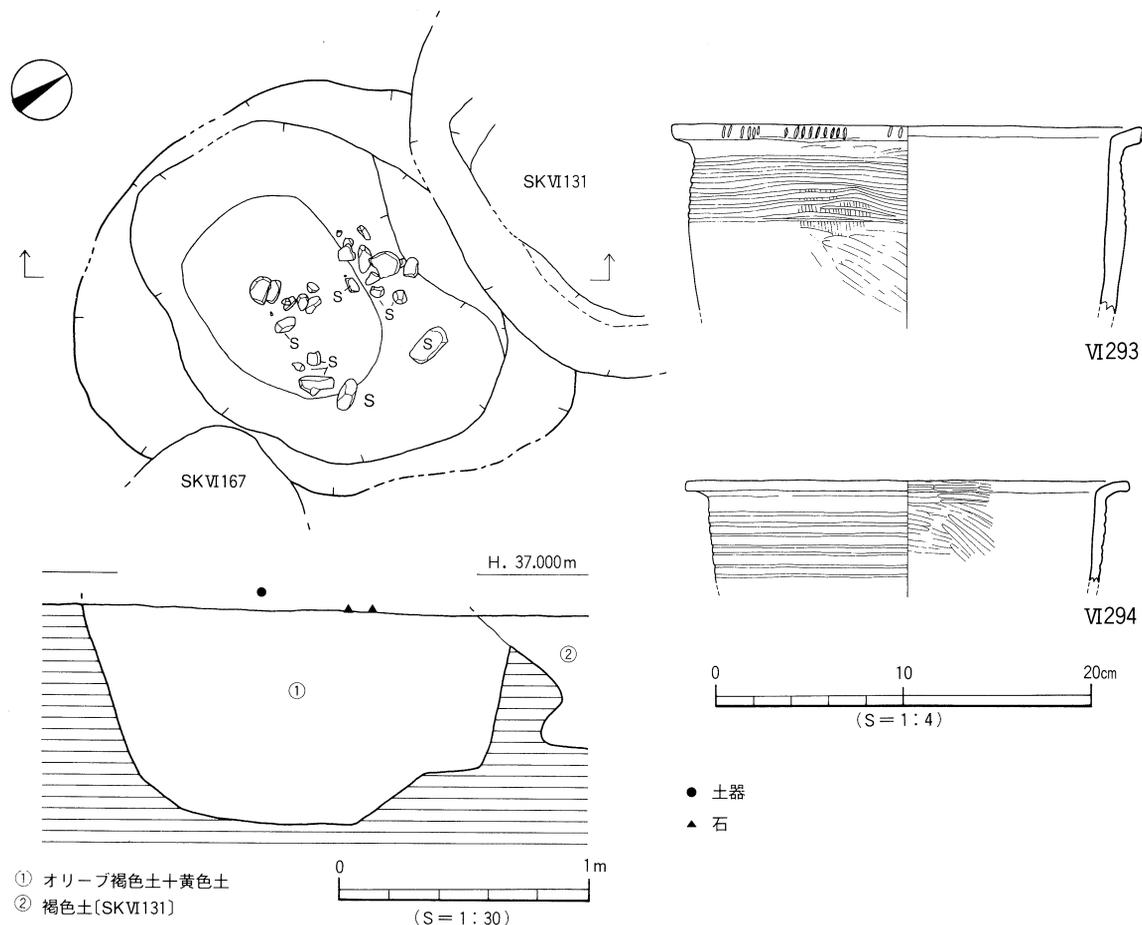
第1地区の南部、E3～F4区に位置する。SDVI105完掘後、溝の南側壁面で検出したもので、遺構上部はSDVI105に削平されている。平面形態は円形を呈し、規模は径1.0～1.2m、深さ80cmを測る。断面形態は袋状を呈する。基底面は中央部がやや凹む(比高差4cm)。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。埋土は3層(①～③層)に分層され、②層は茶褐色土に炭化物が混入する。②層は西方向からの土砂の流入がみられ、やや放物線型凹堆積を呈する。炭化物が混入することから人為的に投げ込まれた土層の可能性ある。①層と②層の間には炭化物を多量に含む③層が薄く堆積し、②層堆積後に、再度底面として火を使用したものとみられる。遺物は、弥生土器の小片が少量と、径15cm大の河原石が出土した。ただし、図化しうるものはない。

② その他の土坑

i) 円形土坑

SKVI130 (第245図)

第1地区の中央部、E5区に位置する。遺構の北側はSKVI131(土坑B)、南東側はSKVI167(土坑A)に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は東西検出長1.60m、南北長1.70m、深さ87cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。埋土は単一層で埋まる。基底面北側は幅25cmの平坦面をなし、二段掘り構造である(比高差25cm)。遺物は埋土上位から弥生土器片と、径10～20cmの河原石が出土した。



第245図 SKVI130測量図・出土遺物実測図

出土遺物 (図版78)

VI293・294は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。胴部には、VI293はヘラ描き沈線文1条と3条1組の工具による沈線文、VI294は2条1組の工具による沈線文を施す。

S K VI153 (第246図)

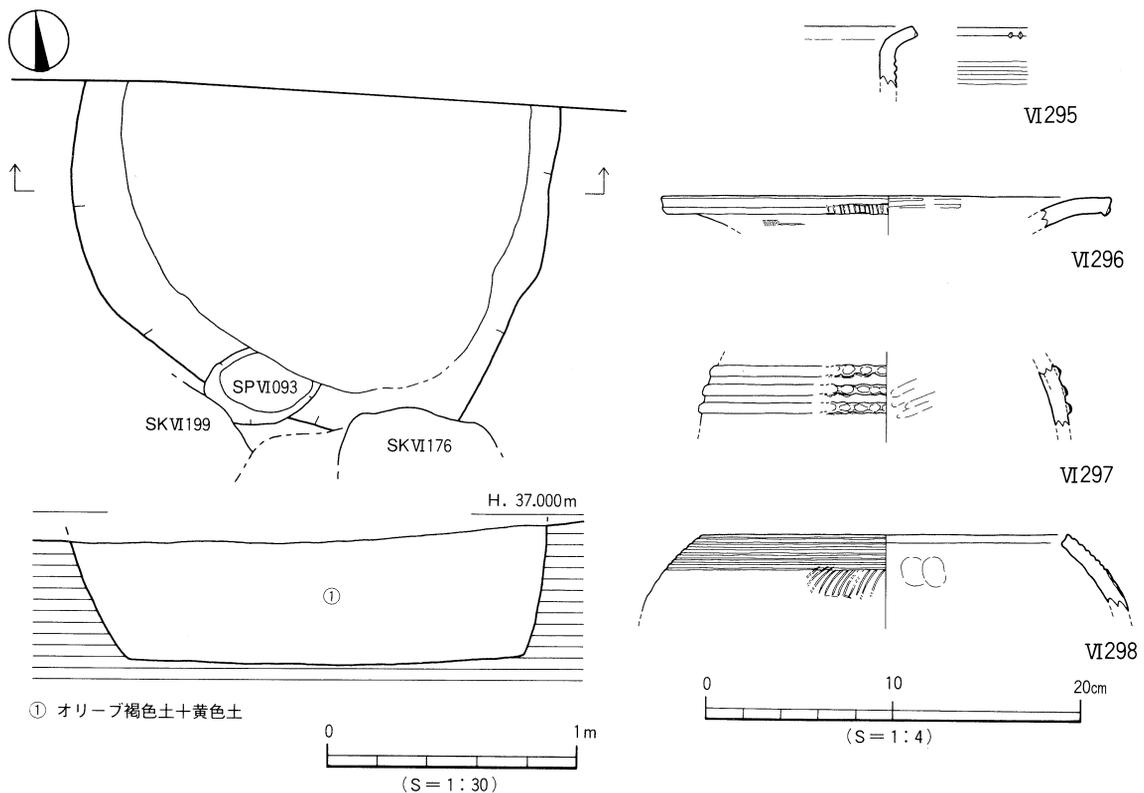
第1地区の南部、D2・3区に位置する。遺構の南側はS K VI176 (土坑A)、S P VI093に切られる。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西長1.94m、南北検出長1.36m、深さ50cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東側壁体は垂直に立ち上がる。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。埋土は単一層であることから、人為的に埋め戻された可能性がある。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中にて、弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを4点掲載した。

出土遺物

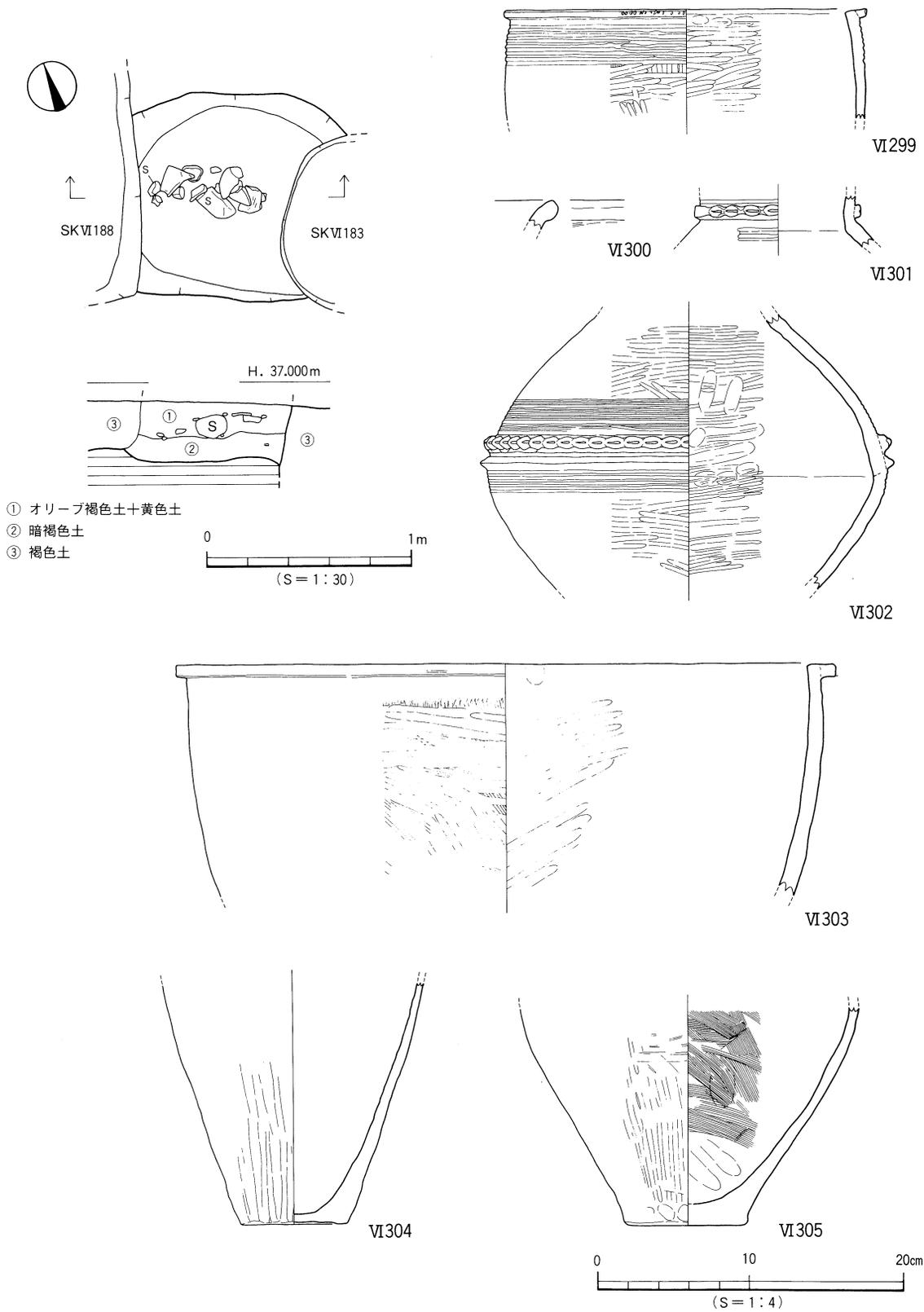
VI295は折り曲げ口縁の甕形土器、VI296・297は壺形土器である。VI297は3条の凸帯を貼り付け、凸帯上に工具による押圧を施す。VI298は凹線文期の壺形土器、もしくは鉢形土器で、混入品である。

S K VI182 (第247図)

第1地区の南部、E2区に位置する。遺構の西側はS K VI188 (土坑B)、東側はS K VI183 (土坑B)に切られる。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長0.70m、南北長1.00m、深さ34cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は上下2層(①・②層)に分層され、②層は暗褐色土である。堆積状況は水平堆積である。基底面はほぼ平坦である。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。遺物は、遺構中央部付近の①層中にまとまって出土した。



第246図 S K VI153測量図・出土遺物実測図



第247図 S K VI182測量図・出土遺物実測図

### 出土遺物

VI299は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。胴部には沈線文7条を施す。VI300～302は壺形土器。VI301は凸帯上に連鎖状刻目文を施す。VI302は沈線文とM字状の凸帯文が組み合うもので、凸帯上段のみ連鎖状刻目文を施す。VI303は大型の鉢形土器。内外面共に丁寧なミガキ調整を施す。VI304は甕形土器、VI305は壺形土器の底部である。VI304は上げ底、VI305は平底となる。

#### S K VI205 (第248図)

第2地区の中央部、E・F9区に位置する。遺構の東側はS K VI204(土坑B)、南側は近現代坑に切られる。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西長1.40m、南北検出長1.10m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東側壁体は緩やかに立ち上がる。埋土は単一層で埋まる。基底面はほぼ平坦である。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。基底面からは径5～14cm、深さ5cmの小ピット3基(S P①～③)を検出した。ピット埋土は土坑埋土と同様である。そのほか、径40cm前後の土坑S K①を基底面にて検出した。土坑埋土は、褐色土に黄色土が混入するものである。S K①が本土坑に伴うものかは不明である。遺物は埋土中から、弥生土器片が数点出土した。

### 出土遺物

VI306は鉢形土器で、粘土紐を貼り付けることにより口縁部を成形する。VI307～311は壺形土器で、VI307は口縁部内面と頸部外面に断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯上に指頭押圧を加える。口縁端面に羽状文を施す。VI308は肩部片で、頸部と胴部中位には沈線文を施し、胴部上半部にはヨコ方向のミガキ調整を施す。VI309～311は底部片で、上げ底となる。

#### ii) 楕円形土坑

#### S K VI166 (第249図)

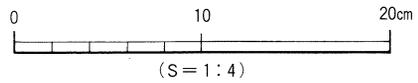
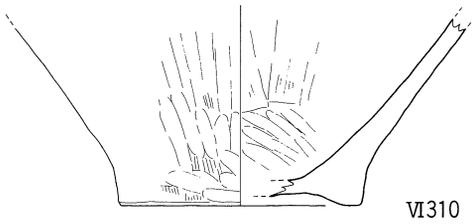
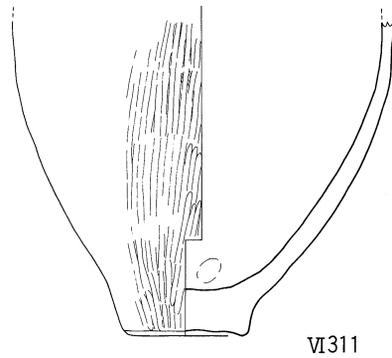
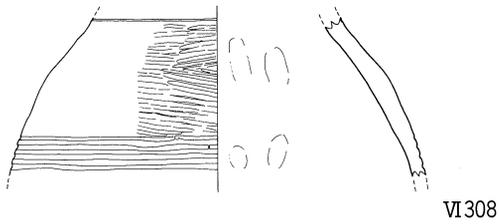
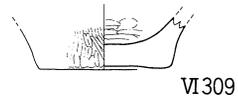
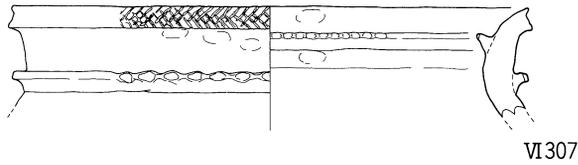
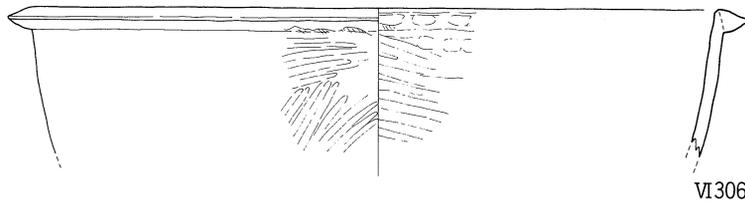
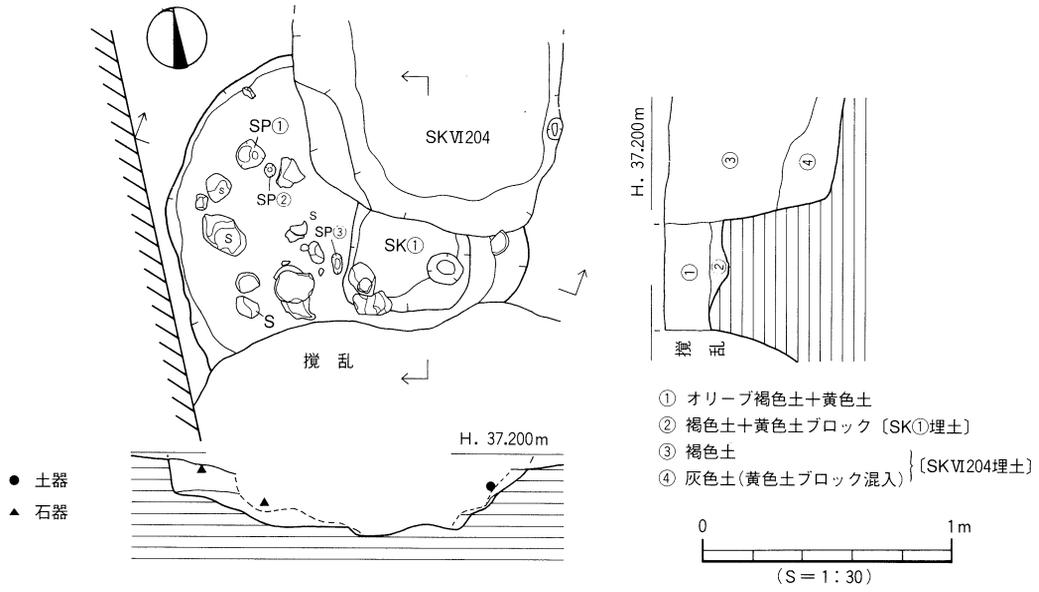
第1地区の中央部、E6・7区に位置する。遺構の南側はS K VI168(弥生中～後期)に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.10m、短径1.00m、深さ90cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。埋土は単一層で埋まる。南側の基底面付近では炭化物と焼土を検出した。基底面南東部からは径5cm、深さ6cmの小ピット1基(S P①)を検出した。ピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は壺形土器の口縁部(VI312)が伏せた状態で出土したほか、南側基底面から10cm浮いた地点で、径10cm大の円礫が1点出土した。

### 出土遺物 (図版78)

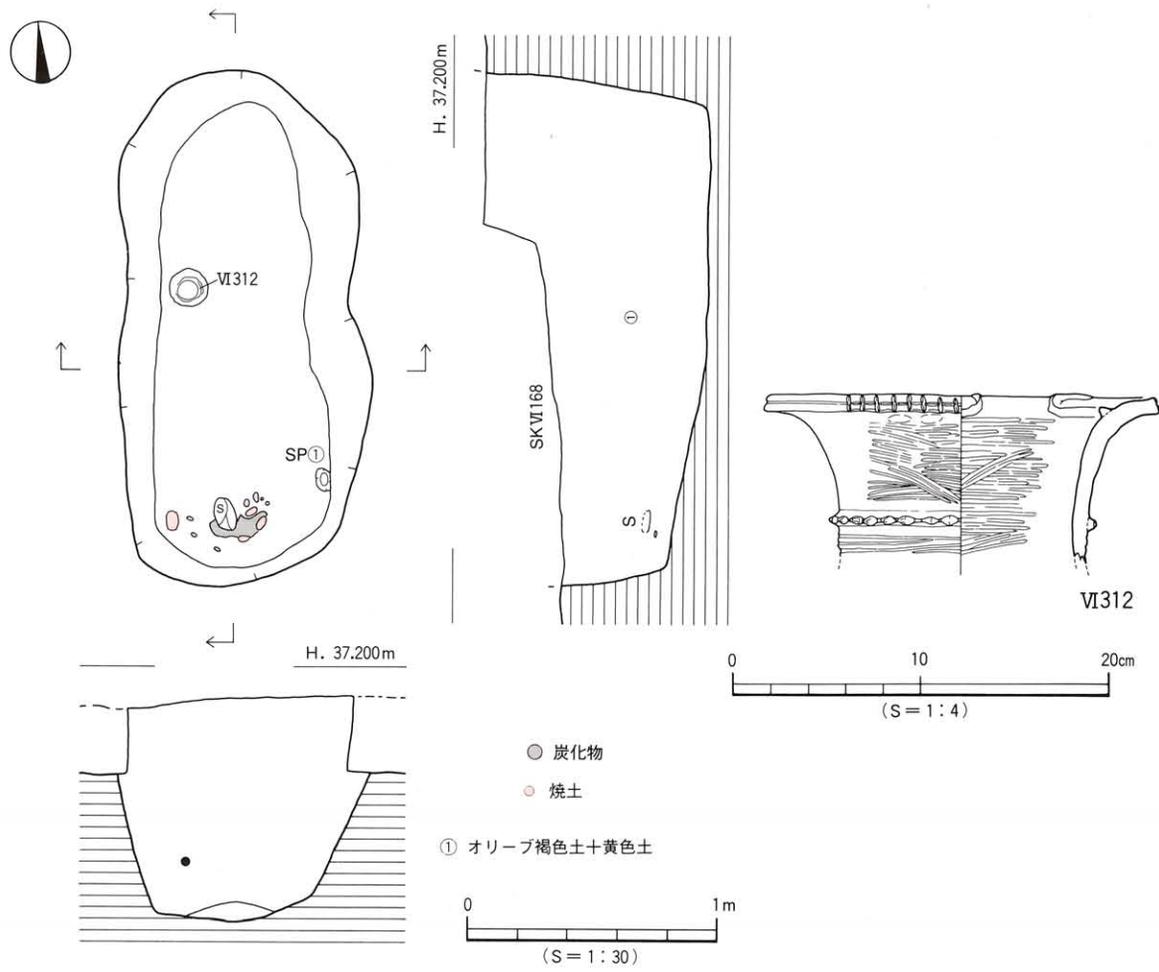
VI312は壺形土器で、口縁部内面に断面三角形の凸帯を貼り付ける。凸帯は全周せず、一部が注口状になる。頸部には断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯上に指頭押圧を加える。口縁端面はヘラ描き沈線文を施した後、刻目を施す。

#### S K VI163 (第250図)

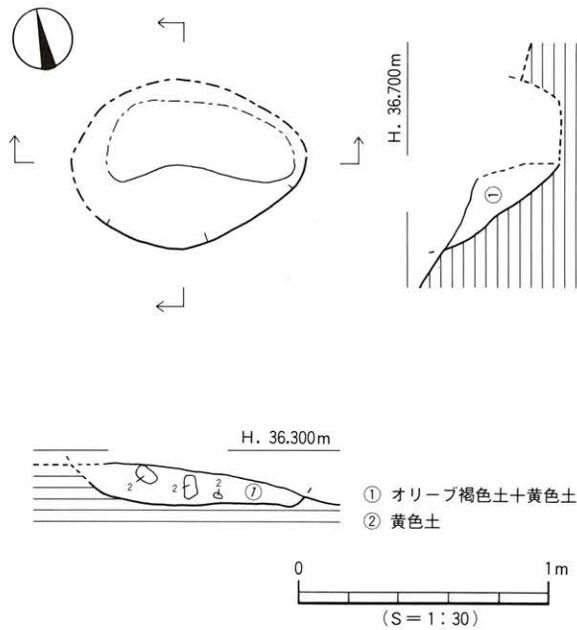
第1地区の南部、F4区に位置する。S K VI163はS D VI105を完掘後、溝の南側基底面付近で検出したもので、遺構上部はS D VI105に削平されている。平面形態は楕円形を呈し、規模は東西長0.96m、南北検出長0.34m、深さ42cmを測る。断面形態は播鉢状を呈し、単一層で埋まる。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。遺物は埋土中にて、弥生土器の細片が数点出土したが、図化しうるものはない。



第248図 SK VI205測量図・出土遺物実測図



第249図 S K VI166測量図・出土遺物実測図



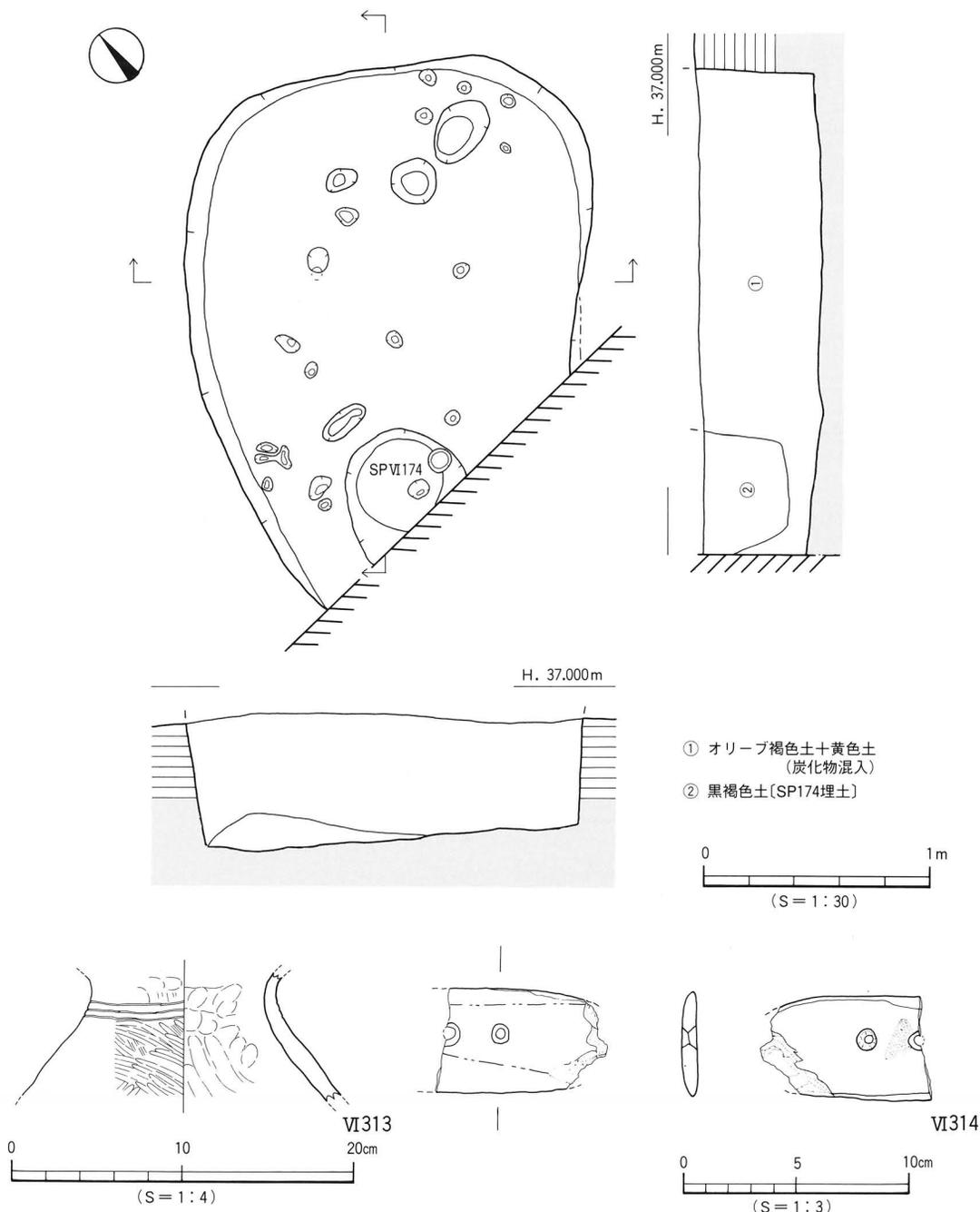
第250図 S K VI163測量図

S K VI187 (第251図)

第1地区の南部、E2区に位置する。遺構の南側はSPVI174に切られ、調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西長1.75m、南北検出長2.10m、深さ60cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東側壁体は垂直に立ち上がる。掘り方最終面は第Ⅷ層の砂礫層に達する。埋土は単一層である。基底面は東側から西側に向かって傾斜する(比高差10cm)。基底面からは径5~20cm、深さ5cmの大小21基のピットを検出した。ピット埋土はいずれも土坑埋土と同様である。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量と、石庖丁が1点出土した。

出土遺物(図版78)

VI313は壺形土器である。頸部に沈線文3条を施す。VI314は石庖丁である。平面形態は長方形を呈するものとみられ、偏両刃である。穿孔は両面から2ヶ所に穿つ。緑色片岩製。



第251図 S K VI187測量図・出土遺物実測図

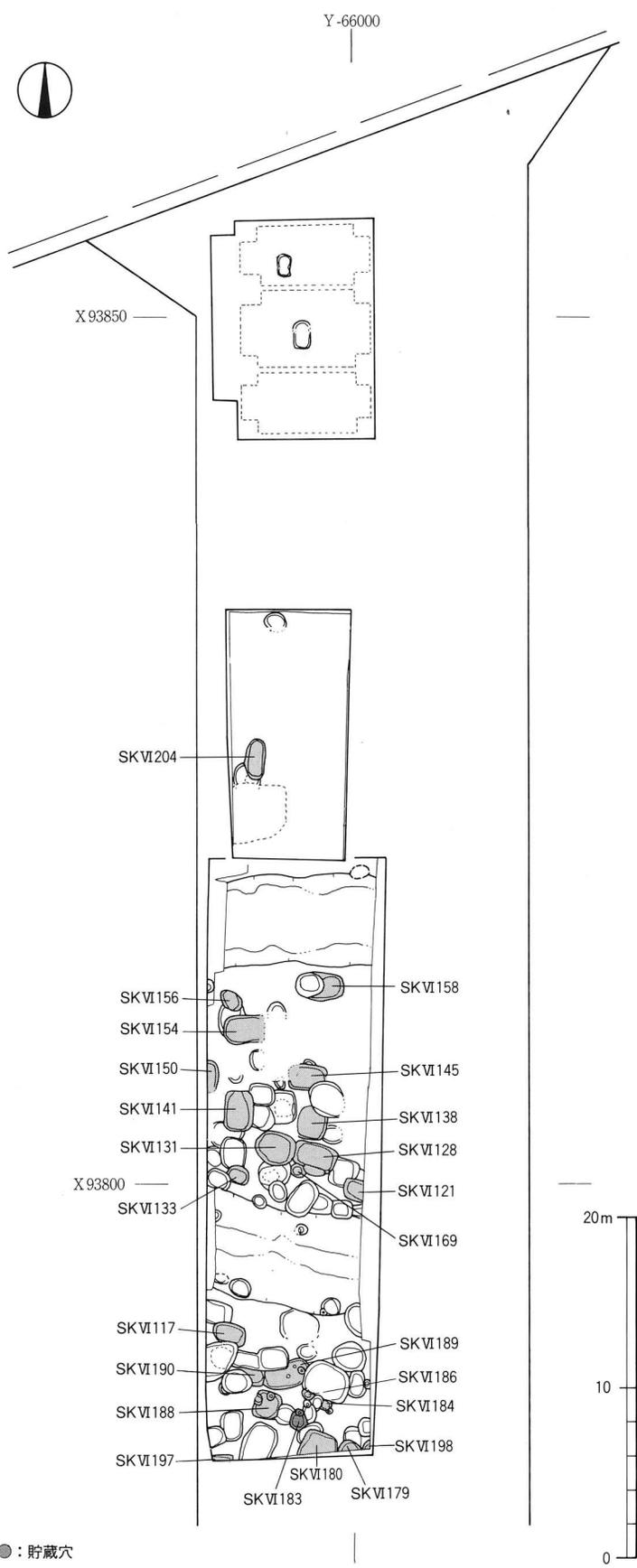
4) 土 坑 B (第252図、表29)

土坑Bは24基ある。第1地区で23基、第2地区で1基を検出し、すべて第Ⅶ層上面での検出である。第3地区では未検出であった。平面形態では円形が7基、楕円形が5基、方形が2基、長方形が10基である。12基の土坑の測量図と、8基の土坑から出土した遺物の実測図を掲載した。このうち、SK VI183は貯蔵穴の形態をなす土坑である。

表29 土坑B一覧

SK番号	平面形態	断面形態	堆積状況	遺構測量図	遺物実測図	グリット	備考
SK VI117	長方形	逆台形	単一	○		E・F3	
SK VI121	長方形	逆台形	単一	○		D4・5	
SK VI128	長方形	皿	単一			D・E5	
SK VI131	円形	逆台形	放物線型凹			E5	
SK VI133	長方形	皿	単一	○		E・F5	
SK VI138	長方形	逆台形	単一	○		D5～E6	
SK VI141	長方形	逆台形	単一	○	○	E5～F6	
SK VI145	不整形	皿	単一			D・E6	
SK VI150	楕円形	逆台形	単一			F6	
SK VI154	長方形	皿	単一	○		E6～F7	
SK VI156	楕円形	皿	単一			E・F7	
SK VI158	楕円形	皿	単一	○	○	D・E7	
SK VI169	円形	皿	単一			E5	
SK VI179	円形	逆台形	単一		○	D2	
SK VI180	長方形	皿	単一	○	○	D・E2	
SK VI183	円形	筒(一部フラスコ)	単一	○	○	E2	貯蔵穴
SK VI184	円形	逆台形	単一			D・E2	
SK VI186	円形	逆台形	単一			E2	
SK VI188	方形	逆台形	単一			E2	
SK VI189	長方形	逆台形	放物線型凹	○	○	E2・3	
SK VI190	長方形	逆台形	単一	○	○	E2・3	
SK VI197	楕円形	皿	単一			F2	
SK VI198	円形	逆台形	単一			D2	
SK VI204	楕円形	逆台形	放物線型凹	○	○	E9・10	

VI 区



第252图 VI区 土坑B分布图

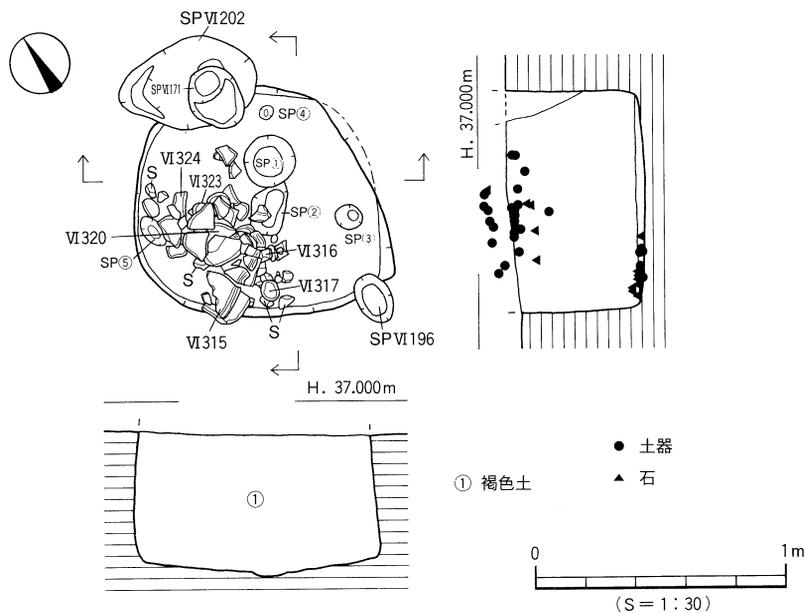
① 貯蔵穴

S K VI183 (第253図)

第1地区の南部、E2区に位置する。S P VI071・S P VI196・S P VI202に切られ、S K VI182 (土坑C) を切る。平面形態は円形を呈し、規模は径0.90~1.00m、深さ56cmを測る。断面形態は筒状を呈するが、東側壁体は一部フラスコ状となる。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。埋土は単一層である。基底面からは径5~18cm、深さ5~8cmの小ピット5基 (S P ①~⑤) を検出した。ピット埋土は、土坑埋土と同様である。遺物は基底面及び埋土上位から、弥生土器と石器がまとめて出土した。

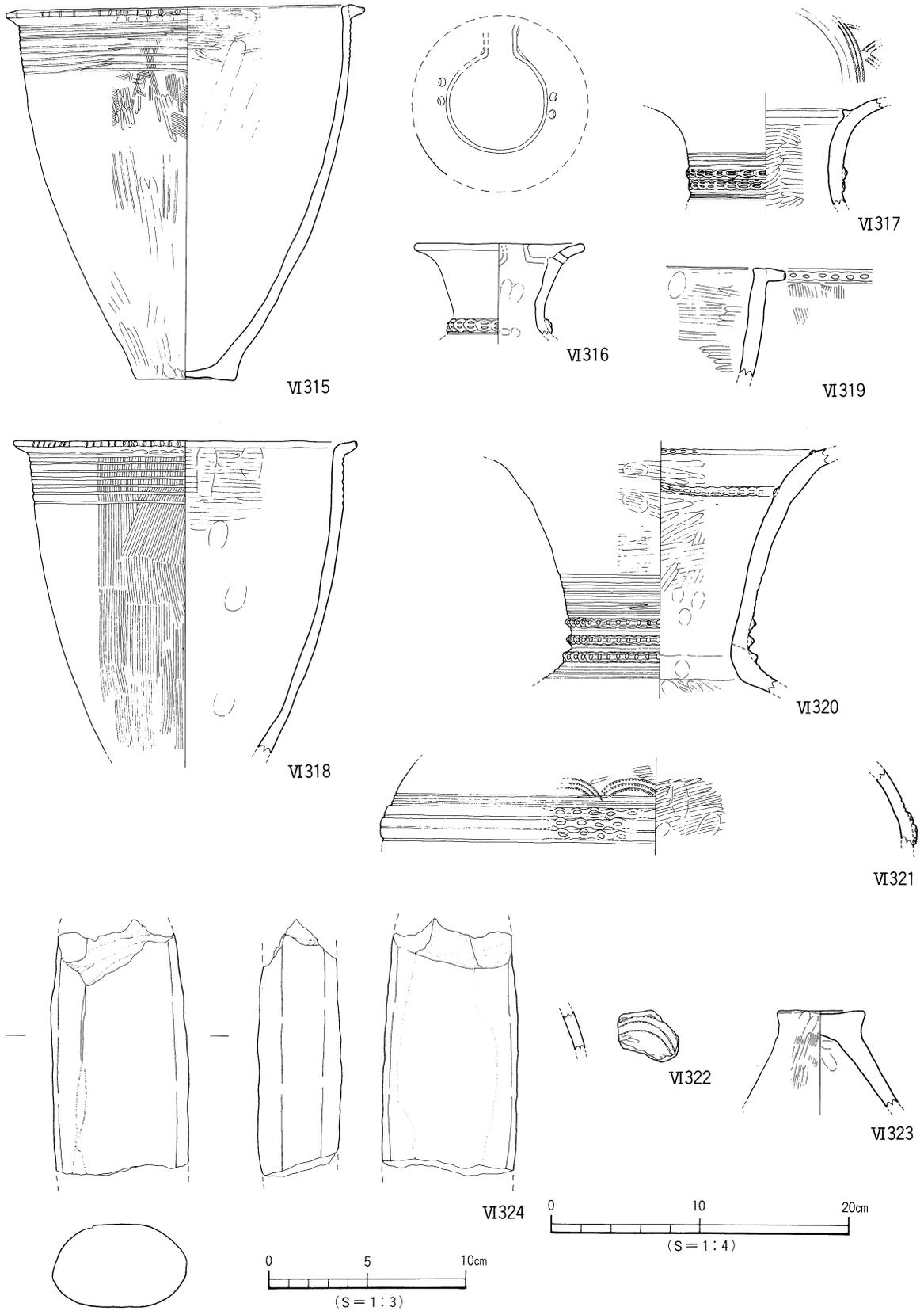
出土遺物 (第254図、図版78)

VI315~317は基底面、その他は埋土上位からの出土品である。VI315は粘土紐を貼り付けることにより口縁部を成形する甕形土器。胴部に沈線文9条 (3条1組) を施す。VI316・317は壺形土器。VI316・317共に口縁部内面に凸帯を貼り付ける。VI316は凸帯が一部注口状となる。頸部には凸帯を貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文2列を施す。口縁部には径4mm大の円孔を4ヶ穿つ。VI317は頸部に沈線文とM字状の凸帯を貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文2列を施す。口縁内面には貝殻腹縁による直線文と山形文を施す。VI318は折り曲げにより口縁部を成形する甕形土器。胴部には沈線文7条、口縁端面には刻目を施す。VI319は口縁端面に刺突文を施す。VI320~322は壺形土器。VI320は口縁内面に凸帯を2条貼り付け、凸帯上に押圧を施す。頸部には沈線文と凸帯 (押圧) を施す。VI321・322は胴部片である。VI321は沈線文と凸帯文 (連鎖状刻目文)、貝殻腹縁による弧文を施す。VI322は貝殻腹縁による弧文を施す。VI323は蓋形土器で、つまみ上端面はわずかに凹む。VI324は伐採斧である。刃部は欠損し、基部は折れている。刃部に比べ基部が細く、断面形態は楕円形状を呈する。表面には成形時の傷が深く、研磨が及んでいない。緑色片岩製。



第253図 S K VI183測量図

VI 区



第254图 S K VI183出土遺物実測図

② その他の土坑

i) 円形土坑

SK VI179 (第255図)

第1地区の南端、D2区に位置する。遺構の北側はSK VI178(土坑D)を切り、南側はトレンチに切られる。平面形態は円形を呈するものとみられ、規模は東西検出長1.20m、南北検出長0.60m、深さ41cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

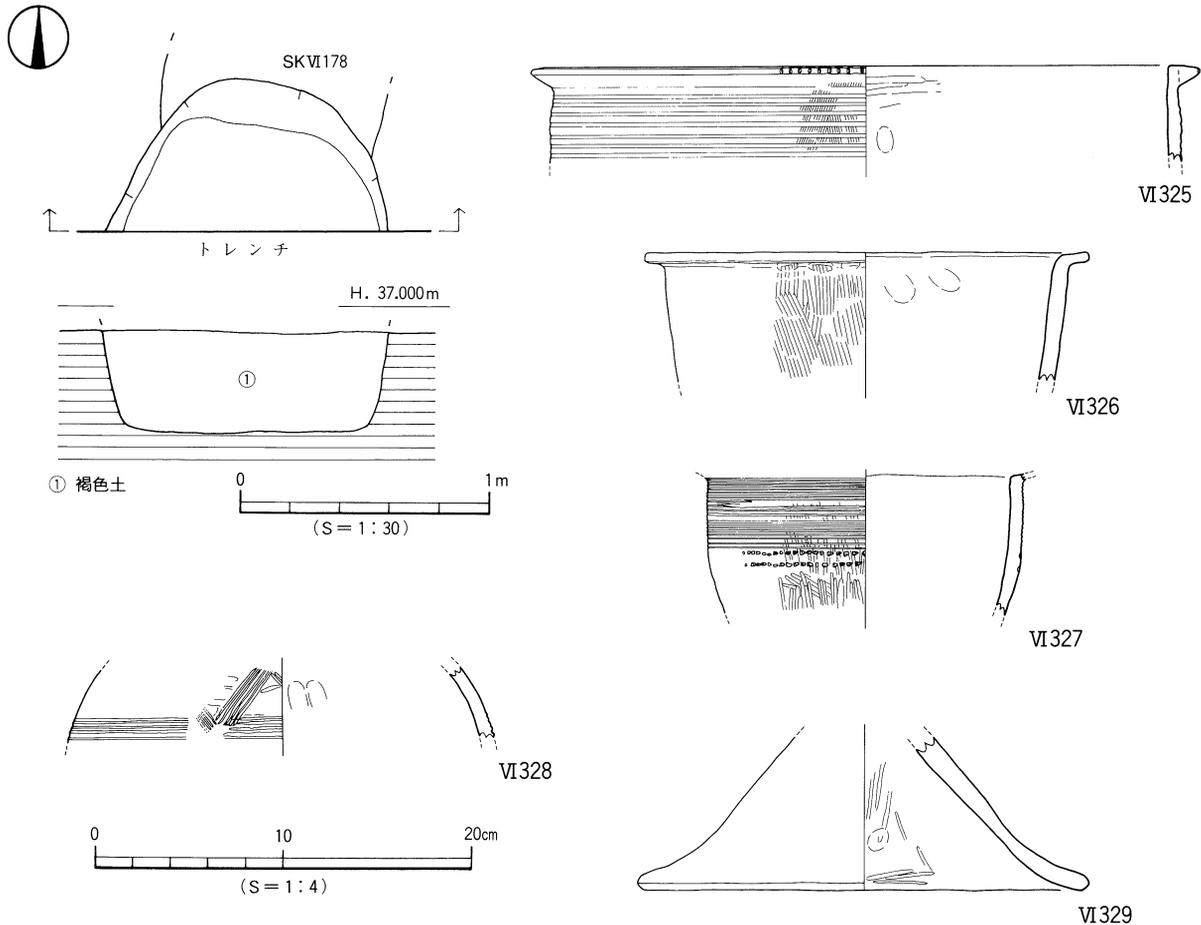
出土遺物

VI325～327は甕形土器である。VI325は貼り付け、VI326・327は折り曲げにより口縁部を成形する。胴部文様はVI325は沈線文、VI327はクシ描き沈線文(7条1組)と刺突文2列が組み合う。VI328は壺形土器の胴部片である。山形文(5条1組)と沈線文を施す。VI329は蓋形土器である。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。口縁部内外面共に煤が付着する。

ii) 楕円形土坑

SK VI158 (第256図)

第1地区の北部、D・E7区に位置する。遺構の西側はSK VI157(土坑A)に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は東西検出長1.80m、南北長1.70m、深さ50cmを測る。断面形態は皿状を呈する。

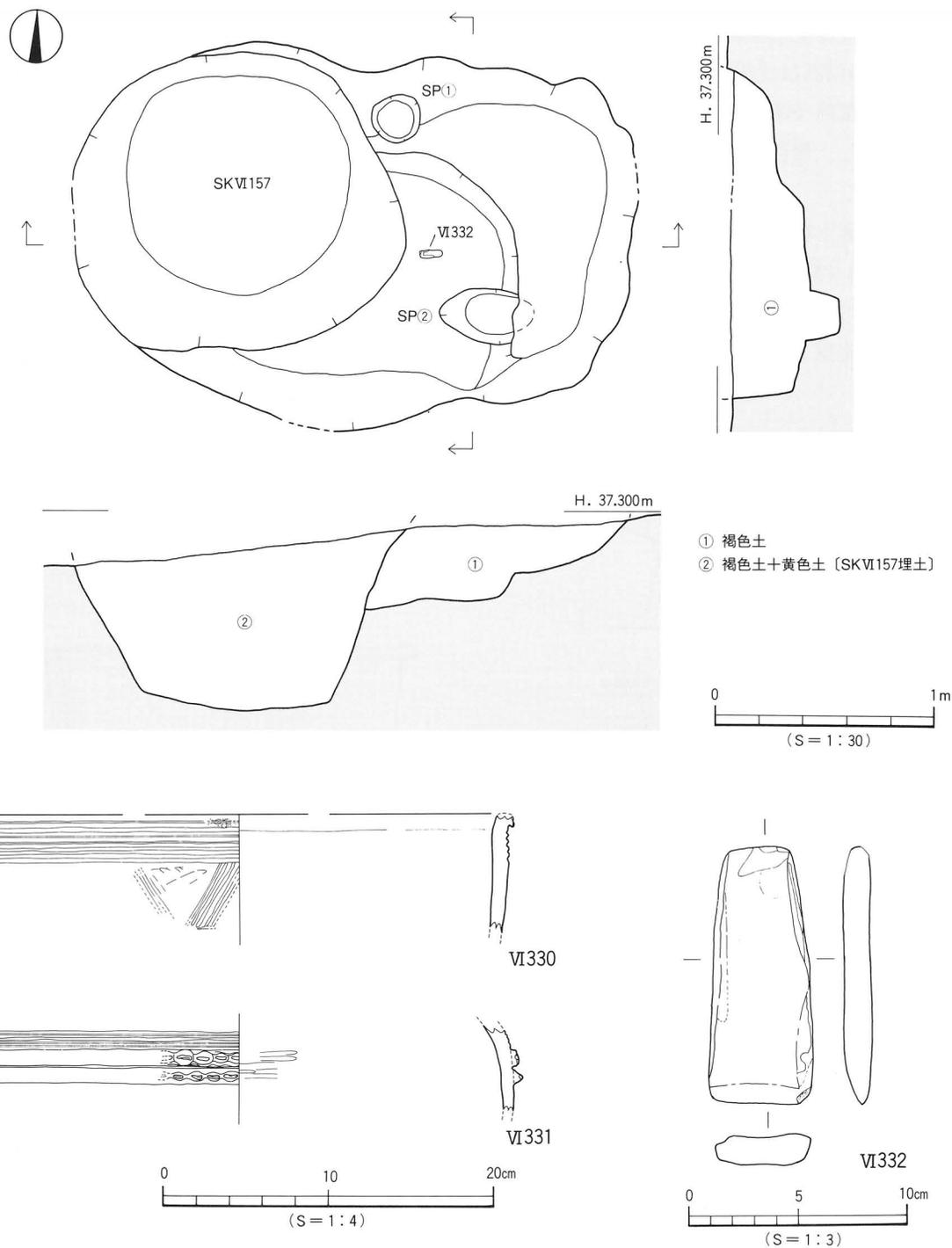


第255図 SK VI179測量図・出土遺物実測図

南側壁体は垂直に立ち上がる。掘り方最終面は第Ⅷ層の砂礫層に達する。埋土は単一層である。基底面北側と東側は幅95cmのテラス状の平坦面があり、二段掘り構造になっている（比高差14cm）。基底面からは径20~40cm、深さ15cmのピット2基（SP①・②）を検出した。ピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は埋土中から、弥生土器片が数点と石器が1点出土した。

出土遺物

VI330は甕形土器である。胴部に沈線文と山形文（5条1組）を施す。VI331は壺形土器である。胴部にM字状の凸帯を貼り付け、凸帯上には連鎖状刻目文1列を施す。VI332は扁平片刃石斧である。



第256図 SK VI158測量図・出土遺物実測図

製作途中で基部と基部寄りの側面は折れているが、そのまま研磨を施している。刃部に比べ基部の幅が狭く、刃もしっかりと作り出されていないため、錆がみられない。全体に研磨はあまく、側面に一部、敲打痕を残す。緑色片岩製。

#### S K VI204 (第257図)

第2地区の中央部、E9・10区に位置し、S K VI205(土坑C)を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.28m、短径1.08m、深さ68cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は上下2層(①・②層)に分層され、②層はオリーブ褐色土である。堆積状況は放物線型凹堆積である。遺物は①層上位にて、底部を欠損した壺形土器(VI333)が横倒しの状態で出土した。この壺形土器の下部では、猪の歯が列をなして出土し、北側の埋土中位でも猪の歯が出土した。このほか、遺構の長軸に沿って、径5cm大の小礫が埋土上位付近に直線的に点在していた。

#### 出土遺物

VI333は壺形土器である。口縁端面に斜格子目文、胴部にクシ描き沈線文(4条1組)と波状文を施す。胴部内外面共にヘラミガキ調整を施す。

#### iii) 長方形土坑

#### S K VI117 (第258図)

第1地区の南西部、E・F3区に位置する。遺構の南側は一部トレンチに切られ、S K VI118(土坑C)を切る。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.76m、幅1.20m、深さ47cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器の小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

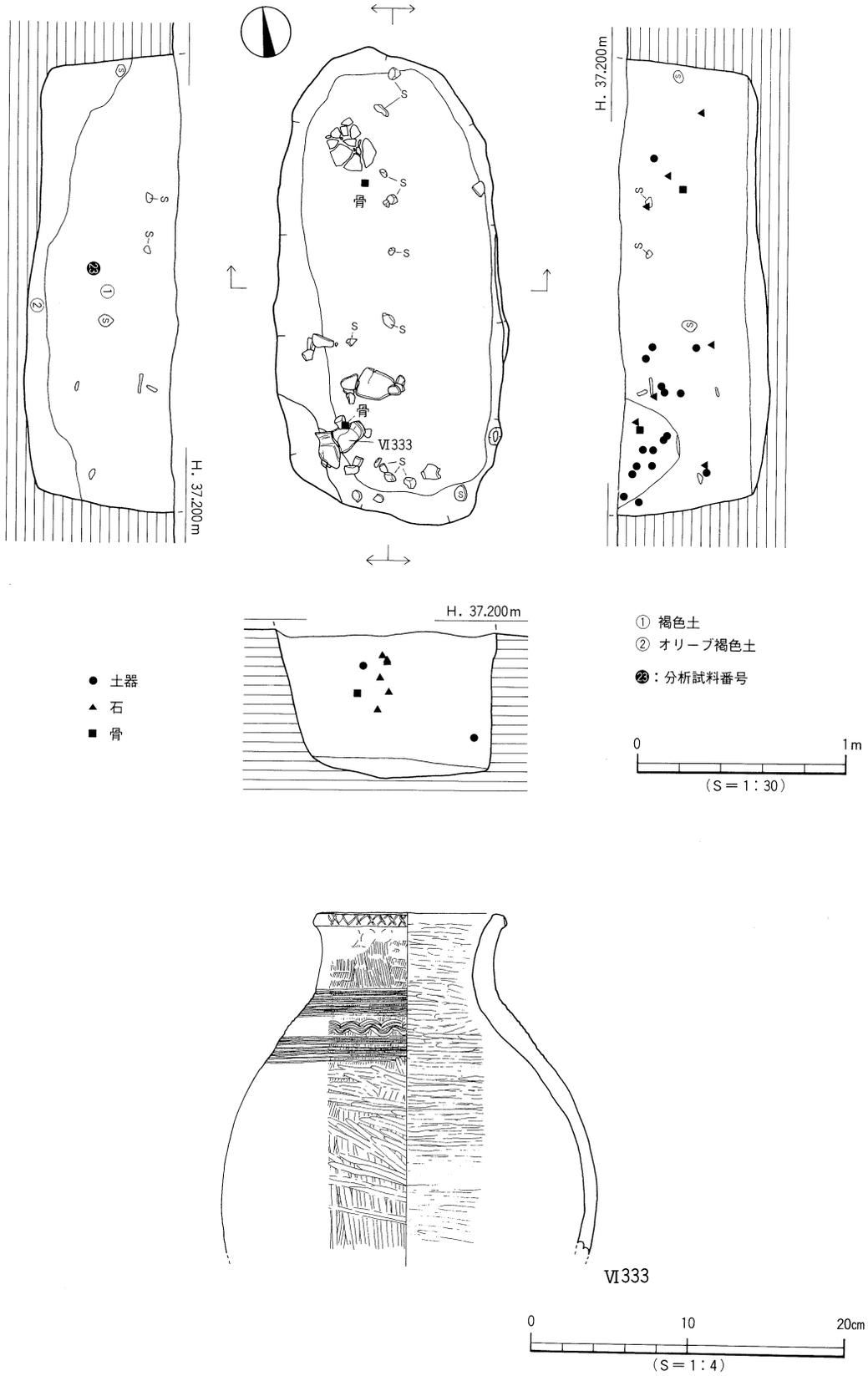
#### S K VI133 (第258図)

第1地区の中央部、E・F5区に位置する。遺構の北西隅はS K VI132(土坑A)に切られ、北東隅はS K VI134(土坑D)を切る。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.30m、幅0.86m、深さ25cmを測る。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。断面形態は皿状を呈するが、南・東・西壁体は垂直に立ち上がる。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。基底面の中央部からは径5～8cm、深さ5cmの小ピット2基(SP①・②)を検出した。ピット埋土は土坑埋土と類似する。遺物は埋土中にて、弥生土器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。

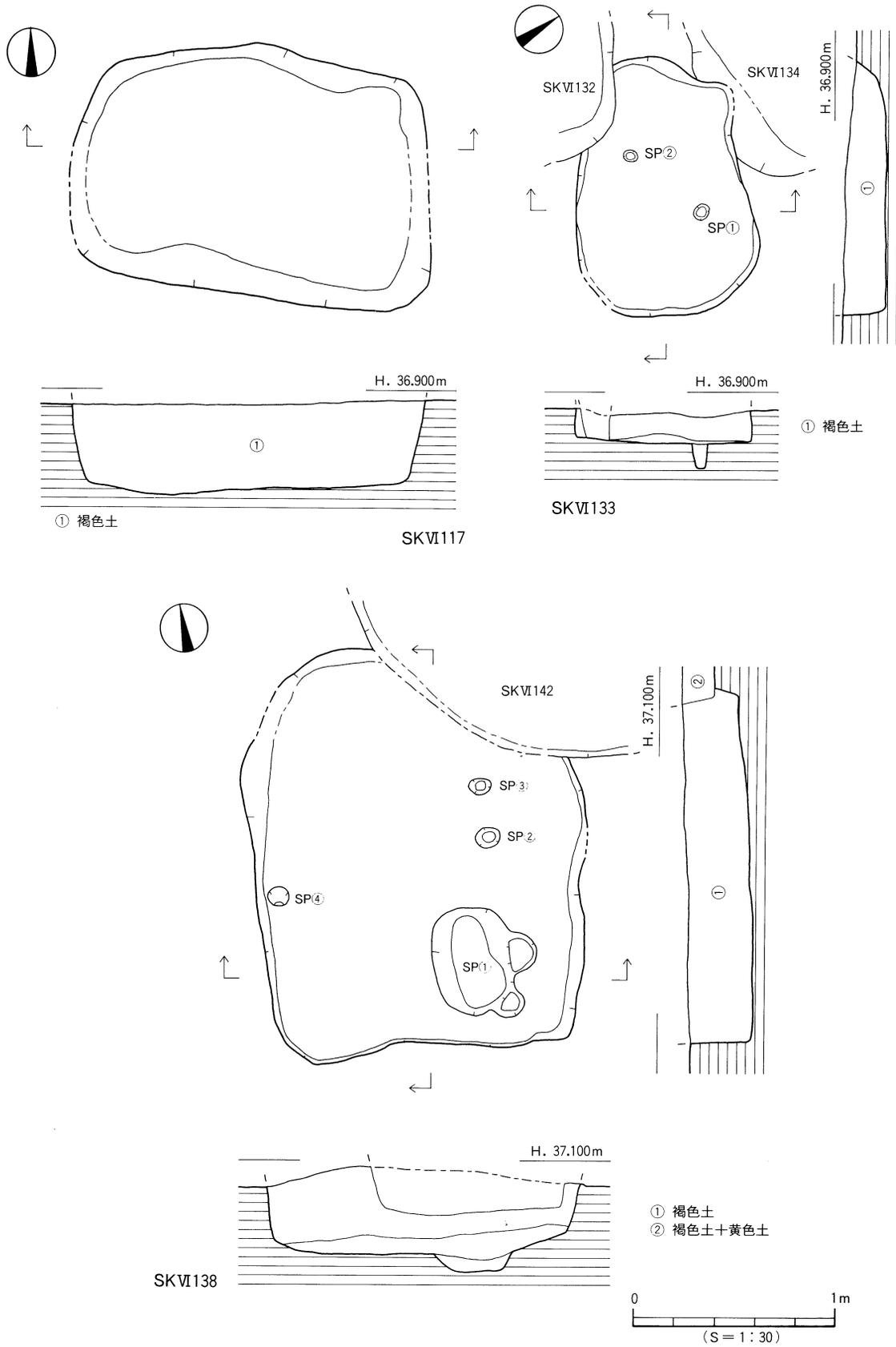
#### S K VI138 (第258図)

第1地区の中央部、D5～E6区に位置する。遺構の東部はS K VI142(土坑A)に切られ、S K VI137(土坑D)を切る。平面形態は長方形を呈し、規模は東西長1.60m、南北長2.00m、深さ50cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。基底面からは径8～50cm、深さ6cmの大小のピット4基(SP①～④)を検出した。ピット埋土はすべて土坑埋土と類似する。土坑内からの遺物の出土はない。

VI 区



第257図 S K VI204測量図・出土遺物実測図



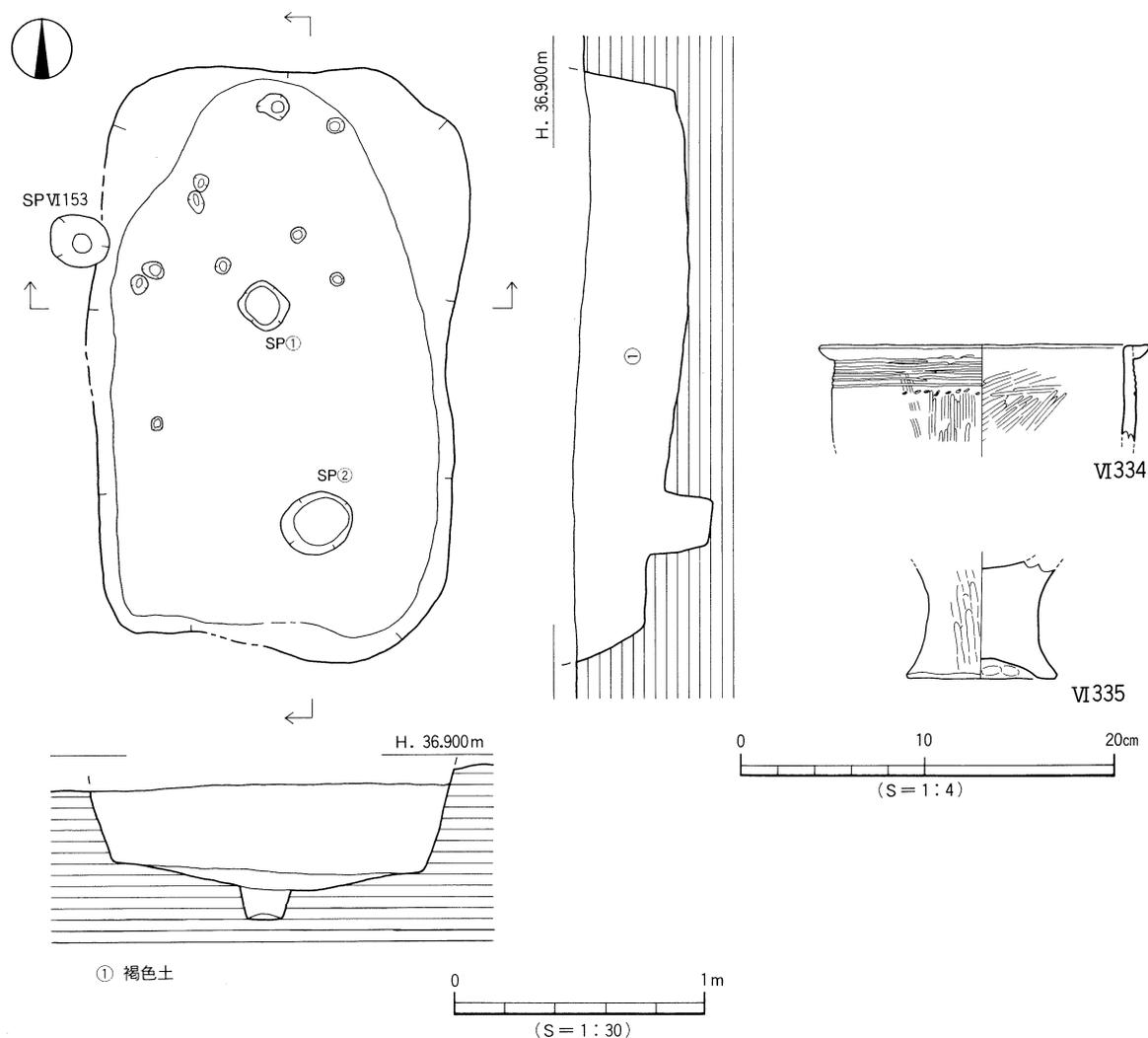
第258図 S K VI117・133・138測量図

## S K VI141 (第259図)

第1地区の中央部、E5～F6区に位置する。遺構の北西部はSP VI153に切られ、S K VI140・S K VI147(土坑C)を切る。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.40m、幅1.50m、深さ56cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は単一層である。基底面は南側から北側に向かって傾斜する(比高差16cm)。基底面からは、径20～25cm、深さ10cmのピット2基(SP①・②)と径5～10cm、深さ5cmの小ピット10基を検出した。ピット埋土は、すべて土坑埋土と類似する。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量出土した。

## 出土遺物

VI334は甕形土器で、粘土紐を貼り付けることにより口縁部を成形する。胴部には沈線文と刺突文を施す。VI335は鉢形土器の底部と判断した。脚台部は上げ底を呈する。



第259図 S K VI141測量図・出土遺物実測図

SKVI190 (第260図)

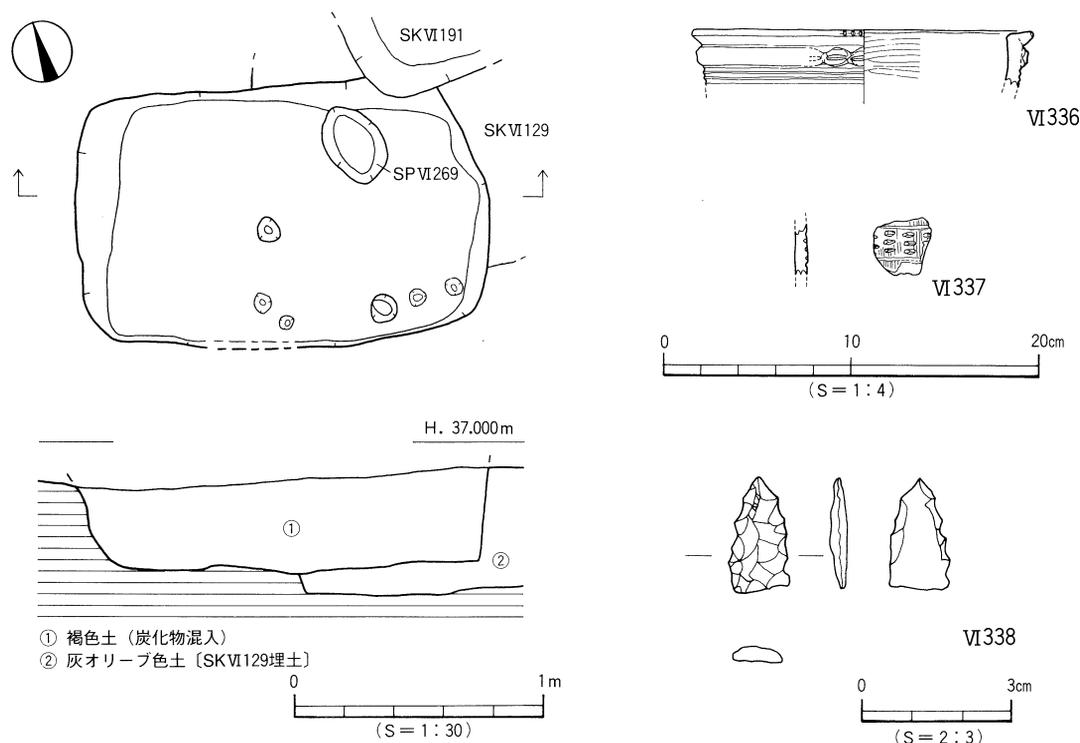
第1地区の南部、E2・3区に位置する。遺構の北側はSKVI129(土坑E)を切り、SKVI191(土坑A)、SPVI269に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.68m、幅1.04m、深さ38cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、西側壁体は緩やかに立ち上がる。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は単一層であるが、少量の炭化物が混入する。基底面はほぼ平坦である。基底面中央部及び南東部では径5～10cm、深さ3～5cmの小ピット6基を検出した。ピット埋土は土坑埋土に類似する。遺物は基底面から、弥生土器片が数点と、石鏃が1点出土した。

出土遺物

VI336・337は甕形土器。VI336は胴部に沈線文と凸帯文(連鎖状刻目文)を施す。VI338はサヌカイト製の平基無茎石鏃である。基部は一部破損している。平面形態は二等辺三角形を呈する。

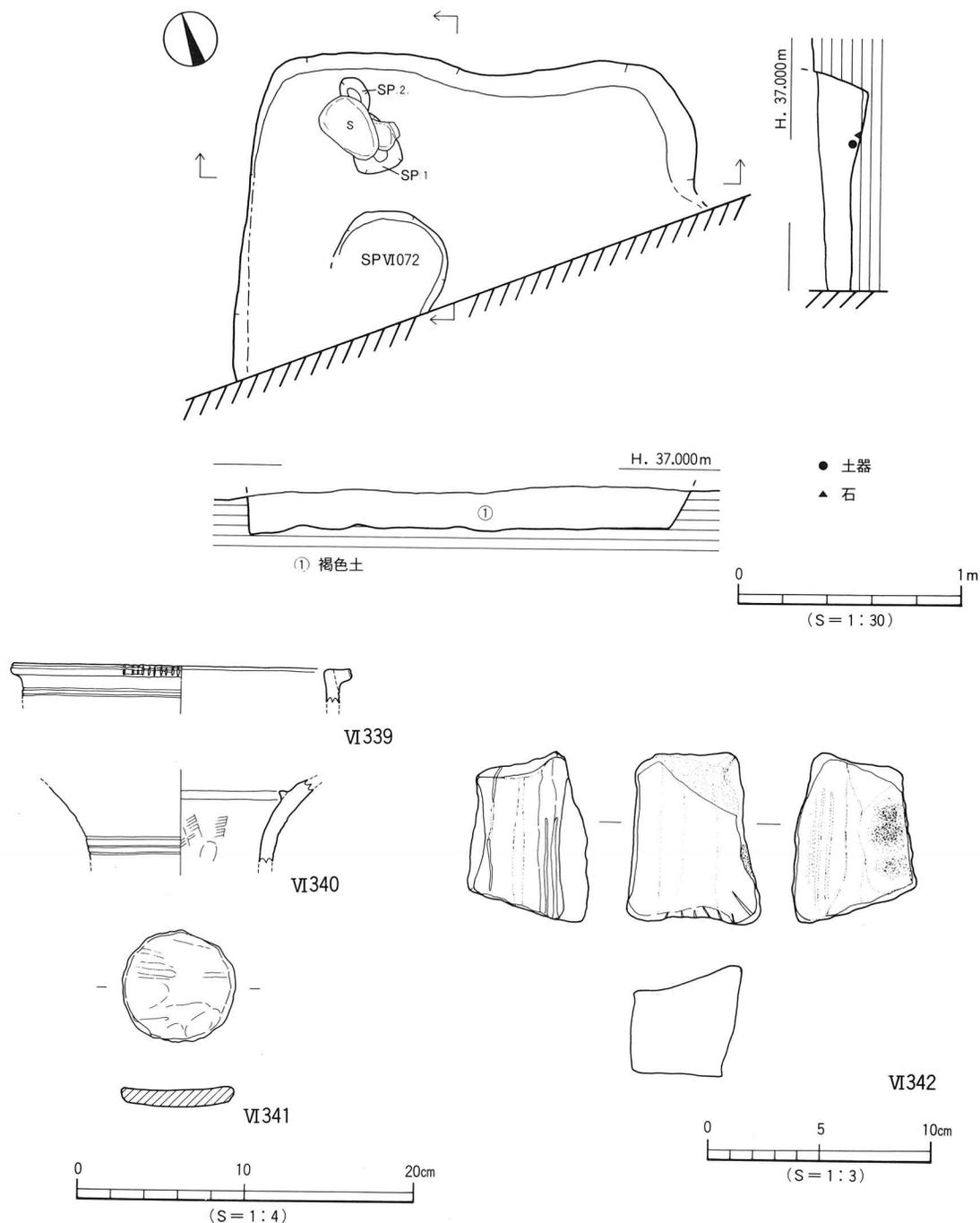
SKVI180 (第261図)

第1地区の南部、D・E2区に位置する。遺構の東側はSKVI179(土坑B)、南西部はSPVI072に、南側はトレンチに切られる。平面形態は長方形を呈するものとみられ、規模は東西長2.00m、南北検出長1.10m、深さ18cmを測る。断面形態は皿状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は単一層で、基底面はほぼ平坦である。北西部基底面にて大小2基のピット(SP①・②)を検出した。ピットは径10～30cm、深さ5cmで、埋土は土坑埋土に類似する。遺物は基底面から、弥生土器片が数点と、砥石1点が出土した。また、北西隅からは径20cmの河原石が1点出土した。



出土遺物

VI339は貼り付け口縁の甕形土器。胴部には沈線文2条以上、口縁端面には沈線文1条と刻目を施す。VI340は壺形土器の頸部片で、内面には断面三角形の凸帯を貼り付ける。VI341は円盤状の土製品で、壺形土器の転用品か。VI342は石英粗面岩製の砥石である。四面を使用面とし、そのうち1面は1～2mm大の溝が2条認められる。



第261図 S K VI180測量図・出土遺物実測図

SKVI189 (第262図)

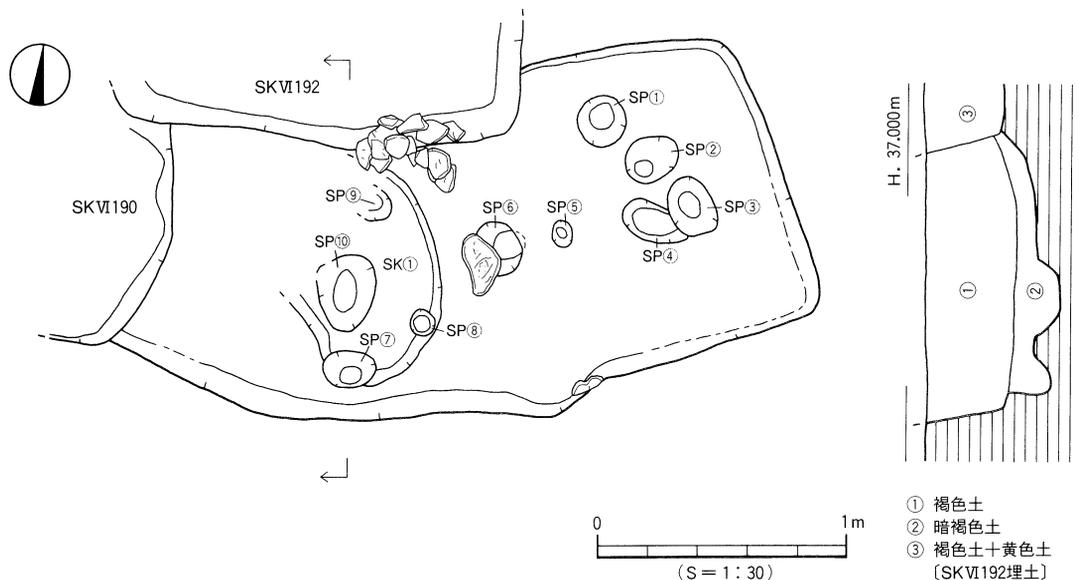
第1地区の南部、E2・3区に位置する。SBVI101(弥生時代後期前半)・SKVI192(土坑A)に切られ、SKVI190(土坑B)と重複する。平面形態は長方形を呈するものとみられ、規模は東西検出長2.50m、南北1.30m、深さ40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦で、基底面からは径10～24cm、深さ5cmの大小ピット10基(SP①～⑩)を検出した。ピット埋土は土坑埋土と類似する。基底面の中央部付近からは径40×80cm、深さ10cmの土坑SK①を検出した。SK①埋土は暗褐色土であり、SKVI189に伴うかは判断しえない。遺物は基底面北側中央部より、弥生土器片と石庖丁1点が出土したほか、縄文土器の破片が1点出土した。

出土遺物 (第263図)

VI343～345は甕形土器である。VI343は折り曲げ、VI344は粘土紐を貼り付けることにより口縁部を成形する。胴部文様はVI343は無文、VI344・345は沈線文を施す。VI344は口縁端部の内面に指頭押圧を加える。VI346～350は壺形土器である。VI346・348は内傾する頸部に、短く外反する口縁部をもつ。頸部には沈線文(2条1組)を施す。VI347・349は外傾する長い口頸部をもつ。VI347の頸部及び胴部には凸帯文(連鎖状刻目文)、貝殻腹縁による直線文と山形文を施している。VI350は底部片で、平底となる。VI351は縄文時代後期の深鉢である。VI352は石庖丁の未製品である。背部は面取りされる。打裂が終了しない段階で、a面の背部寄りには、穿孔のための敲打を施している。緑色片岩製。

SKVI121 (第264図)

第1地区の中央部、D4・5区に位置する。遺構の東側はトレンチに切られ、SKVI174(土坑E)・SKVI126(土坑D)を切る。平面形態は長方形を呈するものとみられ、規模は東西検出長1.10m、南北長1.20m、深さ45cmを測る。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。基底面北側からは径5～10cm、深さ5cmの小ピット3基(SP①～③)を検出した。ピット埋土は、土坑埋土と同様である。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量と、基底面からは径20cmの河原石が1点出土した。図化しうるものはない。

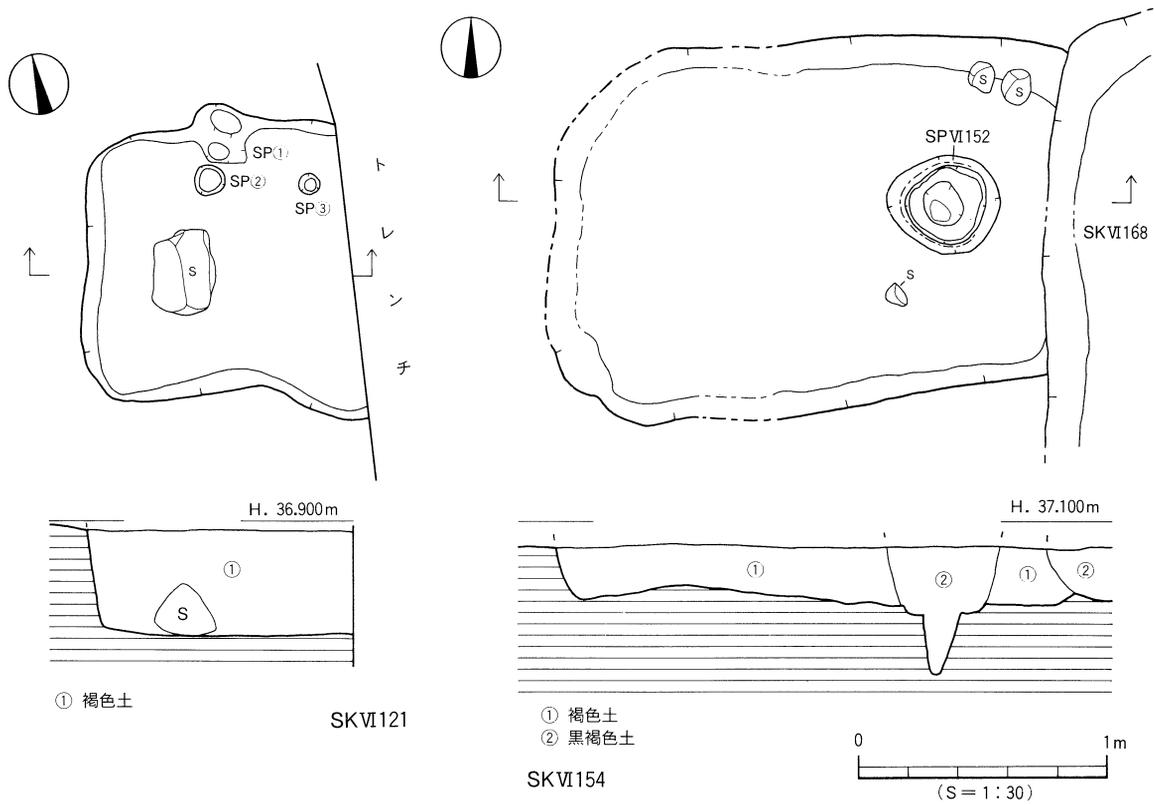


第262図 SKVI189測量図



SKVI154 (第264図)

第1地区の北部、E6～F7区に位置する。遺構の東部はSKVI168(弥生中～後期)とSPVI152に切られ、SKVI155(土坑C)を切る。平面形態は長方形を呈するものとみられ、規模は東西検出長2.10m、南北長1.50m、深さ50cmを測る。断面形態は皿状を呈する。掘り方最終面は第VII層になる。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中にて、弥生土器片が数点出土した。また、遺構北東部と南側では径5～10cm大の円礫が3点出土したが、図化しうるものはない。



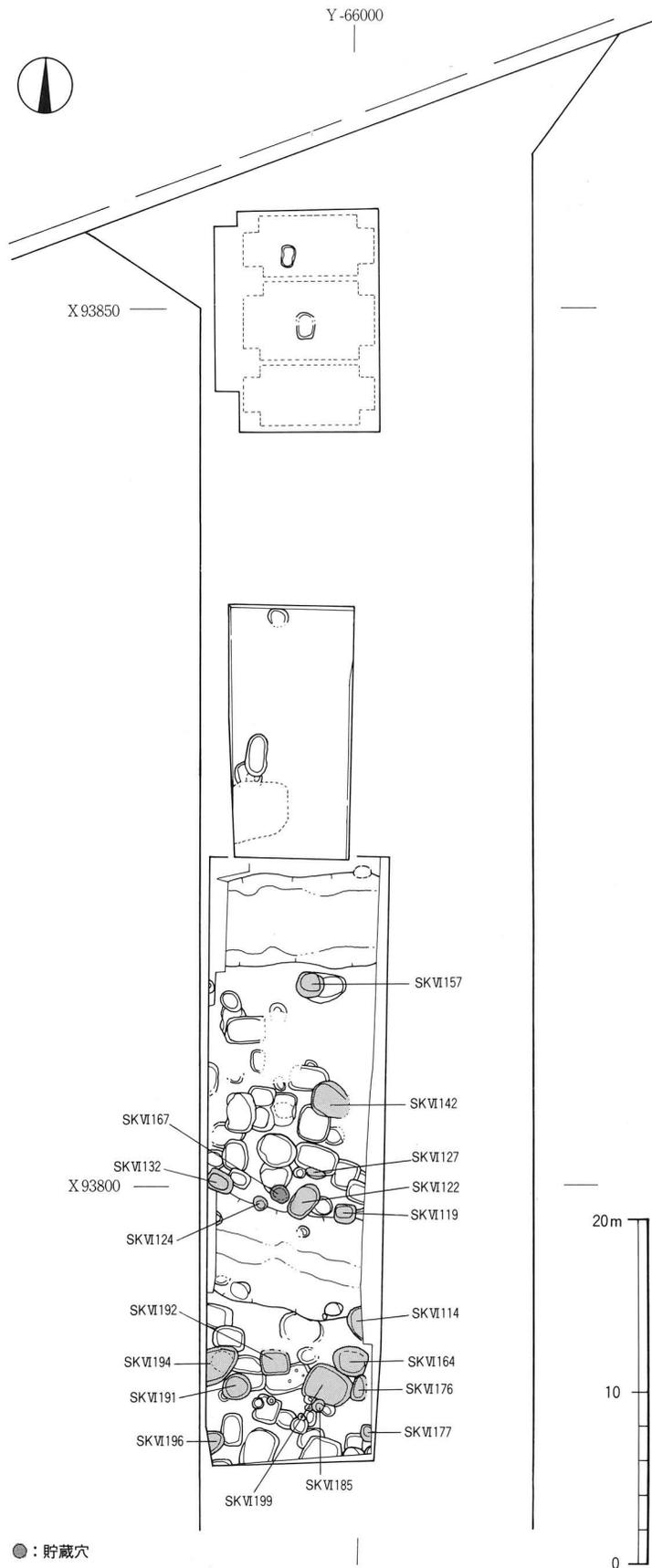
第264図 SKVI121・154測量図

## 5) 土坑 A (第265図、表30)

土坑Aは18基ある。すべて第1地区で検出したものであり、第Ⅶ層上面での検出である。平面形態では円形が9基、楕円形が5基、長方形が4基である。10基の土坑の測量図と9基の土坑から出土した遺物の実測図を掲載した。このうち、SKVI167は貯蔵穴の形態をなす土坑である。

表30 土坑A一覧

SK番号	平面形態	断面形態	堆積状況	遺構測量図	遺物実測図	グリット	備考
SKVI114	円形	逆台形	単一			D3	
SKVI119	不整円形	逆台形	放物線型凹	○		D4	
SKVI122	楕円形	逆台形	単一	○	○	E4・5	
SKVI124	円形	逆台形	単一	○	○	E4	
SKVI127	長方形	皿	単一			D・E5	
SKVI132	楕円形	逆台形	単一			F5	
SKVI142	円形	皿	単一			D5～E6	
SKVI157	円形	舟底	単一	○		E・F7	
SKVI164	円形	逆台形	単一	○	○	D2・3	
SKVI167	不整円形	フラスコ	単一	○		E4・5	貯蔵穴
SKVI176	楕円形	逆台形	単一	○	○	D2	
SKVI177	楕円形	逆台形	単一		○	D2	
SKVI185	円形	皿	単一			E2	
SKVI191	円形	逆台形	単一	○	○	E・F2	
SKVI192	長方形	逆台形	放物線型凹	○	○	E2・3	
SKVI194	不整楕円形	逆台形	単一		○	E3～F3	
SKVI196	長方形	逆台形	単一			F2	
SKVI199	長方形	逆台形	単一	○	○	D2～E3	

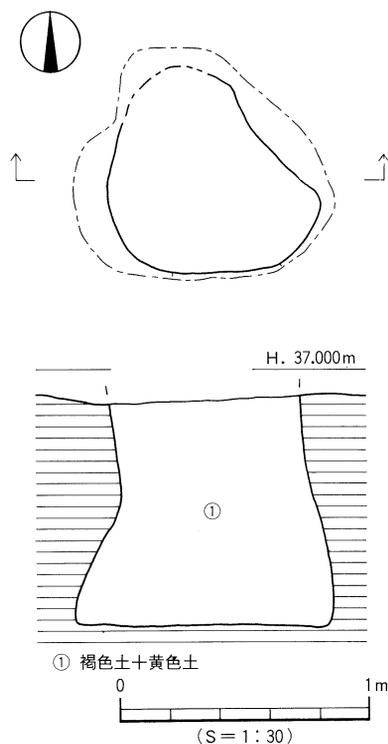


第265図 VI区 土坑A分布図

## ① 貯蔵穴

## SK VI167 (第266図)

第1地区の中央部、E4・5区に位置し、SK VI130(土坑C)を切る。平面形態は不整の円形を呈し、規模は径0.90~1.00m、深さ90cmを測る。断面形態はフラスコ状を呈する。とりわけ、西側壁体は大きくフラスコ状になる。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中にて、弥生土器小片が数点出土したが、図化しうるものはない。



第266図 SK VI167測量図

## ② その他の土坑

## i) 円形土坑

## SK VI119 (第267図)

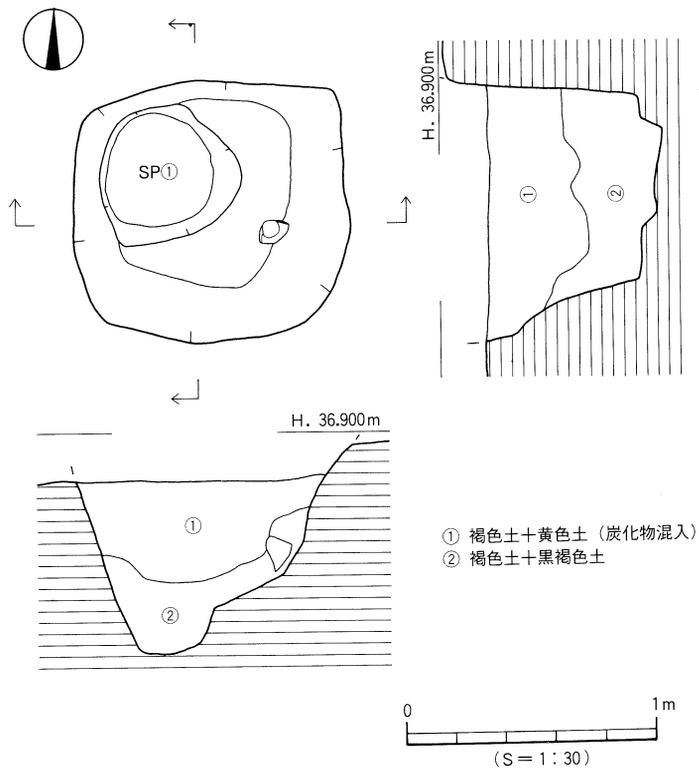
第1地区の中央部、D4区に位置し、SD VI105の下層部分を切る。平面形態は不整の円形を呈し、径1.05~1.10m、深さ70cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は上下2層(①・②層)に分層され、②層は褐色土に黒褐色土が混入するものである。①層中からは、炭化物が少量検出された。堆積状況は放物線型凹堆積である。基底面からは径40cm、深さ20cmのピット1基(SP①)を検出した。ピット埋土は②層である。遺物は②層中から弥生土器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

## SK VI124 (第268図)

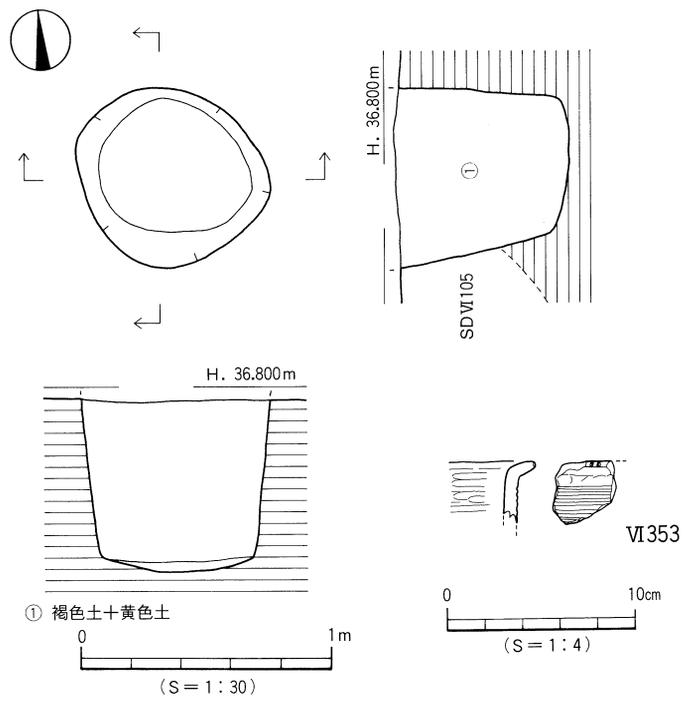
第1地区の中央部、E4区に位置し、SD VI105の下層部分を切る。平面形態は円形を呈し、径0.74~0.78m、深さ70cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量出土した。

## 出土遺物

VI353は折り曲げ口縁の甕形土器。口縁端面には刻目、胴部には沈線文5条以上を施す。



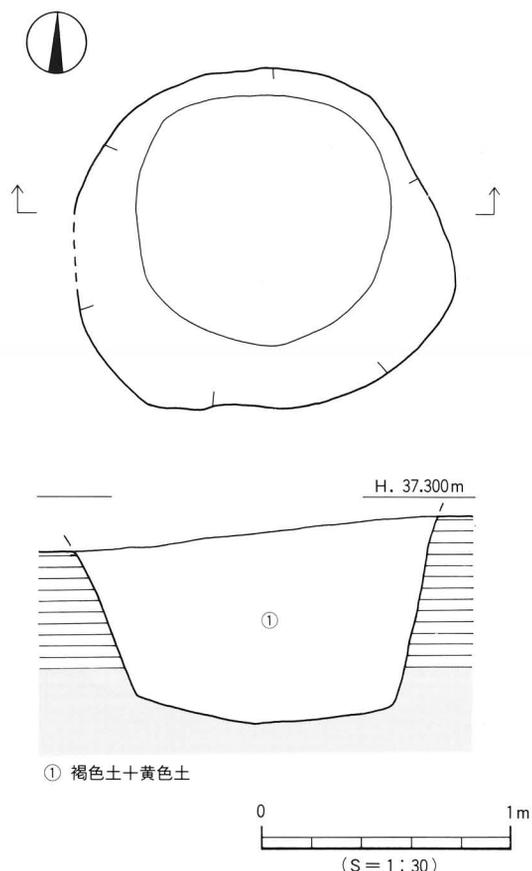
第267図 S K VI119測量図



第268図 S K VI124測量図・出土遺物実測図

## S K VI157 (第269図)

第1地区の北部、E・F7区に位置し、S K VI158 (土坑B) を切る。平面形態は円形を呈し、規模は径1.35~1.45m、深さ76cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。掘り方最終面は第Ⅷ層の砂礫層に達する。埋土は単一層である。基底面は中央部がくぼみ、壁際との比高差6cmを測る。土坑内からの遺物の出土はない。



第269図 S K VI157測量図

## S K VI191 (第270図)

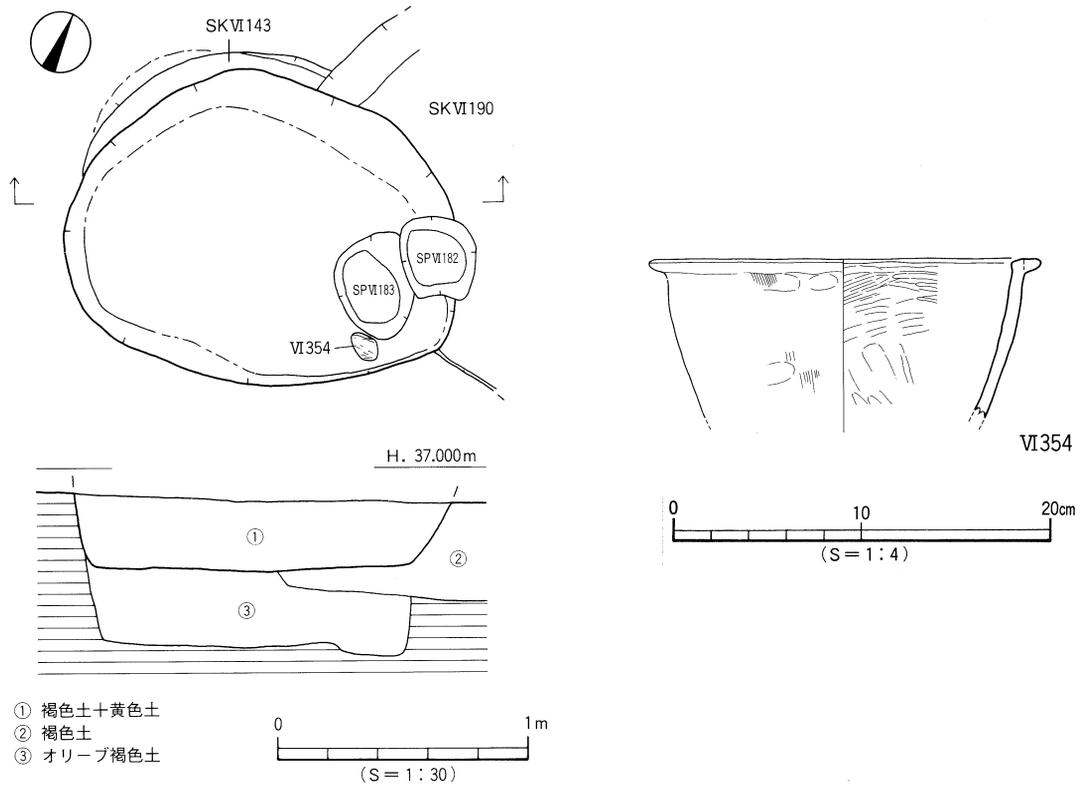
第1地区の南部、E・F2区に位置する。遺構の北西側はS K VI143 (土坑D)、東側はS K VI190 (土坑B) を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.64m、短径1.28m、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中にて、弥生土器片が出土した。

## 出土遺物

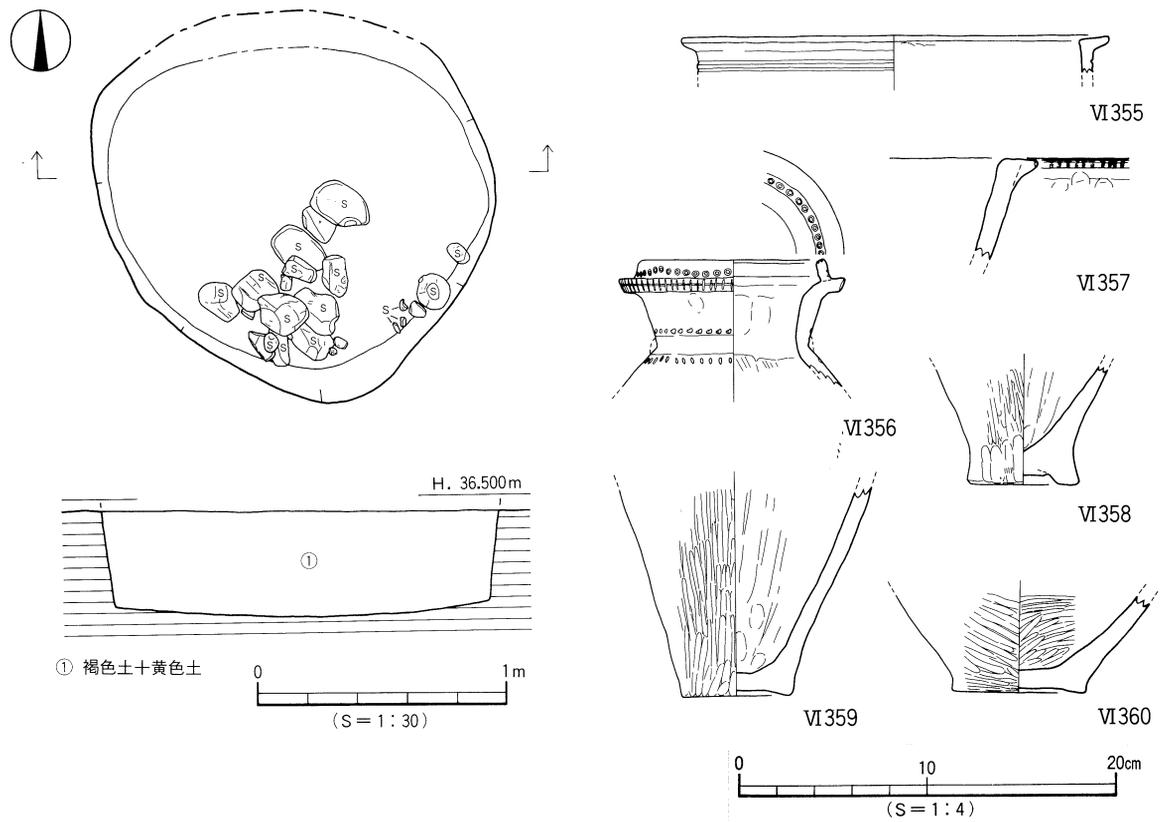
VI354は貼り付け口縁の鉢形土器。無文。

## S K VI164 (第271図)

第1地区の南部、D2・3区に位置する。遺構の上部はS B VI101 (弥生後期前半) に切られ、S K VI153 (土坑C) を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.60m、短径1.38m、深さ42cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。遺物は、基底面南側からは径10~20cmの河原石が密集して出土し、埋土中からは弥生土器片が数点出土した。



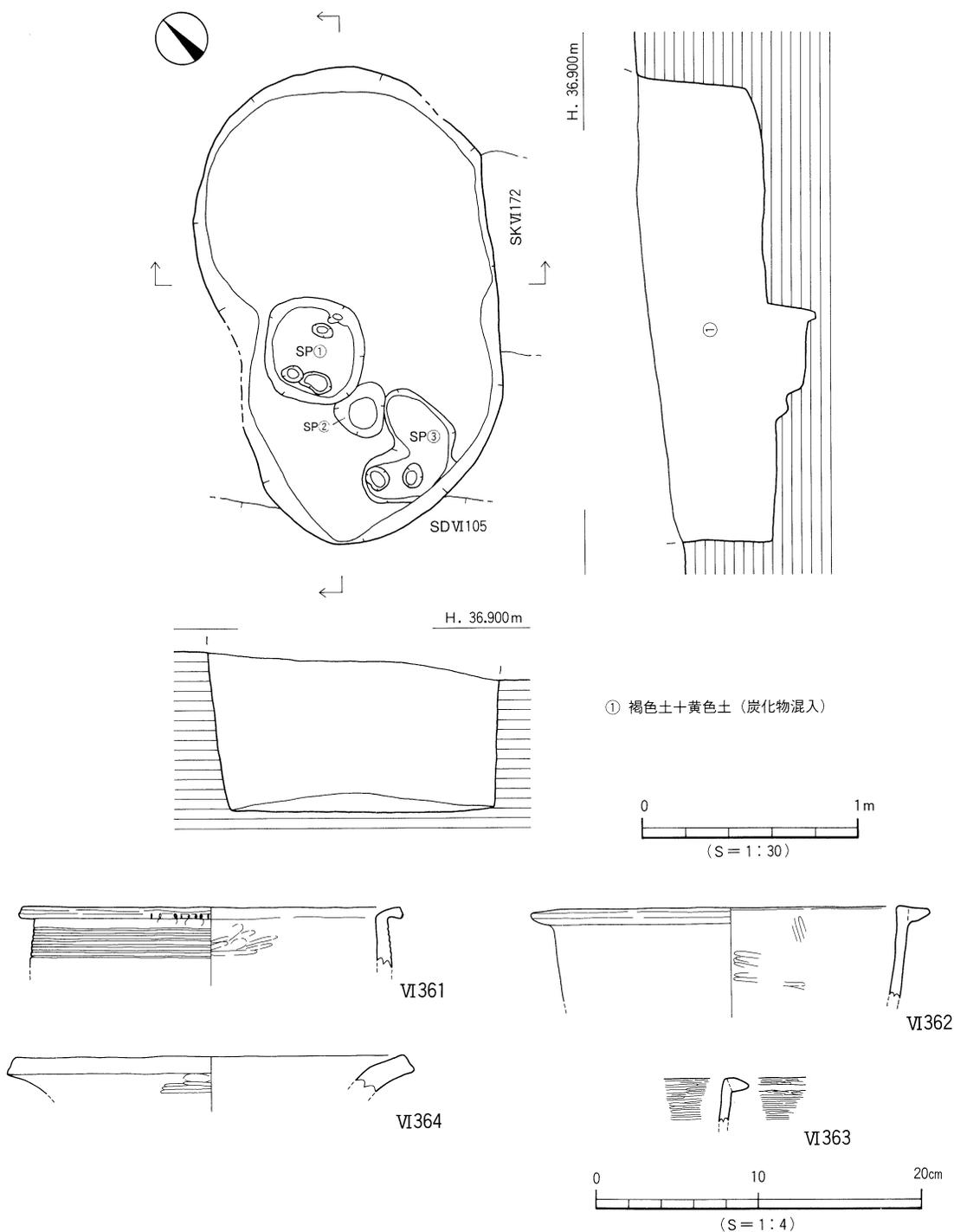
第270図 S K VI 191測量図・出土遺物実測図



第271図 S K VI 164測量図・出土遺物実測図

出土遺物

VI355は貼り付け口縁の甕形土器。胴部には沈線文2条以上を施す。VI356は壺形土器。口縁内面に断面長方形の凸帯を貼り付け、凸帯端面と側面に竹管文を施す。口縁端面はへら描き沈線文と刻目を施す。頸部には凸帯の剥落痕が残る（弥生後期）。VI357は鉢形土器で、口縁端面に刻目を施す。VI358・359は甕形土器、VI360は壺形土器の底部で、わずかに上げ底となる。外面にミガキ調整を施す。



第272図 SK VI122測量図・出土遺物実測図

ii) 楕円形土坑

S K VI122 (第272図)

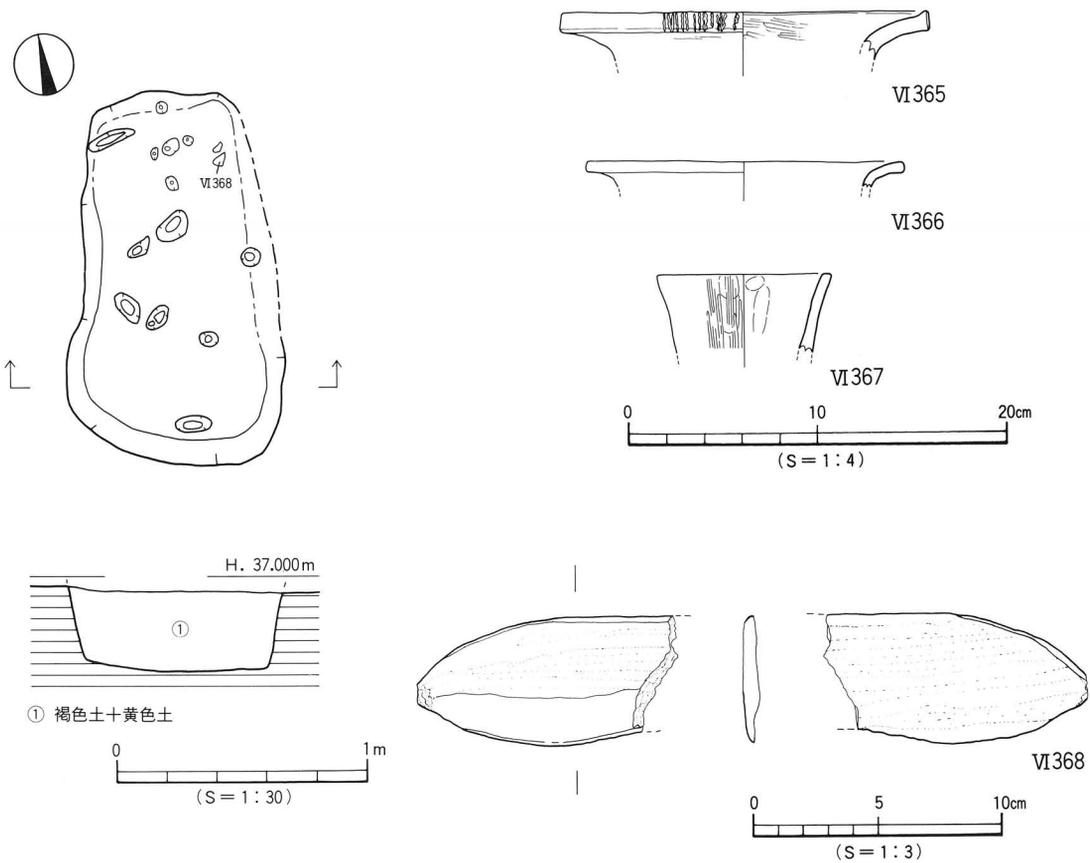
第1地区の中央部、E4・5区に位置し、S D VI105の下層部分とS K VI172(土坑E)を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.18m、短径1.34m、深さ78cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は単一層であるが、炭化物が少量混入する。基底面は北側から南側に向かって緩やかに傾斜する(比高差10cm)。基底面からは径24～50cm、深さ15cmのピット3基(S P ①～③)を検出した。ピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は埋土下位から、弥生土器片が数点出土した。

出土遺物

VI361は折り曲げ、VI362・363は貼り付けにより口縁部を成形する甕形土器。VI361は胴部に沈線文、VI363はクシ描き沈線文を施す。VI364は壺形土器の口縁部片で、口縁端面はナデ凹む。

S K VI176 (第273図)

第1地区の南部、D2区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、S K VI153(土坑C)を切る。規模は長径1.50m、短径0.80m、深さ35cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。基底面からは大小13基のピットを検出した。ピット埋土はすべて土坑埋土と同様である。



第273図 S K VI176測量図・出土遺物実測図

遺物は埋土中から、弥生土器片が数点と石庖丁1点が出土した。

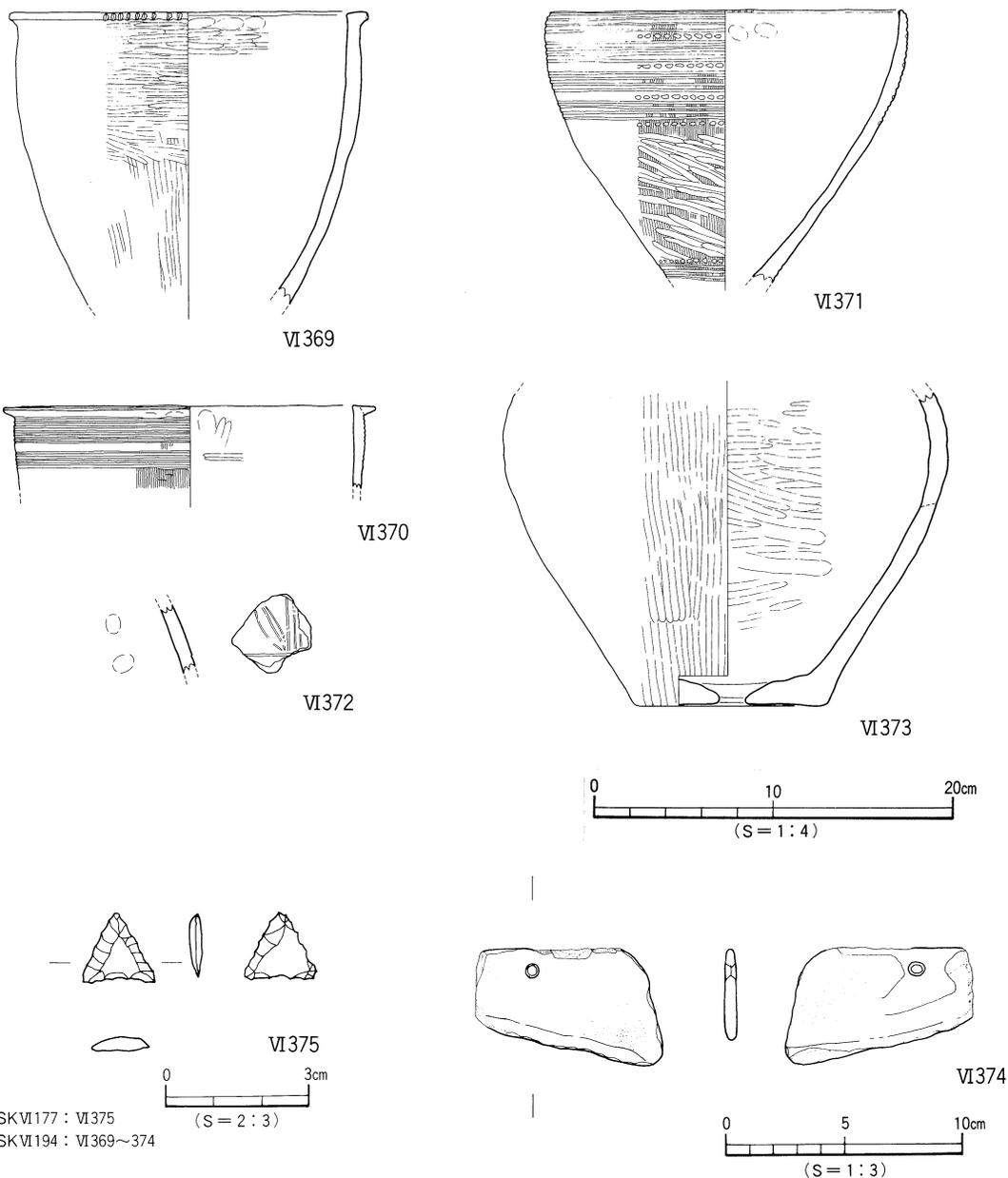
出土遺物

VI365～367は壺形土器。VI365は口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に刻目を施す。VI367は長頸のもので、口縁端部は平坦面をなす。VI368は緑色片岩製の石庖丁の未製品である。平面形態は杏仁形を呈するものとみられ、刃部のみ研磨を施す。おそらく、刃部を作り出した後に、敲打段階で破損したものと推測される。

このほか、楕円形を呈する土坑 S K VI177と、S K VI194から出土した遺物を第274図に掲載した。

S K VI194出土遺物 (第274図 - VI369～374)

VI369・370は粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形する甕形土器。VI369は口縁端面に刻目を施す。VI370は胴部に沈線文10条を施す。VI371は直口口縁の鉢形土器。胴部に沈線文(4条1組か?)



SK VI177 : VI375  
SK VI194 : VI369～374

第274図 S K VI177・194出土遺物実測図

と刺突文を4段組み合わせて施す。VI372は壺形土器の肩部片で、ヘラ描きによる有軸の木葉文を施す。VI373は所謂「コシキ」形土器で、壺形土器の転用品である。径1.6cm大の孔を焼成後に穿つ。VI374は石庖丁である。平面形態は長方形を呈するものとみられ、刃部は使用によりすり減っている。穿孔は両面から1ヶ所に穿つ。刃部寄りの両面に敲打痕を残す。

**SK VI177出土遺物 (第274図-VI375)**

VI375はサヌカイト製の凹基無茎石鏃。平面形態は正三角形を呈する。

**iii) 長方形土坑**

**SK VI192 (第275図)**

第1地区の南部、E2・3区に位置する。遺構の北側はトレンチに切られ、南西部はSK VI129(土坑E)・SK VI189(土坑B)を切っている。平面形態は長方形を呈し、規模は東西長1.68m、南北検出長1.25m、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は上下2層(①・②層)に分層され、②層は①層に比べ、やや明るい褐色土で炭化物が混入する。基底面は西側から東側に向かって傾斜する(比高差17cm)。基底面北西及び北東部では径5～25cm、深さ3～15cmのピット5基(SP①～⑤)を検出した。ピット埋土は土坑埋土の②層に類似する。遺物は埋土中から、弥生土器片が数点出土した。

**出土遺物**

VI376・377は甕形土器である。VI376は粘土紐を貼り付けることにより口縁部を成形する。胴部文様は、VI376が無文、VI377は沈線文と刺突文が組み合う。VI378は壺形土器である。口縁部内面に断面三角形の凸帯を貼り付ける。頸部にはM字状の凸帯を貼り付け、凸帯上に連鎖状刻目文を施す。VI379は高坏形土器。脚柱部にヘラ描き沈線文5条を施す。混入品。弥生中期後半。VI380はミニチュア土器の底部で、平底となる。

**SK VI199 (第276図)**

調査区の第1地区に南部、D2～E3区に位置する。遺構の南側はSK VI184・SK VI186(土坑B)を切り、SK VI185と重複する。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ2.50m、幅2.00m、深さ47cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。埋土は単一層である。基底面はほぼ平坦である。基底面からは径5～15cm、深さ5cmのピットを多数検出した。ピット埋土は土坑埋土に類似する。遺物は埋土中から、弥生土器片が数点と、石庖丁1点が出土した。このほか、縄文土器の小片が1点出土している。

**出土遺物**

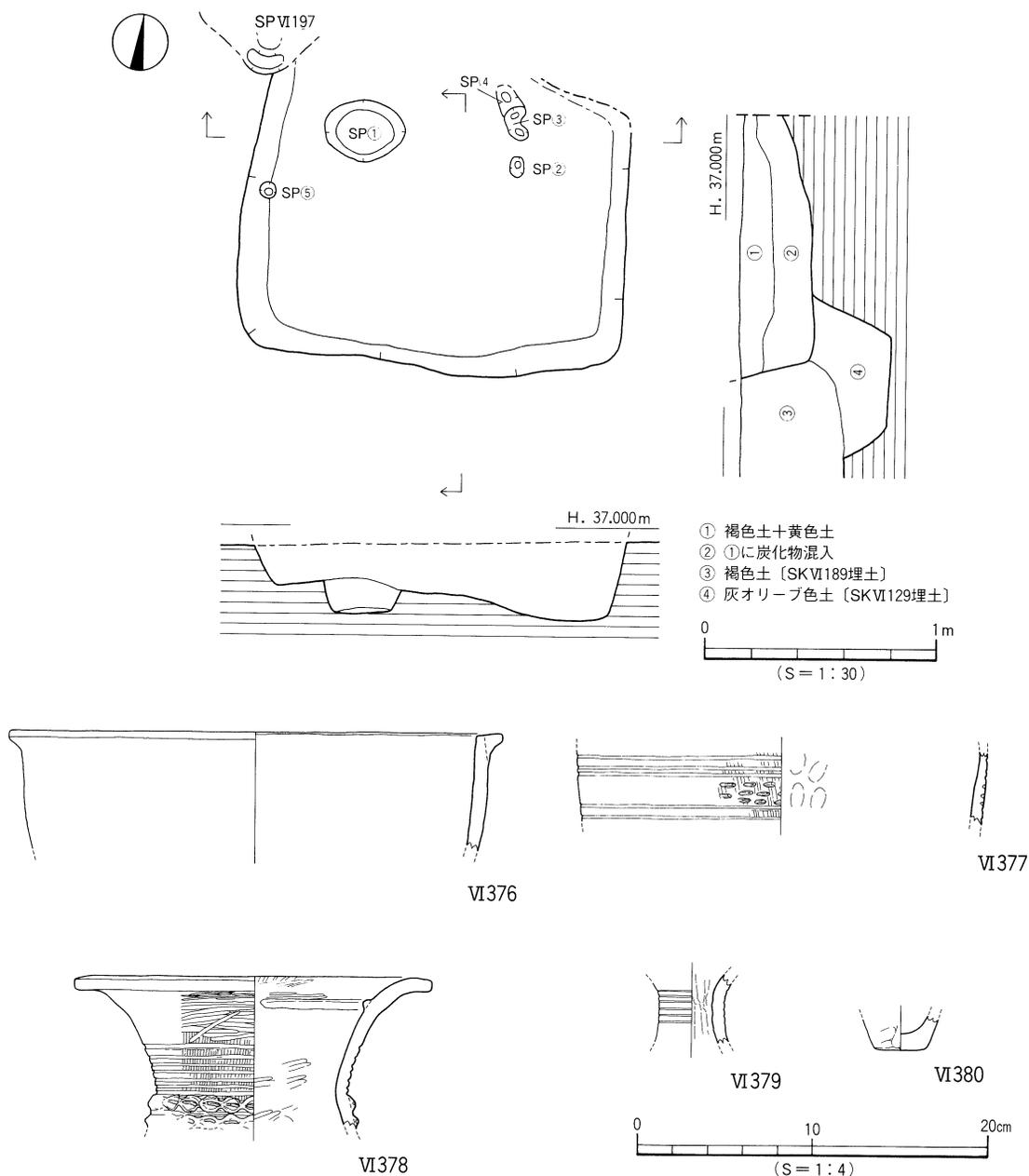
VI381～383は甕形土器である。VI381は粘土紐の貼り付け、VI382は折り曲げにより口縁部を成形する。VI381・382は胴部に沈線文、口縁端面に刻目を施す。VI383は沈線文を施し、沈線文間に山形文(2条1組)を施す。VI384・385は壺形土器である。VI384は口縁部内面に断面三角形の凸帯を貼り付ける。口縁端面と頸部には沈線文を施す。VI385は口縁端面に連鎖状刻目文2列を施す。VI386は鉢形土器である。断面三角形の粘土紐を貼り付けることにより口縁部を成形する。VI387は縄文時代晩期の浅鉢である。VI388は石庖丁である。平面形態は、直線刃半月形態を呈するものとみられる。側面は面取りされ、刃部を作り出す前に穿孔している。緑色片岩製。

(3) 土器溜まり (S X)

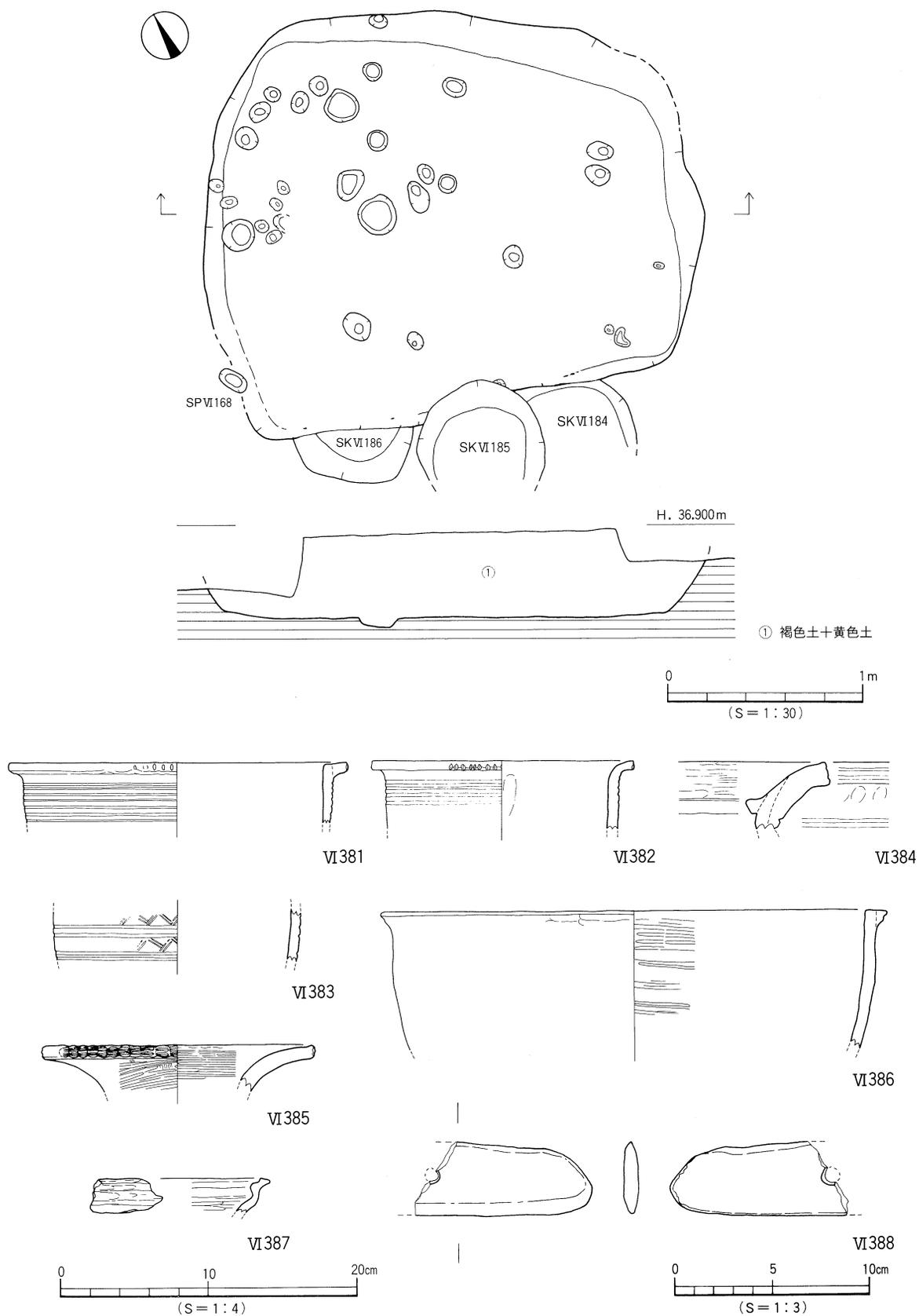
VI区では、第1地区の南側、D2区で弥生時代前期末～中期初頭の遺物がまとまって出土した地点がある。S K VI176 (土坑A) の上面で検出した遺物集中地点は、径2 mの範囲に破片が散在していた。ただし、明確な遺構プランは検出されず、ここでは土器溜まり S X VI101として取り扱っている。S X VI101の範囲は第195図に図化し、実測図は第277図に掲載した。

S X VI101出土遺物 (第277図)

VI389～391は甕形土器である。いずれも粘土紐を貼り付けることにより口縁部を成形する。胴部文様は沈線文を施し、VI389は沈線文と刺突文が組み合う。いずれも口縁端面に刻目を施す。VI391は3条1組の工具によるタテ方向の沈線文を施す。VI392は壺形土器の胴部片で、クシ描きの沈線文と波状文を施す。

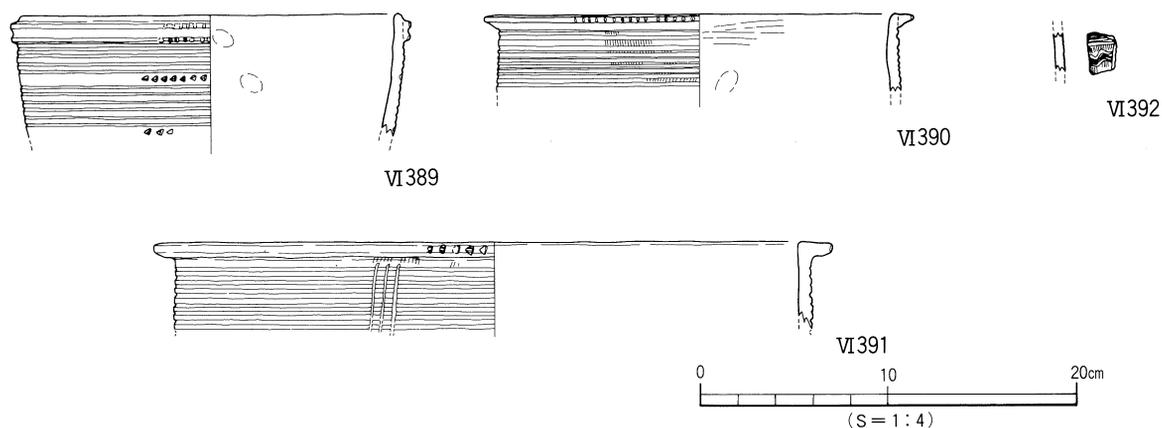


第275図 S K VI192測量図・出土遺物実測図



第276図 SK VI 199測量図・出土遺物実測図

VI 区

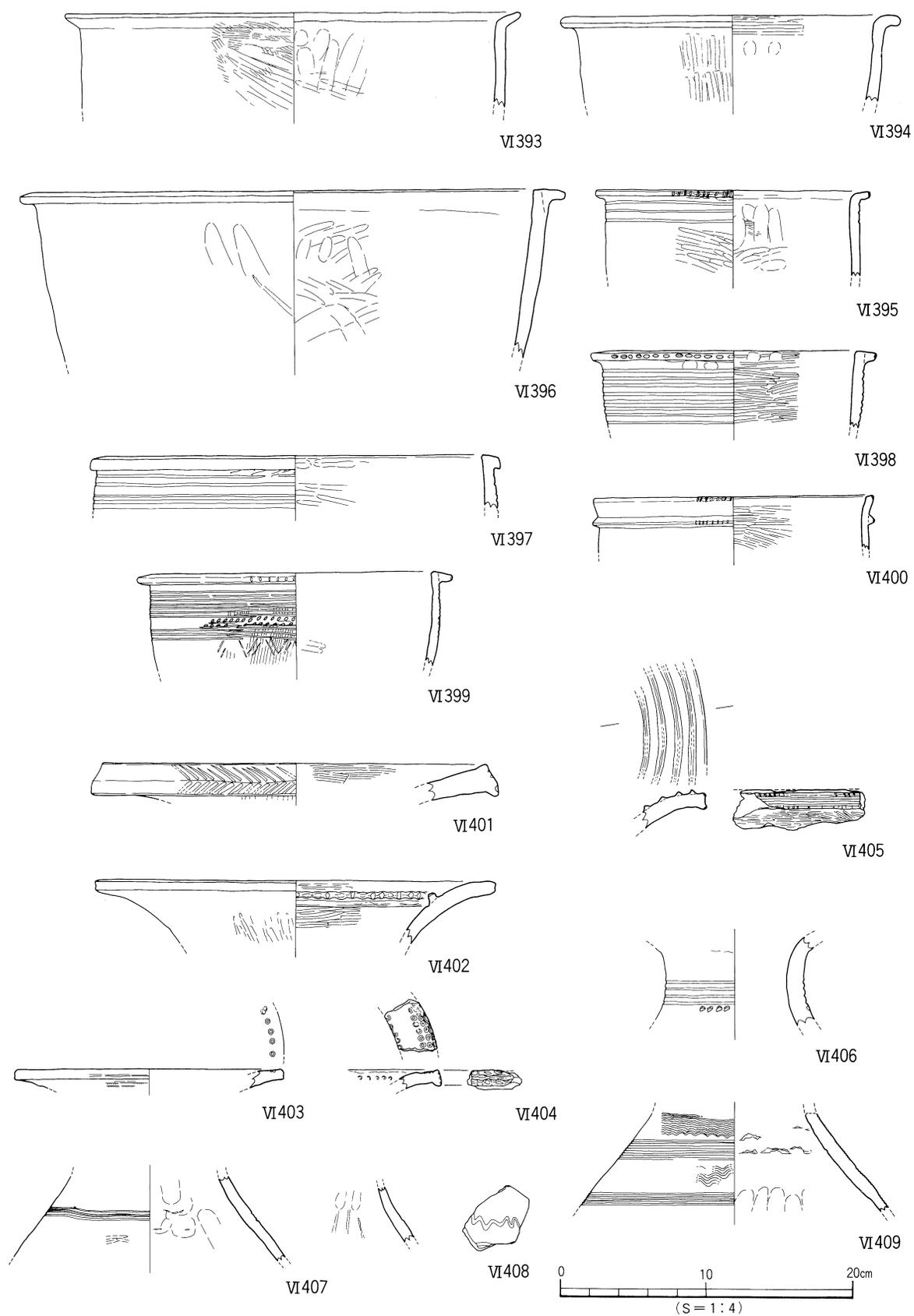


第277図 S X VI101出土遺物実測図

(4) 第VI層出土遺物 (第278・279図)

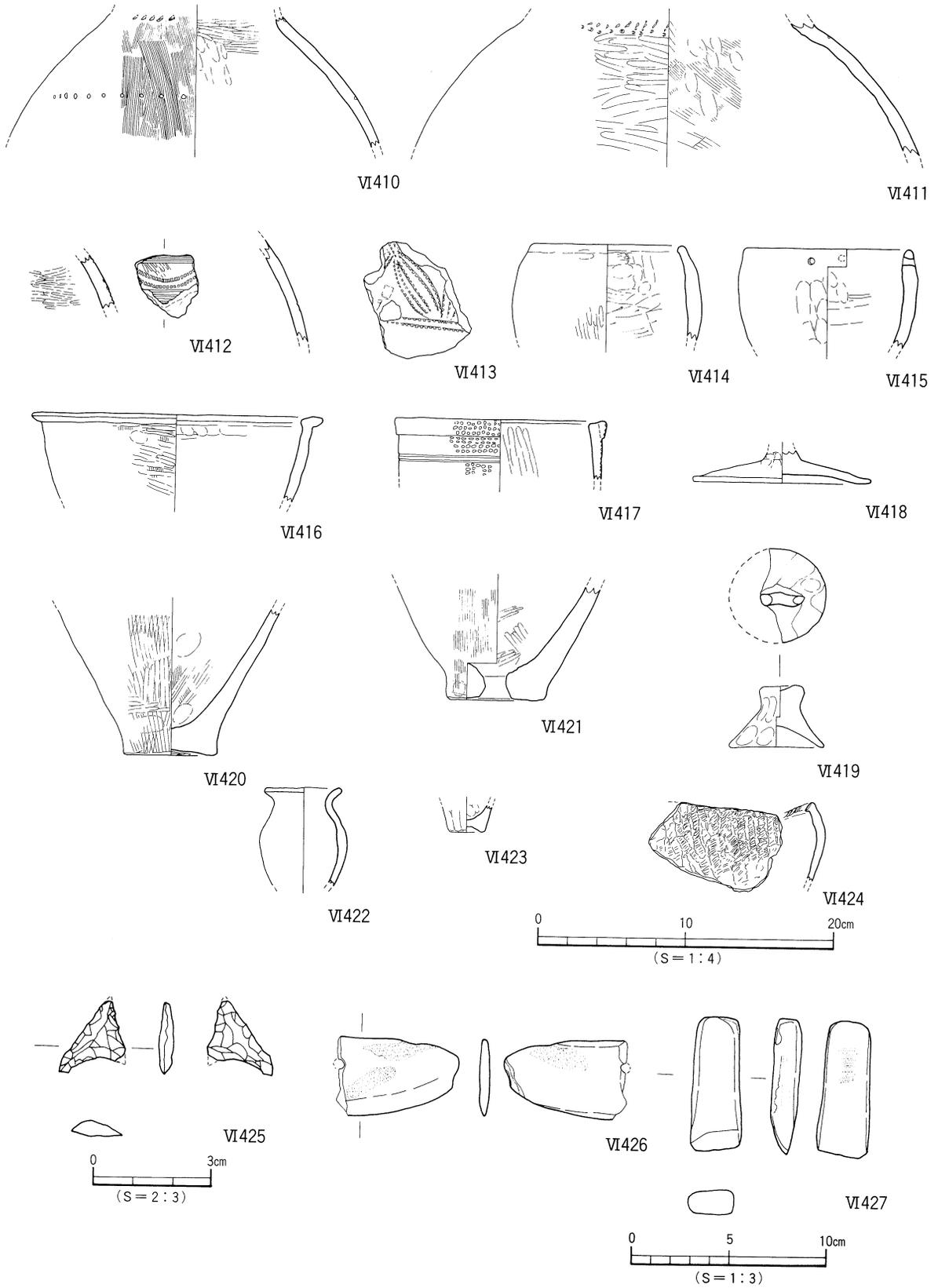
VI区の調査では、第VI層中より弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される遺物が出土した。発掘調査時は第V層と混同して遺物を取り上げている可能性もあるが、ここでは調査時の状況を考慮し、第VI層として取り上げた遺物として掲載する。

VI393～400は甕形土器である。VI393～395は折り曲げ、VI396～400は粘土紐を貼り付けることにより口縁部を成形する。VI400は口縁端部からやや下がった位置に断面三角形の凸帯を貼り付けるものである。胴部文様は、沈線文を施すもの (VI395・397・398)、沈線文と刺突文・山形文が組み合うもの (VI399)、無文のもの (VI393・394・396) がある。VI398は口縁端面に刺突文、VI395・399・400は刻目を施す。VI401～413は壺形土器である。VI401～405は口縁部片である。VI401は口縁端部を上下方に肥厚し、羽状文を施す。VI402は口縁部内面に断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯上には刻目を施す。VI403は口縁部内面に竹管文を施す。VI404は口縁端面にヘラ描き沈線文を施した後、刻目を施す。口縁上面には竹管文を施す。VI405は口縁部内面に断面三角形の凸帯4条を貼り付ける。口縁端面には沈線文2条を施した後、刻目を施す。VI406は頸部片、VI407～413は胴部片である。VI406は沈線文と刺突文が組み合う。弥生中期後半。VI407は頸部にクシ描き沈線文3条を施す。VI408はクシ描き波状文、VI409はクシ描き沈線文と波状文を施す。VI410は刺突文を施し、VI411は竹管文3列を施す。VI412・413は貝殻腹縁により文様を施したもので、VI412は弧文、VI413は直線文と無軸の木葉文を施す。VI414～417は鉢形土器である。VI414・415は直口口縁を呈し、VI415は径0.5cmの孔を穿つ。VI416・417は粘土紐を貼り付けることにより口縁部を成形する。VI417は刺突文6列と沈線文(2条1組)を施す。VI418・419は蓋形土器である。VI419はつまみが角状に分かれる。VI420は甕形土器の底部で、やや上げ底になる。VI421はコシキで、壺形土器からの転用品である。径1.4cmの孔を焼成後に穿つ。VI422・423はミニチュア土器で、VI422は壺形土器の模倣品、VI423は底部片である。VI424は縄文土器の深鉢である。縄文後期。VI425～427は石器である。VI425は凹基無茎石鏃である。サヌカイト製。VI426は石庖丁である。刃部の鑄は甘い。穿孔は金属によるものである。VI427は柱状片刃石斧である。刃部の鑄は丸味を帯びる。断面形態は長形状を呈する。緑色片岩製。



第278図 第VI層出土遺物実測図(1)

VI 区



第279图 第VI層出土遺物実測図(2)



## 4. 弥生時代中期～後期の遺構と遺物

VI区で検出した弥生時代中期から後期の遺構は、竪穴式住居址3棟、溝3条、土坑4基である。内訳は第2地区から土坑1基、その他はすべて第1地区からの検出である。遺構検出面は、第VI層上面と第VII層上面である（第280図、図版66）。

### (1) 竪穴式住居址

SBVI101（第281図、図版67・68）

第1地区の南部、D2～E3区に位置する。第VI層上面での検出である。住居址中央部と東側はトレンチに切られる。後述するが、炉の検出状況から改築（貼床）が施された住居址になる。

平面形態は円形を呈し、規模は径5.00～5.45m、深さは第VII層上面下20cmを測る。床面は東から西に緩傾斜する（比高差10cm）。埋土は、黒褐色土に白色砂粒が混入する。主柱穴はSP①～④の4本を検出した。柱穴は方形の配置をとる。各柱穴は円形を呈し、規模は径24～42cm、深さ28～30cmを測る。柱穴間隔はSP①～②間2.6m、SP②～③間2.3m、SP③～④間2.5m、SP④～①間2.4mである。柱穴埋土は暗褐色土単層である。

炉は、住居址のほぼ中央部で2基を検出した。断面観察の結果、炉①は住居址床面、炉②は埋土上面から掘り込まれたものである。よって、住居址埋土の①層は貼床土と考えられる。

炉①は住居址の中央部からやや西側に位置する。改築前に使用された炉で、平面形態は不整楕円形を呈するものとみられ、規模は径50×70cm、深さ26cmである。埋土は暗褐色土単層であるが、埋土中には、炭化物と焼土が少量が混入する。

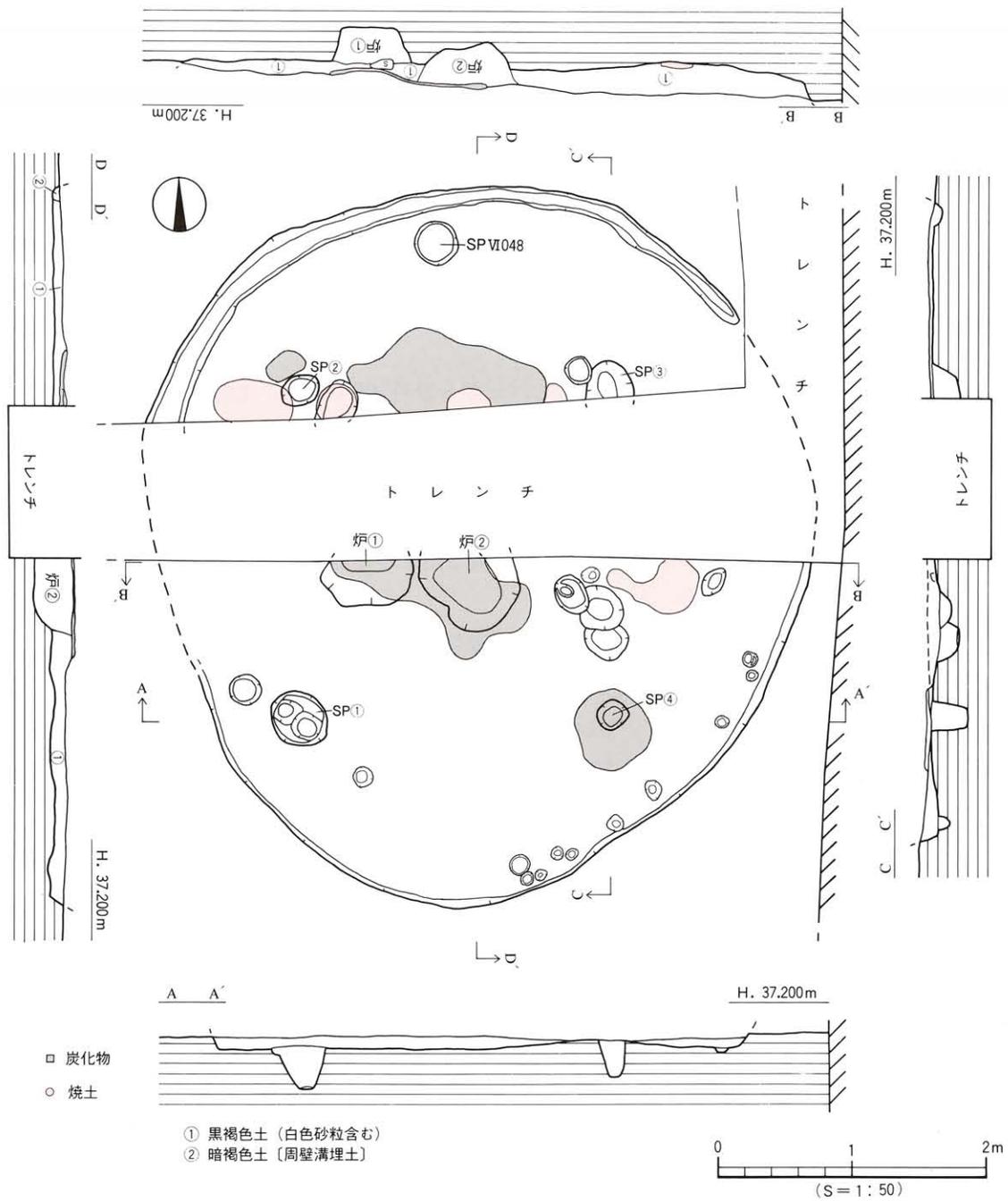
炉②は住居址のほぼ中央に位置する。改築後に使用された炉で、平面形態は不整楕円形を呈するものとみられ、規模は径50×70cm、深さ34cmを測る。埋土は、黒褐色土に炭化物と焼土が混入している。炉内からの遺物の出土はない。

住居址内からは、①層中より弥生土器片が数点出土した。住居址改築後の床面に、炭と焼土が散在して検出されたことから、焼失家屋の可能性もある。住居址床面にて大小10基のピットを検出したが、住居に伴うものかは判断しえない。住居址北側では周壁溝を検出した。規模は幅14～24cm、深さ6cmを測る。また、住居址の南東側では径8～12cm、深さ3～5cmの小ピット9基が壁体に沿って点在している。周壁溝とピットの埋土は暗褐色土単層である。

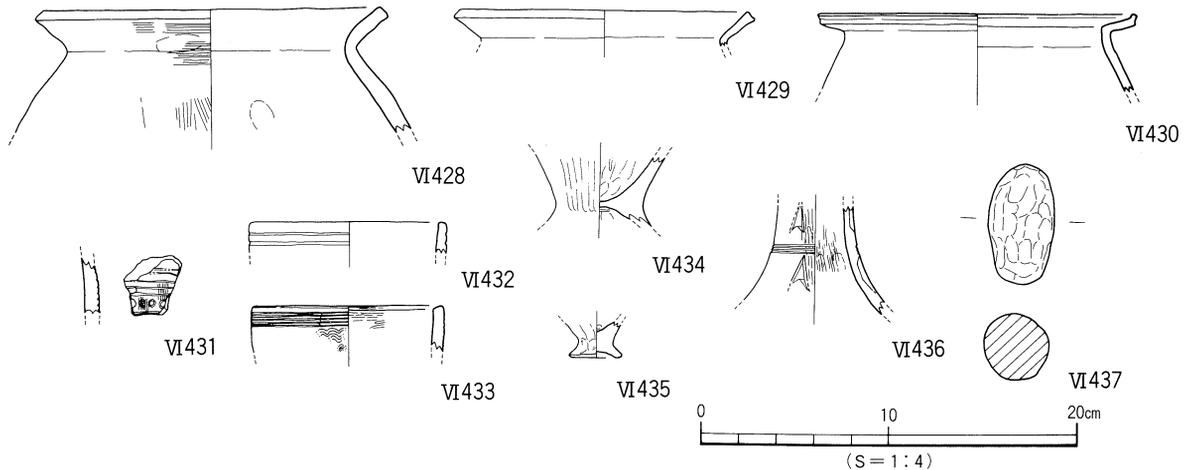
### 出土遺物（第282図）

VI428～431・434は甕形土器である。VI428～430は口縁部片である。VI428・429は口縁部が「く」の字状、VI430は逆「L」字状を呈する。VI428・429は口縁端部が面をなす。VI430は口縁部を上方につまみ上げて、口縁端面はナデにより凹む。弥生後期前半。VI431は胴部片で、沈線文と竹管文が組み合う。弥生前期末。VI432・433は鉢形土器である。VI432は沈線文2条を施す。VI433はクシ描き沈線文と波状文を施す。弥生前期末。VI434は底部で、上げ底となる。外面にミガキ調整を施す。VI435はミニチュア土器の底部で、上げ底となる。VI436は高坏形土器である。脚部中位にヘラ描き沈線文3条、その上下に矢羽根透かし（未完通）を施す。VI437は用途不明の土製品である。

時期：出土した甕形土器は、弥生時代後期前半の特徴を示している。よって、本住居址の廃棄、埋没時期も弥生時代後期前半とする。



第281図 S BⅥ101測量図



第282図 S B VI101出土遺物実測図

## S B VI102 (第283図、図版68)

第1地区の南西壁付近、F 3・4区に位置し、一部S D VI105を切る。遺構の西側は調査区外に続く。平面形態は円形もしくは方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.12m、南北長4.95m、深さ18cmを測る。埋土は第V層の黒褐色土になる。床面から径30cm、深さ16cmの小ピット2基(S P ①・②)を検出した。両者共に、埋土は粘性の強い黒色土である。S P ①・②は本住居址に伴うものかは不明である。遺物は埋土中から、弥生土器片が数点出土した。

## 出土遺物

VI438・439は甕形土器である。折り曲げにより口縁部を成形する。VI438は口縁端面に凹線文1条を施す。弥生中期後半。VI439は胴部に沈線文6条以上を施す。弥生前期末。VI440・441は壺形土器である。VI440は口縁端面に刻目を施す。VI441は口縁端部をわずかに上方につまみ上げる。弥生中期中葉。VI442は鉢形土器である。断面三角形の凸帯を貼り付けることにより、口縁部を成形する。弥生前期か。

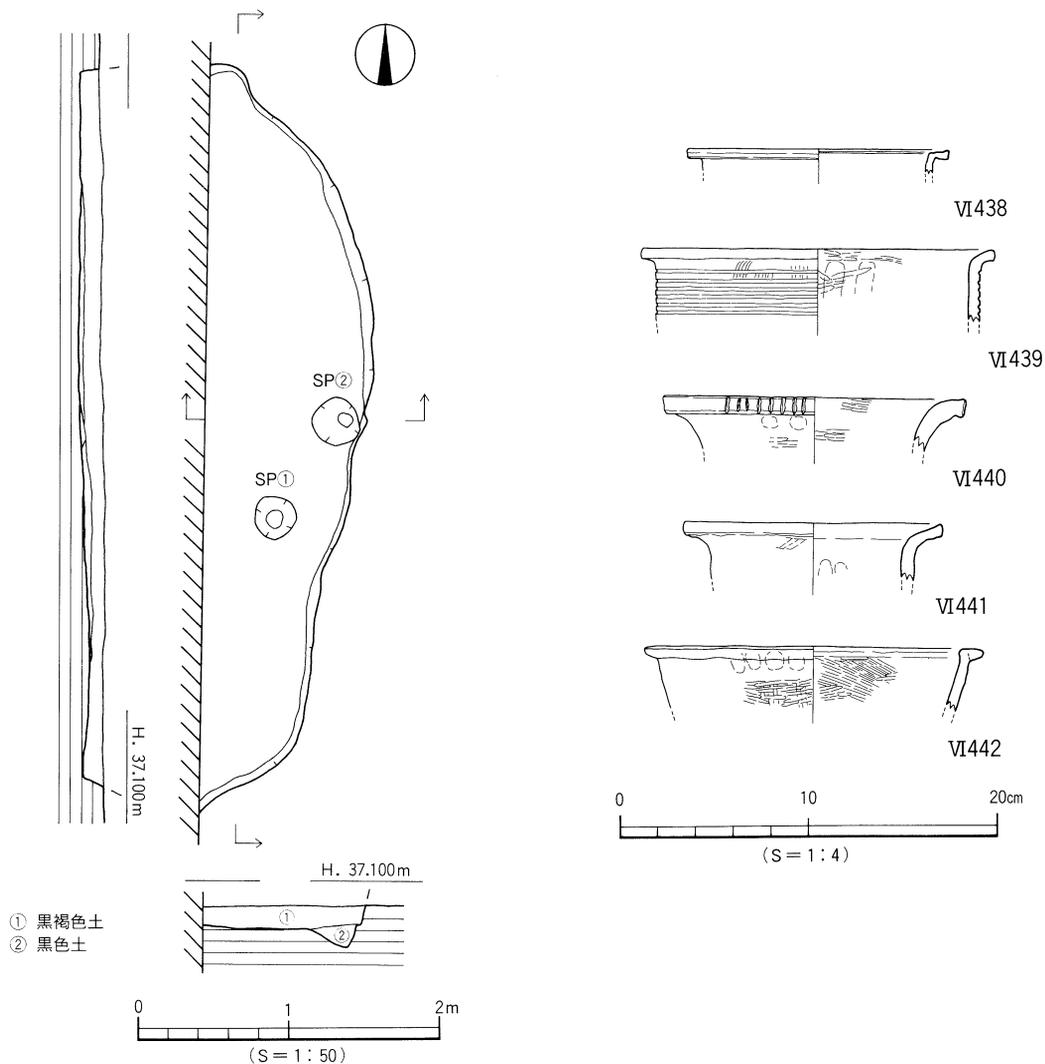
時期：出土した遺物は多少の時期幅が認められるが、第V層で埋没することと、VI438の甕形土器の特徴から、S B VI102は弥生時代中期後半の住居址としておく。

## S B VI103 (第284図、図版69・70)

第1地区の中央部、D 4～E 5区に位置する。S D VI105とS K VI122(土坑A)を切る。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ3.90m、幅2.85m、壁高38cmを測る。S B VI103は断面観察の結果、改築(貼床)が施された住居址である。住居址埋土は黒褐色土である。ここでは、改築前と改築後とに分けて住居址構造と出土遺物の説明を行う。

## 1) 改築前

S B VI103は改築前、つまり構築当初は住居址のほぼ中央部に炉①を付設する。炉①は、平面形態は不整の楕円形を呈し、規模は長径1.00m、短径0.60m、深さ30～40cmを測る。埋土は灰茶褐色土で、炭化物が少量混入する。住居址西壁中央部と南西部では径30cm前後、深さ5cmのピット2基(S P ①・②)を検出した。ピット埋土は両者共に黒色土である。住居址中央部では径10cm、深さ5cmのピット(S P ③)を検出した。ピット埋土は黒褐色土である。検出状況からは、S P ①～③は改築後の



第283図 S B VI102測量図・出土遺物実測図

住居址に伴う可能性をもつ。住居址南西隅の壁体沿いには溝SD①があり、規模は幅15～20cm、深さ3～5cmである。埋土は黒褐色土で、黄色土が斑点状に混入するものである。

主柱穴は特定できなかった。住居址北東コーナー付近の壁体に沿って径4～8cm、深さ3cmの小ピットを検出した。おそらく住居址の周壁杭の痕跡と考えられる。

## 2) 改築後

SB VI103改築後、つまり⑥層を貼床として使用し、床面を構築したものである。改築前と同様、主柱穴となりうる柱穴は未検出である。炉は住居址ほぼ中央部に付設されている(炉②)。平面形態は不整の楕円形を呈し、規模は長径90cm、短径50cm、深さ20cmを測る。炉①に比べるとやや小型化している。埋土は、暗褐色土と茶褐色土とが互層堆積をなし、炉上面には炭化物や焼土が広がっている。炉の東側には径40×80cmの範囲で、炭化物が検出されている。

床面では土坑を3基検出した。住居址床面北西部にて土坑S K①、東壁中央部にて土坑S K②、西壁中央部にて土坑S K③をそれぞれ検出した。S K①は楕円形を呈し、規模は長径80cm、短径70cm、深さ8cmを測る。埋土は茶褐色土単層である。S K②は不整の円形を呈し、断面形態は舟底状を呈する。規模は径70~75cm、深さ30cmを測る。埋土はS K②と同様の茶褐色土の単層である。

S K③は不整の長方形を呈し、東西長60cm、南北検出長90cm、深さ10cmを測る。埋土は粘性の強い黒色土である。いずれの土坑内からも遺物は出土していない。

このほか、住居址北壁中央付近には径20cm大のピット(S P④)を検出している。S P④埋土は粘性の強い黒褐色土である。住居址北壁及び南東壁コーナー沿いに径3~5cm、深さ3cm程度の小ピットが列をなして点在している。周壁杭の痕跡と考えられる。

遺物は⑥層である貼床土内と⑤層中からの出土であり、弥生土器片、石器、鉄器が出土した。

#### 出土遺物 (第285図)

VI445は⑥層貼床土内、その他は⑤層出土品である。VI443・444は甕形土器である。VI443は頸部に刺突列点文を施す。VI444は口縁部をわずかに下方に肥厚し、口縁端面に凹線文2条を施す。VI445は鉢形土器である。口縁端部は「コ」字状を呈する。VI446は高坏形土器で、柱部が三角錐状を呈し、裾部は内面に稜をもって折り曲げられる。VI447は器台形土器で、柱部に径1.6cmの孔を穿つ。VI448は鉢形土器、VI449は壺形土器の底部である。VI450・451は石庖丁で、VI450は刃部の鑄が明確である。使用後、何回も研磨されたため、刃部がやや内湾している。穿孔は金属による。緑色片岩製。VI451は平面形態が長方形を呈し、刃部の鑄が明確である。穿孔は敲打後、両面から孔を穿つ。VI452はスクレイパーである。ほぼ完形品で、刃部に自然面が残る。サヌカイト製。VI453は手持ちの砥石である。変成岩製。VI454は鎌の身の破片で、現存長4.0cm、幅1.1~1.2cmである。先端部に向けて厚さが薄くなり、先端部の断面形態がレンズ状を呈することから、鎌の切先に近い部分とみられる。器表面には石をとりこんだ錆が薄く付着する。

時期：出土した遺物には、多少の時期幅が認められる。VI447の器台形土器の特徴より、S B VI103は弥生時代後期後半までに埋没したものとする。

## (2) 溝

VI区第1地区にて溝3条を検出した。遺構検出面は第VI層上面である。

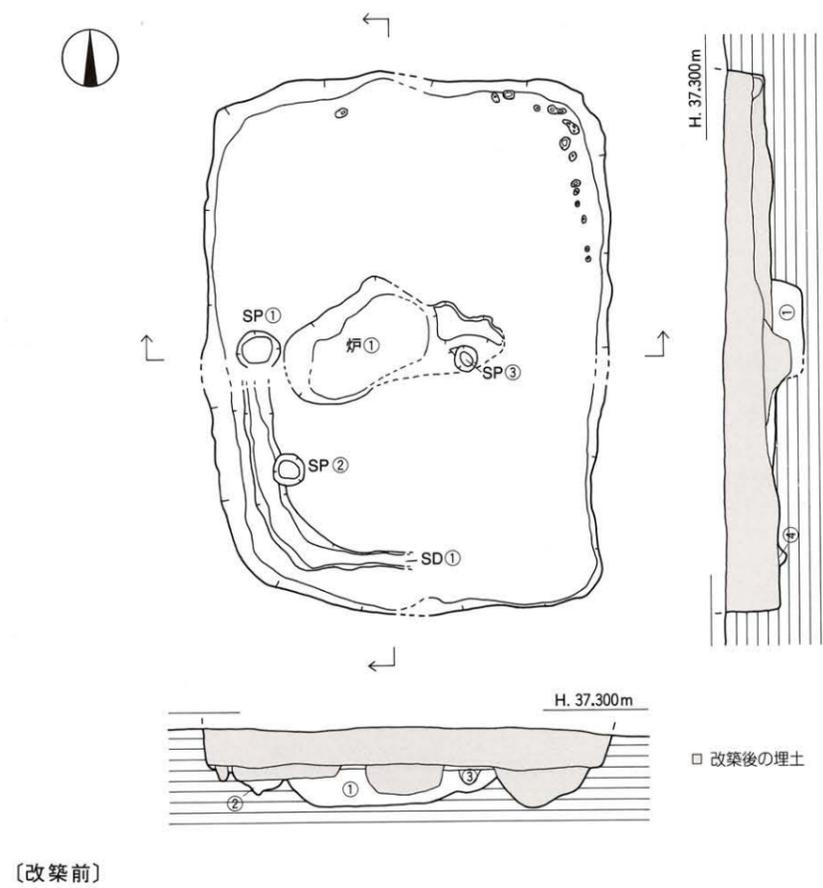
#### SD VI101 (第195図)

第1地区の中央部、E3区で検出した。北東から南方向の溝である。溝の東端はSD VI102と重複する。規模は検出長4.00m、幅60cm、深さ10cmを測る。溝基底面は南から北東に緩傾斜する(比高差2cm)。断面形態は皿状を呈する。埋土は第V層と同様の黒褐色土の単層である。遺物は、埋土中から弥生土器片が数点出土した。

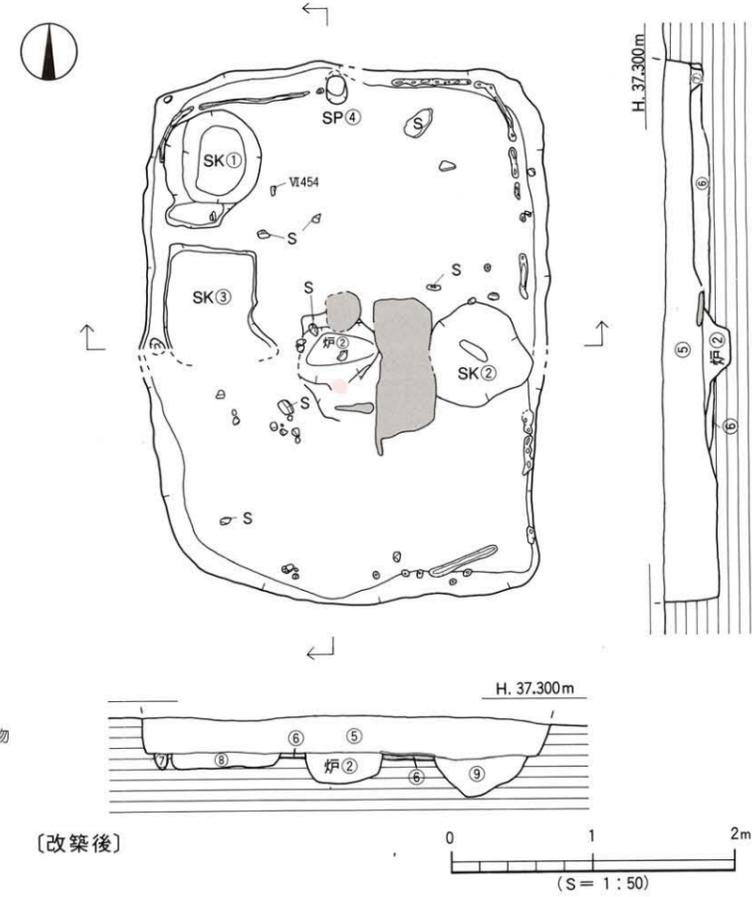
#### 出土遺物 (第286図-VI455・456)

VI455は鉢形土器の口縁部片。直口口縁を呈し、内外面共に細かなハケメ調整を施す。VI456は高坏形土器。坏部と脚部の接合は組み合わせ式である。

時期：第V層で埋没することと、出土遺物の特徴から、SD VI101は弥生時代後期前半の溝としておく。

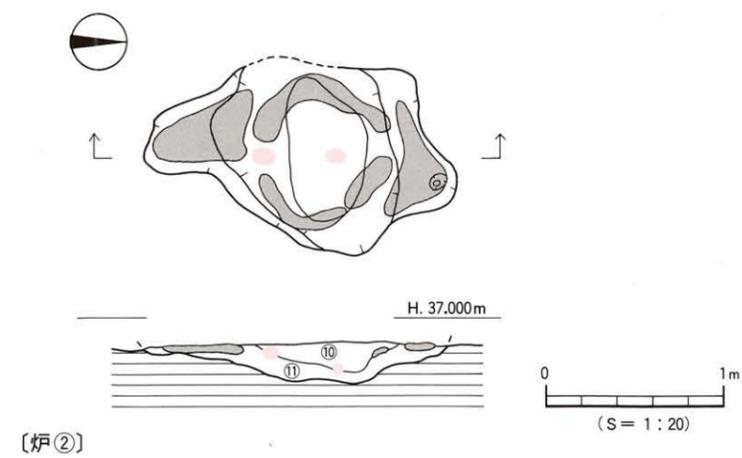


[改築前]



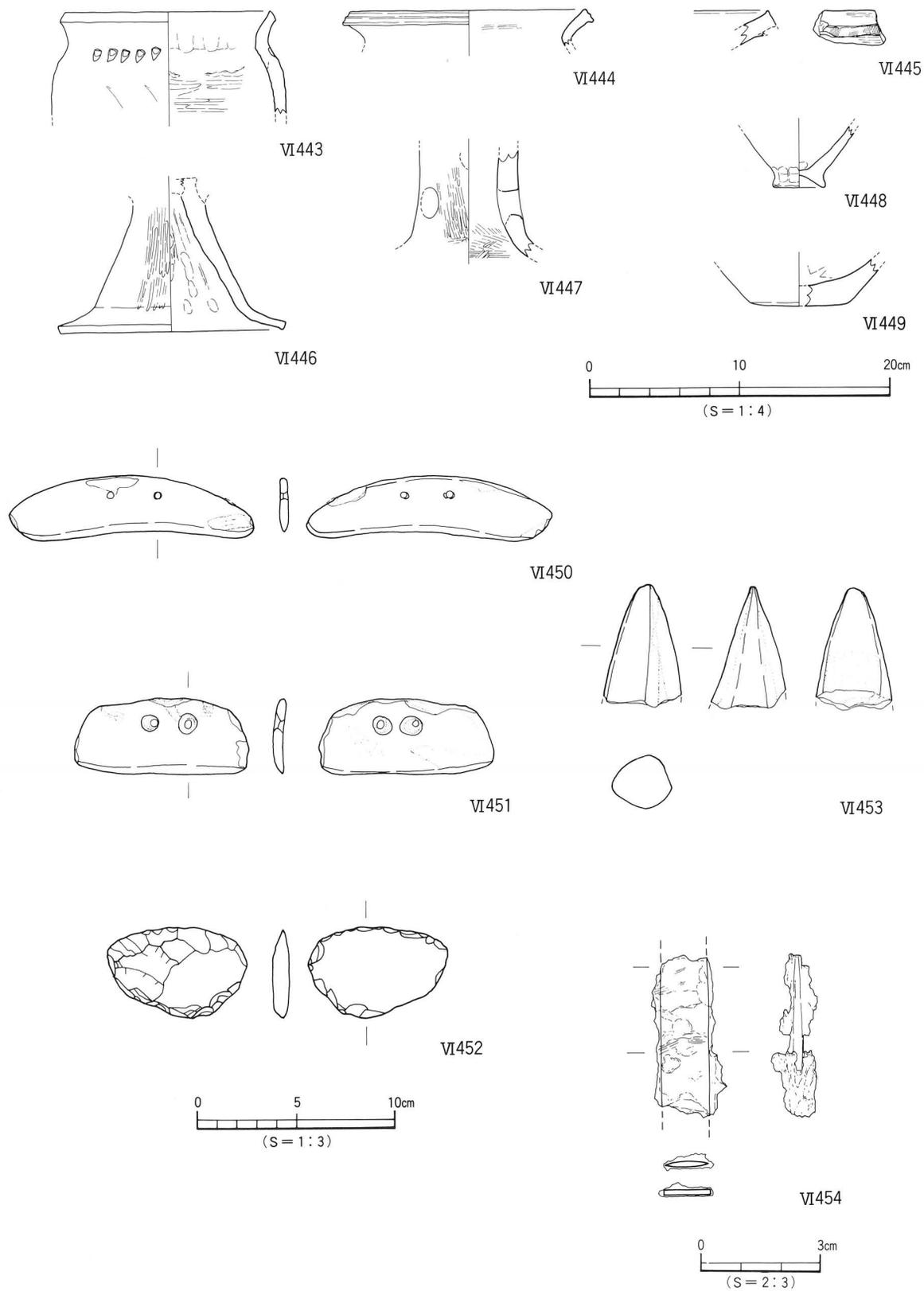
[改築後]

- ① 灰茶褐色土 (炭化物混入) [炉①埋土]
- ② 黒色土 [SP①埋土]
- ③ 黒褐色土 [SP③埋土]
- ④ 黒褐色土 (黄色土が斑点状に混入) [SP①埋土]
- ⑤ 黒褐色土
- ⑥ 黒褐色土+黄色土 [貼床]
- ⑦ 黒褐色土 (粘性強)
- ⑧ 黒色土 (粘性強) [SK③埋土]
- ⑨ 茶褐色土 [SK②埋土]
- ⑩ 暗褐色土 } [炉②埋土]
- ⑪ 茶褐色土 }

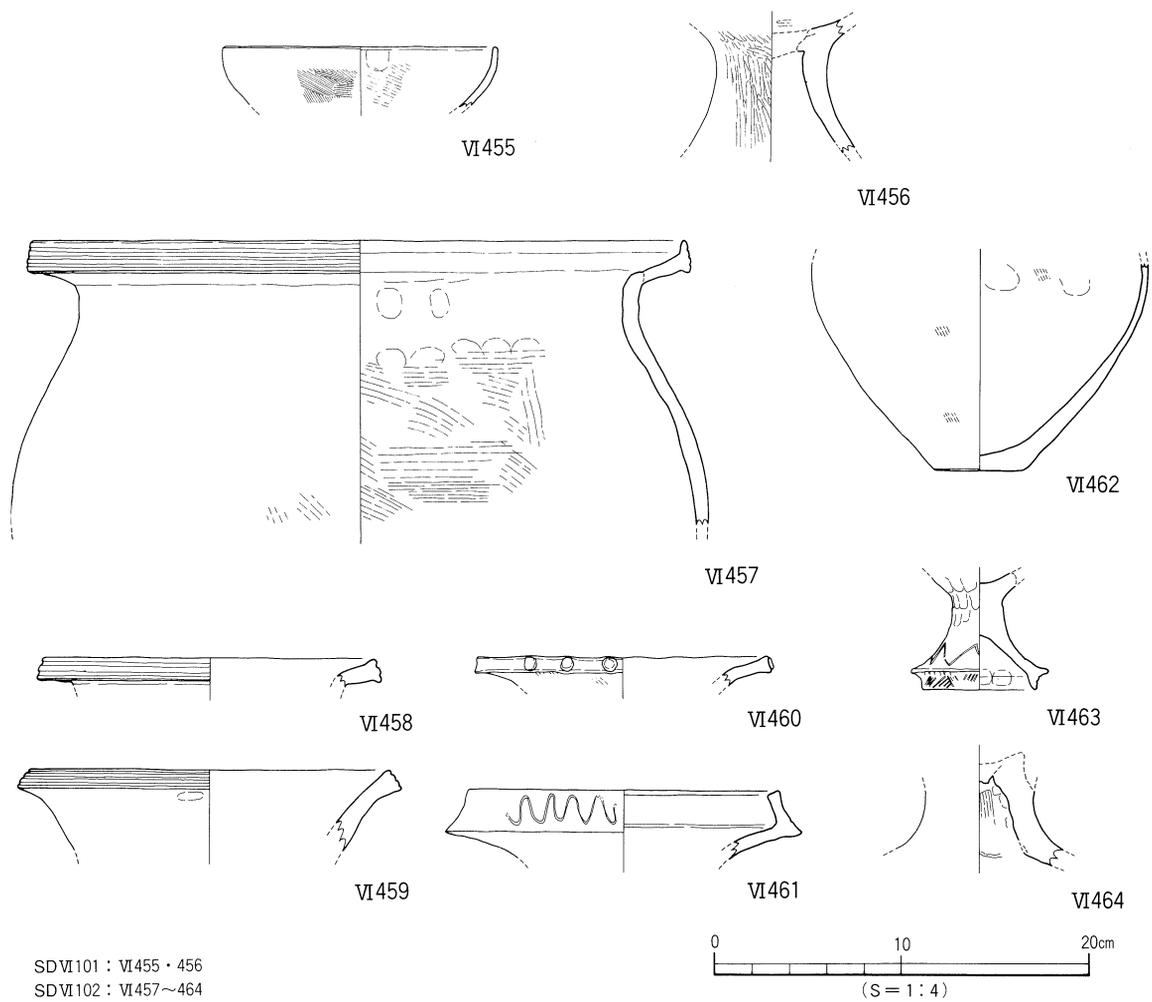


[炉②]

第284図 S B VI103測量図・炉②測量図



第285図 S B VI103出土遺物実測図



SDVI101 : VI455・456  
SDVI102 : VI457~464

第286図 S D VI 101・102出土遺物実測図

#### S D VI 102 (第195図)

第1地区の中央部、E 3～D 4で検出した東西方向の溝である。規模は検出長6.30m、幅1.80m、深さ29cmを測る。溝基底面は東から西に傾斜する(比高差20cm)。断面形態は皿状を呈する。埋土は第V層と同様の黒褐色土である。遺物は、埋土中から弥生土器片が数点出土した。

#### 出土遺物 (第286図-VI457~464)

VI457・458は甕形土器である。口縁端部を上下方に肥厚し、口縁端面に凹線文を施す。VI459~462は壺形土器である。VI459・460は広口壺で、VI459は口縁端部を下方にやや肥厚し、凹線文3条を施す。VI460は口縁端面に円形浮文を施す。VI461は複合口縁壺で、口縁拡張部にヘラ描き波状文を施す。VI462は胴底部片で、胴部中位に張りもち、底部は平底となる。VI463・464は高坏形土器である。VI463は柱部と裾部に山形文を施す。VI464は低脚になる。

**時期：**出土した遺物には、多少の時期幅が認められる。VI461の壺形土器の特徴から、S D VI 102は弥生時代後期中葉までに埋没した溝としておく。

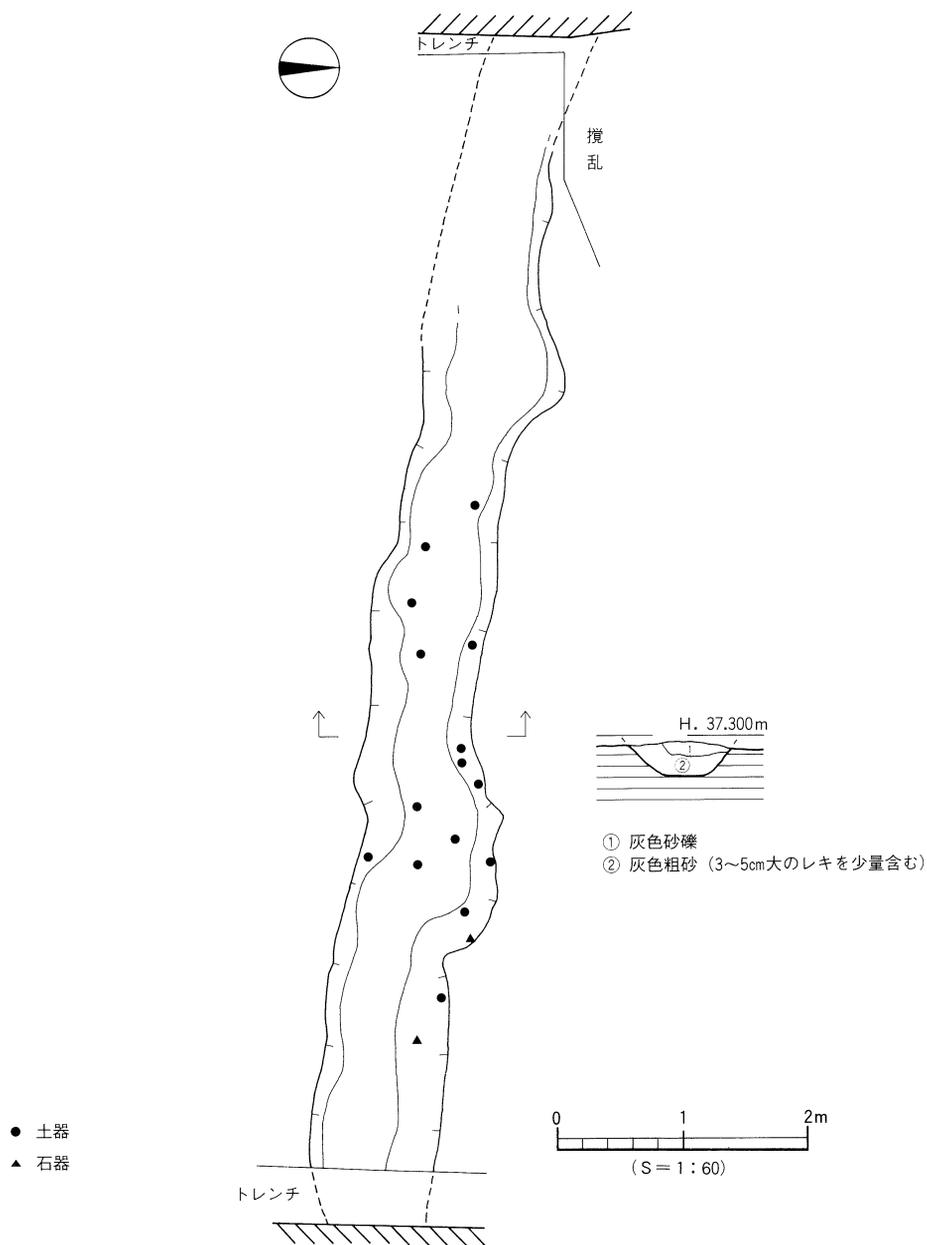
#### S D VI 103 (第287図、図版70)

第1地区の北部、D～F 8区で検出した東西方向の溝である。S D VI 104上面での検出であり、第

V層が覆う。規模は検出長8.20m、幅1.20m、深さ24cmを測る。溝基底面は東から西に傾斜する（比高差7cm）。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は上下2層（①・②層）に分層され、①層は灰色砂礫、②層は灰色粗砂である。遺物は①・②層中からそれぞれ出土した。

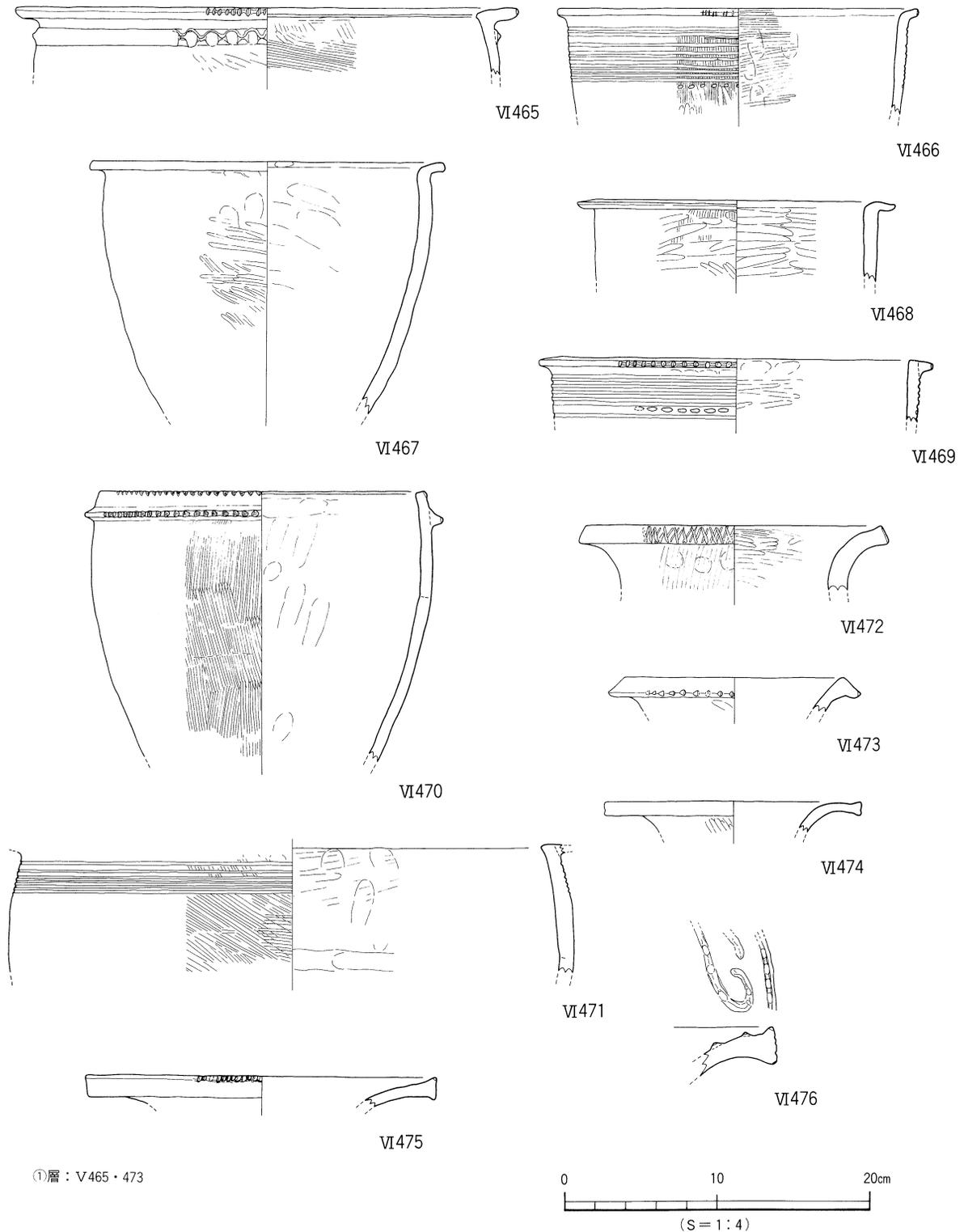
出土遺物（第288・289図）

VI465・473は①層、その他は②層出土品。VI465～471・481は甕形土器で、VI465～468は折り曲げ、VI469～471は粘土紐を貼り付けることにより口縁部を成形する。VI470は口縁端部から下がった位置に断面三角形の凸帯を貼り付ける。胴部文様は、沈線文を施すもの（VI471）、沈線文と刺突文が組み合うもの（VI466・469）、無文のもの（VI467・468）、断面三角形の凸帯を貼り付けるもの（VI465）がある。

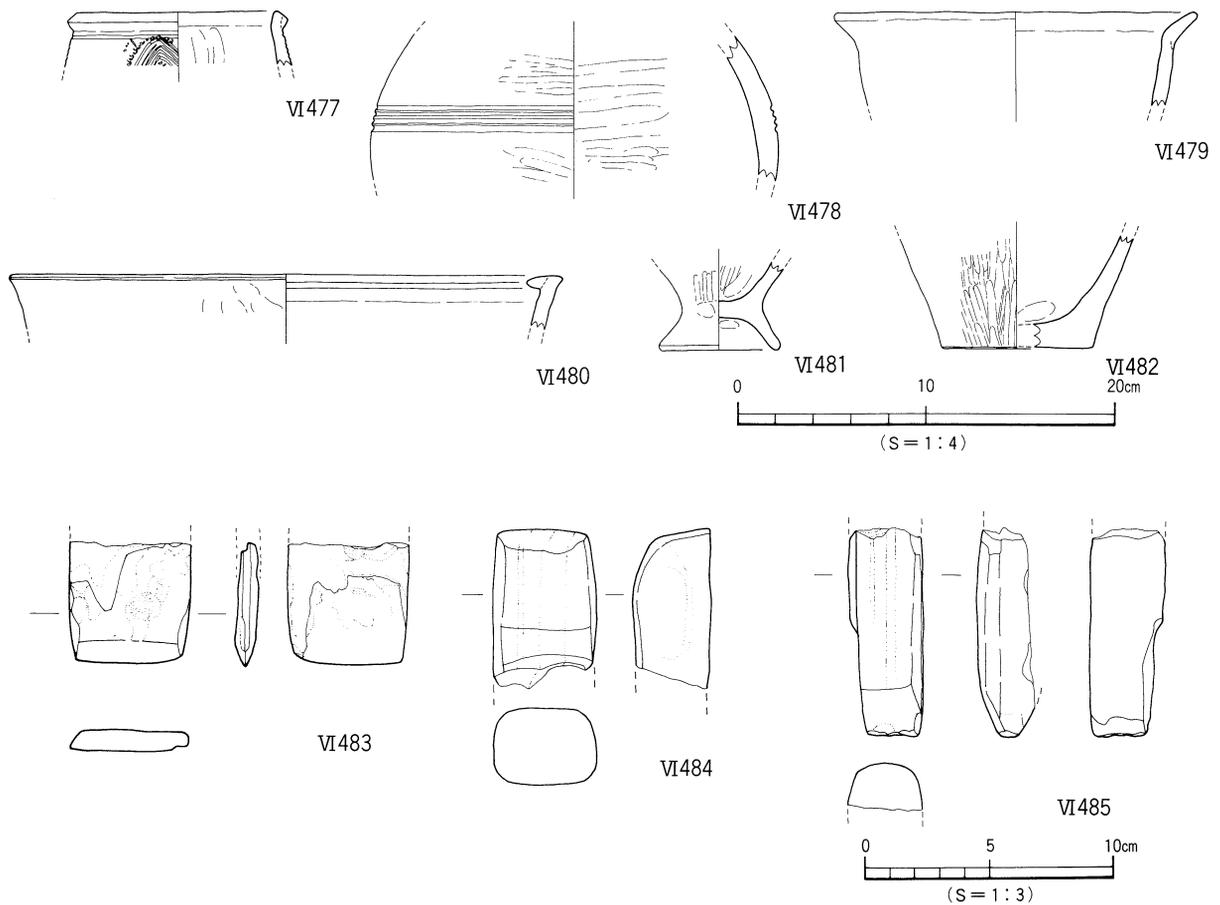


第287図 S D VI103測量図

口縁端面には刻目を施すもの（VI465・466・469・470）と、刻目を施さないもの（VI467・468）とがある。VI472～478は壺形土器である。VI472～476は広口壺で、VI472は口縁端面に斜格子目文、VI473・475・476は口縁端面に刻目を施す。VI474は口縁端部はナデによりわずかに凹む。VI476は口縁内面に凸帯を貼り付け、凸帯上に押圧を施す。口縁端部は上下方に肥厚し、口縁端面に沈線文3条を施す。VI477は無頸壺である。断面三角形の凸帯を貼り付け、波状文と竹管文を施す。VI478は沈線文4条を施す。



第288図 S D VI103出土遺物実測図(1)



第289図 S D VI103出土遺物実測図(2)

VI479・480は鉢形土器である。VI479は折り曲げ口縁で、VI480は口縁内面に断面三角形状の凸帯を貼り付ける。VI481は甕形土器、VI482は壺形土器の底部片。VI481は上げ底、VI482は平底となる。VI483は扁平片刃石斧で、基部は欠損する。刃部の鑄は明確である。緑色片岩製。VI484・485は柱状片刃石斧で、VI484は断面形態が方形状を呈する。変成岩製。

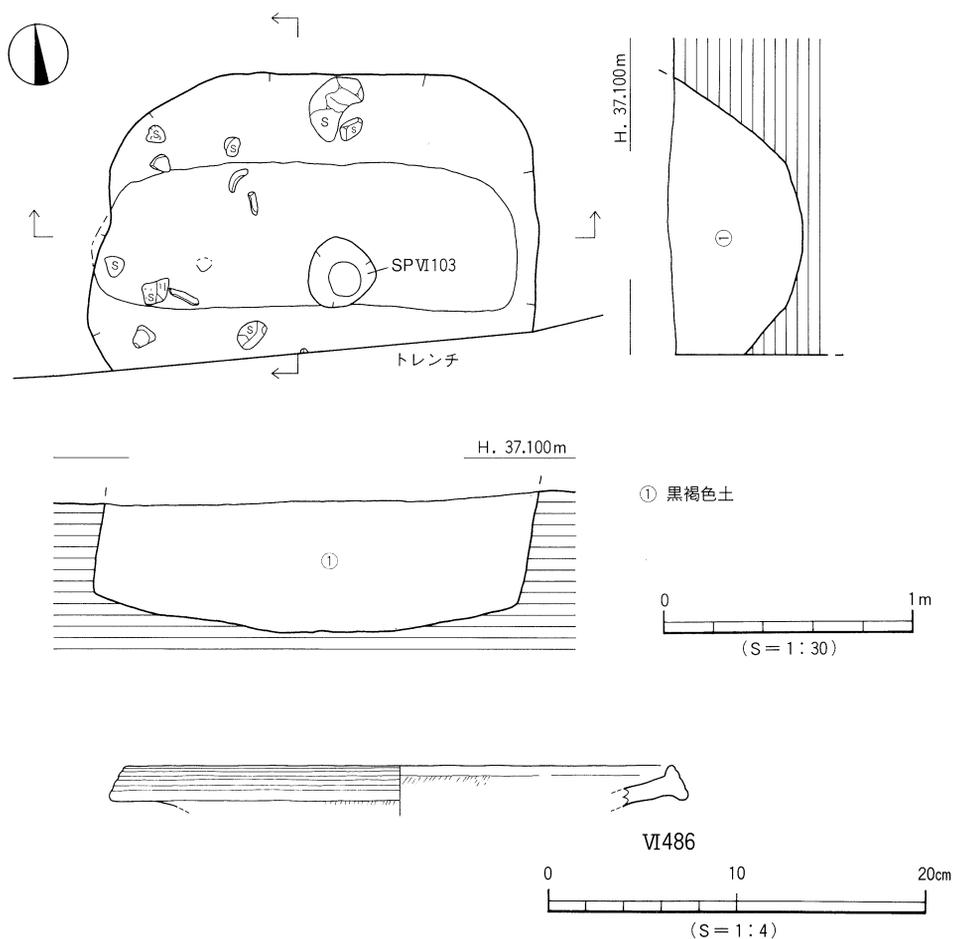
時期：出土した遺物には時期幅が認められる。S D VI104上面での検出であり、本来はS D VI104に伴う遺物も多数ある。①層出土の甕形土器（VI465）と壺形土器（VI473）が弥生時代中期中葉の特徴を示すことから、S D VI103は弥生時代中期中葉の溝とする。

### (3) 土 坑

VI区の調査では、第1地区にて土坑3基、第2地区にて土坑1基を検出した。

#### S K VI115 (第290図)

第1地区の南部、E3区に位置し、S K VI116 (土坑C) を切り、S B VI101に切られる。遺構中央部はS P VI103、南側はトレンチに切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、規模は東西長1.80m、南北検出長1.10m、深さ50cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、西壁のみ一部袋状となる。掘り方最終面は第Ⅶ②層になる。埋土は黒褐色土の単層である。基底面は中央部に向かい傾斜する（比高差10～16cm）。遺物は埋土中にて弥生土器片が数点出土した。図化しうるものを1点掲載した。



第290図 S K VI115測量図・出土遺物実測図

#### 出土遺物

VI486は壺形土器。口縁部は上下方に拡張し、口縁端面に凹線文3条を施す。

時期：出土した遺物の特徴から、S K VI115は弥生時代中期後半の遺構とする。

#### S K VI159 (第291図)

第1地区の南部、D 2区に位置する。遺構の東側は調査区外に続く。平面形態は不整の円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長30cm、南北長90cm、深さ35cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は黒褐色土単層で、炭化物が少量混入する。基底面からは径16cm、深さ5cmの小ピット1基（SP①）を検出したが、本土坑に伴うものかは不明である。遺物は埋土中から、弥生土器片が少量出土した。

#### 出土遺物

VI487は壺形土器。口縁部は短く外反し、口縁端面にはヘラ描き沈線文を施した後、刻目を施す。胴部上位に沈線文4条、下位に沈線文1条を施す。

時期：遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。埋土と出土した遺物の特徴から、S K VI159は弥生時代後期の遺構とする。

S K VI207 (第291図)

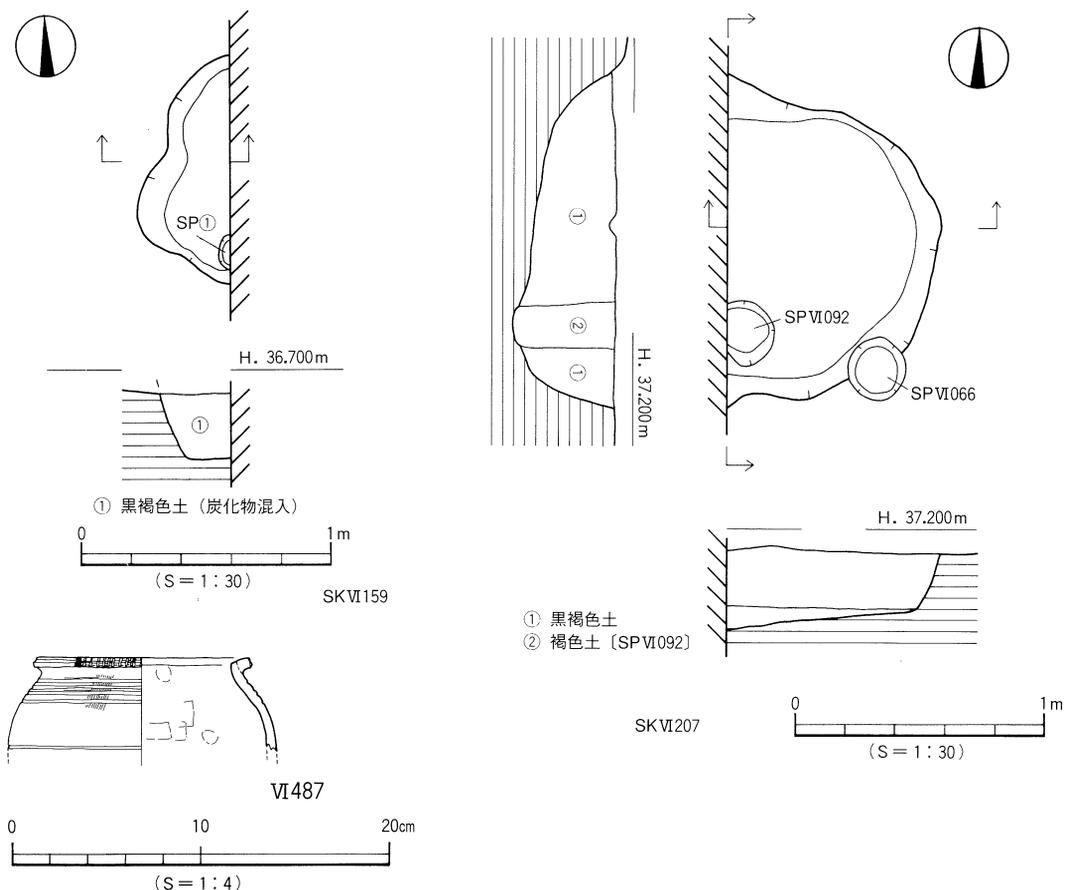
第2地区の北部、E・F11区に位置する。遺構の南側はS P VI066・VI092(褐色土)に切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ、規模は東西検出長0.90m、南北長1.30m、深さ40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色土の単層である。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。基底面は中央部に向かって傾斜する(比高差10cm)。遺物は埋土中にて、弥生土器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。S K VI207埋土がS K VI115と酷似することから、S K VI207は弥生時代中期後半の遺構とする。

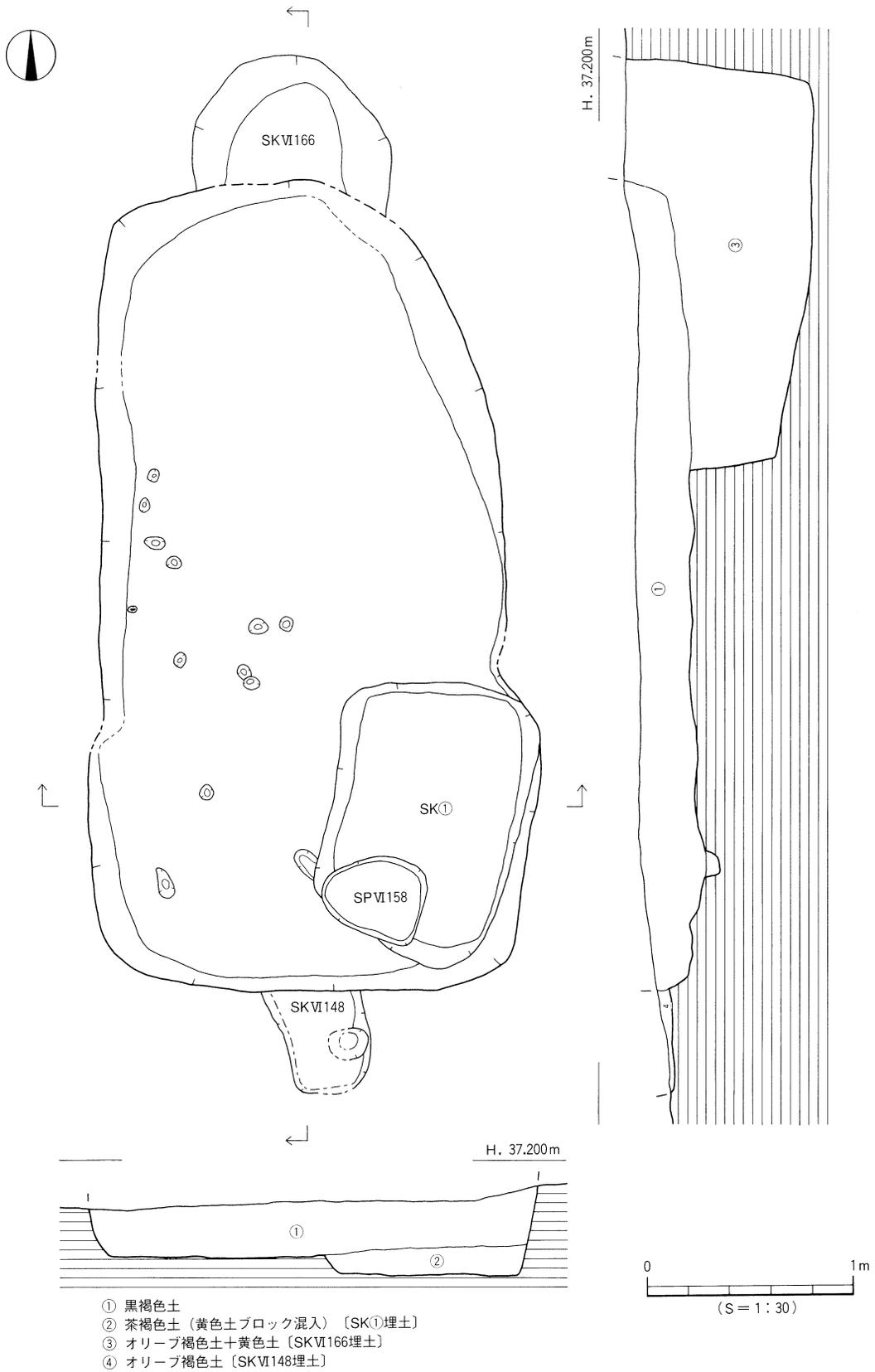
S K VI168 (第292図)

第1地区の中央部、F4・5区に位置する。遺構北壁はS K VI166(土坑C)、遺構南壁はS K VI148(土坑D)を切っている。遺構の南東部はS P VI158(褐色土)に切られている。平面形態は長楕円形を呈し、規模は長径3.90m、短径2.20m、深さ26cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は黒褐色土の単層である。基底面の南東部では、土坑S K ①を検出した。S K ①は不整の楕円形を呈し、規模は東西長0.96m、南北長1.40m、深さ14cmを測る。埋土は、黒褐色土に黄色土がブロック状に混入するものである。S K ①は、本土坑に伴うものかは不明である。基底面からは径10cm、深さ6cmの小ピットを多数検出した。ピット埋土は、土坑埋土と同様である。遺物は埋土中にて、弥生土器片が少量出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。第Ⅴ層と同様の埋土で埋没することから、S K VI168は弥生時代中～後期の遺構としておく。



第291図 S K VI159・207測量図及び出土遺物実測図



第292図 SK VI168測量図

(4) 第V層出土遺物 (第293～298図)

VI区では、第V層中より主に弥生時代中期中葉から後期の遺物が出土した。このうち、搬入品（讃岐地方）や外来系土器（吉備地方・山陰地方）の出土がある。また、分銅形土製品と紡錘車が1点ずつ出土している。このほか、猪の歯が出土している。

VI488～513は弥生時代中期中葉、VI514～528は弥生時代中期後半、VI529～538は弥生時代後期前半、VI539～570は弥生時代後期後半に時期比定される土製品である。VI571～573は時期の特定しえない土製品である。

1) 弥生時代中期中葉 (第293・294図)

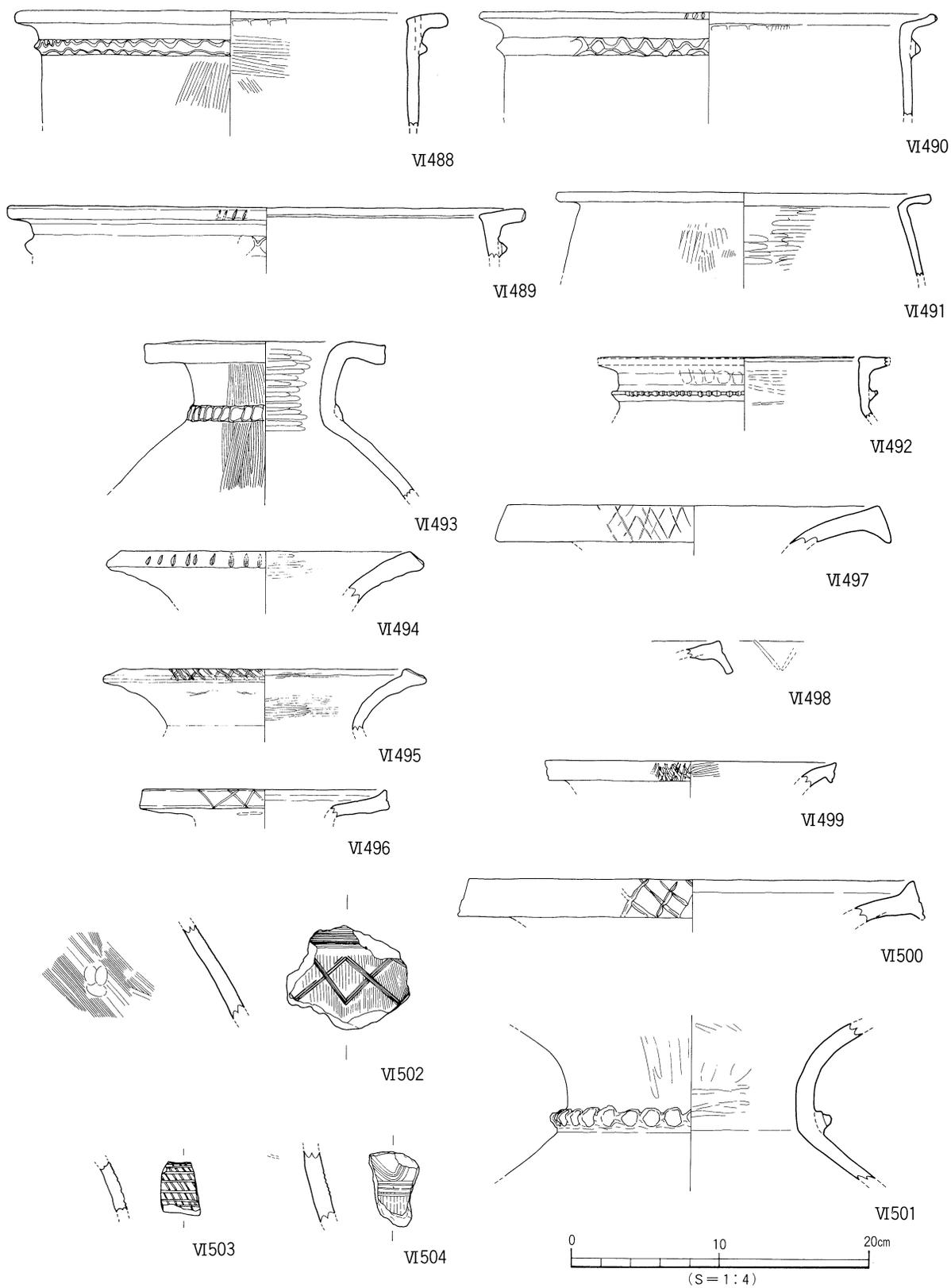
VI488～491は甕形土器である。VI488・489は粘土紐を貼り付け、VI490・491は折り曲げることにより口縁部を成形する。VI488～490は頸部に断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯上に指頭押圧を施す。VI491は内外面共にミガキ調整を施す。VI492～504は壺形土器である。VI492は頸部に断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。VI493は筒状の頸部から大きく外反する口縁部をもつ。頸部には凸帯を貼り付け、凸帯上には押圧を加える。VI494～500は口縁部片である。いずれも口縁部は上下方、又は下方に肥厚し、口縁端面には文様を施す。VI495・497・499・500は斜格子目文、VI496・498は山形文、VI494は刻目を施す。VI501は頸部に断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯上に指頭押圧を加える。VI502～504は胴部片である。VI502はクシ描き沈線文と斜格子目文、VI503は沈線文、VI504はクシ描き沈線文と波状文を施す。VI505・506は鉢形土器で、直口口縁を呈する。VI505は口縁上端面に円形浮文を貼り付ける。VI506は口縁内端部に、断面三角形の凸帯を貼り付ける。外面にはミガキ調整を施す。VI507～511は高坏形土器である。VI507～510は坏部片で、VI507・509・510は口縁外面に刻目を施す。VI511は脚部片である。長形状の透かしをもつ。脚端部に沈線文2条を施す。VI512・513は台形状土製品の底部である。厚みのある平底となる。

2) 弥生時代中期後半 (第295図)

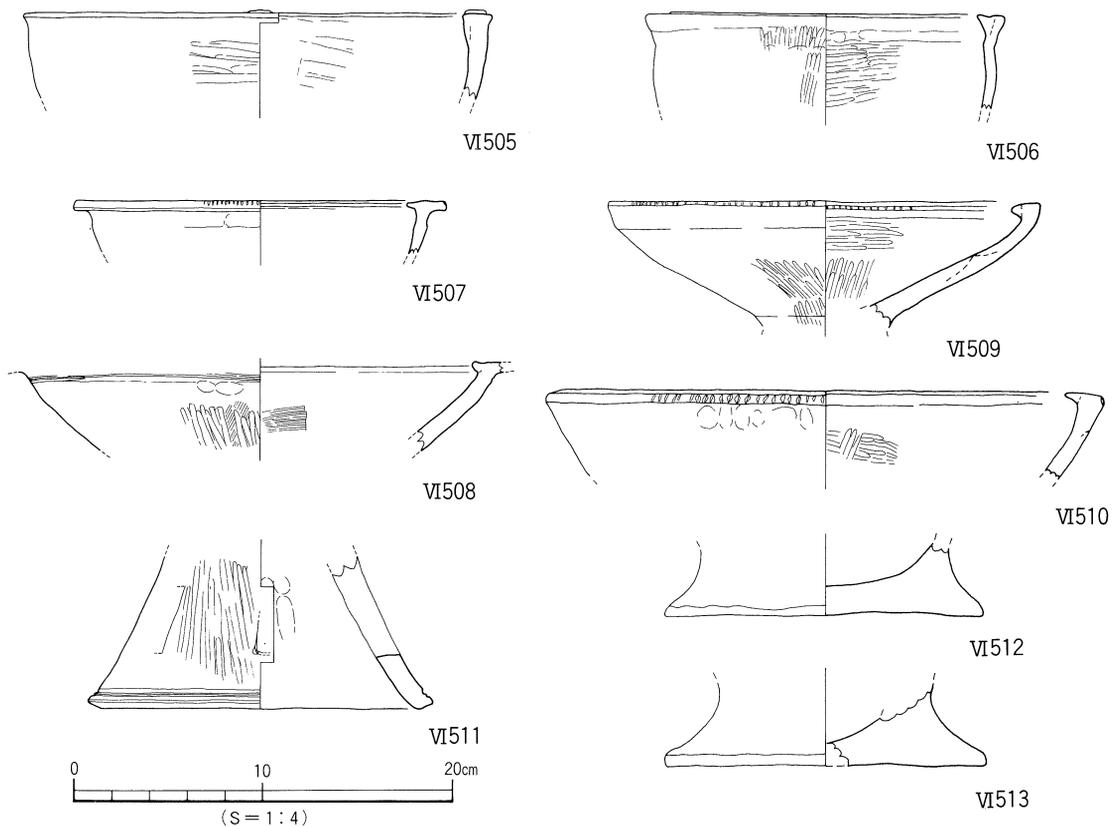
VI514～516・527・528は甕形土器である。VI514～516は口縁部片で、VI514・515は口縁端部をわずかに拡張し、VI516は上方につまみ上げ、口縁端面には凹線文を施す。VI527・528は底部である。くびれの上げ底を呈し、外面にミガキ調整を施す。VI517～520は壺形土器で、いずれも口縁部を上下方に拡張し、口縁端面には2～3条の凹線文を施す。VI521～526は高坏形土器である。VI521～523は坏部片で、VI521・523は口縁部が内傾し、VI522は直立気味に立ち上がる。口縁部には凹線文を3～7条施す。VI524～526は脚部片である。VI524・525は柱部で、VI524は凹線文7条、VI525はヘラ描き沈線文と矢羽根透かし（未完通）を施す。VI526は脚端部に凹線文1条と柱部に矢羽根透かし（未完通）を施す。形態は吉備地方のものに類似する（外来系）。

3) 弥生時代後期前半 (第296図、図版79)

VI529～531は甕形土器で、口縁部は緩やかに外反する。VI529は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面には凹線文を2条施す。VI530は強いヨコナデにより口縁端部はやや凹み、VI531は「コ」字状をなす。VI532～536は壺形土器である。VI532～535は口縁部片で、VI532・534は口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文を施す。VI533は口縁部が大きく外反し、口縁端部は強いヨコナデによりわずかに凹む。VI535は口縁部が直立気味に立ち上がり、ヘラ描きによる山形文を施す。VI536は胴部片で、沈線文と刺突文を施す。VI537・538は高坏形土器で、VI537は口縁端部は外方に肥厚する。VI538は口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。



第293図 第V層出土遺物実測図(1)

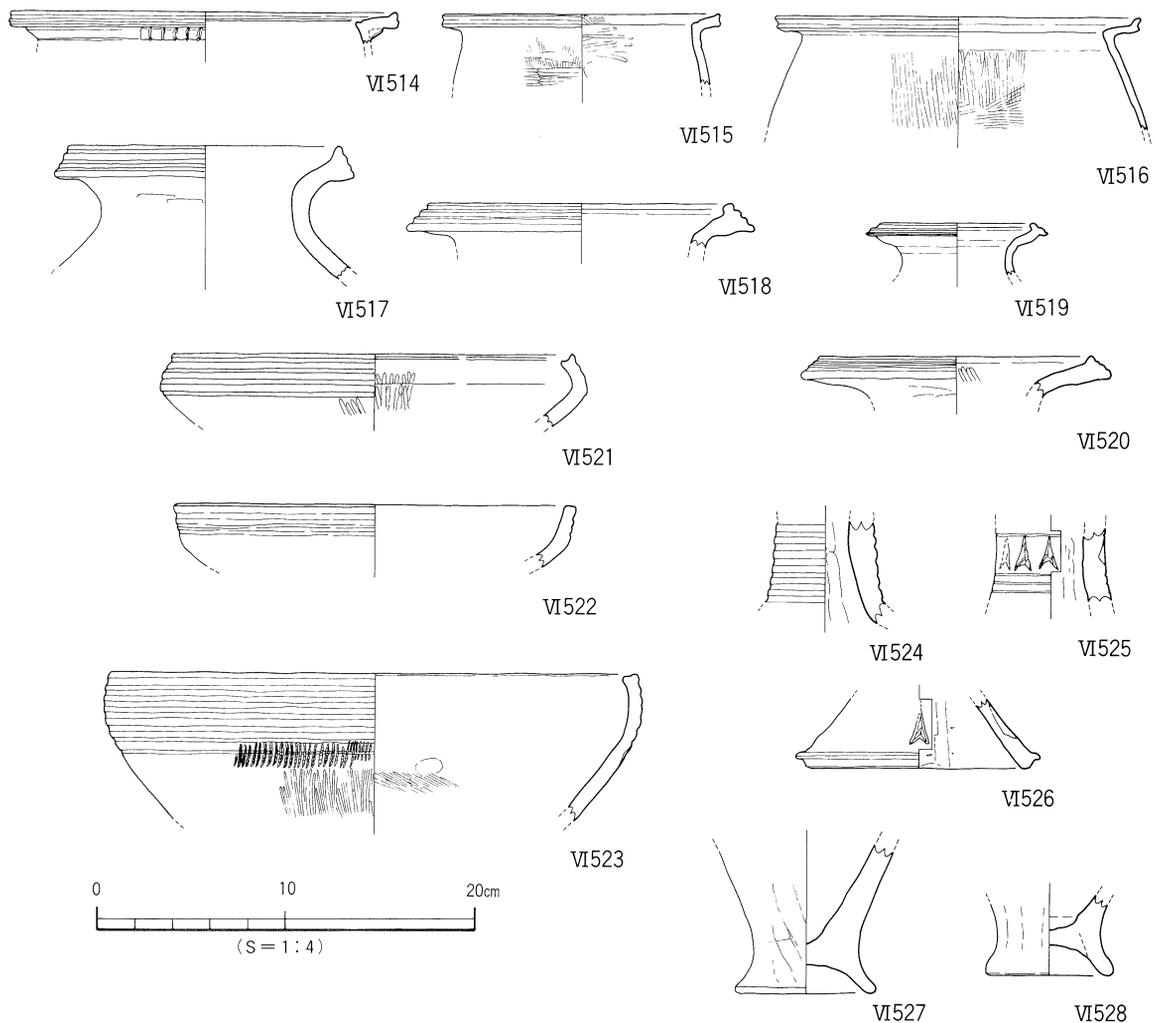


第294図 第V層出土遺物実測図(2)

4) 弥生時代後期後半 (第297・298図、図版79)

VI539～542は甕形土器である。VI539～541は口縁部が「く」の字状を呈し、VI539・540は口縁部内面に明瞭な稜をもつ。VI542は口縁部が上外方に直線的に延びる。口縁端部は上方につまみ上げる。VI543～555は壺形土器である。VI543は細長頸壺の肩部片で、外面に沈線文を施す。胎土や形状より讃岐地方からの搬入品とみられる。VI544～553は複合口縁壺で、VI544・545は口縁拡張部が内傾し、無文である。VI546～548は口縁接合部が曖昧な面となる。VI546は口縁拡張部と頸部とにヘラ描き沈線文を施す。VI547はクシ描き波状文を施す。VI548は形態の特徴より、山陰地方のものに類似する。VI551・553は口縁接合部がタガ状をなす。VI552は口縁部外面に沈線文、波状文と半截竹管文を施す。VI553は沈線文と山形文を施す。VI554は長頸壺で、鋸歯文と細沈線文とが組み合う。VI555は渦巻き状の浮文に半截竹管文を施す。

VI556は鉢形土器である。直口口縁を呈し、口縁端部は尖る。VI557～559は高坏形土器である。VI557は大きく外反する口縁部で、坏部と口縁部の境界に稜をもつ。口縁端部は丸い。VI558・559は脚部片である。VI558は裾端部に半截竹管文(S字状)を施す。VI559は柱部に径0.8cm大の円孔を穿つ。VI560～565は器台形土器である。VI560・561は口縁部片で、VI560は口縁端面に沈線文3条、VI561は波状文を施す。VI562は頸部片で、沈線文を施す。VI563・564は柱部である。VI563は径1.7cm、VI564は径1.3cmの円孔が2段穿たれる。VI565は脚部片である。脚端面はヨコナデによりわずかに凹む。VI566・567は支脚形土器である。中空で、内外面共に指頭痕が残る。VI568・569は甕形土器の底部である。VI568は平底を呈し、外面にタタキ痕がみられる。VI569は平底を呈し、外面にミガキ調整を施す。



第295図 第V層出土遺物実測図(3)

VI570は壺形土器の底部で、平底となる。底面に「×」印の記号あり。

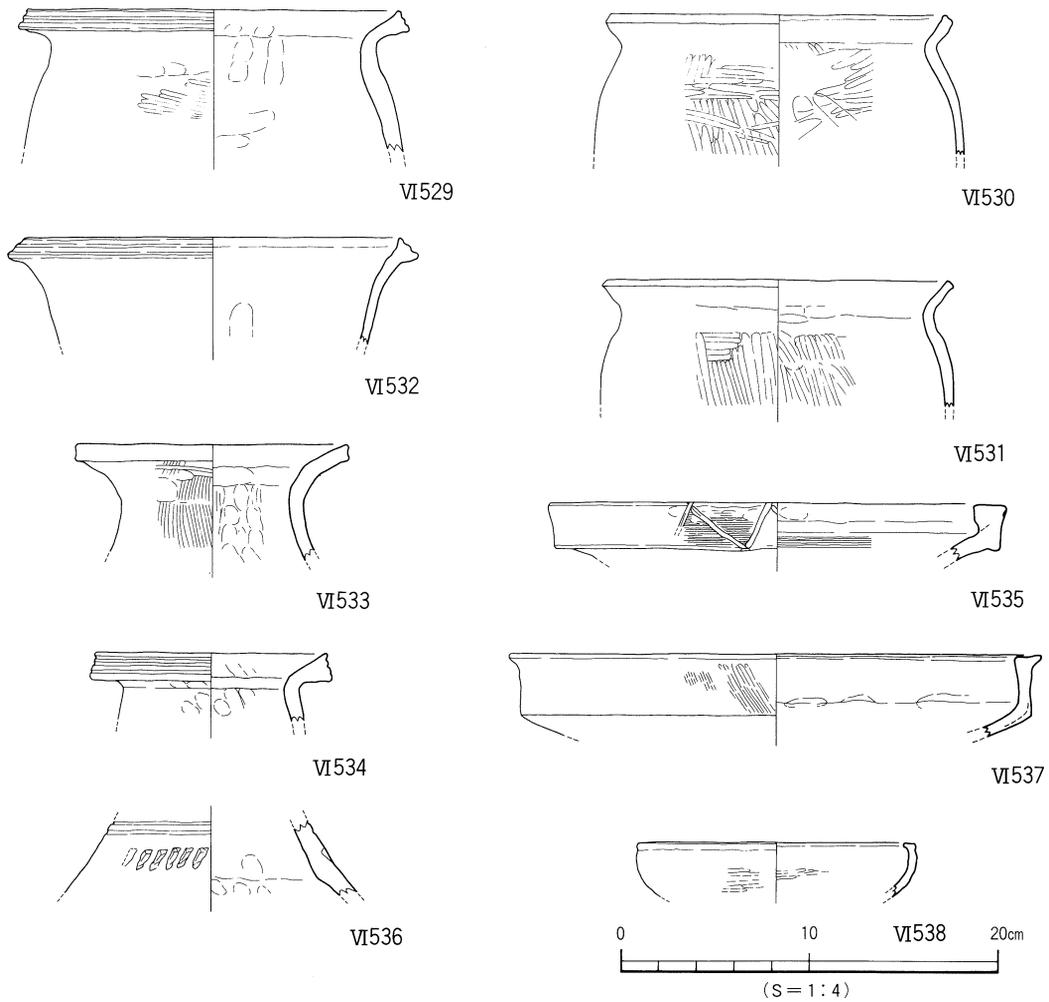
5) 時期不明 (第298図、図版79)

VI571はミニチュア土器で、鉢形土器の形態をもつ。VI572は紡錘車である。径0.6cmの円孔を焼成前に穿つ。VI573は分銅形土製品である。裏面に刺突文3ヶ、頭頂部に2ヶを施し、表面に細沈線文を施す。

(5) 第V・VI層出土遺物 (第299・300図、図版79)

このほか、発掘調査時に第V層もしくは第VI層で遺物を取り上げたが、明確な時期判断をしかねる石製品や鉄製品があり、ここでは第V・VI層出土遺物としてこれらの遺物を掲載している。

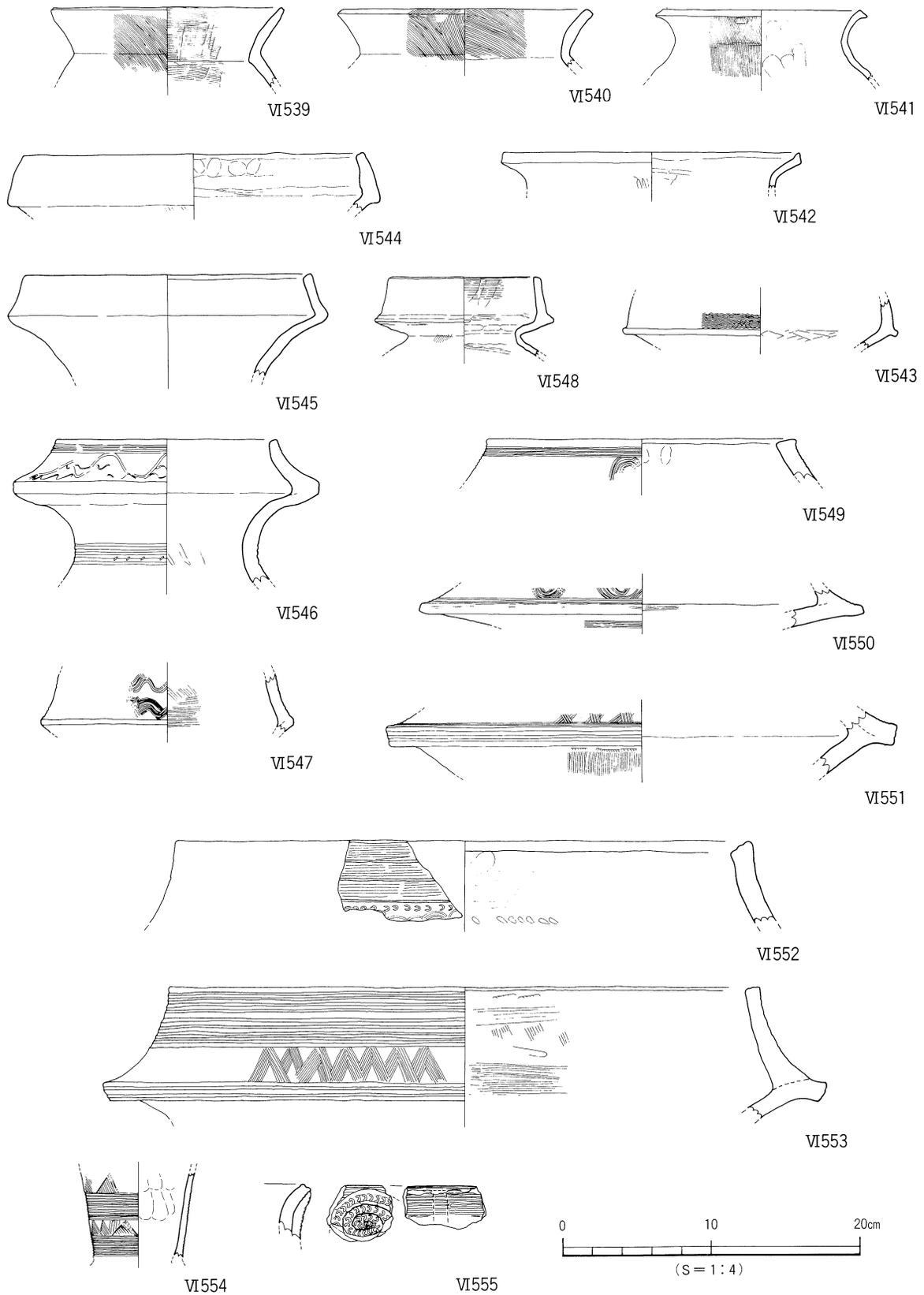
VI574~581は石鏃である。VI574は平基無茎石鏃で、平面形は二等辺三角形を呈する。赤色チャート製。VI575~581は凹基無茎石鏃である。VI575・578は平面形が三角形、VI576・577・579・580は二等辺三角形を呈する。サヌカイト製。VI581は丸味のある二等辺三角形形状となる。赤色チャート製。VI582・583は石庖丁で、VI582は両面を丁寧に研磨する。刃部の鑄は明確である。VI583は刃部の鑄は甘い。緑色片岩製。



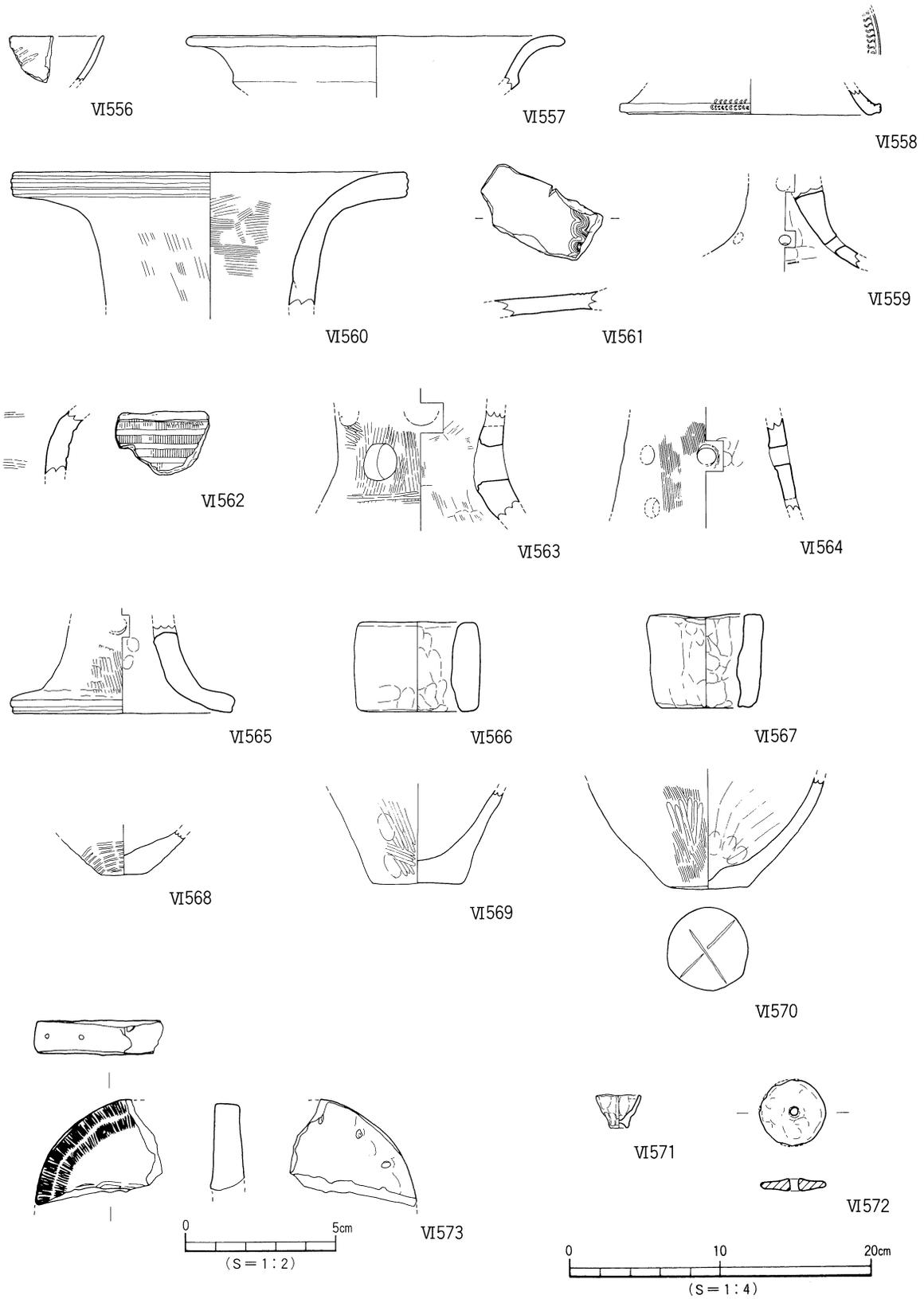
第296図 第V層出土遺物実測図(4)

VI584は扁平片刃石斧である。平面形態は、基部から刃部にかけてやや幅が広くなる。両面は研磨され、刃部は明確である。VI585は伐採斧である。基部は欠損する。断面形態は楕円形を呈する。緑色片岩製。VI586・587は砥石である。VI588・589は鉄器である。VI588は器種不明品で、鑄造品の破損品の可能性が高い。X線写真では、上辺部以外は破損している。器表面には、石を取り組んだ錆が厚く付着する。VI589は板状鉄器とみられるもので、現存長7.3～7.4cm、刃部幅2.0cmである。周辺部にはコブ状の錆が厚く付着する。中央部付近は錆が薄く、厚さ2.0～2.3cmを測る。

VI 区

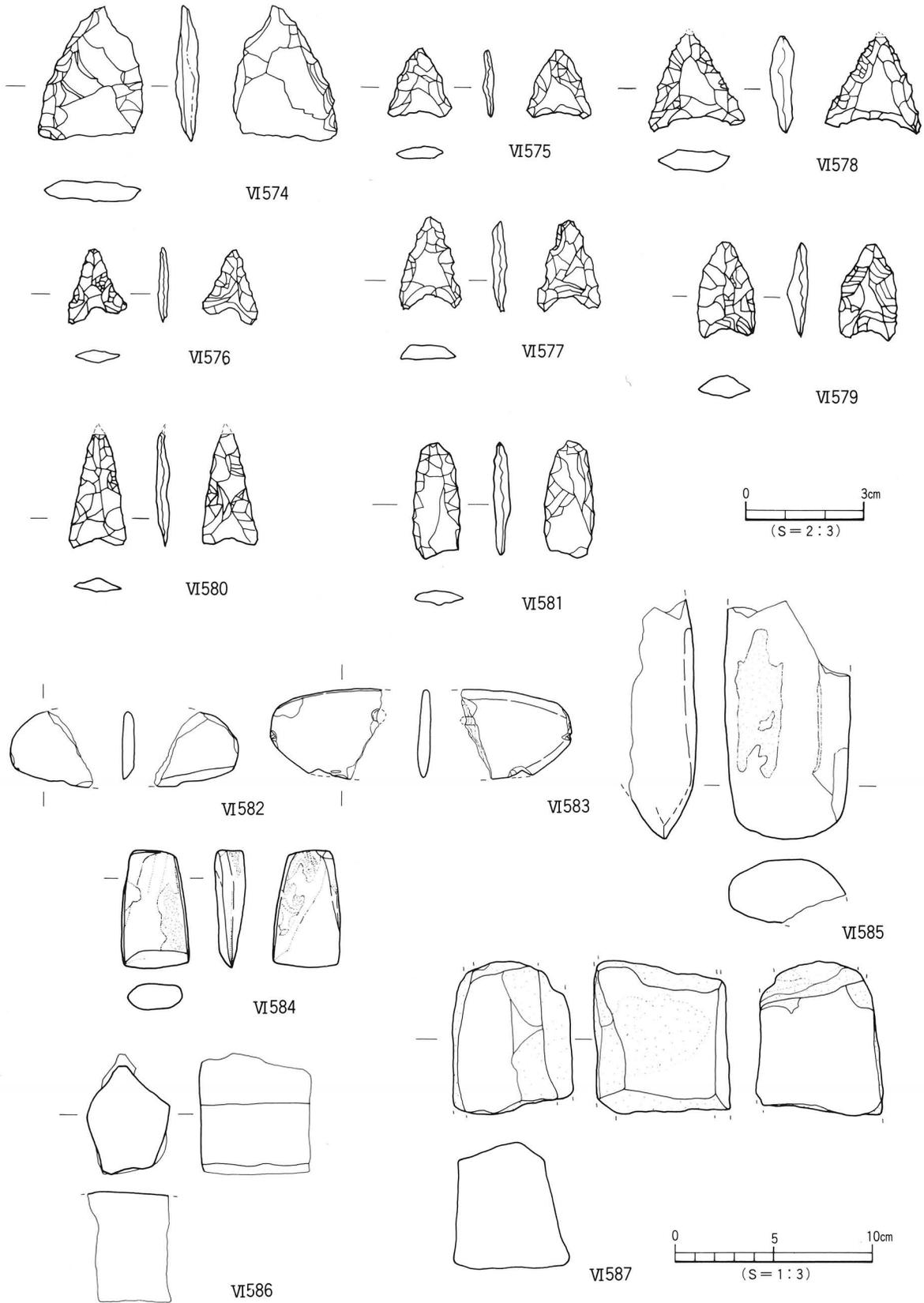


第297图 第V層出土遺物実測図(5)

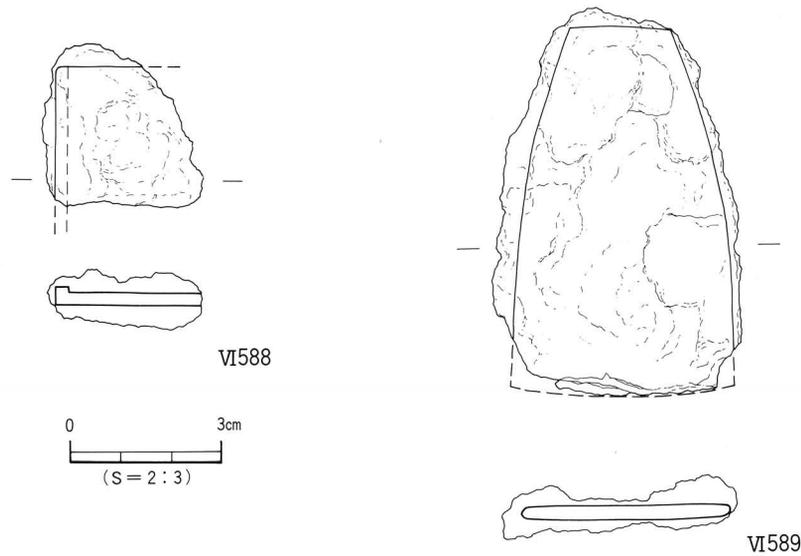


第298図 第V層出土遺物実測図(6)

VI 区



第299图 第V·VI層出土遺物実測図(1)



第300図 第V・VI層出土遺物実測図(2)

## 5. 古墳時代～古代の遺構と遺物

VI区で検出した古墳時代の遺構には溝1条と土坑3基、古代の遺構には溝1条と土坑7基がある。内訳は第1地区から土坑9基、第2地区から溝1条、第3地区からは溝1条と土坑1基である。

### (1) 溝

VI区では、第2地区と第3地区からそれぞれ溝1条を検出した。

#### SDVI202 (第195図)

第2地区の南部、D・E9区で検出した東西方向に延びる溝である。溝の上面は第IV層が覆う。溝の西側は近現代坑に切られる。規模は検出長3.30m、幅1.10m、深さ4cmを測る。溝基底面は西から東に緩傾斜する(比高差6cm)。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰色の砂礫である。溝内からの遺物の出土はない。

**時期：**溝内からの遺物の出土はなく、明確な時期判断はしかねるが、第IV層が覆うことから、SDVI202は古墳時代の遺構とする。

#### SDVI303 (第196図)

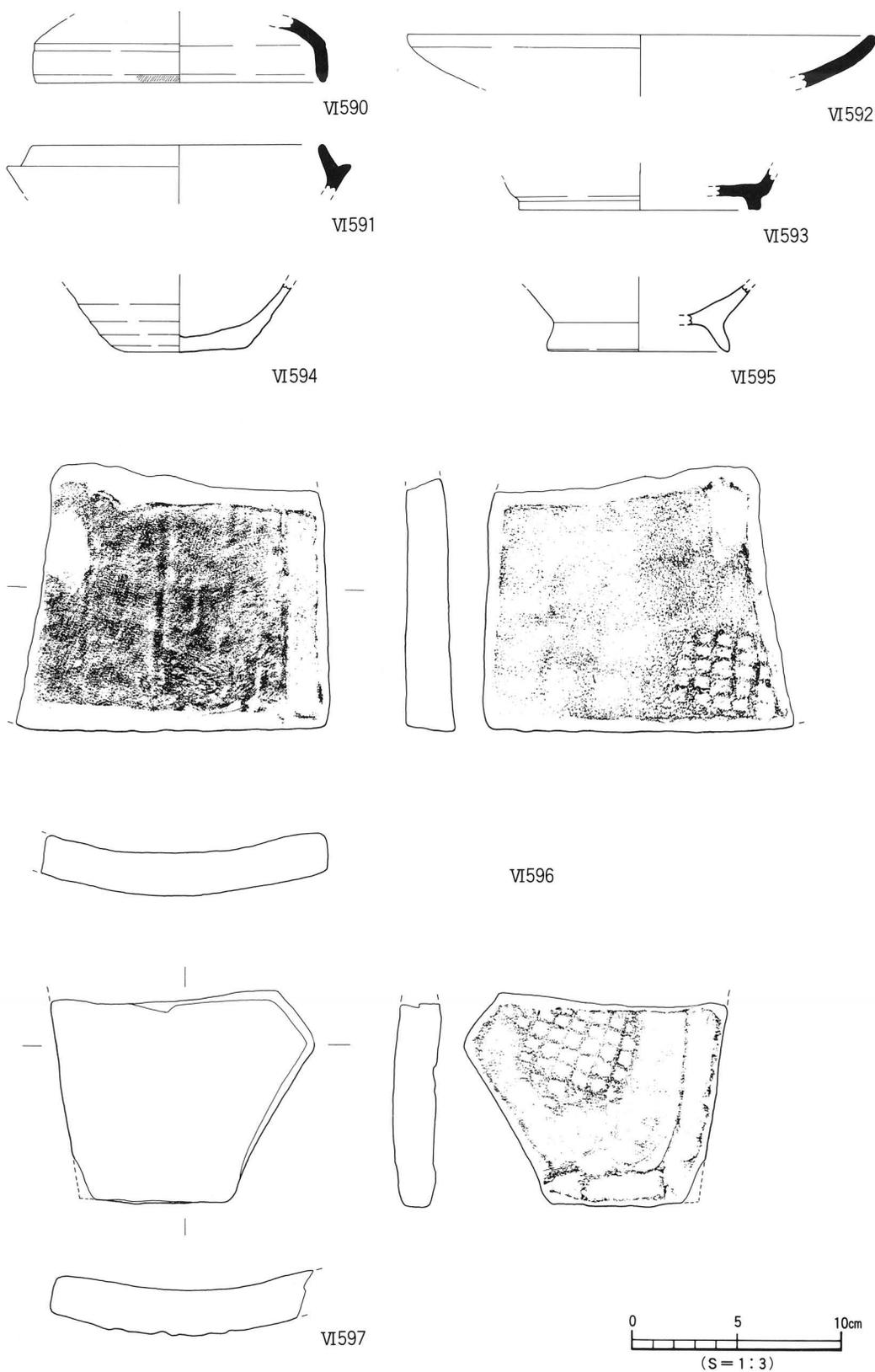
第3地区の南部、D13～E14で検出した東西方向に延びる溝である。溝の南側はSDVI302(中世)、西側は近現代坑にそれぞれ切られる。規模は検出長5.60m、検出幅2.50m、深さ36cmを測る。溝基底面は東から西に傾斜する(比高差23cm)。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黄褐色土の単層である。

遺物は埋土中から土師器片と須恵器片、瓦片2点が出土した。

#### 出土遺物 (第301図、図版80)

VI590～593は須恵器である。VI590は坏蓋で、天井部と口縁部とを分ける稜は凹線による。口縁端部は内傾する面をなす。口唇部外面に刻目を施す。VI591は坏身で、たちあがりは内傾する。受部は短く上外方に延びる。VI592は皿である。口縁部はやや内湾し、口縁端部は丸い。VI593は有台坏である。

VI 区



第301図 S D VI303出土遺物実測図

高台は体底部境よりやや内側に付く。VI594・595は土師器の坏である。VI594は底部切り離しが回転ヘラ切りである。VI595は高台付の坏である。高台は「ハ」字状に開き、端部は丸い。VI596・597は瓦である。いずれも平瓦で、凸面に格子目叩き、凹面はVI596に布目痕が残る。

時期：出土した遺物の特徴から、S D VI303は8世紀代の溝とする。

(2) 土 坑

S K VI112 (第302図)

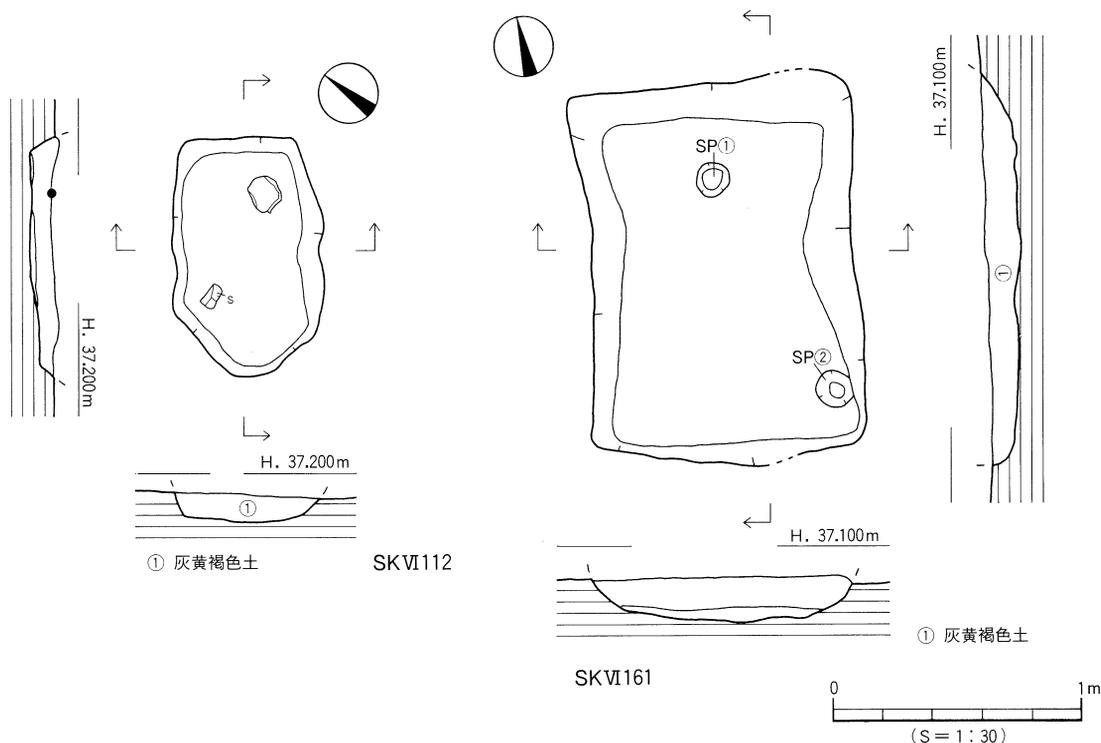
第1地区の中央部、E 5区に位置する。遺構上面は第IV層が覆う。平面形態は不整の長方形を呈し、規模は東西長0.59m、南北長0.93m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土の単層である。掘り方最終面は第VII層である。基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中から、須恵器片と径8cmの河原石が1点出土したが、図化しうるものはない。

時期：出土した遺物が僅少で、時期特定はしかなる。第IV層が覆うことから、S K VI112は古墳時代の遺構としておく。

S K VI161 (第302図)

第1地区の中央部、D 5・6区に位置する。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ1.50m、幅1.00m、深さ15cmを測る。断面形態は皿状を呈する。掘り方最終面は第VII層になる。埋土は灰黄褐色土の単層である。基底面からは径14cm、深さ5cmの小ピット2基（SP①・②）を検出した。ピット埋土は土坑埋土と類似する。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、明確な時期判断はしかなる。第IV層が覆うことから、S K VI161は古墳時代の遺構としておく。



第302図 S K VI112・161測量図

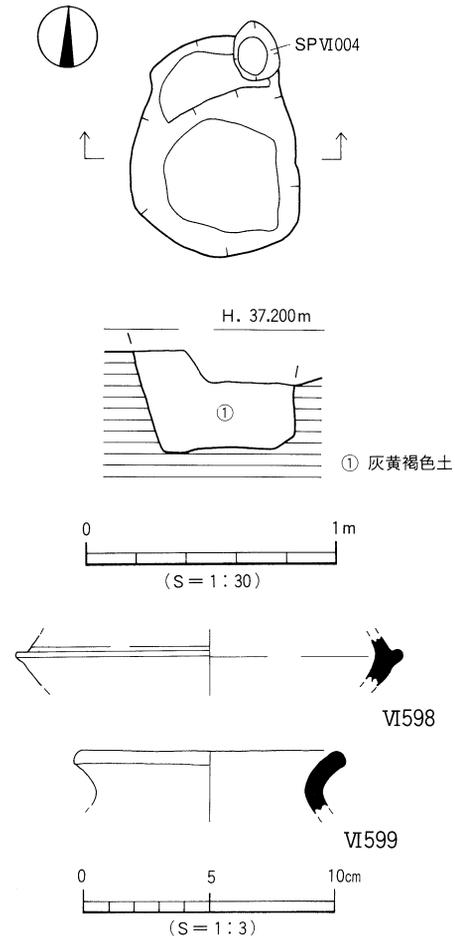
## S K VI307 (第303図)

第3地区の北部、E15区に位置する。遺構上面は第Ⅳ層が覆い、北東部はS P VI004(中世)に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径88cm、短径66cm、深さ41cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は灰黄褐色土の単層である。基底面はほぼ平坦であるが、北側に幅30cmの平坦面をもつ(比高差10cm)。遺物は埋土中から、土師器片と須恵器片が数点出土した。

## 出土遺物

VI598は須恵器坏身である。たちあがりは欠損する。受部は短く上外方にのびる。VI599は壺の口縁部。口縁端部は「コ」字状となる。

時期：出土した遺物の特徴と第Ⅳ層が覆うことから、S K VI307は古墳時代後期の遺構とする。



第303図 S K VI307測量図・出土遺物実測図

## S K VI107 (第304図)

第1地区の中央部、D6区に位置する。平面形態は不整の楕円形を呈し、規模は長径2.18m、短径1.51m、深さ41cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は褐色土の単層である。基底面はほぼ平坦で、南西部には、幅18cm、高さ12cmのテラス状の平坦面をもつ。

遺物は埋土中から、須恵器の小片と径10cmの河原石1点が出土したが、図化するものはない。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。出土遺物の特徴と、土坑埋土が第Ⅲ層と類似することなどから、S K VI107は古代の遺構としておく。

## S K VI110 (第304図)

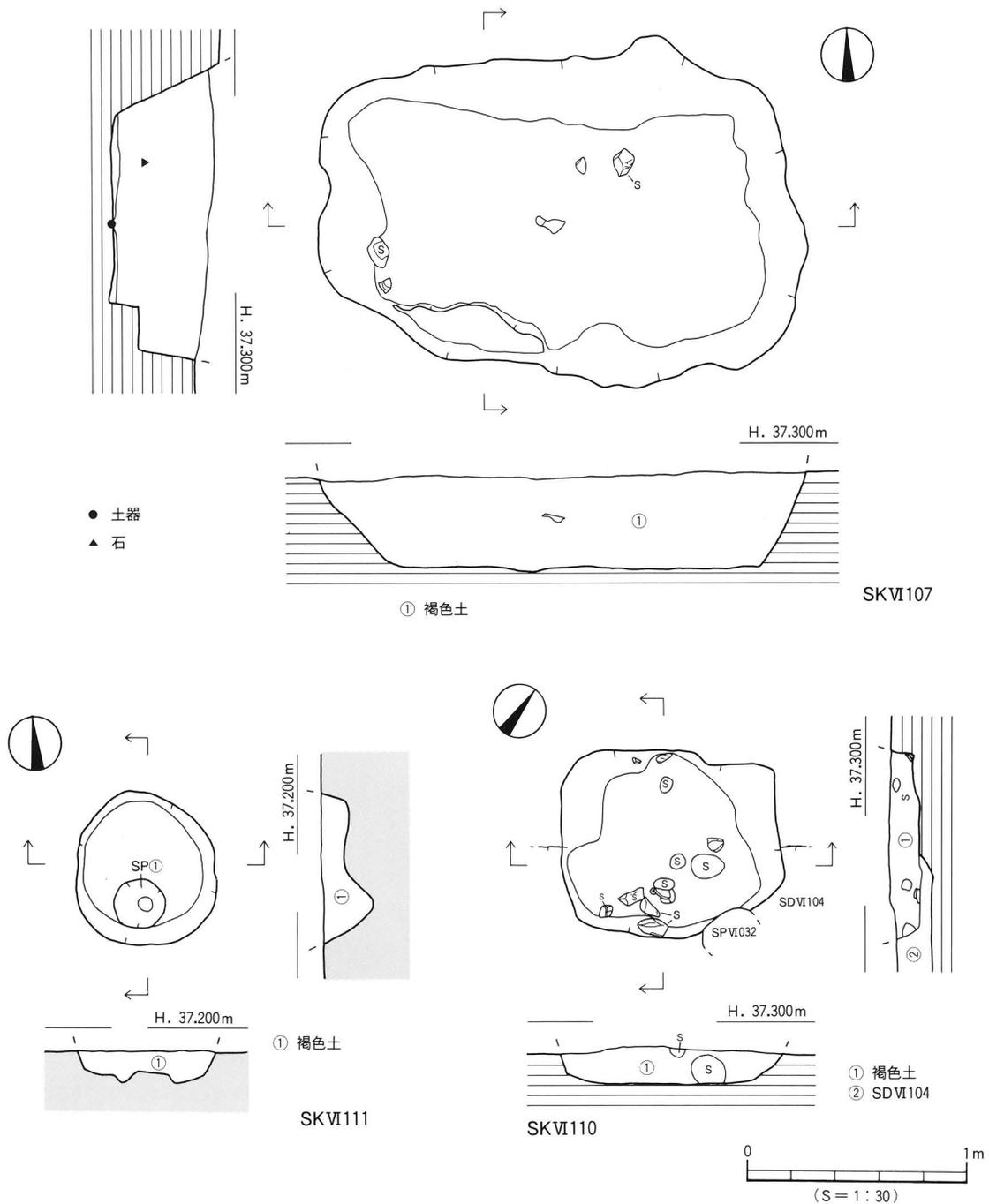
第1地区の北部、D8区に位置し、S D VI104を切る。遺構の上面は第Ⅲ層が覆う。平面形態は方形を呈し、規模は長さ98cm、幅83cm、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は褐色土の単層である。基底面はほぼ平坦である。土坑内からは土師器片と、径10cm大の石が多数出土したが、図化するものはない。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はしかねる。第Ⅲ層が覆うことから、S K VI110は古代の遺構としておく。

SKVI111 (第304図)

第1地区の中央部、D6区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径62～67cm、深さ13cmを測る。断面形態は皿状を呈する。掘り方最終面は第Ⅷ層の砂礫層に達する。埋土は褐色土の単層である。基底面からは径22cm、深さ14cmのピット1基（SP①）を検出したが、本土坑に伴うものかは不明である。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、明確な時期判断は困難である。埋土がSKVI107やSKVI110に類似することから、SKVI111は古代の遺構としておく。

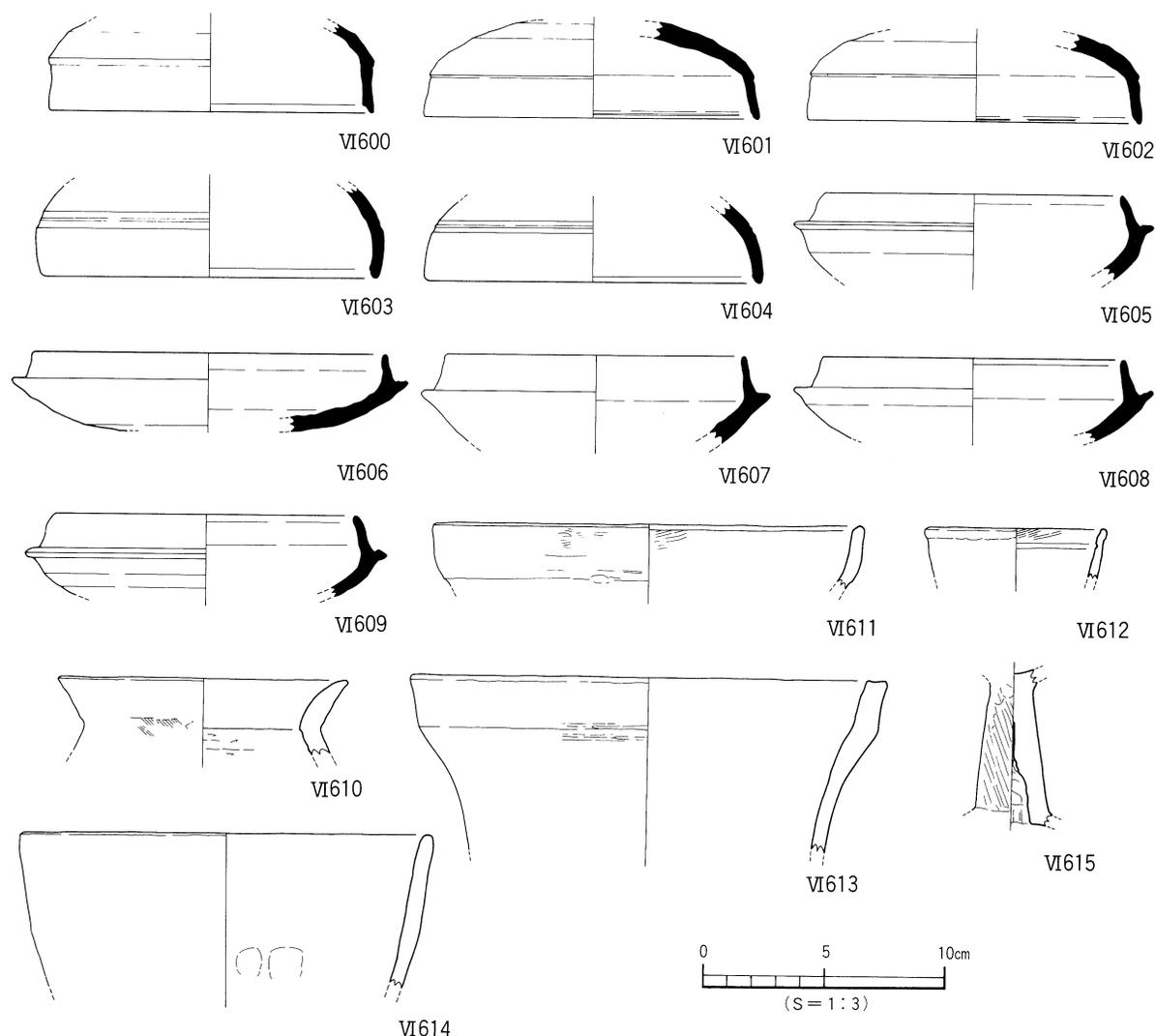


第304図 SKVI107・110・111測量図

## (3) 第IV層出土遺物 (第305図)

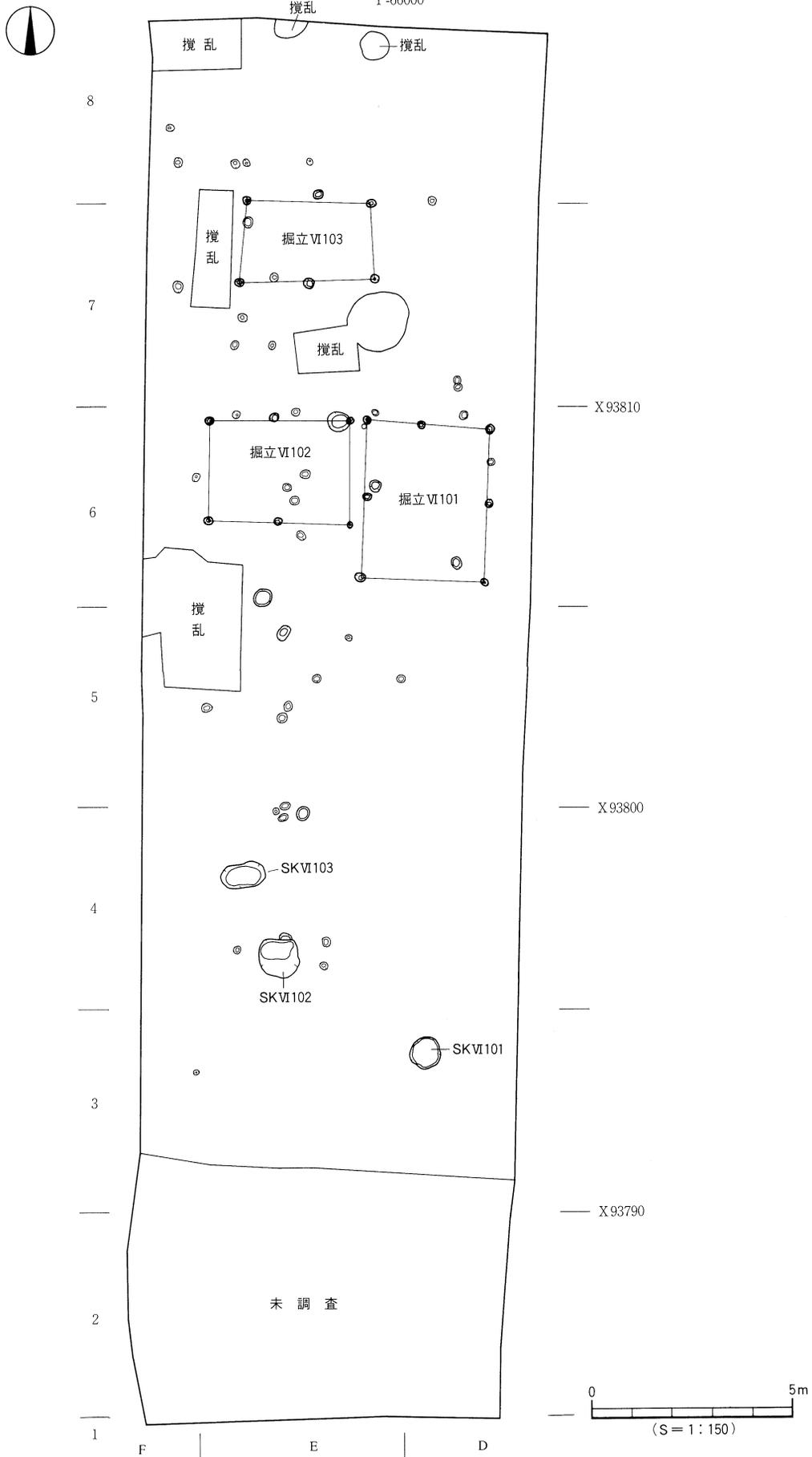
VI区の調査では第IV層中より、古墳時代に時期比定される遺物が出土した。

VI600~609は須恵器である。VI600~604は坏蓋で、VI600~602は天井部と口縁部の境に断面三角形の稜をもつ。VI603・604は凹線により表現される。VI605~609は坏身である。たちあがりは内傾し、端部は丸い。VI609は他のものに比べ、たちあがりやや短かく、坏部が浅い。いずれも受部は上外方に延びる。VI610~615は土師器である。VI610・611は甕形土器で、VI610は口縁部内面に稜をもち外反する。VI611は内湾してたちあがる口縁部をもち、口縁端部は内傾する。VI612~614は鉢形土器である。いずれも直口口縁を呈し、口縁端部は丸い。VI612は口縁部内面に沈線状の凹みが巡る。VI615は高坏形土器である。柱部は三角錐状を呈する。



第305図 第IV層出土遺物実測図

中世の遺構と遺物



第306図 VI区〔第1地区〕遺構配置図（第V層上面）

## 6. 中世の遺構と遺物

VI区で検出した中世の遺構は掘立柱建物址3棟、溝5条、土坑8基である。内訳は第1地区で掘立柱建物址3棟と土坑3基、第2地区で溝3条、第3地区で溝2条と土坑5基である。いずれも第V層上面での検出である(第306図、図版71)。

### (1) 掘立柱建物址

#### 掘立VI101(第307図)

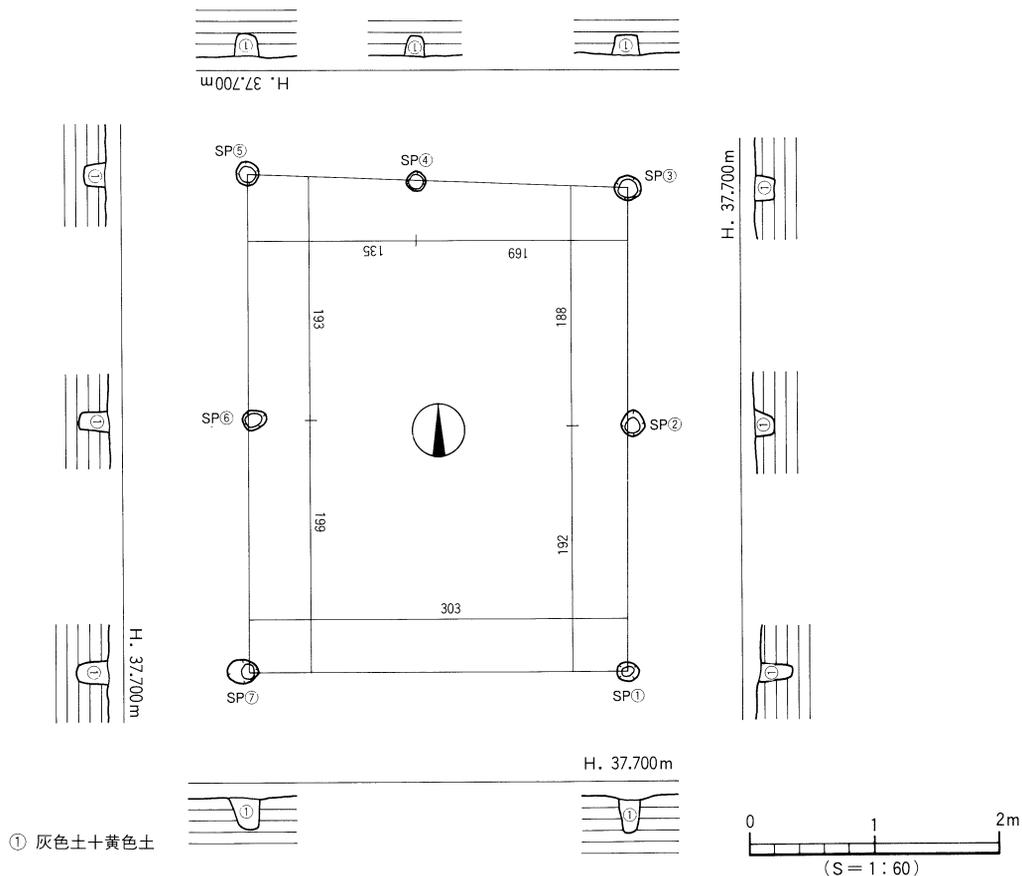
第1地区の中央部、D・E6区に位置し、第ⅡB-②層が覆う。2間×2間の南北棟で、建物方位はほぼ真北方向にとる。建物規模は桁行長3.92m、梁行長3.04m、柱穴間隔は桁間1.9m、梁間1.3~1.7mを測る。各柱穴は円~楕円形を呈し、規模は径16~20cm、深さ16~26cmを測る。柱穴埋土は灰色土に黄色土が混入する。柱穴内からの遺物の出土はない。

時期：柱穴内からの遺物の出土はなく、明確な時期判断はしかねる。第ⅡB-②層が覆うことから、掘立VI101は13世紀代の建物址とする。

#### 掘立VI102(第308図)

第1地区の中央部、E6区に位置し、第ⅡB-②層が覆う。1間×2間の東西棟で、建物方位はほぼ真北方向にとる。建物規模は桁行長3.34m、梁行長2.01m、柱穴間隔は桁間1.6~1.7mを測る。各柱穴は円~楕円形を呈し、規模は14~24cm、深さ10~28cmを測る。柱穴埋土は灰色土の単層である。柱穴内からの遺物の出土はない。

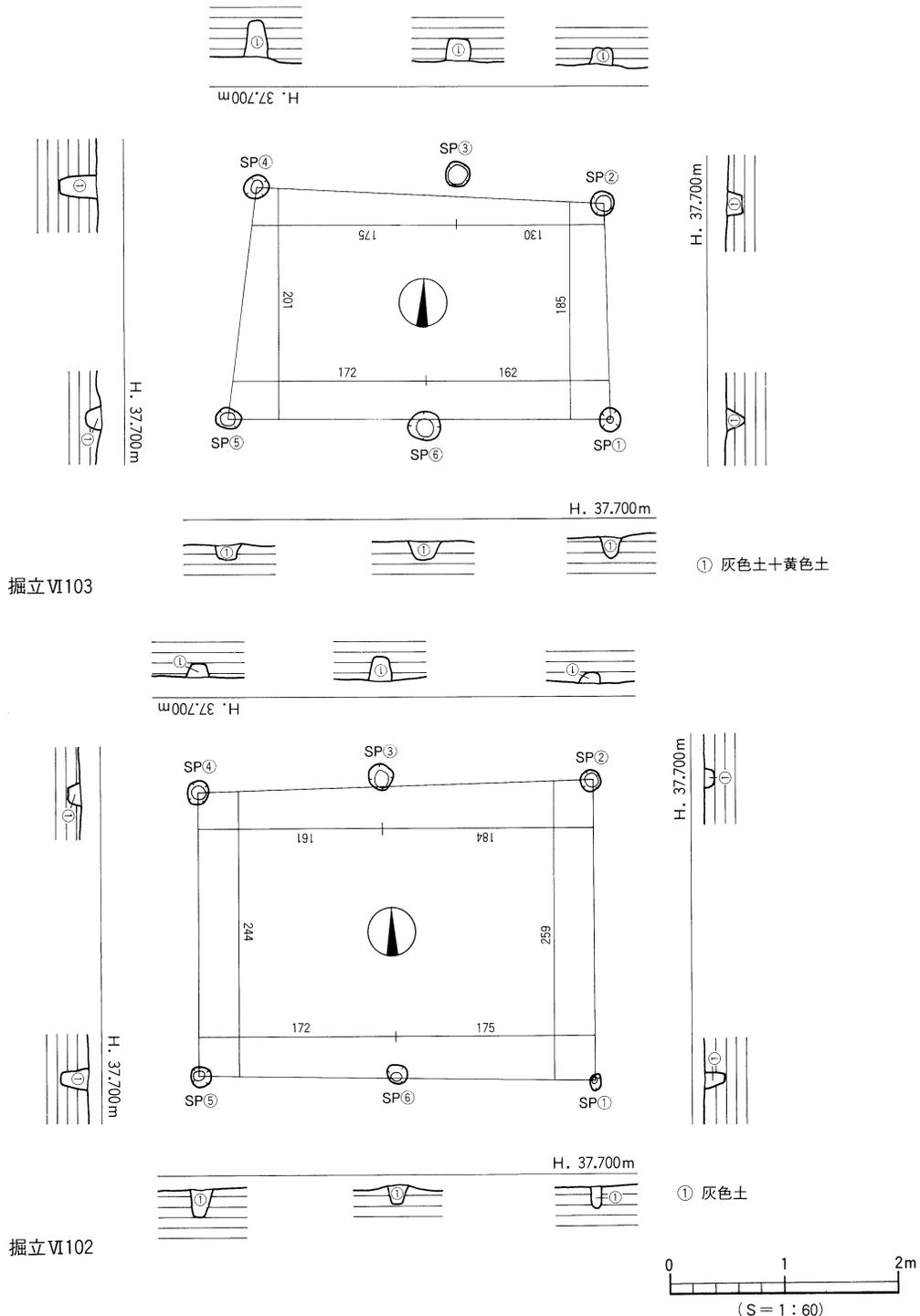
時期：第ⅡB-②層が覆うことから、掘立VI102は13世紀代の建物址とする。



掘立VI103 (第308図)

第1地区の北部、E7区に位置し、第ⅡB-②層が覆う。1間×2間の東西棟で、ほぼ真北方向に建物方位をとる。建物規模は桁行長3.47m、梁行長2.59m、柱穴間隔は桁間1.7mを測る。各柱穴は円～楕円形を呈し、規模は径16～24cm、深さ12～32cmを測る。柱穴埋土は灰色土に、黄色土が混入する。柱穴内からの遺物の出土はない。

時期：第ⅡB-②層が覆うことから、掘立VI103は13世紀代の建物址とする。



第308図 掘立VI102・103測量図

## (2) 溝

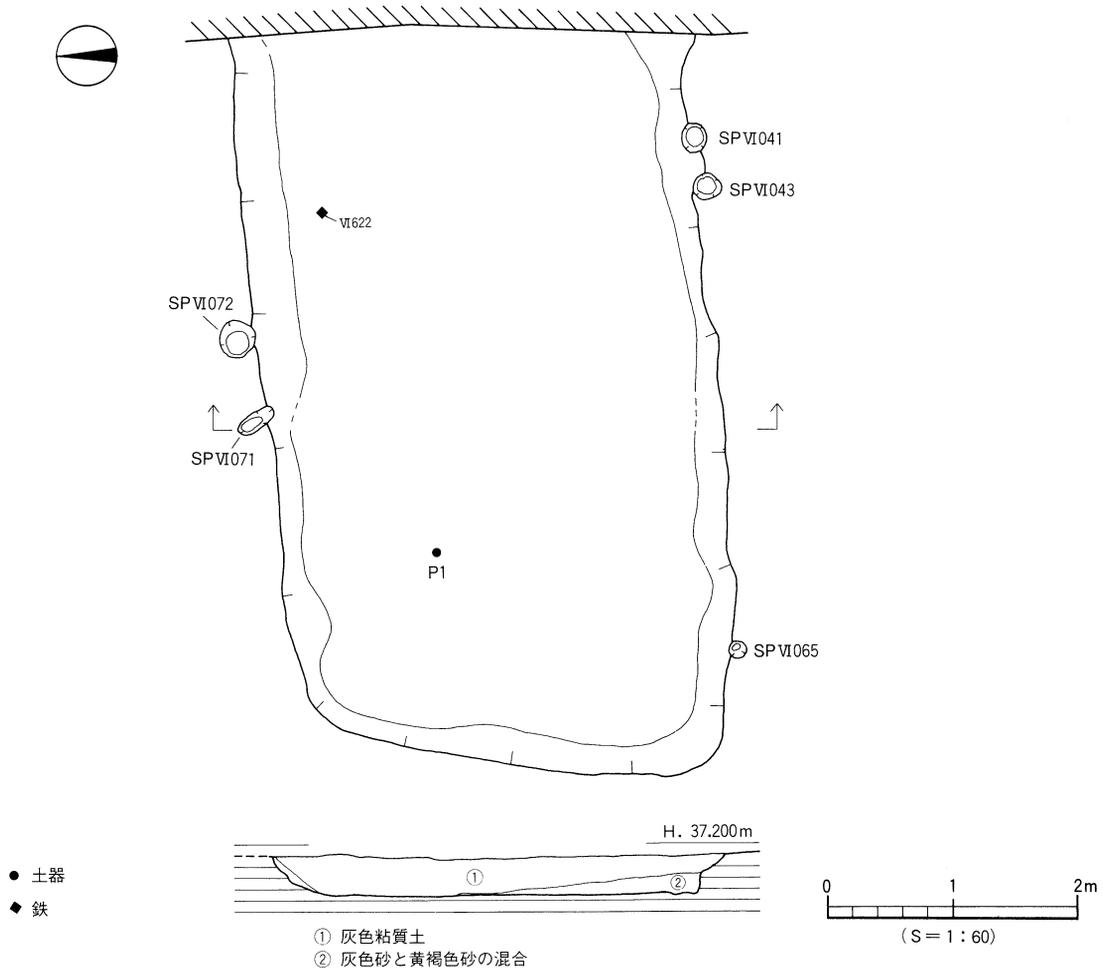
SDVI201 (第308図、図版72)

第2地区の北部、D10～E11区で検出した東西方向の溝である。溝の西側は消失し、東側は調査区外に続く。溝北壁と南壁は、灰黄色土を埋土にもつ5基のピットに切られ、SKVI202(土坑D)を切る。規模は検出長5.90m、幅3.60m、深さ25～40cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は上下2層(①・②層)に分層され、①層は灰色粘質土、②層は灰色砂と黄褐色砂との混合砂である。

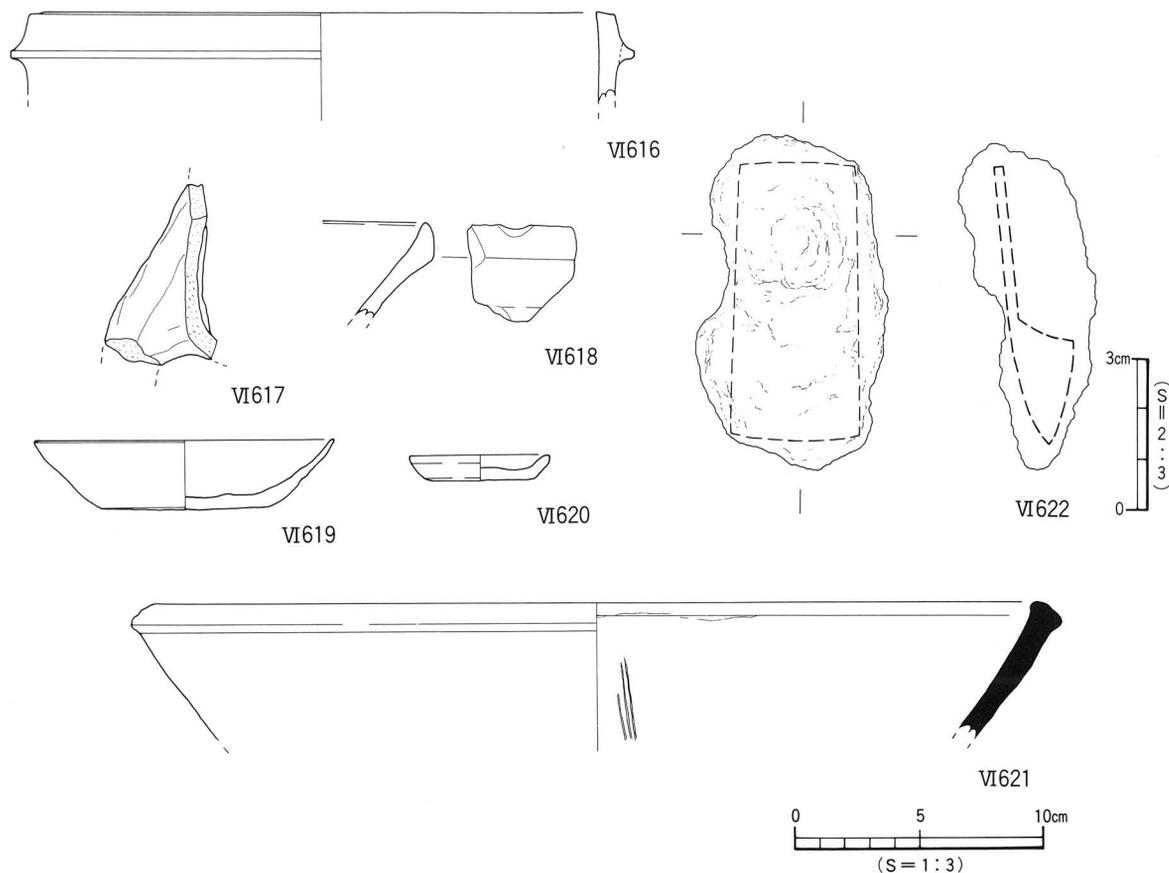
遺物は埋土中から土師器片、須恵器片、鉄器、木製品が出土した。

## 出土遺物 (第310図、図版80)

VI616～620は土師器、VI621は須恵器、VI622は鉄製品である。木製品はP1地点からの出土であるが、遺存状況が非常に悪く、実測が困難であり、写真図版のみを掲載している(図版80、VI623)。VI616は土釜の口縁部片である。口唇部からやや下がった位置に断面三角形の凸帯を貼り付ける。VI617は脚部片である。釜底部と脚部の接合位置は底部付近になる。VI618はこね鉢である。VI619は坏で、底部の切り離しは回転糸切りである。VI620は小皿で、底部切り離しは静止糸切りである。VI621は須恵器こね鉢。口縁端部はわずかに上下方に肥厚し、内面には条線がわずかに残る。VI622は鉄斧で、器表面に錆が厚く付着する。現況では器種は不明であるが、X線写真からは小型の鉄斧の可能性をもつ。現存長5.3～5.4cm、刃部幅2.5cm、厚さ2～3mmを測る。VI623は木製の椀とみられるもの



第309図 SDVI201測量図



第310図 S D VI201出土遺物実測図

である。内外面共に漆が塗彩（肉眼観察）されている。

時期：出土した遺物の特徴より、S D VI201は14世紀代の溝とする。

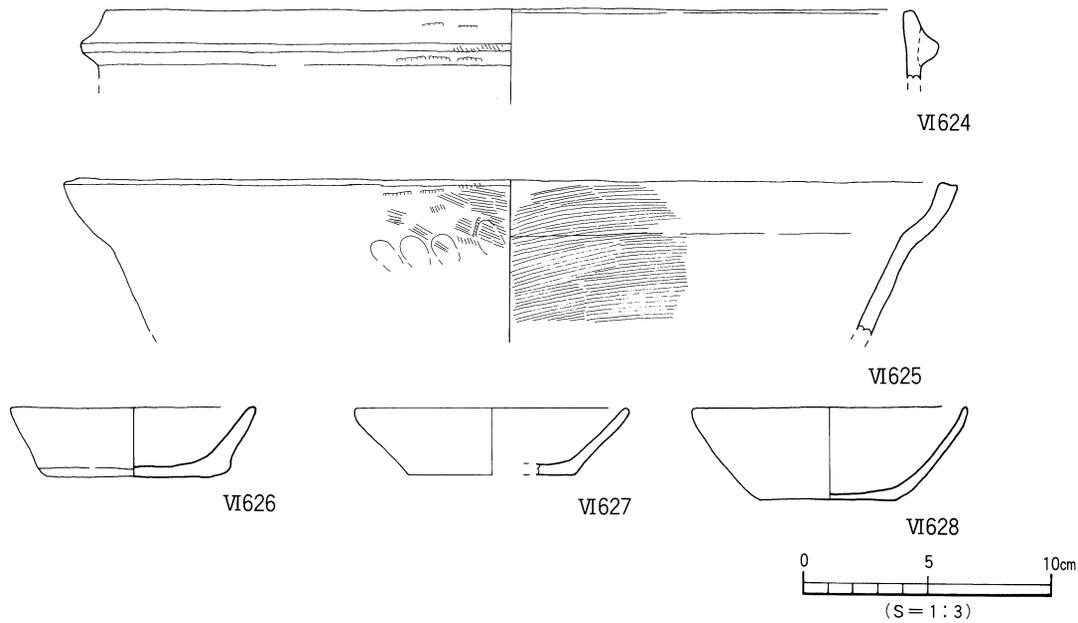
#### S D VI301（第196図）

第3地区の中央部、E14区で検出した東西方向の溝である。溝両端は消失し、中央部は土坑S K VI 305（土坑D）を切っている。規模は検出幅28cm、検出長2.79m、深さ11cmを測る。断面形態は浅いレンズ状を呈す。埋土は第II B-②層と同様の灰黄褐色土の、単層である。溝基底面は東から西へ向けてわずかに傾斜する（比高差3cm）。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、明確な時期判断はしかねる。第II B-②層で埋没することから、S D VI301は13世紀代の溝とする。

#### S D VI302（第196図）

第3地区の南側、D13～E14区で検出した東西方向の溝であり、S D VI302（古代）を切っている。規模は検出長5.61m、検出幅1.48m、深さ21cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は浅黄色土の単層である。溝基底面は東から西へ向けて傾斜する（比高差10cm）。溝内からは土師器片と、10～20cm大の礫が出土した。



第311図 S D VI302出土遺物実測図

## 出土遺物 (第311図)

VI624は土師器の釜である。口唇部よりやや下がった位置に、断面三角形の凸帯を貼り付ける。VI625は土師器鍋で、口縁部は内湾し、口縁端部はヨコナデにより凹む。外面に煤が付着する。VI626～628は坏である。底部の切り離しはVI626は回転ヘラ切り、VI627・628は回転糸切りである。

時期：出土した遺物の特徴より、S D VI302は14世紀代の溝とする。

## (3) 土 坑

## S K VI101 (第312図)

第1地区の南部、E 3区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径68～78cm、深さ5cmを測る。断面形態は皿状を呈する。掘り方最終面は第V層になる。埋土は第II B-②層と同様の灰褐色土の単層である。基底面からは、炭と焼土を検出した。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土した遺物がなく、明確な時期判断はしかねる。第II B-②層で埋没することから、S K VI101は13世紀代の遺構とする。

## S K VI102 (第312図)

第1地区の南部、E 4区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径0.93～1.00m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈する。掘り方最終面は第V層になる。埋土は第II B-②層と同様の灰褐色土の単層である。埋土中からは、炭と焼土を少量検出した。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土した遺物がなく、時期判断は困難であるが、第II B-②層で埋没することから、S K VI102は13世紀代の遺構とする。

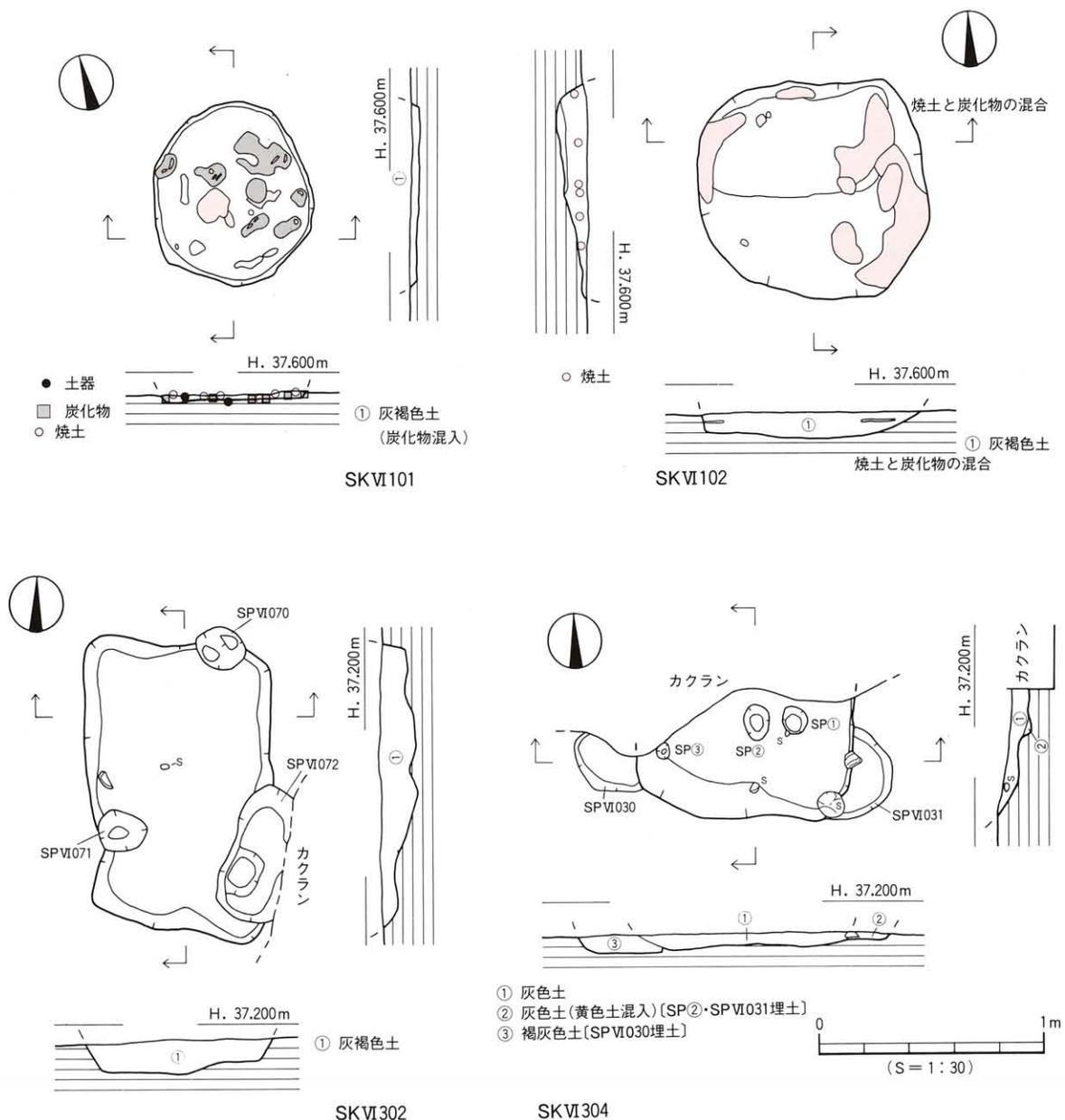
S K VI302 (第312図)

第3地区の北部、E15区に位置する。遺構の北側、西側と東側はそれぞれS P VI070・S P VI071・S P VI072 (灰色土) に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は幅82cm、長さ1.30m、深さ15cmを測る。断面形態は皿状を呈する。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。埋土は第ⅡB-②層と同様の灰褐色土単層である。基底面は凹凸が著しい。遺物は埋土中から、土師器皿が1点出土した。

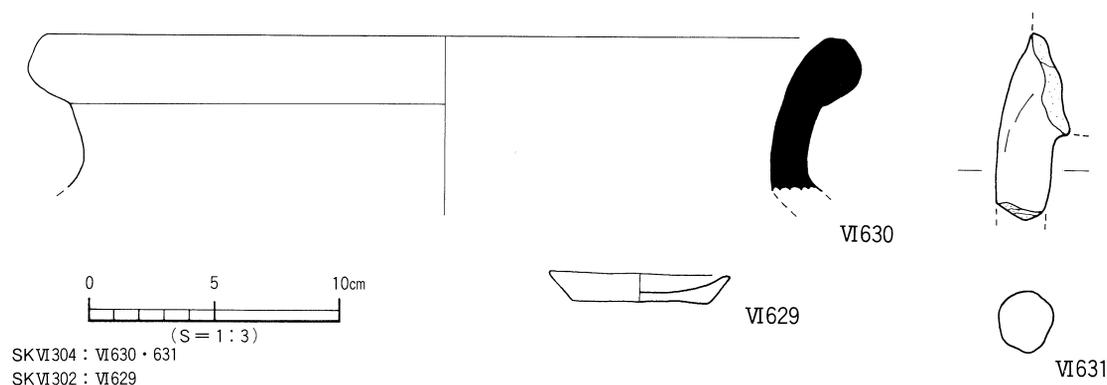
出土遺物 (第313図-VI629)

VI629は土師器皿である。底部の切り離しは磨滅の為不明である。

時期：出土した遺物が僅少で、明確な時期判断はし兼ねるが、第ⅡB-②層で埋没することから、S K VI302は13世紀代の遺構とする。



第312図 S K VI101・102・302・304測量図



第313図 S K VI302・304出土遺物実測図

## S K VI304 (第312図)

第3地区の中央部、E15区に位置する。遺構の北側は攪乱に切られ、東側はS P VI031、西側はS P VI030を切っている。平面形態は方形を呈するものとみられ、規模は東西長94cm、南北検出長50cm、深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰色土の単層である。掘り方最終面は第Ⅶ層になる。基底面からは径8~14cm、深さ5cmの小ピット3基(S P ①~③)を検出した。ピット埋土は土坑埋土に類似する。遺物は埋土中から、土師器や備前焼の甕が出土した。

## 出土遺物 (第313図-VI630・631)

VI630は備前焼の甕である。口縁部は外反し、口縁端部は丸い。VI631は土釜の脚部である。

時期：出土した遺物の特徴から、S K VI304は15世紀代の遺構とする。

## 7. その他の遺構と遺物

## (1) ピット

VI区の調査では、ピット243基を検出した。埋土の違いによりA・B・C類の3種類に分類される。

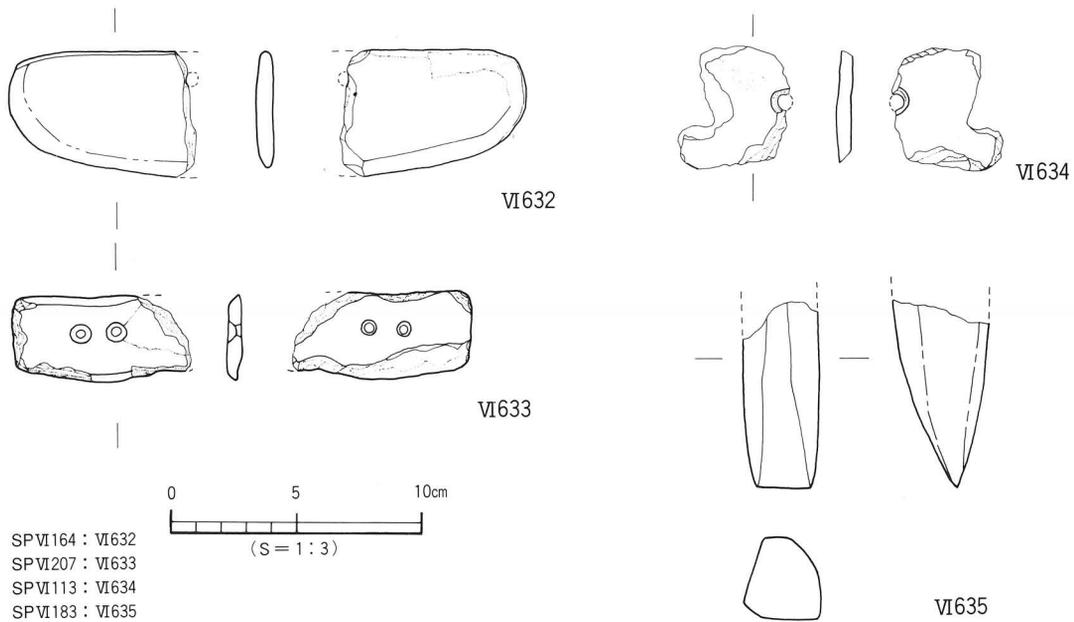
A類は、黒褐色土を埋土にもつピット群で、115基ある。VI区ほぼ全域に点在する。平面形態は円~楕円形を呈し、規模は径50~80cm、深さ10~40cmを測る。このうち4基のピット内からは、石包丁と石斧が出土した。

B類は、主に褐色土を埋土にもつピット群で、70基ある。VI区第1地区と第3地区に点在する。平面形態は円~楕円形を呈し、規模は30~70cm、深さ20~40cmを測る。ピット内からは土師器片と須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

C類は、主に灰~灰褐色土を埋土にもつピット群で、58基ある。VI区ほぼ全域に点在する。平面形態は円形を呈し、径20~50cm、深さ20~70cmを測る。ピット内からは土師器片と須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

## ピット出土遺物 (第314図、図版80)

VI632~635は第1地区検出のA類のピット出土の石製品である。VI632~634は石庖丁である。VI632は両面を丁寧に研磨する。刃部の鑄は甘い。VI633は再加工品である。穿孔は両面から2ヶ所に穿つ。VI634は自然面が多く残っている。VI635は柱状片刃石斧である。基部は欠損する。断面形態は台形状を呈し、刃部の鑄は明瞭である。石製品は、すべて緑色片岩製である。



第314図 ピット出土遺物実測図

(2) 地点不明出土遺物 (図版80)

VI区の調査では、近現代坑内より中国銭が2点出土した。実測図は掲載せず、写真図版を掲載した(図版80、VI636・637)。VI636・VI637は共に北宋時代の銅銭である。X線写真よりVI636は「元豊通寶」、VI637は「景祐元寶」の文字がみてとれる。実年代はVI636は1078年、VI637は1034年に相当する。

8. 小 結

VI区の調査では、縄文時代後期から中世までの遺構と遺物を検出した。層位では第I層から第IX層までを検出した。

(1) 層 位

VI区では、第I層から第IX層までのすべての基本土層を確認した。

VI区のほぼ中央部、第1地区の北側と第2地区では、最下部で第IX層の石手川の洪積礫層を検出した。第IX層上面の標高を測量すると、第1地区で35.500m、第2地区で36.000m前後であり、北側に向けてやや高くなっている。

次に、第VIII層はV区と同様に、石手川の氾濫によって堆積した砂礫層と考えられるものである。粗砂や微砂、砂礫から構成される。第VIII層上面は起伏に富んでおり、第1地区北側から第2地区の中央部までが凹んでいる。また、第1地区の中央部付近では礫の盛り上がった箇所を確認した。高まりは幅2m、高さ1mにおよぶ。礫は扁平な花崗岩や砂岩で、最大径が10×20cm、最小径が3×5cmを測り、それらが水平に並んだ状態で堆積していた。礫と礫との間には粘土が覆うように侵入していた。この高まりは特異な堆積状況であり、自然堆積であるか否かは判断できなかった。

第Ⅶ層の明黄褐色シルトは、第Ⅷ層を覆うようにⅥ区の全域に堆積している。第Ⅶ層は前述の凹んだ箇所が最も厚く、1 m程の堆積をなす。第Ⅶ層上面の標高を測量すると、Ⅵ区はⅤ区に比べわずかに低くなっているが、Ⅲ・Ⅳ区に比べると約1 m高い。Ⅵ区では、Ⅴ区に引き続き微高地が形成されているようである。

第Ⅵ層の弥生時代前期末～中期初頭の遺物包含層は部分的な堆積をなすが、弥生時代中～後期の遺物包含層である第Ⅴ層は、Ⅵ区のほぼ全域に安定して堆積している。当該期の竪穴式住居址や土坑などは、第Ⅴ層の堆積状況に起因するように、Ⅵ区に存在しているものと考えられる。

第Ⅳ層は、第1地区と第3地区の第Ⅴ層上面で検出した。部分的に堆積しており、層厚10～20cmである。また、古代の遺物包含層である第Ⅲ層は、第1地区ほぼ全域において検出されたが、第2・3地区では未検出であった。

Ⅴ区から続くと考えられる第ⅡB-②層は、第1地区に部分的に堆積しているが、状況から判断すると、近現代の造成等によりかなり削平されている可能性が高い。

## (2) 遺構・遺物

### 1) 縄文時代

縄文時代の遺構は未検出である。ただし、遺物は弥生時代前期末～中期初頭の遺構内や第Ⅵ層中から、縄文時代後～晩期の土器片が数点出土している。溝S DⅥ104上層及びS KⅥ199(土坑B)からは縄文晩期の深鉢片と浅鉢片が、S KⅥ189(土坑B)と第Ⅵ層中からは縄文後期の深鉢片がそれぞれ出土し、調査地の近隣に縄文集落が存在することを示唆している。

### 2) 弥生時代前期末～中期初頭

弥生時代前期末～中期初頭の遺構には、溝2条と土坑85基がある。

溝：溝S DⅥ104とS DⅥ105とは特筆すべき遺構である。両者は、共に検出幅5 m前後、深さ1.2～1.4mを測る大型の溝で、溝内からは該期の遺物が多量に出土している。その一方で、両者には異なる点がいくつかある。まず、平面形状が異なり、S DⅥ104は南側、S DⅥ105は北側へ向けて湾曲している。断面形態はS DⅥ104が逆台形状を呈するのに対し、S DⅥ105は緩やかな「U」字状をなしている。埋土や堆積状況も異なり、S DⅥ104は二次的な掘削が行われており、埋土中に砂を多く含むのに対し、S DⅥ105は二次的な掘削はなく、埋土中に砂をあまり含んでいない。S DⅥ105は空掘りの壕と考えられる。

ところで、両者を述べるうえで、Ⅴ区で検出した溝S DⅤ202の存在がクローズアップされる。S DⅤ202は断面観察の結果、再掘削され、埋土中に砂を多く含む。この状況はS DⅥ104と酷似している。したがって、S DⅥ104とS DⅤ202が同一の溝であった可能性が非常に高くなる。つまり、両者は互いに弧状に配置していることから「環壕」としての機能を持った溝と考えられるのである。そこで、S DⅥ105との関係が問題になってくる。出土遺物を比較すると時期差はほとんどなく、少なくともある時期にS DⅥ104とS DⅥ105は併存していたことになる。そうすると、S DⅥ105は、S DⅥ104とS DⅤ202で構成されている環壕に取り付く溝とすることができる。つまり、S DⅥ105は環壕を仕切るための溝としての機能を備えていたのではないかと考えられる。調査は狭い範囲に限られていることから、推論の域は出ないが、今後の周辺調査に期待し、課題としておく。

S D VI104とS D VI105の埋土を採取し、分析をした結果、両溝内から珪藻が検出された。特に、真塩性から中塩性（海水性から汽水性）の塩分を好む珪藻が検出されている。岩崎遺跡の所在する持田町と岩崎町は陸地にあり、海の影響は考えがたく、興味深い分析結果である。分析結果については、「第9章自然科学分析」のところで詳細を紹介する。

土坑：土坑は、埋土の違いにより5種類のもの（土坑A～E）を検出した。これは、V区で分類した土坑とほぼ同じである。溝と土坑との切り合いでは、S D VI105が土坑C・D・Eを切り、土坑AにS D VI105が切られている。少なくとも、S D VI105が掘削される以前に土坑C・D・Eは調査地内に存在しており、S D VI105埋没後に土坑Aが掘削されたものと判断される。

次に、各土坑の検出数と分布状況を見る。土坑Eは6基検出しており、全体の1割にもみまない。分布状況では第1地区に点在している。土坑Dは17基あり、全体の2割程度にのぼる。第1地区から第3地区にかけて広く分布する。土坑Cは20基あり、ほぼ土坑Dと同様の分布状況をなす。土坑Bは24基あり、全体の3割程度である。とりわけS D VI104とS D VI105とに囲まれたエリアに密集する。土坑Aは18基あり、第1地区に点在する。検出数は、土坑Eは少なく、土坑D以降に多くなり、範囲も第1地区に限られたものが、第1～3地区の広い範囲に拡大していった様子が見える。

平面形態では、円～楕円形の土坑が54基あり、全体の6割を占める。次いで長方形土坑が25基、方形土坑が6基となる。長方形土坑のうち、土坑Bでは24基中10基あり、他の埋土の土坑と比較するとその割合が高い。これはV区で検出した土坑とも同じ状況を示している。

土坑の規模は、円～楕円形のもの径1.0～1.5mが大半を占め、なかには2mを越えるものも数基ある。長方形のものは、長さが1.8～2.0mで、幅が1m前後のものと、長さが1.0～1.5mで、幅が0.6～0.8mのものに大別される。

掘り方では、円～楕円形土坑は深く、方～長方形の土坑は浅いものが多い。

断面形態では、逆台形状のものが全体の約5割を占める。つづいて、筒状や袋状、フラスコ状を呈するものが1割みられる。遺構の全体が袋状を呈するものはわずかに3基だけで、その他は壁体の一部が袋状もしくはフラスコ状を呈するものである。

堆積状況では、単一土壌で埋没する土坑が全体の8割を占める。深さ50cm前後の土坑が単一層で埋没することから、自然の堆積とは考えがたく、人為的に何度も掘り直しが施されたものと考えられる。また、土坑内に炭化物や焼土が層をなして堆積している土坑があり、焚き火もしくは土坑基底面の再利用が考えられた。

遺物：出土した遺物には、東北部九州地方や周防灘周辺からの搬入品や形状をまねた模倣土器がある。S D VI105中層からは、山口県（綾羅木郷）からの搬入品と考えられる壺形土器（VI197）があり、S D VI104下層とS D VI105中層からは、模倣土器（東北部九州地方）が、それぞれ1点ずつ（VI016・VI216）出土している。これらの土器は、当時の他地域との交流を知るうえで好資料となる。

注目される遺物には、溝や土坑内から出土した動物骨があげられる。分析の結果、猪や鹿の歯であることが判明し、これらの遺物は当時の食生活の一端を示す資料になる。また、S D VI105内からは分銅形土製品が1点出土している。愛媛県内では道後城北地区で比較的多く出土しているが、大半は中期中葉～後期に時期比定されるものであり、今回出土の分銅形土製品は出現期を考えるうえで、貴重な資料といえる。

## 3) 弥生時代中期～後期

弥生時代中期～後期の遺構は、竪穴式住居址3棟、溝3条、土坑4基を検出した。遺物は、第V層中から多量に出土している。

竪穴式住居址：竪穴式住居址は、平面形態で、円形と長方形の2種類に分けられる。S B VI102は遺構西半部は調査区外に続くため、形状は定かではない。S B VI101は径5.0～5.5mの円形住居址で、4本の支柱穴から構成される。一方、S B VI103は長方形住居址で、長さ3.9m、幅2.8mを測るが、支柱穴は未検出である。出土した遺物から、S B VI101は後期前半、S B VI103は後期後半頃の住居址と考えられる。両者は共に改築が施された住居址であった。内部施設も同形態をなし、炉は改築前と改築後にそれぞれ付設され、径60cm～1mの楕円形状を呈し、壁体に沿って径3～5cm大の小ピット(周壁溝)が検出された。

溝：次に、溝は第1地区にて3条を検出した。S D VI101とVI102の切り合いは不明であるが、出土した遺物から両者共に中期後半～後期に埋没したものである。S D VI103はS D VI101とS D VI102に比べ、やや古く、中期中葉の溝と考えられる。3基の溝は、前期末～中期初頭の溝S D VI104とVI105の上面で検出されたものである。このような状況は、久米高畑遺跡25次調査においても同様の検出例があり、非常に興味深い。

遺物：第V層からは主に、弥生時代中期中葉～後期後半までの遺物が出土している。このなかには、讃岐地方からの搬入や模倣土器(吉備・山陰地方)の出土もある。前期末～中期初頭段階に引き続き、中期～後期においてもこれらの地域との交流が継続していたことがうかがわれる。また、第V層中からは分銅形土製品が1点出土している。

## 4) 古墳時代～古代

古墳時代から古代までの遺構は少なく、溝2条と土坑10基を検出したにとどまる。

第3地区検出の溝S D VI303は、古代に時期比定されるもので、溝の北側部分のみを検出した。第2地区で検出されていないことから、未調査部分の道路下に溝の南側部分が存在するものと考えられる。調査地の北東部や東方には、古代寺院の湯ノ町廃寺や内代廃寺が存在することから、今後の周辺での調査が注目される。

## 5) 中世

中世の遺構は掘立柱建物址3棟、溝5条、土坑8基を検出した。

掘立柱建物址は1間×2間、または、2間×2間の規模で、真北方向に等しい建物方位をとる。建物規模や建物方位、建物の時期がⅢ区で検出した建物址と類似している。比較的小規模の建物址が、この時期に調査地内に点在していたものと推測される。第2地区検出の溝S D VI201は東西方向に延びる溝であるが、西端は消失している。埋土中には、微砂や細砂が堆積しており、滞水状態であったことがうかがわれる。西壁の土層観察においても溝は検出されておらず、S D VI201は、池もしくは貯水施設の可能性がある。

# 第9章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

## I. 植物珪酸体分析

### 1. 試料

試料は、I区第1地区の第II A-⑤層（試料1）・第II A-⑨層（試料2・3）・第II A-⑬層（試料5）の3層4点と、畝溝から採取した1点（試料4）の計5点である（第9・315図）。

### 2. 分析

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対して直径約40 $\mu$ mのガラスビーズを約0.02g添加  
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu$ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}$ g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

### 3. 結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表31および第315図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す（第316・317図、表32）。

[イネ科]

機動細胞由来：イネ、ヨシ属、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、シバ属

[イネ科－タケ亜科]

機動細胞由来：メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、未分類等

[イネ科－その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等  
〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、その他

#### 4. 考 察

##### (1) 稲作址の検討

水田址（稲作址）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料 1 g あたりおよそ 5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、愛媛県内では密度が 3,000個/g 程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を 3,000個/g として検討を行った。

I 区第 1 地区東壁では、第 II A-⑤層（試料 1）から第 II A-⑬層（試料 5）まで層準について分析を行った。その結果、これらすべての試料からイネが検出された。このうち、第 II A-⑤層（試料 1）と第 II A-⑨層（試料 2・3）では密度が 3,000個/g 以上と高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。中世とされる畑状遺構が検出された第 II A-⑬層（試料 5）では、密度が 2,000個/g とやや低い値であるが、直上の A 層（畝溝埋土、試料 4）よりも高いことから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

##### (2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題とした。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

##### (3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、ウシクサ族型やタケ亜科（未分類等）、ブナ科（シイ属）、クスノキ科などが検出されたが、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると、A 層以外ではイネが卓越しており、A 層ではヨシ属が比較的多くなっていることが分かる。

以上のことから、第 II A-⑤層から第 II A-⑬層にかけては、概ね継続して稲作が行われていたと考えられ、その他のイネ科植物はあまり見られなかったものと推定される。また、A 層の溝周辺などではヨシ属が生育する湿地的なところも見られたものと考えられる。なお、当時の遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたものと推定される。

#### 5. ま と め

植物珪酸体分析の結果、中世とされる畑状遺構が検出された第 II A-⑬層では、イネが比較的多く検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に確かめられた。また、その上層の第 II A-⑤層や第 II A-⑨層でも稲作が行われていた可能性が認められた。

[参考文献]

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表31 岩崎遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100 個/g)

分類群 \ 試料	1	2	3	4	5
イネ科					
イネ	30	35	30	8	22
ヨシ属				8	
ウシクサ族型	7		7	8	7
ウシクサ族型 (大型)	7	7			
シバ属		7	7		
タケ亜科					
メダケ節型				8	
ネザサ節型	15				
クマザサ属型	7				
未分類等	15	14	7	8	29
その他のイネ科					
表皮毛起源		7			
棒状珪酸体	45	35	82	8	36
未分類等	164	188	201	114	94
樹木起源					
ブナ科 (シイ属)	15		7		14
クスノキ科	7				7
その他	7		7		7
(海綿骨針)		14			7
植物珪酸体総数	320	293	350	160	216

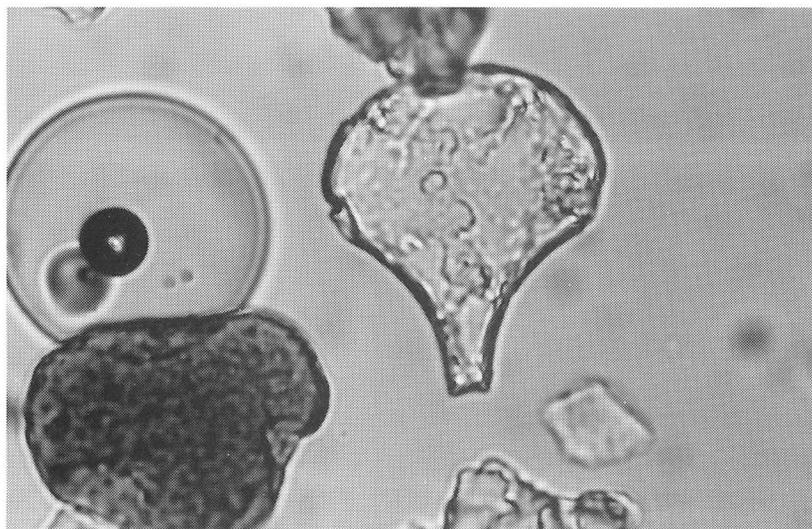
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

イネ	0.88	1.03	0.88	0.22	0.64
ヨシ属				0.48	
メダケ節型				0.09	
ネザサ節型	0.07				
クマザサ属型	0.06				

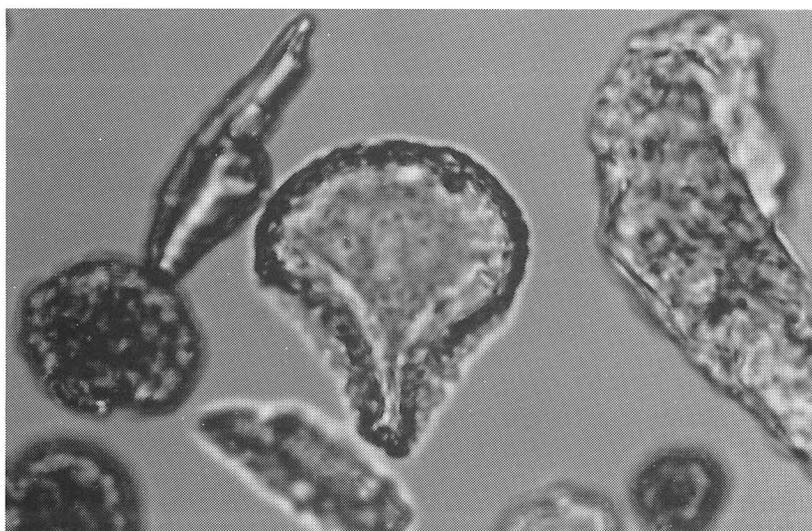
タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型					100
ネザサ節型	56				
クマザサ属型	44				

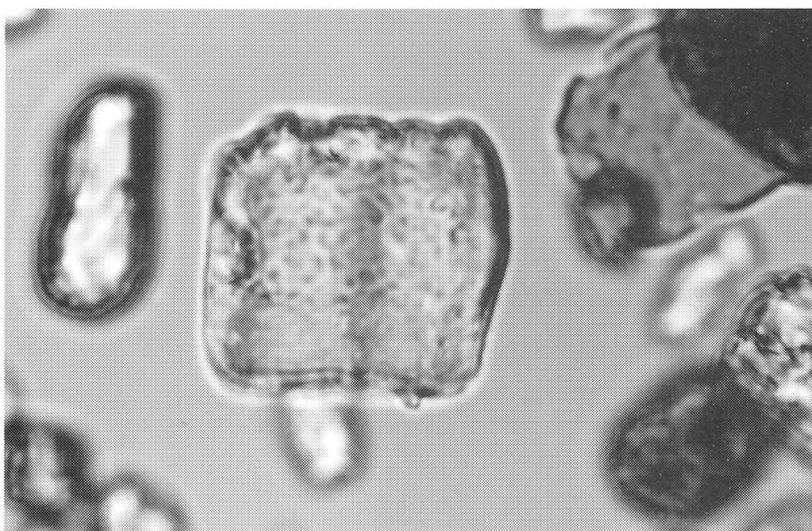




1. イネ

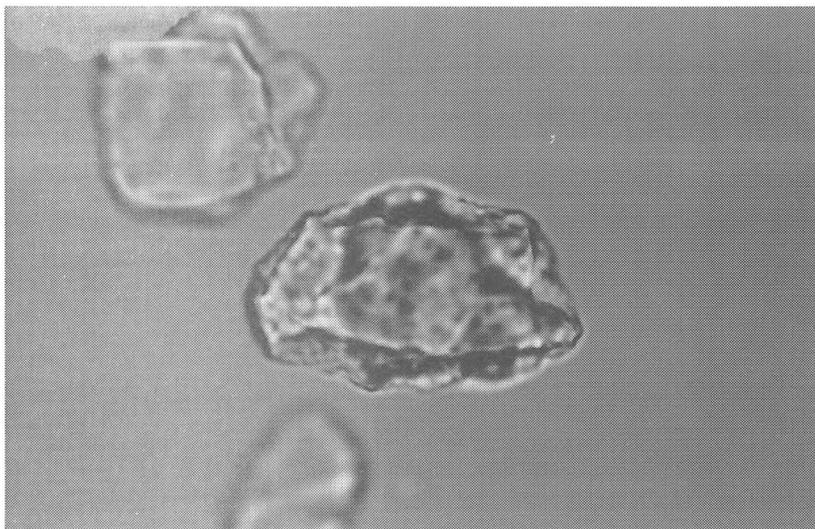


2. イネ

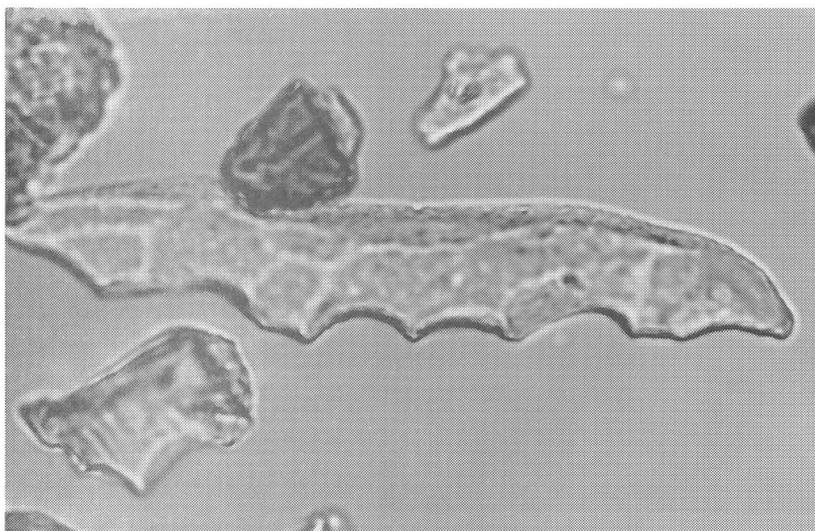


3. ネザサ節型

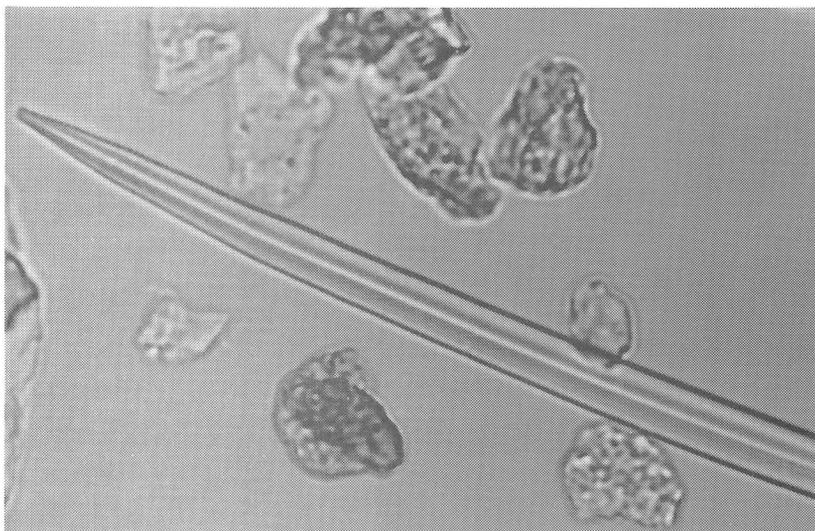
第316図 植物珪酸体の顕微鏡写真(1)



4. ブナ科 (シイ属)



5. クスノキ科



6. 海綿骨針

第317図 植物珪酸体の顕微鏡写真(2)

## Ⅱ. 珪藻分析

### 1. 試料

試料は、Ⅵ区第1地区検出の溝SDVI104の埋土から採取された3点（試料6～8）、およびSDVI105の埋土から採取された11点（試料9～19）の計14点である（第198・212・318図、表33）。

### 2. 方法

試料に以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から乾燥重量1gを秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加湿し反応させながら、一晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗いを行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600～1000倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が200個体にまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

### 3. 結果

分析の結果、SDVI104からは珪藻があまり検出されず、SDVI105からは多くの珪藻が検出された。出現した珪藻は、海水～汽水生種7分類群7属7種1亜種、淡水生種49分類群18属40種5亜種である。計数された珪藻の学名と個数を表33に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを第318図に示す。

#### (1) SDVI104

いずれの試料も珪藻があまり含まれていなかった。真塩性から中塩性（海水生から汽水生）の *AchnAnthesbrevipes* v. *AngustAtA* が相対的に多い。 *AchnAnthesbrevipes* v. *AngustAtA* は海水砂質干潟指標種群でもある。

#### (2) SDVI105

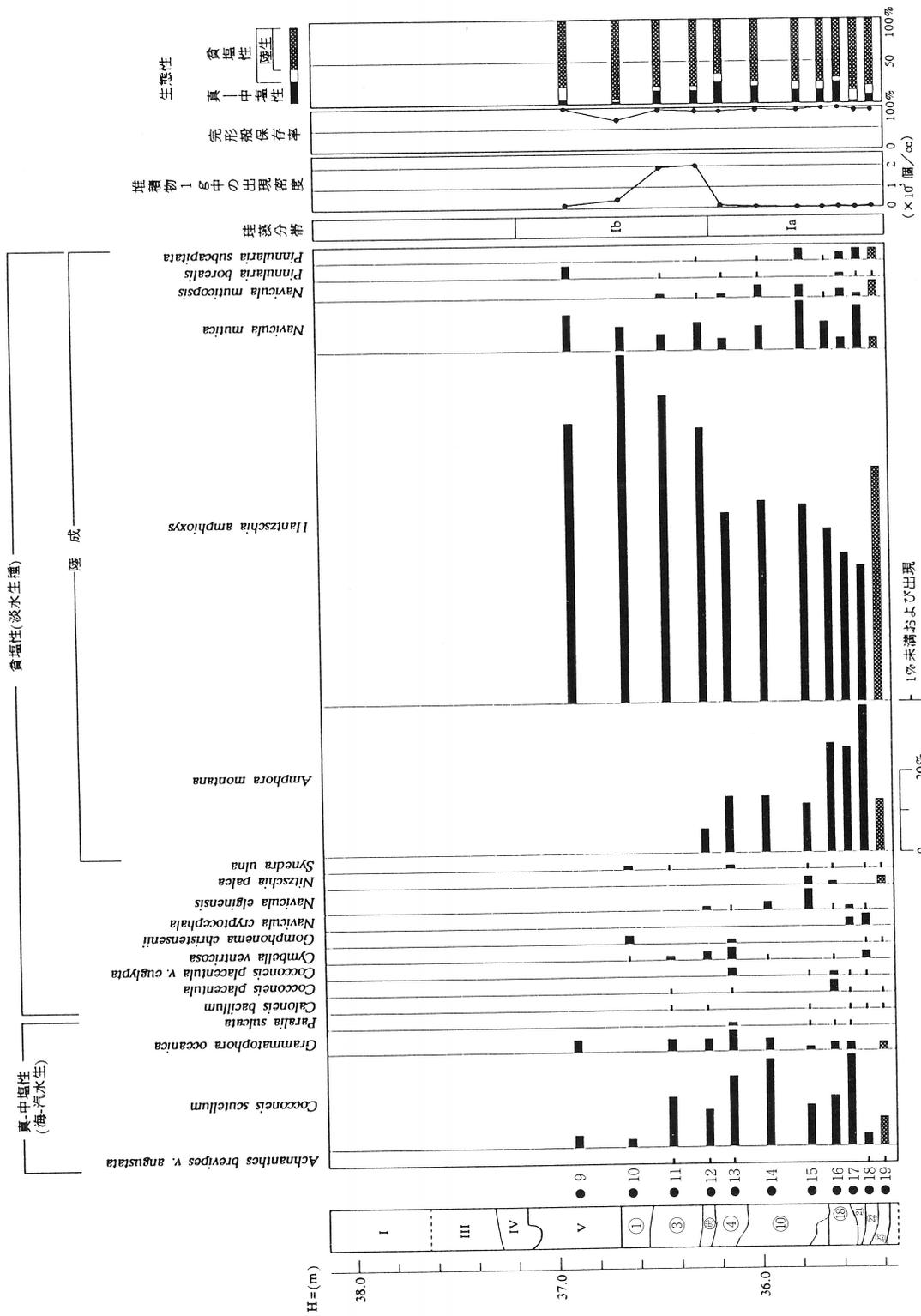
全体を通して各試料とも淡水生種で陸生珪藻の *HantzschiaAmphioxys* が優占し、同じく陸生の *AmphoramontanA*、*NaviculamuticA* や真塩性の *Cocconeisscutellum* や *GrammatophoraocenicA* などが伴われる。 *Cocconeisscutellum* は海水藻場指標種群でもある。 *HantzschiaAmphioxys* と *AmphoramontanA* の優占傾向からさらに2亜帯に区分される。下部のIa亜帯（試料13・14）では *AmphoramontanA* が比較的高い出現率を示す。堆積物1g中の珪藻の密度は低い。上部のIb帯（試料9～12）では *AmphoramontanA* が低率になり、 *HantzschiaAmphioxys* のみが優占する。

### 4. 珪藻分析から推定される堆積環境

SDVI104では珪藻が極めて少ないことから、珪藻の生育できない乾燥した堆積環境が支配的であったと推測される。SDVI105では陸成珪藻が優占することから、陸成珪藻の生育するやや湿った土壌やコケの生育する環境であったと示唆される。陸成珪藻を除く貧塩性（淡水生）種は極めて少なく、常時に水域を呈したり、水が供給されるような環境でなかったことを示している。

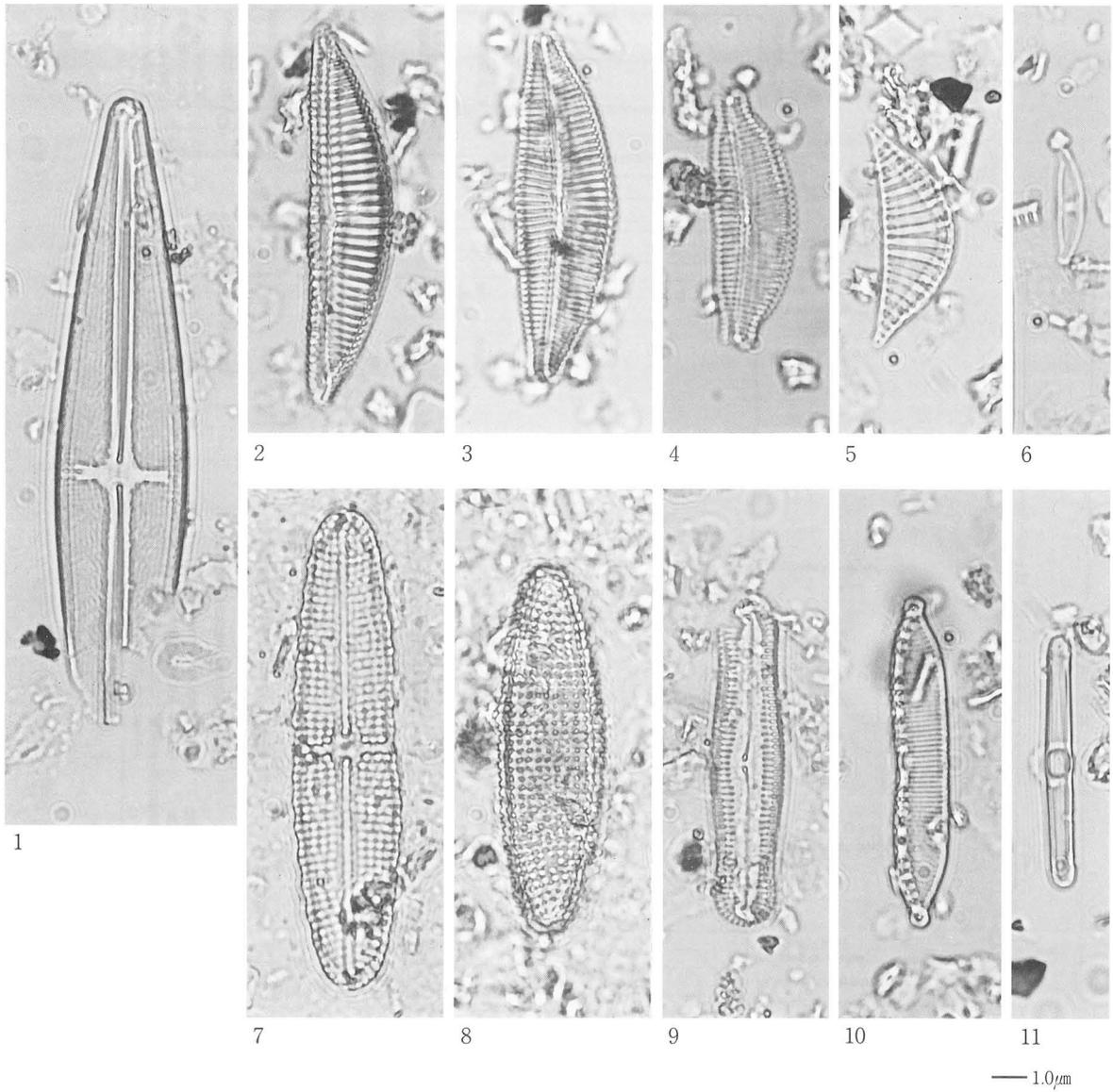
表33 岩崎遺跡における珪藻分析結果

分類群	SDVI104			SDVI105														
	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19				
真塩-中塩性(海水-汽水)種																		
Achnanthes brevipes v.angustata	32	25	5			1	1	1					1	1				
Cocconeis scutellum	2			1	5	56	23	52	71	21	30	70	6	8				
Grammatophora oceanica	1	1		1		14	8	14	11	3	4	6		2				
Nitzschia granulata							1											
Paralia sulcata								3		2	1	1						
Rhaphoneis surirella						1								1				
Rhopalodia musculus							1											
貧塩性(淡水)種																		
Achnanthes crenulata											1							
Achnanthes exigua				2														
Achnanthes sp.									1									
Amphora montana							15	43	49	25	68	81	80	15				
Amphora ovalis							2		1				1					
Caloneis bacillum						2	1			2		1	1	1				
Cocconeis placentula	1					3		1			5	1		1				
Cocconeis placentula v.euglypta								6		1	3	1	1					
Cymbella affinis														2				
Cymbella cymbiformis								6										
Cymbella gracilis							1	1										
Cymbella sp.							5											
Cymbella tumida					5	1												
Cymbella turgida											1	1	1	1				
Cymbella ventricosa	1			1	6	4	8	1			2		4					
Diatoma hyemale v.mesodon							1	1				1						
Diploneis ovalis													1					
Eunotia pectinalis v.minor						1												
Fragilaria construens v.venter								1										
Gomphonema christensenii					5			3					1	1				
Gomphonema gracile				2							1			1				
Gomphonema parvulum				1				1	1	1			2					
Gomphonema pumilum							1					1						
Hantzschia amphioxys	1			23	175	361	165	136	170	104	106	113	72	68				
Melosira sp.			1							1		1						
Melosira sulcata						1							1					
Navicula contenta												2						
Navicula cryptocephala												5	7					
Navicula elginensis	1						3	1	6	11	1	3	1					
Navicula mutica		1		3	12	21	16	10	21	26	17	8	23	4				
Navicula muticopsis						6	1	4	11	6	2	5	3	5				
Navicula pupula											3							
Navicula radiosa							1						2					
Neidium iridis v.amphigomphus								1										
Nitzschia amphibia										2								
Nitzschia kutzingiana												1						
Nitzschia palea										5	3			2				
Nitzschia sp.									1									
Pinnularia acrosphaeria													1					
Pinnularia borealis				1		1		2	1			3	2	1				
Pinnularia microstauron													1					
Pinnularia obscura							1											
Pinnularia schroederii								1										
Pinnularia subcapitata							1		2	6	1	5	6	3				
Rhopalodia musculus												2						
Stauroneis acuta					1													
Stauroneis phoenicenteron											1							
Synedra tabulata													1	1				
Synedra ulna	1	1	1		2	1		3		1	1		1	1				
未同定	2	1		10	4	10	4	8	7	5	8	3	6	7				
合計	40	28	7	34	206	481	247	299	347	217	251	312	220	119				
試料(堆積物) 1cc中出現密度	8.0 <sub>3</sub>	5.6 <sub>3</sub>	1.4 <sub>3</sub>	6.8 <sub>3</sub>	4.1 <sub>4</sub>	1.9 <sub>5</sub>	2.0 <sub>5</sub>	1.1 <sub>4</sub>	8.7 <sub>3</sub>	2.0 <sub>3</sub>	3.1 <sub>3</sub>	4.9 <sub>3</sub>	4.1 <sub>3</sub>	8.5 <sub>4</sub>				
完形殻保存率	66.8	70.0	77.8	97.1	74.9	94.9	92.9	90.6	94.6	94.8	97.3	97.5	92.8	93.0				



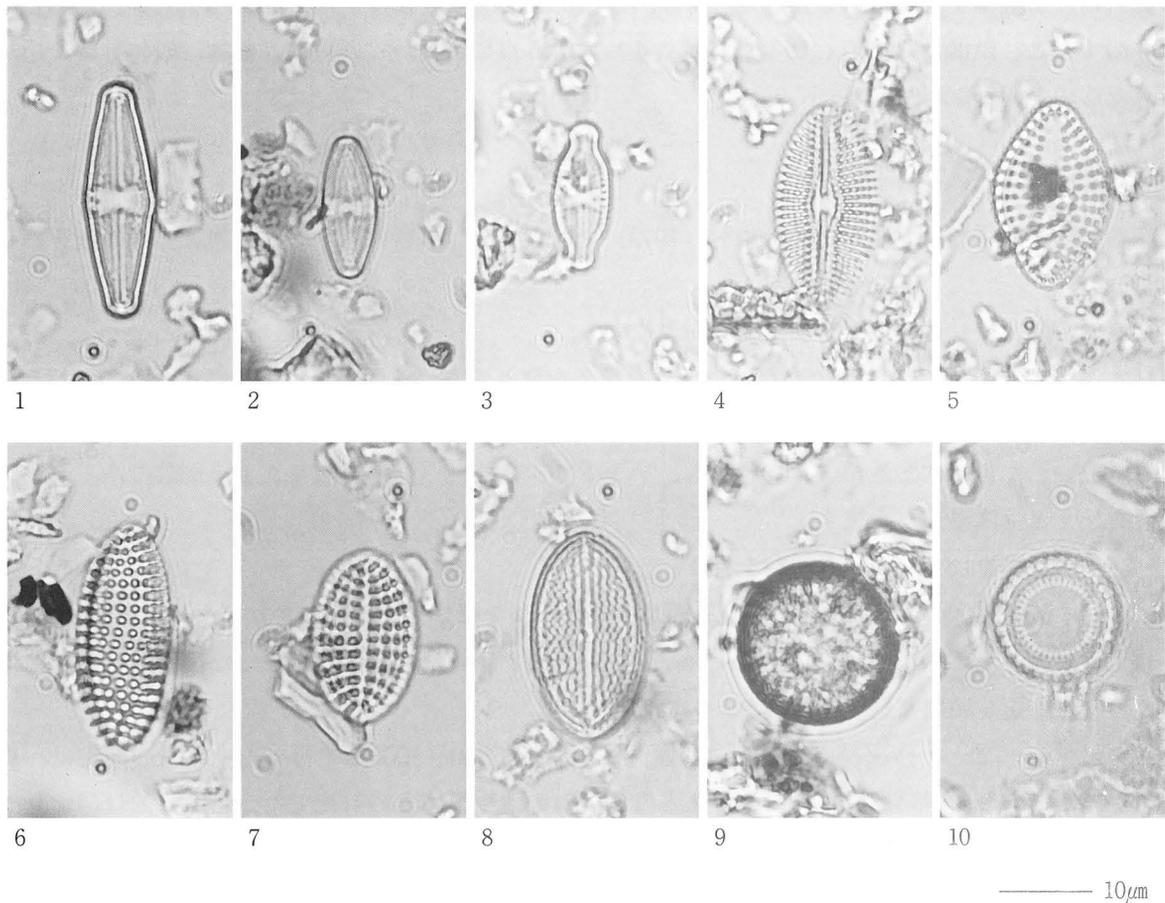
第318図 VI区 S D VI105における主要珪藻ダイアグラム

第319図 珪藻の顕微鏡写真 (1)



1. *Stauroneis phoenicentron* 2. *Cymbella graciles* 3. *Cymbella cymbiformis* 4. *Cymbella turgidula* v. *nipponica* 5. *Rhopalodia acuminatum* 6. *Amphola montana* 7. 8. *Achnanthes brevipipes* v. *angustata* 9. *Pinnularia acrosphaeria* 10. *Hantzschia amphioxys* 11. *Grammatophora macilenta*

第320図 珪藻の顕微鏡写真(2)



1. 2. *Navicula mutica* 3. *Navicula muticopsis* 4. *Diploneis ovalis* 5. *Rhophoneis surirella*  
 6. *Nitzschia granulata* 7. *Cocconeis scutellum* 8. *Cocconeis placentula* v. *euglypta* 9. *Melosira* sp  
 10. *Paralia sulcata*

なお、SDVI104では真塩性から中塩性（海水生から汽水生）の *Achnanthes brevipes* v. *angustata*、SDVI105でも真塩性の *Cocconeis scutellum* や *Grammatophora oceanica* が出現している。このような塩分を好む珪藻が出現する原因として、人の生活排水と乾燥により塩分濃度が高くなって塩分を好む珪藻が生育したこと、塩分濃度の高い泉源が付近にありその影響で塩分を好む珪藻が生育したこと、*Cocconeis scutellum* が海水藻場指標種群であることから、たとえば藻より生成された塩に珪藻が含まれそれらが堆積したことなどが考えられる。

〔文献〕

- 小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—。植生史研究，第1号，植生史研究会，p 29-44。  
 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究，27，p 1-20。

### Ⅲ. 花粉分析 (1)

#### 1. 試料

試料は、I区第1地区の第ⅡA-⑤層(試料1)・第ⅡA-⑨層(試料2・3)・第ⅡA-⑬層(試料5)の3層4点と、畝溝から採取した1点(試料4)の計5点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

#### 2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗いした後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗いした後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び水酢酸を加えた後、水洗いを行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作成する。

以上の物理・科学の各処理間の水洗いは、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作成後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

#### 3. 結果

分析の結果、草本花粉2、シダ植物孢子2形態の計4分類群が検出された。各分類群の学名、和名、粒数を表34に示す。

[草本花粉]

イネ科、アブラナ科

[シダ植物孢子]

単条溝孢子、三条溝孢子

#### 4. 考察

第ⅡA-⑨層上位(試料2)からはイネ科、アブラナ科が検出されたが、いずれもごく少量であり、植生や環境を復原するのは困難であった。その他の試料からは、花粉はまったく検出されなかった。花粉が検出されないのは、乾燥した堆積環境下で花粉遺体が分解されたためと考えられる。

花粉分析

表34 I区第1地区における花粉分析結果

分類群		試料				
学名	和名	1	2	3	4	5
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Gramineae	イネ科		1			
Cruciferae	アブラナ科		1			
Fern spore	シダ植物孢子					
Monolate type spore	単条溝孢子	7				3
Trilate type spore	三条溝孢子					3
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	2	0	0	0
Total pollen	花粉総数	7	0	0	0	3
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物孢子	7	0	0	0	6

〔参考文献〕

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

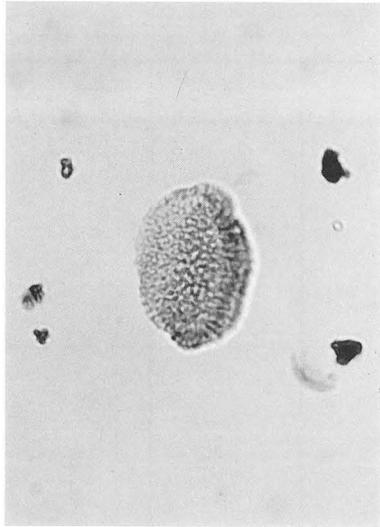
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標微．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

第321図 花粉・孢子遺体の顕微鏡写真



1 アブラナ科



2 シダ植物単条溝孢子



3 シダ植物三条溝孢子  $45\mu\text{m}$



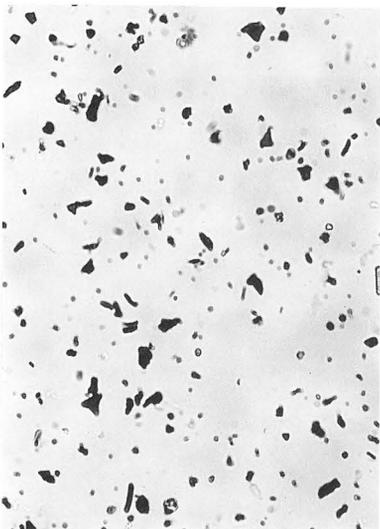
4 試料 1



5 試料 2



6 試料 3



7 試料 4



8 試料 5  $180\mu\text{m}$

## 花粉分析(2)

### 1. 試料

試料は、Ⅵ区第1地区検出の溝SDⅥ105の埋土から採取した11点(試料9~19)である。これらは、珪藻分析に用いられたものと同一試料である。

### 2. 方法

試料に以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から乾燥重量1gを秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、一晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗いを行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600~1000倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が200個体まで行い、少ない試料についてはプレパラート全面の精査を行った。

### 3. 結果

#### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉2である。これらの学名と和名および粒数を表35に示す。以下に出現した分類群を記す。

#### 〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、ハンノキ属

#### (2) 出現傾向

分析の結果、試料10からハンノキ属、試料12からマツ属複維管束亜属が検出されたが、いずれも微量である。また、寄生虫卵と消化残渣の観察も行ったが、いずれの試料からも検出されなかった。

### 4. 考察

花粉がほとんど検出されないことから、試料となった堆積物が花粉などの有機質の微遺体が堆積されない堆積環境か、あるいは分解される堆積環境であったことが考えられる。このことから、溝SDⅥ105は常時滞水するような環境ではなく、通常は水域を呈しない状態であったものと推定される。

#### 〔参考文献〕

中村純(1973)花粉分析. 古今書院, p.82-110.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純(1980)日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

表35 VI区 SDVI105における花粉分析結果

分類群		S D V I 105										
学名	和名	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
Arboreal pollen	樹木花粉											
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属				1							
Alnus	ハンノキ属		1									
Arboreal pollen	樹木花粉	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Total pollen	花粉総数	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

## IV. 炭化材の樹種同定

### 1. 試料

試料は、表36に示した4点の炭化材（試料20～23）である。（第9・10・38・257図）。

表36 岩崎遺跡出土炭化材一覧

試料番号	区	地区	出土地点	時期	備考
20	I	4	第II A-①層	14～15世紀後半	水田1を覆う土壌
21	II	1	第II A-⑥層	14～15世紀後半	水田2を覆う土壌
22	III	3	第II B-②層	13世紀	掘立柱建物検出層
23	VI	2	S K VI 204	弥生前期末～中期初頭	埋土中

### 2. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作成し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 3. 結果

結果を表37に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表37 岩崎遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料番号	樹種 (和名/学名)
20	針葉樹 conifer
21	マツ属複維管束亜属 Pinus subgen. Diploxyton
22	クマシデ属イヌシデ節 Carpinus sect. Carpinus
23	サクラ属 Prunus

a. マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxyton* マツ科 (第322図1)

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

b. 針葉樹 conifer

横断面、放射断面、接線断面共に保存状態が悪く、針葉樹の特徴を示すが、それ以上の同定は困難であった。

c. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Carpinus* カバノキ科 (第322図2)

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向に配列する放射孔材である。集合放射組織が見られる。

放射断面：道管の穿孔は、単穿孔である。放射組織は同性である。道管の内壁に、不鮮明ではあるが、らせん肥厚が見られる。

接線断面：放射組織は、同性で1～3細胞幅のものと、集合放射組織からなる。

以上の形質よりクマシデ属イヌシデ節に同定される。クマシデ属イヌシデ節は落葉の中～高木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。なお、イヌシデは落葉高木で、高さ12m、径60cmに達する。

d. サクラ属 *Prunus* バラ科 (第322図3)

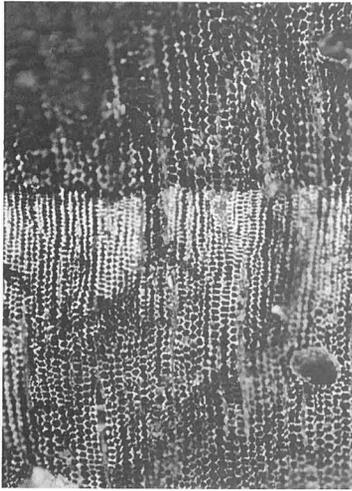
横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で1～4細胞幅である。

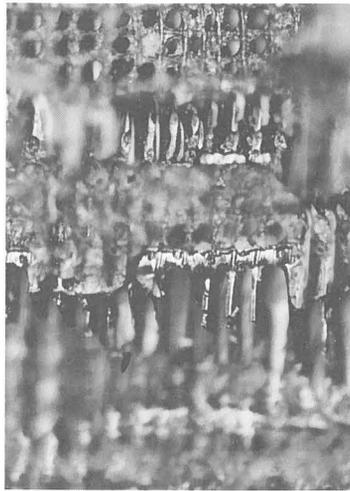
以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

第322図 岩崎遺跡出土炭化材の顕微鏡写真

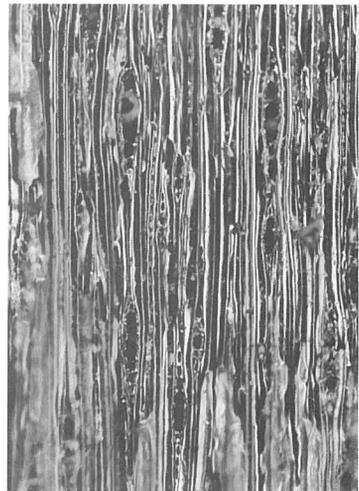


横断面 ————— : 0.4mm

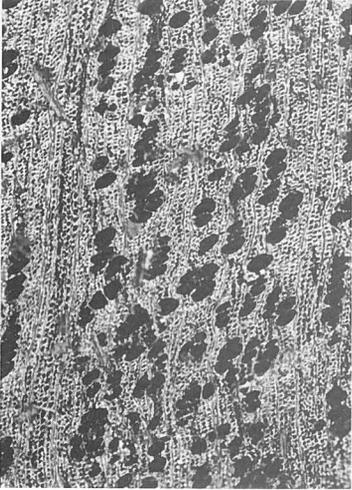
1. マツ属複維管束亜属



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.2mm

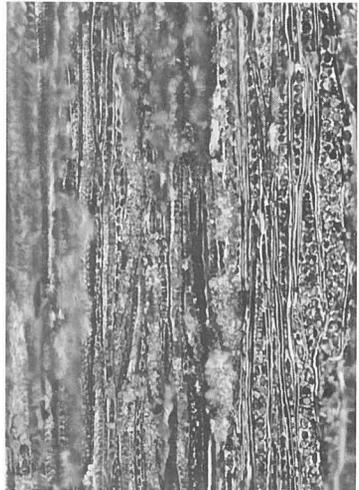


横断面 ————— : 0.4mm

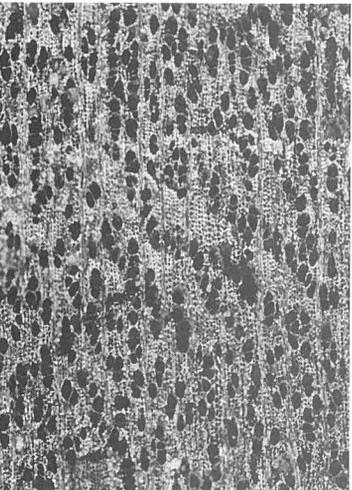
2. クマシデ属イヌシデ節



放射断面 ————— : 0.2mm

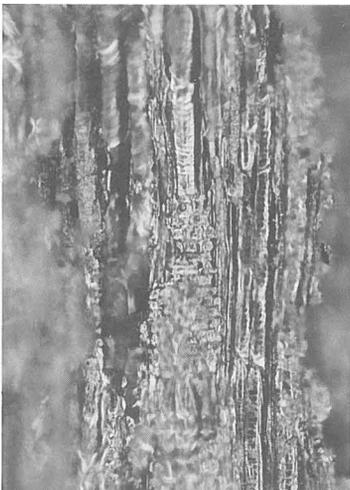


接線断面 ————— : 0.2mm

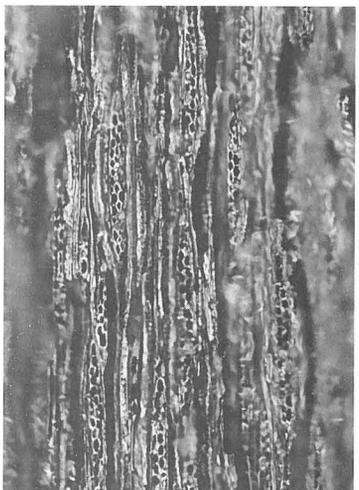


横断面 ————— : 0.4mm

3. サクラ属



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

## 4. 所 見

岩崎遺跡から出土した炭化材の樹種は、マツ属複維管束亜属、針葉樹、クマシデ属イヌシデ節、サクラ属であった。いずれの樹種も照葉樹林や二次林の林内に生育する種類であり、周辺地域で普通に供給される樹木であったと考えられる。

## V. 種 実 同 定

## 1. 試 料

試料は、VI区第1地区第V層（弥生時代中～後期）から出土した種実類（12点）である（第323図）。

## 2. 方 法

肉眼および実体顕微鏡で試料を観察し、同定を行った。同定は形態的特徴および現生標本との対比によって行った。同定レベルによって科、属、亜属、種の分類群によって表した。

## 3. 結 果

同定の結果、いずれもコナラ属の堅果内部の炭化した子葉であった。表38に分類群の学名、和名、部位および粒数を示した。

表38 種実同定結果

出 土 地 点	時 期	分類群（学名／和名）	部 位	粒 数
第V層	弥生中～後期	Quercus コナラ属	堅果（炭化子葉）	12（半割）

コナラ属 *Quercus* 堅果（炭化子葉）ブナ科

黒色で楕円形を呈し、表面は比較的滑らかである。堅果の内部の子葉の炭化したもので、いずれも半割の状態である。やや小型であるため、コナラ属アカガシ亜属の可能性が高いが断定できない。

## 4. 考 察

VI区第1地区の第V層（弥生時代中～後期）から出土した種実類は、コナラ属堅果（炭化子葉）であった。コナラ属の堅果は優良な食物であり、本遺跡の弥生時代においても利用されていたとみなされる。なお、コナラ属の堅果はイチイガシのみが渋抜きなしで食用になり、他は渋抜きが必要である。

## 〔参考文献〕

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p. 276-283.

渡辺誠（1982）採集対象植物の地域性．季刊考古学創刊号，雄山閣出版，p.28-31.

第323図 岩崎遺跡出土の種実写真



1 コナラ属堅果 — 1.0mm



2 同左 — 1.0mm



3 コナラ属堅果 — 1.0mm



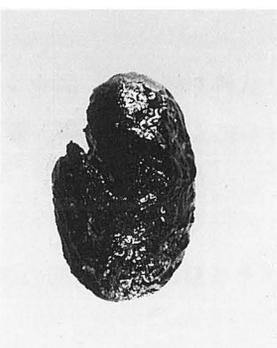
4 同左 — 1.0mm



5 コナラ属堅果 — 1.0mm



6 同左 — 1.0mm



7 コナラ属堅果 — 1.0mm



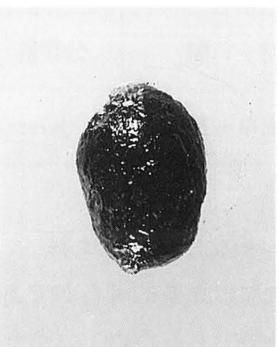
8 同左 — 1.0mm



9 コナラ属堅果 — 1.0mm



10 同左 — 1.0mm



11 コナラ属堅果 — 1.0mm



12 同左 — 1.0mm



13 コナラ属堅果 — 1.0mm



14 同左 — 1.0mm



15 コナラ属堅果 — 1.0mm



16 同左 — 1.0mm

## 第10章 調査の成果

岩崎遺跡は、石手川によって形成された扇状地上に広がる、縄文時代後期から中近世にわたる集落遺跡である。岩崎遺跡が立地する道後城北遺跡群は、松山平野内において有数の遺跡密集地帯であり、今回の調査により、遺跡群東部地域の集落様相が明らかになってきた。

第1章で触れたように、発掘調査は総面積13,000m<sup>2</sup>におよぶが、調査区幅10m前後という狭小範囲の調査であるため、集落全体が検出されたわけではない。よって、今回の調査では集落の一部をかいまみただけになるが、弥生時代前期末～中世までの集落の実体を解明する手がかりを得ることになった。

ここでは、まず遺跡の様相を地形変遷と集落変遷で整理し、次に弥生時代前期末～中期初頭の土坑群、土器、石器及び貝殻施文土器、続いて施釉陶器、暗文土師器、動物遺存体についてまとめを行うことにする。

### I 地形の変遷

#### 1. 立地と地域区分

岩崎遺跡は、石手川によって形成された扇状地の扇央部分に位置する。遺跡の北側は微高地を形成しており、わずかに東から西へ向けて緩やかな傾斜をなす。一方、南側は現在の石手川が流れており、北東から南西に向けて傾斜をなしている。現況では、調査地の地形は北から南に向けて傾斜をなし、調査地北端で標高38m、南端では36mを測る。

第2章で示したように、岩崎遺跡は地形、堆積物、堆積環境の違いにより三つのエリアから構成されている。第1エリアは調査地の南側、I区からII区南側に設定したA地点までの地域、第2エリアはII区A地点からV区に設定したB地点までの地域、第3エリアはV区B地点からVI区までの地域とする(第324図)。

第1エリア：調査地の中で最も低い位置にある。第IX層の洪積礫層上には、第VIII層灰白色の砂礫層が堆積し、その上には中世の水田土壌である第II層、さらに近現代の第I層が堆積する。この地域は、中世に土壌が安定し、水田や畑といった生産地として利用され、居住化が進むのは近代以降であった。

第2エリア：第IX層上には、第VIII層が第1エリアよりも厚く堆積し、その上には、第IV層灰オリブ色土、さらに第III層から第I層が堆積する。この地域は第IV層が堆積をなすことで、古墳時代後期には居住化が進んでいる。

第3エリア：基本層位の第I層から第IX層までが、すべて堆積している。三つの地域の中では最も早く居住化が進み、第VII層明黄褐色シルトが堆積することで、弥生時代前期後半には集落が営まれ、以後、現代まで続く。

#### 2. 時期区分

次に、時代毎の土層の堆積状況をみる。時代区分は0期からVI期までとする(表39)。

まず、集落が出現する以前、すなわち第VIII層が堆積する縄文時代中期以前を0期とする。I期は、第VII層が堆積し、縄文時代後期～弥生時代中期初頭までの集落が展開する時期、II期は、第V層が堆積し、弥生時代中期～後期の集落が形成される時期とする。III期は、第IV層堆積に伴い古墳時代の集落が形成される時期、IV期は、第III層堆積に伴い古代の集落が形成される時期をあてる。さらに、V

期は、第Ⅱ層堆積に伴い中世の集落が形成される時期、Ⅵ期は、近世の集落が形成される時期とする。

- 0期：第Ⅷ層堆積以前、縄文時代中期以前
- I期：第Ⅶ層堆積後の縄文時代後期～弥生時代中期初頭
- Ⅱ期：第Ⅴ層堆積後の弥生時代中期～後期
- Ⅲ期：第Ⅳ層堆積後の古墳時代
- Ⅳ期：第Ⅲ層堆積後の古代
- Ⅴ期：第Ⅱ層堆積後の中世
- Ⅵ期：近世

続いて、各時期の土層堆積と集落造営についてみる（第324～326図）。

1) 0期（縄文時代中期以前）

調査では、約4万年前に形成したとされる石手川の洪積礫層（第Ⅸ層）を検出した。遺跡南側、第1エリアは石手川の本流により基盤層は侵食され、上流から運ばれた礫が堆積する。一方、第2エリアは石手川本流の氾濫により河川氾濫堆積物が堆積し、さらに、第3エリアでは様々な流路により地表面が削られながら地山が形成され、その削り残しは尾根状になり微高地が形成されるようになる。

礫層を構成する礫種は、花崗岩と砂岩であり、礫径は30～40cmを測る。礫層上位には、黒化したクサリ礫を検出した。本層上面は、調査地南端が最も低く標高34.2m、北端が最も高く36.0mを測る。

第Ⅸ層の上部、第Ⅷ層の堆積状況は、Ⅱ区A地点を境にして異なっている。A地点より南側の第1エリアでは、比較的大型の礫を含む砂礫層を検出した。礫と礫の間には粗砂を多量に含み、速い水流が通っていたものと判断した。

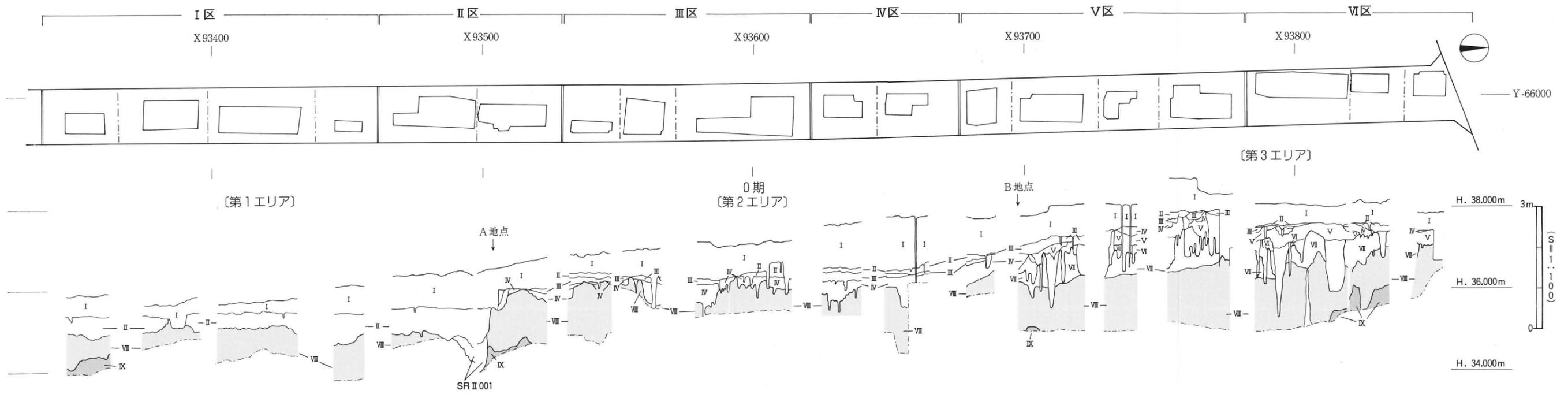
一方、A地点より北側、第2・第3エリアでは、径5～20cm大の礫を含む砂礫層を検出した。砂礫層は、上面・下面共に起伏に富み、調査地北側へいくほど礫は小型化する。しかも、砂礫層上位には粗砂や微砂を含む砂層が、砂礫層と同様の堆積状況をなしていた。

これらのことから、A地点より南側の第1エリアで検出した砂礫層は、石手川の本流により堆積したものであり、A地点より北側の第2・第3エリアで検出したそれは、石手川の氾濫により堆積した河川氾濫堆積物となる。

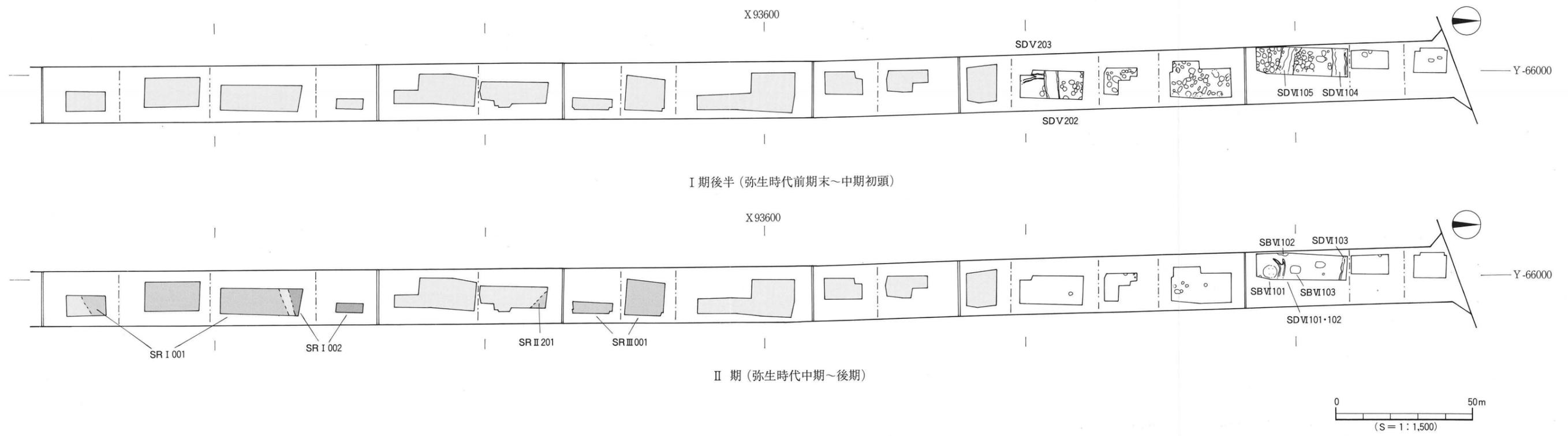
なお、0期は堆積土層の違いから、第Ⅸ層堆積時期を0期前半、第Ⅷ層堆積時期を0期後半とする。

表39 岩崎遺跡における地理的変遷

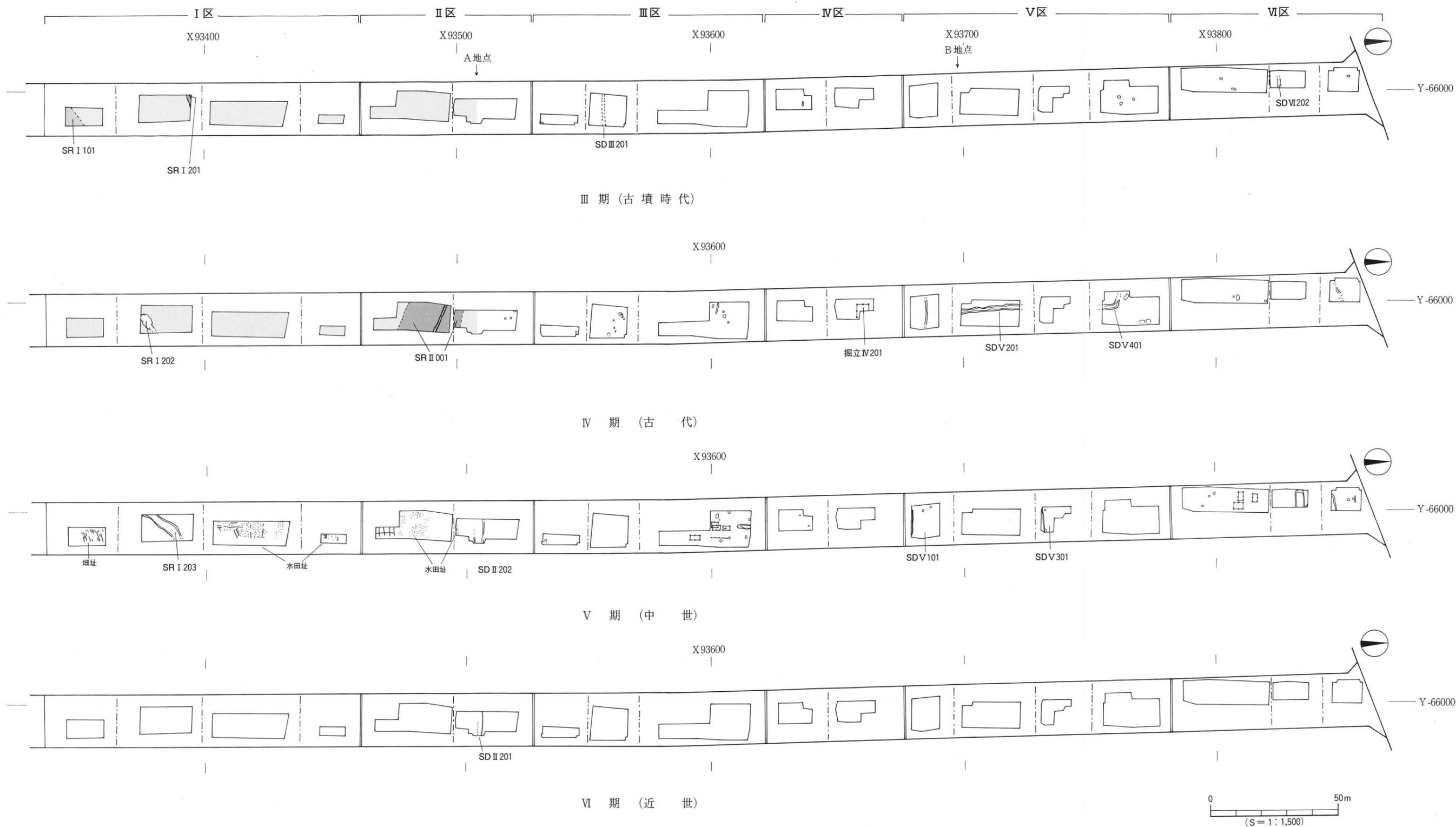
時期	地域	第1エリア	第2エリア	第3エリア
0期	前半	←	河川	→
	後半	←	河川	→
I期	前半	←	河川	→
	後半	←	河川	集落
Ⅱ期	期	←	河川	集落
Ⅲ期	期	←	河川	集落
Ⅳ期	期	←	河川	集落
Ⅴ期	期	←	水田・畑	集落
Ⅵ期	期	←	集落	→



第324図 岩崎遺跡の土層堆積図



第325図 岩崎遺跡の集落変遷図(1)



第326図 岩崎遺跡の集落変遷図(2)

## 2) I期(縄文時代後期～弥生時代中期初頭)

調査地北側の第3エリアでは縄文時代後期までに、第Ⅶ層明黄褐色シルトが堆積し、居住に適した安定的な地表面を形成する。その後、弥生時代前期末には集落が形成されることになる。

第Ⅶ層上面は、第3エリア中央のV区第4地区が最も高く、標高37.4mを測り、北側と南側に向けて緩やかに傾斜をなしている。第Ⅶ層の堆積は、V区第4地区が最も厚く、層厚は1mにおよぶ。一方、第1・第2エリアは、この時期には多数の流路が流れている。

I期は第Ⅶ層堆積時期をI期前半、第Ⅶ層堆積後をI期後半とする。

## 3) II期(弥生時代中期～後期)

調査地北側、第3エリアでは第Ⅴ層黒褐色土が厚さ30cm前後の堆積をなし、安定した地盤を形成している。それに伴い弥生時代中期中葉から後期後半に集落が営まれる。一方、第1・第2エリアはI期と同様に、流路が流れる状況にある。

## 4) III期(古墳時代)

古墳時代になると、第2・第3エリアには、第Ⅳ層の灰オリーブ色土が堆積し、地表面を形成する。第Ⅳ層上面は北側に向けて高くなり、第2エリア南端は標高35.6m、第3エリア北端では標高37.4mを測る。堆積は、第2エリア中央部のⅢ区第2・第3地区が最も厚く、層厚は50cm前後を測る。一方、第1エリアでは、先行堆積物を開折して、流路が形成される状況にある。

## 5) IV期(古代)

古代になると、第2・第3エリアに第Ⅲ層褐灰色土が堆積し、地表面を形成する。第Ⅲ層上面は北側に向けて高くなるが、第3エリア中央部のV区第3・第4地区が最も高くなり(標高37.8m)、その後は第3エリアの北端に向けて低くなっていく。第1エリアではⅢ期と同様、流路形成が続いている。

## 6) V期(中世)

中世、12～13世紀になると全域の土地が安定化する。第2・第3エリアは第Ⅱ層灰黄～灰黄褐色土が堆積し、地表面を形成する。層厚は10～20cmであるが、上部は近現代の造成により削平されている。

一方、第1エリアには水田土壌や畑土壌がみられ、層厚50～80cmを測る。水田は少なくとも3時期あり、いずれも洪水砂で埋没し、12～15世紀後半まで存続していたものと推測される。

## 7) VI期(近世)

近世では、第2エリア南端、Ⅱ区A地点にて溝1条を検出したが、溝上部は近現代の造成により大半が削平されている。地表面や堆積状況は分からない。

## 3. まとめ

上記のとおり、調査地北側、第3エリアが最も早い段階に土地が安定化し、まず、弥生時代前期末に集落が開かれ、弥生時代中期～後期には断続的に集落が営まれている。さらに、古墳時代後期から古代、特に奈良時代においては、官衙や寺院に関連すると思われる遺構が比較的多く検出されている。その後、中世では13～15世紀頃まで集落が継続的に営まれるようになる。

調査地中央部、第2エリアは古墳時代後期になり、土地が安定化する。古代、平安時代には掘立柱建物址が検出され、中世13～15世紀代には建物址や溝が散見されるようになる。

一方、調査地南側、第1エリアは中世、12～13世紀頃になりようやく土地が安定化し、人々は水田や畑を営むようになる。建物址や土坑などの遺構は検出されておらず、居住のためのエリアではないことが分かる。第1エリアが居住地化するのには近世以降である。

## Ⅱ 集 落 の 変 遷

調査では、弥生時代前期末から中近世までの集落遺構を確認した。

ここでは、集落遺構の変遷をみることにする。記述に際しては、前節の時期区分（Ⅰ期からⅥ期）を用いて、各時期の遺構と遺物について整理する。

### 1. Ⅰ期後半（弥生時代前期末～中期初頭）

#### 1) 遺 構

岩崎遺跡において集落活動が始まる時期である。遺構と遺物は、共に遺跡北部の微高地、第3エリアに分布する。これは、前述した第Ⅶ層明黄褐色シルトの堆積に起因するものであり、土地の安定化に伴い集落が形成されたものである。一方、調査地中央部から南側、第1・第2エリアでは、第Ⅶ層は堆積せず、数条の流路が流れる状況にある。

調査では、第3エリアにて溝4条と土坑185基を検出したが、竪穴式住居址は検出されなかった。

4条の溝のうち、3条の溝SDV202・SDVI104・SDVI105は、溝幅5m前後、深さは1.3～1.5mを測り、規模の大きな遺構になる。残りの1条SDV203は、SDV202への取水水路と考えている。

SDV202とSDVI104は、溝の形状、断面形態（逆台形状）、埋土、堆積状況が類似することから、同一の溝と判断した。溝埋土の堆積状況からは、溝の下部は滞水状態にあったものと推測された。さらに、中層堆積以前には二次的な掘削（再掘削）が行われており、その後に、炭化物と土器・石器が廃棄されている。

一方、SDVI105は断面形態（U字状）と堆積状況がSDV202・SDVI104と異なっている。特に、埋土中に砂の混入があまりみられないことから、空掘りの壕と判断した。遺物は、SDV202・SDVI104から出土したものと時期差がほとんどなく、少なくとも一定期間併存していたことが分かる。

したがって、SDV202とSDVI104は環壕としての機能を有しており（溝内側間100m）、さらに、SDVI105は、SDV202とSDVI104とで囲まれた地域（以下、環壕内地域と呼称）を区切る仕切溝の可能性をもっている。

次に、検出数が莫大な土坑を整理しておく。Ⅰ期に時期比定されるものは185基あり、Ⅴ区には100基、Ⅵ区には85基がある。このうち、環壕内地域には179基もの土坑が存在する。埋土や切り合いより6種類（土坑A～F）の土坑に分類され、かつ、切り合い関係から土坑Fが古く、順に土坑E→土坑D→土坑Aとなる。各土坑から出土した遺物には大幅な時期差は認められず、溝4条と概ね同時期になる。また、堆積状況からも、単一層で埋没するものが多く、短期間の埋め立て、掘り直しが行われたものとみられる。土坑についての詳細は、本章の「Ⅶ 弥生時代前期末～中期初頭の土坑」で述べることにする。

3条の溝SDV202・SDVI104・SDVI105と土坑との切り合い関係は、土坑CがSDV202下層を切り、土坑C・D・EをSDVI105が切っている。さらに、土坑AはSDVI105を切っている。つまり、SDV202は土坑C埋没以前、SDVI105は土坑C埋没以降に掘削された溝になる。

まとめると、SDV202とSDVI104が掘削された後、両溝で囲まれた地域内に土坑Fが構築され、その後、土坑Eが構築される。引き続き、土坑Dが構築されるが、この段階で溝は再掘削される。再掘削後には土坑Cが構築され、続いて土坑Bが構築される。なお、土坑BとSDVI105との掘削時期は切り合いがなく、前後関係は定かではない。そして、最後にSDVI105埋没後に、土坑Aが構築さ

れることになる。この間の詳細は、本章の「Ⅷ 弥生時代前期末～中期初頭の集落変化」で記述する。

## 2) 遺物

I 期に時期比定される土器の大半は、梅木編年前期Ⅳの段階に比定されるものである。器種には、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、高坏形土器、ミニチュア土器があり、1,090点が出土している。遺物には東北部九州の遠賀川流域以東でみられる城ノ越式土器や、響灘～周防灘周辺でみられる土器や石器が含まれており注目される。

また、S D VI105内からは分銅形土製品が1点出土している。愛媛県内では従来、弥生時代中期～後期の遺構や包含層中から出土する例がほとんどであり、今回の出土は最も時期の古い資料になる(注 今治市阿方遺跡で出土)。

## 2. II 期 (弥生時代中期～後期)

### 1) 遺構

II 期の遺構は、I 期と同様に調査地北側の微高地上、第3エリアに分布する。中期の遺構には堅穴式住居址1棟、溝1条、土坑3基があり、後期の遺構には堅穴式住居址2棟、溝2条、土坑3基がある。なお、明確な時期比定はしかねるが、第II期の遺構として土坑4基がある。

中期前葉：遺構と遺物は、共に検出されていない。

中期中葉：遺構には、VI区第1地区で検出した溝S D VI103がある。前期末～中期初頭の溝S D VI104の上面で検出したもので、東西方向に延びる溝である。埋土中に砂や小礫を含む。

中期後葉：遺構には、堅穴式住居址1棟と土坑3基がある。S B VI102は、VI区第1地区で検出した住居址で、住居の一部を検出したにすぎず、平面形態や内部施設は不確定である。土坑は、V区第2地区でS K V203、VI区第1地区でS K VI115、VI区第2地区でS K VI207をそれぞれ検出した。このうち、S K VI115は平面形態が楕円形を呈し、断面形態は一部が袋状となり、貯蔵穴の可能性はある。

後期前葉：遺構には、堅穴式住居址1棟と溝1条がある。S B VI101は、VI区第1地区で検出した、一辺6mの円形住居址で、4本の主柱穴をもつ。S B VI101は、改築(貼床)が施されており、改築前と改築後にはそれぞれ炉を付設していた。溝S D VI101は、VI区第1地区の南側で検出したもので、S D VI102と重複する。

後期後葉：遺構には、堅穴式住居址1棟と土坑3基がある。S B VI103は、VI区第1地区中央部で検出したもので、長さ3.90m、幅2.85mの長方形住居址である。主柱穴は確定できなかった。S B VI101と同様に、改築(貼床)が施されており、改築前と改築後にはそれぞれ楕円形状の炉を付設している。埋土中や住居址床面付近では、焼土や炭化物が検出されたことから、焼失住居の可能性はある。土坑はV区第4地区にて、S K V405・S K V435・S K V467の3基を検出した。このうち、S K V405は長方形土坑で、埋土中や基底面より径5～15cm大の石が数点出土した。遺物の出土状況から土壙墓の可能性はある。

### 2) 遺物

遺物は、遺構及び第V・VI層中から出土した。

第V層中からは、中期中葉から後期後葉の遺物が比較的多く出土した。この中には、讃岐地方からの搬入品1点と外来系土器2点(吉備地方・山陰地方)の出土がある。また、第V層中からは、炭化

した種実が少量出土しており、分析の結果、コナラ属の堅果（炭化子葉）であることが判明している。

### 3. Ⅲ期（古墳時代）

#### 1) 遺構

今回の調査のうち、Ⅲ期の遺構は他の時代に比べ、検出例が少ない。古墳時代前期～中期の遺構と遺物は検出されておらず、後期のものに限られる。検出した遺構は、溝2条、自然流路2条、土坑9基である。溝や土坑といった集落関連遺構は、調査地中央部から北側の第2・第3エリアに、自然流路は、調査地南側の第1エリアに分布が分かれている。

溝は、Ⅲ区とⅥ区でそれぞれ1条ずつを検出した（S D Ⅲ201・S D Ⅵ202）。両者は東西方向に延びる溝で、特にS D Ⅲ201からは比較的まとまった量の遺物が出土している。

土坑は、第2・第3エリア内に点在しており、平面形態は円形・楕円形・長方形の3種類がある。このうち、Ⅴ区第4地区検出のS K V475は長方形土坑で、長さ2m、幅1mを測り、基底面中央部には径20～30cm大のピット4基が長軸方向に並ぶ。ピットの配置から、屋根持ち構造の可能性がある。

なお、住居址は未検出であるが、調査地の西方約200mの持田町3丁目遺跡からは、当該期の住居址が多数検出されている。本調査検出の溝や土坑は、これらの集落に伴うものと考えている。

#### 2) 遺物

遺物は、遺構及び第Ⅳ層中から出土した。遺構内からは古墳時代後期後半、第Ⅳ層中からは古墳時代後期前半から後半までの遺物が出土している。第Ⅳ層中からは比較的多量の土師器や須恵器が出土しており、なかには完形品も少量含まれている。

### 4. Ⅳ期（古代）

#### 1) 遺構

Ⅳ期の遺構は、掘立柱建物址1棟、溝7条、自然流路2条、土坑28基である。

建物址、溝、土坑は調査地中央部から北側の第2・第3エリアに点在し、自然流路は調査地南側の第1エリアを流れている。Ⅰ区では11世紀後半の流路S R Ⅰ202、Ⅱ区では8世紀の流路S R Ⅱ001を検出したため、第1エリアは12世紀頃までは自然流路が流れる状況にあり、土地が安定していないことが分かる。

第2エリア中央部、Ⅳ区では平安時代、10世紀頃の掘立柱建物址1棟（掘立Ⅳ201）が検出されている。2間×2間以上の建物址で、ほぼ真北方向に建物方位をとる。

特筆すべき遺構は、第3エリアⅤ区で検出した溝S D V201とS D V401があげられる。両者は真北から西に4°方位をとる南北方向の溝で、断面形態や埋土、検出状況が類似しており、同一の溝と判断される。S D V401は、溝北端が西側に向けて「L」字状に屈曲し、S D V201の南端は調査区外に続くが、S D V201南方のⅤ区第1地区では検出されておらず、S D V201も途中で屈曲している可能性がある。とすると、両者は「コ」字状を呈することになり、区画溝の可能性が高い。その場合、溝の内径は65～68mを測る。

#### 2) 遺物

遺物は、遺構及び第Ⅲ・Ⅳ層中から出土した。遺構内からは、前述の溝S D V201内より、奈良時代、8世紀中葉から後葉の復元完形品を含む土師器・須恵器が多数出土した。円面硯（破片）1点と、

畿内産土師器2点（平城Ⅰ・Ⅲ期）のほか、赤色塗彩や暗文を施す土師器がある。また、SDV201からは土師質の小型土製馬（土馬）が1点出土している。愛媛県内では、松山市平井遺跡（昭和57年愛媛県埋蔵文化財調査センターの調査）から、土馬と考えられる須恵器製品の破片が出土している。全体像がわかる資料としては今回が初例になる。このほか、第Ⅲ層中からは、7世紀後半～11世紀の遺物が出土し、土師器・須恵器・瓦のほか、緑釉陶器と灰釉陶器の破片と鉄器が含まれている。

## 5. V期（中世）

### 1) 遺構

V期の遺構は掘立柱建物址7棟、柵列1条、溝23条、土坑22基、自然流路1条、水田址、畑址である。検出した遺構は、調査地の北側と南側とでは様相が異なっている。調査地中央部から北側の第2・第3エリアでは、建物址や土坑を検出したが、調査地南側の第1エリアではこれらの遺構はまったく検出されず、水田や畑に伴う足跡・鋤跡と畝溝を検出したにすぎない。

第1エリア：水田址は少なくとも3面（水田1・水田2・水田3）を確認した。畦畔と水路は平面調査で検出できなかったことで、水田区画や形状は明確ではない。水田は、灰～灰白色の粗砂や微砂などの洪水砂で埋没し、人間や牛と思われる足跡と鋤跡を多数検出した。特に、牛の足跡は鋤跡とほぼ同じ方向で検出されたことから、水田は開墾時に埋没したものと推測される。最も古い水田3は12～13世紀、水田2と水田1は13世紀以降、15世紀後半以前に埋没したものと判断した。

水田に伴う遺構は、Ⅱ区検出の溝SDⅡ202があげられる。真北方向にほぼ直交する東西方向に延びる溝で、SDⅡ202の南側に限り水田が展開している。溝内には多少の砂を含むことや、その配置状況から、水田に水を供給する基幹水路と考えている。

畑址は、調査地南端Ⅰ区第1地区にあり、東西方向の畝溝を30条検出した。畝は、平面調査及び土層断面観察においても検出されなかった。畝溝は水田址と同様、洪水砂で埋没している。時期は、畑址を覆う土壌内から13世紀代の遺物が出土していることより、水田3と同様に、12～13世紀頃に埋没したものとみられる。

なお、畑土壌を分析した結果、プラントオパールが比較的多量に検出された（第9章 自然科学分析）。つまり、Ⅰ区は畑だけでなく、水田としても土地利用された可能性が高く、いわゆる二毛作が当時行われていたものと推測される。

第2・第3エリア：調査地中央部から北側、第2・第3エリアでは、建物址や柵列、土坑、溝を検出した。掘立柱建物址は、第2エリアの中央部Ⅲ区と、第3エリア北側Ⅵ区に分布が限られる。1×2間の比較的小型の建物址で、ほぼ真北方向に建物方位をとる。時期は、柱穴内から出土した遺物より、14世紀代の建物址と判断した。建物がⅢ区とⅥ区の範囲内に点在することや、規模が小さいことから、一般民衆、もしくは農村集落に伴う建物址の可能性が高い。

溝は第3エリアにて8条を検出した。このうち、V区の溝SDV101とSDV301は東西方向に延びる溝で、現在の生活道路とほぼ平行に走っており、集落を区画する溝の可能性を考えている。

### 2) 遺物

遺物は、遺構及び第Ⅱ層中から出土し、13～15世紀後半頃までに時期比定されるものが多い。調査地北東部には、中世河野氏の築城とされる湯築城址があるが、今回の調査では築城時の遺構や遺物は出土していない。第Ⅱ層の堆積状況から、当時の土壌はかなり削平されているものと推測される。

調査地北側の第2・第3地区に堆積する第ⅡB-②層中からは13～14世紀、第ⅡB-①層中から14～15世紀代の遺物が出土している。

遺物は土師器・須恵器（東播系）のほか、輸入陶磁器9点が出土している。輸入陶磁器は青磁5点と白磁4点で、すべてが破片である。青磁は、形態と施釉状況からいずれも龍泉窯系の椀で、森田・横田氏分類のⅠ類～Ⅳ類までのものがある。白磁には椀と皿とがある。椀には玉縁状口縁を呈するⅡ類とⅣ類があり、皿にはⅨ類（口禿げ）のものがある。出土した輸入陶磁器の時期は、12～15世紀代に時期比定される

## 6. VI期（近世）

### 1) 遺構

第Ⅵ期の遺構は、調査地南側の第2エリアにて溝1条を検出した。

S D II 201は、真北方向に直交する東西方向に延びる溝である。溝内には15～30cm大の角礫が2～3段積み、溝に沿って並列する。礫の状況から石組み溝の可能性はある。出土遺物より、18世紀代の溝と判断した。

### 2) 遺物

遺物は、S D II 201出土品に限られる。S D II 201内からは、土師器、肥前焼、青花皿が出土し、青花皿は16世紀後半に時期比定される。

## 7. まとめ

調査では、岩崎遺跡における弥生時代前期末から中近世までの集落変遷をかいまみることができた。

まず、調査地内における集落の出現はⅠ期後半、つまり弥生時代前期末～中期初頭になり、環壕を伴った集落が存在することを明らかにした。

引き続き、Ⅱ期（弥生時代中期～後期）には集落が断続的に経営されることになる。その後、Ⅲ期では古墳時代前期～中期には集落遺構は検出されず、後期になり出現する。さらに、Ⅳ期（古代）では区画溝の可能性をもつ奈良時代の溝や平安時代の建物址のほか、畿内産土師器や施釉陶器の出土があり、継続的に集落が営まれていたことがわかる。

Ⅴ期（中世）では、調査地の南側の低地部には水田や畑、北側の微高地上には建物址や土坑が検出された。つまり、調査地内において、居住域と生産域といった目的の異なった土地利用がなされていることが判明した。

このように、本調査では岩崎遺跡の集落居住域が、時代と共に調査地の南部に拡大していった様子を推察するに至った。

### 〔参考文献〕

- 1 阪本安光 1982 「平井遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 2 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』
- 3 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』

### Ⅲ 弥生時代前期末～中期初頭の土器

#### 1. はじめに

今回の調査では、弥生時代前期末から中期初頭までの集落関連遺構より多量の遺物が出土した。

このうち、調査地北側のV・VI区にある溝SDV202・SDVI104・SDVI105では、層位的に調査を進め、完形品を含む多くの遺物が出土している。

本稿では、これら3条の溝から出土した土器を整理・検討し、松山平野における弥生時代前期末から中期初頭の土器編年の資料充実につとめるものである。ここでは、3条の溝から出土した土器の器種構成、器形（形態）、施文、調整について整理を行う。なお、資料の出土状況については「第7章3、第8章3. 弥生時代前期末～中期初頭の遺構と遺物」にて報告しているため、記述は省略する。

#### 2. 器種構成と比率（第327図・表40）

器種には、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器（甕用）、高坏形土器、ミニチュア土器がある。このほか、特殊な土製品としてSDVI104上層からは棒状の土製品、SDVI105中層からは円盤状の土製品、SDVI105（地点不明）からは分銅形土製品がそれぞれ1点ずつ出土している。

各器種の出土点数は、甕形土器562点、壺形土器212点、鉢形土器80点、蓋形土器12点、高坏形土器3点、ミニチュア土器6点となる。器種構成比では、甕形土器64%、壺形土器24%、鉢形土器10%、蓋形土器1%、高坏形土器0.3%、ミニチュア土器0.7%となる。甕形土器と壺形土器をあわせると88%となり、この二器種が主要器種となっている。鉢形土器は個体識別において、甕形土器との区別で曖昧なものがあり、わずかに増加を考えてみても15%程度であろう。

つづいて、器種ごとに形態を主として、施文・調整について試みる。

表40 器種構成と分類

器種 形態 出土地点	甕形土器						壺形土器					鉢形土器						蓋形土器	高坏形土器	ミニチュア土器	その他			
	中型			大型			中型				大型	小型	中型			大型								
	I	II	III	I	II	I	I	II	III	IV			I	I	II	III	I					II	I	III
SDV202	下層	32	25	1	0	2	0	19	1	0	6	5	0	5	2	5	0	2	0	0	4	0	1	0
	中層	45	42	2	0	2	0	21	2	3	2	1	0	4	3	2	0	1	0	0	1	0	1	0
	上層	23	22	0	0	1	0	13	2	2	3	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0
	小計	100	89	3	0	5	0	53	5	5	11	6	0	11	5	7	0	3	1	0	5	0	4	0
SDVI104	下層	18	10	0	0	0	1	12	0	2	2	4	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0
	中層	17	11	0	0	1	0	15	0	4	7	1	0	4	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0
	上層	64	56	2	0	0	0	18	1	7	1	2	0	3	1	1	0	0	0	0	2	0	0	1
	層不明	1	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
小計	100	77	2	0	1	2	45	1	15	10	7	1	7	2	2	1	1	0	0	3	2	1	1	
SDVI105	下層	16	10	0	0	0	1	5	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
	中層	54	58	3	2	0	0	20	1	3	2	4	1	10	12	4	0	1	0	1	3	0	0	1
	上層	17	21	0	0	0	0	7	0	2	0	3	0	5	4	0	0	2	0	0	1	0	0	0
	層不明	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
小計	88	89	3	2	0	1	33	1	7	2	9	1	15	16	4	0	3	0	2	4	1	1	2	
合計	562						212					80						12	3	6	3			

### 3. 形態

#### (1) 甕形土器

口径が35cmを越える大型品、16～28cmの中型品、16cm未満の小型品がある。なお、口径が29～34cmまでのものはない。このうち、中型品の出土量は562点中551点あり、全体の98%を占め、特に、口径25～28cmのものと、口径20cm前後のものが高い割合を占める。

甕形土器の器形は、胴部にやや膨らみをもち、胴上半部が直立気味に立ち上がるものが多く、なかには胴上半部が頸部ですぼまり、口縁部形状が逆「L」字状になるものもある。なお、胴部最大径が口径を凌ぐものはない。底部は厚みのある平底が多く、わずかに立ち上がりをもち、上げ底を呈するものも少量みられる。

甕形土器は、口縁部の成形方法により三分類される。口縁部を単に折り曲げるものをⅠ類、口縁外端部に粘土紐を貼り付けるものをⅡ類、口縁端部よりやや下がった位置に粘土紐を貼り付けるものをⅢ類とする。これらの比率は表40より、甕形土器562点のうちⅠ類が293点（52%）、Ⅱ類が261点（46%）、Ⅲ類が8点（2%）となり、Ⅱ類に比べⅠ類がやや多くⅢ類はごく少量であることがわかる。

法量別にみると、中型品は551点出土し、Ⅰ類が288点、Ⅱ類が255点、Ⅲ類が8点である。大型品は3条すべての溝から8点出土しており、出土量全体の1.4%となる。口縁部の成形方法はⅠ類が2点、Ⅱ類が6点となる。小型品はSDVI104とSDVI105からあわせて3点出土しているが、口縁部の成形方法はすべてⅠ類となる。なお、大型品、小型品共にⅢ類の出土はない。

次に、甕形土器の遺構別かつ層位別の出土状況を見ると、SDV202下層とSDVI104下層ではⅠ類がⅡ類を凌ぐが、中層から上層になるにつれⅠ類とⅡ類の割合は均衡する。SDVI105は、下層ではⅠ類がⅡ類を凌ぐが、中層と上層ではⅡ類の占める割合がⅠ類より高くなっている。

#### (2) 壺形土器

口径が38cmを越える大型品と、それ以下の中・小型品がある。壺形土器212点のうち、中型品の出土点数は188点あり、全体の89%を占める。

大型品は、3条すべての溝から出土している。出土点数は22点あり、全体の約1割を占める。形態は、頸部径が広く、短く外反する口縁部をもつもので、底部は厚みのある平底となる。大型品はこの一形態に限られる。

中・小型品は、口縁部の形態により四分類される。頸部が著しく発達するもの（長頸）をⅠ類、短い口頸部をもつもの（短頸）をⅡ類、内傾する頸部に短く外反する口縁部をもつものをⅢ類、太くて直立し、やや長い口頸部をもつものをⅣ類とする。

これらの比率は、表40より中型品ではⅠ類が131点（62%）、Ⅱ類が7点（3%）、Ⅲ類が27点（13%）、Ⅳ類が23点（11%）となる。Ⅰ類が全体の6割強を占め、ついでⅢ類とⅣ類がほぼ同じ割合を示し、Ⅱ類の占める割合が低いことがわかる。なお、小型品はSDVI104とSDVI105からあわせて2点出土しているが、口縁部の形態は共にⅠ類となる。中・小型品の底部は平底のものと、中央部が凹み、やや上げ底になるものがある。

各溝の出土状況を見ると、SDVI105ではSDV202とSDVI104に比べ、Ⅰ類の占める割合が高い。また、層位別の出土状況でも、下層から上層へと堆積が進むにつれ、Ⅰ類の占める割合が高くなっている。

器種 出土地	甕形土器	壺形土器	鉢形土器	蓋形土器	高坏形土器	その他
SDV202	<p>V002(中I) V003(中I) V005(中I) V008(大II) V009(中II) V010(中II) V015(中II) V017(中III) V065(大II) V069(中III)</p>	<p>V022(大) V026(中II) V035 V083(中I) V113(中III) V114(中II) V025(中IV) V030(中I) V038</p>	<p>V093(大II) V130(中I) V129(小I) V131</p>	<p>V054 V099</p>		
SDVI104	<p>VI006(中I) VI037(大II) VI077(中I) VI079(中II) VI085(中III) VI014(小I)</p>	<p>VI094(大) VI100(中I) VI049(中I) VI018(大) VI020(中IV) VI095(中III) VI026 VI057</p>	<p>VI030(大II) VI061(中I) VI116(中III) VI032(中III)</p>	<p>VI119 VI131</p>		<p>VI121</p>
SDVI105	<p>VI160(大I) VI134(中I) VI177(中I) VI137(中II) VI178(中II) VI179(中III) VI167(中II) VI166(小I)</p>	<p>VI243(大) VI200(中I) VI201(中I) VI190(中II) VI193(中III) VI195(中IV) VI198(小I) VI210 VI148</p>	<p>VI215(大II) VI219(中II) VI233(中III) VI224(小III)</p>			<p>VI158 VI228 VI270</p>

〈凡例〉 (大II) : 「大型品のII類」

第327図 SDV202・SDVI104・SDVI105出土の弥生土器

(S=1:8)

(3) 鉢形土器

口径が32cmを越える大型品と、20～31cmの中型品、20cm未満の小型品とがある。このうち、中型品は69点出土しており、全体の86%を占める。さらに、口径21～22cmのものと口径25～27cmのものが高い割合を占める。大型品、中型品、小型品は3条すべての溝から出土している。

鉢形土器は、口縁部の成形方法により三分類される。口縁部を単に折り曲げるものをⅠ類、口縁外端部に粘土紐を貼り付けるものをⅡ類、直口口縁のものをⅢ類とする。

出土量の多い中型品は、Ⅰ類が33点(40%)、Ⅱ類が23点(28%)、Ⅲ類が13点(16%)となり、Ⅰ類の占める割合が高い。底部は平底のものと、上げ底のものがある。

大型品は8点出土しており、出土量全体の10%を占める。口縁部の成形方法はⅢ類のものではなく、Ⅰ類が1点、Ⅱ類が7点となる。

小型品は3点出土しており、出土量全体の3%となる。口縁部の成形方法はⅡ類のものではなく、Ⅰ類が1点、Ⅲ類が2点となる。

出土状況を見ると、層位別では下層から中・上層へと堆積が進むにつれ、Ⅰ類とⅡ類の割合が均衡する。

(4) 蓋形土器

口径21～26cm、器高8.9～11.2cmで、3条の溝から計12点が出土している。つまみの形状は、いずれも中央部がやや凹んでいる。口縁端部の形状は丸くおさめるものと、「コ」字状に仕上げるものがあり、両者はほぼ同じ割合をなす。

(5) 高坏形土器

高坏形土器はS D VI104(中層・地点不明)から2点、S D VI105(下層)から1点が出土しているが、坏部形状のわかる資料はない。S D VI104出土品は円柱状の柱部をもち、脚底部はやや上げ底となる。S D VI105出土品は、脚部は「ハ」の字状を呈し、上げ底になる。

(6) ミニチュア土器

S D V202(上・中・下層)から4点、S D VI104下層から1点、S D VI105下層から1点が出土している。S D VI105出土品は、直口口縁を呈するもので、やや上げ底となる。他の5点はいずれも底部片で、平底のものと、上げ底のものがある。

## 4. 施文

(1) 甕形土器(表41)

甕形土器の施文は、口縁端面と胴上半部に加飾されるが、まったく加飾のないものもある。

口縁端面には、刻目を施すものが562点中307点あり、全体の55%を占める。次いで、連鎖状刻目文を施すものが12点(2%)、押圧文と刺突文を施すものがあわせて11点(1%)あり、特異なものとして沈線文を施すものが1点ある。Ⅲ類では、口縁上端部に刻目を施すものが1点ある(V069)。

胴部には、549点中450点の土器に加飾が施される。文様はヘラ描きによる多重の沈線文が主体で、全体の8割を占める。このうち、沈線文と刺突文(1列・2列)とが組み合うものは74点(16%)、沈線文と山形文とが組み合うものは5点(1%)、沈線文、刺突文、山形文が組み合うものが8点(2%)ある。

また、沈線文と弧文とが組み合うものが1点ある(VI141)。ただし、刺突文や山形文、弧文はそれのみで文様を構成することはなく、沈線文間や沈線文帯の最下位に施されている。

調査の成果

胴部に凸帯を貼り付けるものはⅠ類に4点、Ⅱ類に1点あり、凸帯上に指頭押圧を加えるものは2点（Ⅰ類）、連鎖状刻目文を施すものは3点（Ⅰ類2点、Ⅱ類1点）ある。

一方、口縁端面と胴部に加飾を施さないものが全体の2～3割を占め、胴部に加飾を施さないものはⅡ類よりもⅠ類に多く、さらに口縁部の折り曲げが強く、逆「L」字状を呈するものに多い。

そして、胴部に加飾される沈線文の技法には以下の4種類がある。

技法a：ヘラ状工具により、単独の線で描かれる沈線文

技法b：2条1組の工具による沈線文

技法c：ヘラ状工具等を束ねて施したと思われ、3条以上を1組とした工具による沈線文

技法d：いわゆるクシ状工具による沈線文

なお、甕形土器の胴部に加飾される山形文は、2条または3条1組の工具により施文されており、2条1組が多い。

ここで、各溝出土品における沈線文技法をみてみることにする。

未報告資料を含めた562点のうち、胴部に沈線文を施すもの459点を対象とした（表43）。

各溝の状況を見ると、下層から上層へ堆積が進むにつれ、技法bと技法cによる沈線文の割合が増加していることがわかる。特に、SDVI105では、技法bが中層で63点中26点（41%）、上層で47点中6点（13%）、技法cが中層で63点中14点（22%）、上層で47点中8点（17%）となる。また、クシ状工具による技法dは、SDV202中層と上層で1点ずつあり、SDVI105では下層と上層とに1点ずつある。

表41 甕形土器の施文一覧

出土地点	施文 形態	口 縁 端 面						胴 部								
		無 文	刻目文	連鎖状 刻目文	沈線文	押圧文	刺突文	無文	沈線文	沈線文 + 刺突文	沈線文 + 山形文	沈線文 + 弧 文	沈線文 + 刺突文 + 山形文	沈線文 + 凸帯文 (押圧文)	沈線文 + 凸帯文 (連鎖状 刻目文)	
SDV202	中 型	Ⅰ	37	60	1	0	1	1	20	52	13	1	0	0	1	0
		Ⅱ	26	58	2	0	2	1	14	51	21	2	0	1	0	0
		Ⅲ	0	2	1	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0
	大 型	Ⅱ	2	2	0	1	0	0	0	1	4	0	0	0	0	0
	小 型	Ⅰ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小 計		65	122	4	1	3	2	36	105	38	3	0	1	1	0
SDVI104	中 型	Ⅰ	47	50	0	0	1	2	25	58	12	0	0	2	1	2
		Ⅱ	40	34	2	0	1	0	6	66	4	0	0	1	0	0
		Ⅲ	0	1	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
	大 型	Ⅱ	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	小 型	Ⅰ	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
	小 計		89	86	3	0	2	2	35	125	16	0	0	3	1	2
SDVI105	中 型	Ⅰ	38	48	1	0	0	1	14	61	10	0	1	2	0	0
		Ⅱ	37	47	4	0	0	1	10	64	10	2	0	2	0	1
		Ⅲ	1	2	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0
	大 型	Ⅰ	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
	小 型	Ⅰ	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	小 計		77	99	5	0	0	2	28	127	20	2	1	4	0	1
計		231	307	12	1	5	6	99	357	74	5	1	8	2	3	
合 計		562						549								

表42 壺形土器の施文一覧

出土地点	施文 形態	口縁端面						口縁部内面						頸部						肩・胴部							
		無文	沈線文	連続状 刻目文	沈線文 刻目文	沈線文 + 押圧文		無文	凸帯文	凸帯文 (刻目文)	凸帯文 (押圧文)	凸帯文 (連続状 刻目文)	凸帯文 + 竹管文	無文	沈線文	沈線文 + 刺突文	凸帯文 (刻目文)	凸帯文 (押圧文)	凸帯文 (連続状 刻目文)	無文	沈線文	沈線文 + 刻目文	沈線文 + 凸帯文 (刻目文)	沈線文 + 凸帯文 (押圧文)	沈線文 + 凸帯文 (連続状 刻目文)		
SDV202	中型	I	18	12	0	0	20	3	7	30	3	11	0	2	0	10	0	0	0	4	4	0	1	1	1	2	2
		II	5	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0
		III	4	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
		IV	11	0	0	0	0	0	11	0	0	0	0	0	0	5	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0
	大型	6	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小型	I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	44	12	0	0	20	4	28	36	3	11	0	2	9	20	0	1	0	6	4	4	1	1	1	2	2	
SDVI04	中型	I	16	8	2	4	15	0	3	20	7	12	1	2	4	1	0	0	0	0	1	2	0	0	2	0	2
		II	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		III	7	0	0	5	3	0	15	0	0	0	0	0	3	5	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
		IV	8	1	0	1	0	0	10	0	0	0	0	0	0	9	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0
	大型	2	3	0	2	0	0	2	5	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小型	I	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	小計	35	12	2	12	18	0	31	25	7	13	1	2	11	17	1	1	0	1	2	3	3	0	2	0	2	
SDVI05	中型	I	12	8	0	6	7	0	2	17	8	5	1	0	2	7	0	0	5	3	4	0	2	0	0	0	1
		II	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
		III	7	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	1	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		IV	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	大型	1	2	0	3	3	0	0	9	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	小型	I	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	23	10	0	9	11	0	12	27	8	5	1	0	7	16	2	0	5	4	4	1	3	0	0	0	1	
計	102	34	2	21	49	4	71	88	18	29	2	4	27	53	3	2	5	11	10	8	7	1	3	2	5		
合計				212				212					111												26		

表43 溝出土土器の沈線文技法一覧

出土地点	器種 技法	甕形土器						壺形土器					
		a	b	c	d	不明	計	a	b	c	d	不明	計
SDV202	下層	2	9	0	0	38	49	6	3	0	0	5	14
	中層	1	18	0	1	38	58	4	2	0	1	6	13
	上層	0	16	2	1	29	48	1	3	1	0	5	10
	小計	3	43	2	2	105	155	11	8	1	1	16	37
SDVI04	下層	0	10	0	0	26	36	4	4	0	0	4	12
	中層	2	8	0	0	23	33	2	2	1	0	2	7
	上層	0	22	0	1	51	74	0	2	0	0	7	9
	層不明	0	0	0	0	5	5	0	0	0	0	0	0
	小計	2	40	0	1	105	148	6	8	1	0	13	28
SDVI05	下層	1	9	4	1	24	39	3	2	0	0	2	7
	中層	1	26	14	0	22	63	7	3	2	1	5	18
	上層	1	6	8	1	31	47	1	2	3	0	5	11
	層不明	0	1	1	0	5	7	0	0	0	0	0	0
	小計	3	42	27	2	82	156	11	7	5	1	12	36
合計	8	125	29	5	292	459	28	23	7	2	41	101	

(2) 壺形土器 (表42)

壺形土器の施文は、口縁端面、頸部、肩部、胴部、口縁部内面に加飾される。

1) 大型品：大型品は、口縁部内面に凸帯をもつ。口縁端面は、無文のもの、沈線文を施すもの、刻目を施すもの、沈線文と刻目文が組み合うものがある。頸部には、沈線文を施すものと無文のもの、ほぼ同数みられる。

2) 中・小型品：Ⅰ類（長頸）は、口縁部内面に凸帯をもつ傾向があり、全体の9割を占める。凸帯上には、刻目や指頭押圧、連鎖状刻目文を施すものがある。例外として、凸帯の上方に竹管文を施すものが3点ある（SDV202下層：V030・V031、SDVI104中層：VI051）。くわえて、口縁部外面には、耳状の把手が付くものが1点ある（SDV202下層：V030）。口縁端面には、沈線文、刻目文、連鎖状刻目文、沈線文と刻目文、沈線文と押圧文とが組み合うものがある。頸～胴部には、多重の沈線文や、1条～3条の凸帯を貼り付けるものが数多くみられる。凸帯上は指頭押圧されるものが多く、押圧内には連鎖状刻目文を施すものが15点あり、そのうち刻目文を1列施すものが6点、2列施すものが9点あり、凸帯を貼り付ける35点のうち42%を占めている。

Ⅱ類（短頸）は、無文を基調とするが、口縁部に円孔を施すものが1点（SDV202上層：V114）ある。頸部の発達弱いものうち、Ⅲ類・Ⅳ類には、頸部に沈線文を施すものが多く、削り出し状の凸帯をもつものもある。また、口縁端面が面取りされるものは、沈線文や刻目文を施すものがある。

頸～肩部への加飾は、沈線文を施すものや、沈線文と刺突文とが組み合うものがあり、なかには、肩部に輪状の浮文が貼り付けられるものも2点ある（SDVI104上層：VI106、SDVI105下層：VI148）。

胴部は、多重沈線文と凸帯で加飾されるものが多く、貝殻腹縁による直線文や弧文、羽状文、木葉文を施したものが5点ある（SDV202中層：V086、SDVI104下層：VI027、SDVI105中層：VI206～208）。凸帯上は、基本的には指頭押圧され、押圧内には刻目、または連鎖状刻目文を施すものが数多くみられる。文様のモチーフは、斜格子目文と山形文が少数例みられる。

壺形土器の沈線文技法にも、甕形土器と同様に、技法a～技法dの四種類がある。未報告資料を含めた137点のうち、頸～胴部に沈線文を施すもの101点を対象とした（表43）。

各溝の出土状況を見ると、下層から上層に堆積が進むにつれ、技法bと技法cによる沈線文の割合が増加する。特に、SDVI105では、技法bが中層で18点中3点（17%）、上層で11点中2点（18%）、技法cが中層で18点中2点（12%）、上層で11点中3点（27%）となり、両技法をあわせると全体の約4割を占めることになる。また、クシ状工具による技法dは、SDV202中層とSDVI105中層とでそれぞれ1点みられるにすぎない。

(3) 鉢形土器

鉢形土器の施文は、口縁端面に刻目を施すものがあるが、体部は無文になる。ただし、Ⅰ類の中には口縁部に円孔を施すものが1点（SDV202上層：V130）あり、Ⅲ類には口縁部外面に把手が付くもの1点（SDVI104下層：VI032）、沈線文と刺突文を施すもの1点（SDVI104上層：VI116）がある。

また、底部に円孔を施すものも1点ある（SDV202上層：V131）。

(4) 蓋形土器

蓋形土器は無文を基調とする。

(5) 高坏形土器

3点出土しているうち、2点は坏脚部境の接合部に断面三角形の凸帯を貼り付けている。

## 5. 調整

### (1) 甕形土器

器面調整では、口縁部は内外面共にナデまたはヨコナデ調整を施すものが多数みられる。ただし、口縁部内面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を施すものが、全体の3割程度ある。

胴部外面には、タテ方向のハケメ調整とヘラミガキ調整を施すものが、ほぼ同数みられる。ヘラミガキの方向は、胴中～下位はタテ方向のものが多く、斜め方向のものも少数ある。胴上位は、ヨコ方向のヘラミガキが多くみられる。胴部内面は、ナデ調整とヨコ方向のヘラミガキ調整を施すものがあり、1：2の割合で、ヘラミガキ調整のものが多くなっている。

底部は、外面にハケメ調整とヘラミガキ調整を施すものが、ほぼ同数みられる。内面は、大半がヘラミガキ調整を施すものになる。

### (2) 壺形土器

大型品は、口縁部及び頸部外面共にヨコナデ調整とヘラミガキ調整を施すものが、ほぼ同数みられる。胴部及び底部は、内外面共にヘラミガキ調整を施す。

中型品は、Ⅰ類～Ⅳ類まで、ほぼ同じ調整方法がみられる。口頸部外面には、ヨコ方向のヘラミガキ調整とハケメ調整を施すものがあり、やや前者が多くみられる。内面は、ナデ調整またはヨコ方向のヘラミガキ調整を施すが、後者が全体の6割を占める。胴部は、内外面共にヨコ方向のヘラミガキ調整を施すものが大半を占める。底部には、内外面共にハケメ調整とヘラミガキ調整を施すものがほぼ同数みられる。

### (3) 鉢形土器

口縁部外面には、ナデ調整またはハケメ調整を施すが、内面には、ナデ調整とヨコ方向のヘラミガキ調整を施すものが2：1の割合でみられる。胴部外面には、タテ方向とヨコ方向のヘラミガキ調整を施すものが、ほぼ同数みられ、全体の約8割を占める。底部は、内外面共にヘラミガキ調整を施すものが多く、ハケメ調整を施すものがごく少量みられる。

### (4) 蓋形土器

つまみの天井部内面には、ヘラミガキ調整を施すものがある。口縁部は、内外面共にヨコ方向のヘラミガキ調整を施すものが多く、ナデ調整またはハケメ調整を施すものが少量みられる。

### (5) 高坏形土器

高坏形土器は出土点数が少なく、しかも器面が磨滅しているため、調整方法は定かではない。

## 6. 分析

**器種と形態**：出土資料には、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、高坏形土器、ミニチュア土器があり、甕形土器と壺形土器が多数を占めていた。一方では、高坏形土器が器種構成に少ないながらも組み込まれていたことは注目される。

形態では、甕形土器は口縁部の成形方法がⅠ類～Ⅲ類に分類され、当初はⅠ類の割合がⅡ類に比べ多いが、時期の経過と共にⅡ類の割合が増加する傾向をもつ。

壺形土器の中・小型品はⅠ類～Ⅳ類に4分類され、Ⅰ類（長頸）が全体の6割を占め、Ⅲ・Ⅳ類が3割弱、Ⅱ類（短頸）は1割にみたない量となり、形態による比率の違いは明らかである。

鉢形土器は、Ⅰ類～Ⅲ類に3分類され、3者の割合は、中型品ではⅠ類：Ⅱ類：Ⅲ類が5：3：2となる。

よって、壺形土器と同じく、形態による比率差が認められる。

なお、大型品ではⅡ類、小型品ではⅢ類が多くみられた。

甕形土器、壺形土器、鉢形土器の各器種の構成比や器形は、3条の溝共にほとんど変化はみられない。

**施文**：次に、施文手法を整理するが、ここでは連鎖状刻目文と沈線文の工具について着目してみる。

#### 1) 連鎖状刻目文

本資料のうち、連鎖状刻目文を施すものは34点（甕形土器15点、壺形土器19点）あり、比較的多くみられる。施文される器種は、甕形土器と壺形土器に限られ、部位は口縁端面と貼り付け凸帯上に施される。連鎖状刻目文は1列と2列のものがあり、前者が多い。

甕形土器では、口縁端面に連鎖状刻目文を施すものは全体の2%程度にすぎず、Ⅰ類（2点）、Ⅱ類（8点）、Ⅲ類（2点）があり、Ⅱ類に施文される割合が高い。凸帯上に施文されるものはⅠ類に2点、Ⅱ類に1点の計3点があり、極少数となる。

壺形土器では、Ⅰ類（長頸）の口縁端面に2点と口縁部内面の凸帯上に施したもの2点とがあり、両者共に全体の1%にもみえない。また、頸部や胴部の凸帯上に施すものもあり、凸帯を貼り付ける31点中、連鎖状刻目文を施すものは15点（48%）となり、高い比率を占めている。

連鎖状刻目文は、甕形土器に比べ、壺形土器に多数施され、かつ、凸帯上に施すものの割合が高いことがわかる。

つづいて、沈線文の施文技法に注目してみる。

#### 2) 沈線文技法

本資料では、甕形土器、壺形土器、鉢形土器に直線文や山形文が施文されている。これらの施文の中には、明らかに2条以上を1組とした工具により描いているものがあり、前項では甕形土器と壺形土器の施文を整理し、分類を試みた。

技法bは、3条の溝共に下層堆積時に出現する。各溝の出土状況を見ると、表43からSDV202では下層63点中12点（19%）、中層71点中20点（28%）、SDVI104では下層48点中14点（29%）、中層40点中10点（25%）、上層83点中24点（29%）、SDVI105では下層46点中11点（24%）、中層81点中29点（36%）、上層58点中8点（15%）となる。沈線文技法を甕形土器と壺形土器とで比較すると、技法bは甕形土器は3条の溝で全体の27%を占めるのに対し、壺形土器は全体の20%になり、甕形土器が壺形土器に比べ、やや高い割合を示している。

技法cは、SDV202上層、SDVI104中層、SDVI105下層堆積時に出現する。表43から技法cの割合は、SDV202では58点中3点、SDVI104では40点中1点あり、全体の1割にも満たないが、SDVI105では下層堆積時に46点中4点（9%）であったものが、中層堆積時には81点中16点、上層堆積時には58点中11点あり、それぞれ全体の20%を占めることになる。

技法dは、SDV202中層、SDVI104上層、SDVI105下層堆積時に出現する。ただし、その割合は全体の1%にもみえない。

ここで、各技法の出現時期と、その組み合わせの違いに着目すると、3条の溝出土品は古相・中相・新相に3区分することができる（第328～330図、表45）。

古相：ヘラと2条1組の工具を使用する段階……………技法a + b

中相：ヘラと2条1組、3条以上を1組とする工具を使用する段階……技法a + b + c

新相：前述の3者に加え、クシ状工具を使用する段階……………技法a + b + c + d

古相はSDV202下層とSDVI104下層堆積時、中相はSDVI104中層堆積時、新相はSDV202中層、SDVI104上層、SDVI105下層堆積時の資料を各々あてることができる。

この結果を確認するために、土坑出土資料をみてることにする。

表44から、技法bは土坑Eを除くすべての段階にみられ、技法cは土坑Dの段階、技法dは土坑Bの段階になり出現することになる。技法cと技法dは段階が進むにつれ、その割合が増加していることが分かる。

したがって、SDV202とSDVI104では中層堆積時、SDVI105では下層堆積時に沈線文技法の変化があり、さらに、SDVI105では中・上層と堆積が進むにつれ、その変化が顕著になったものといえる。また、土坑では土坑Dの段階に中相へ、土坑Bの段階に新相への変化が溝3条に対応してあったものとみられる。

表44 土坑出土土器の沈線文技法一覧

出土地点	甕形土器						壺形土器						
	技法	a	b	c	d	不明	計	a	b	c	d	不明	計
土坑F		0	1	0	0	7	8	0	0	0	0	3	3
土坑E		1	0	0	0	5	6	1	0	0	0	4	5
土坑D		1	3	2	0	9	15	2	1	0	0	10	13
土坑C		1	5	4	0	13	23	4	7	0	0	12	23
土坑B		2	4	4	4	20	34	6	8	1	3	15	33
土坑A		0	2	2	3	11	18	2	0	0	3	2	7
合計		5	15	12	7	65	104	15	16	1	6	46	84

表45 前期末～中期初頭の土器様相

		沈線文技法	溝	土坑	搬入品・外来系土器
前 期 末	古 相	a + b	SDV202下層 SDVI104下層	F (E)	綾羅木Ⅲ(SDV202下層) 高槻式(SDVI104下層) 城ノ越式(SK V465:土坑F)
	中 相	a + b + c	SDVI104中層	C・D	綾羅木Ⅲ(SK V215:土坑D)
中 期 初 頭	新 相	a + b + c + d	SDVI202中層～上層 SDVI104上層 SDVI105下層～上層	A・B	綾羅木Ⅲ(SDVI105中層) 高槻式(SK V218:土坑B) 城ノ越式(SDVI105中層 SK V218:土坑B SK V445:土坑A)

**外来系土器**：溝出土資料には、外来的要素をもつ土器が4点ある。搬入品1点と外来系土器3点である。

搬入品は山口県綾羅木遺跡出土品、外来系土器は東北部九州地方の弥生時代前期末に比定される高槻式土器、前期末～中期初頭に比定される城ノ越式土器に類似するものである。

古相にはS D V 202下層出土品V 050（綾羅木Ⅲ式相当）とS D VI 104下層出土品VI 016（高槻式土器模倣品）とがあり、中相には出土例がない。新相にはS D VI 105中層出土品VI 197（綾羅木Ⅲ式相当）とVI 216（城ノ越式土器模倣品）とがある。

土坑資料には、搬入品1点と外来系土器5点がある。

古相には土坑Fから城ノ越式土器模倣品が1点、中相には土坑Dから綾羅木Ⅲ式（搬入品）1点がある。新相には土坑Bより高槻式土器模倣品1点と城ノ越式土器模倣品2点が、土坑Aより城ノ越式土器模倣品1点がある。

なお、搬入品・外来系土器については「V 弥生時代の搬入品・外来系土器」にて詳細を説明する。

## 7. まとめ

岩崎遺跡の溝3条（S D V 202・S D VI 104・S D VI 105）からは、弥生時代前期末～中期初頭（梅木編年前期Ⅳ）の良好な資料が得られた。

今回の調査により、前期末～中期初頭には技法aに加え、まず、技法bが出現し、さらに、3条の溝の埋没が進むにつれ、技法cと技法dとが順次出現することになる。特に、S D VI 105では中層から上層へと堆積が進むにつれ、技法bが減少するのに対し、技法cが増加する。

また、技法dは出現期には全体の出土量の1%にもみたくず、クシ状工具の出現期の様相が良く分かる。加えて、弥生時代前期末～中期初頭の施文技法には、ヘラ状工具（技法a）と2条1組の工具（技法b）による段階、3条以上1組の工具（技法c）が加わる段階、クシ状工具（技法d）が出現する段階があり、その変化様相をよみとることができた。

さらには、弥生時代前期末～中期初頭の区分が判断しづらくなっている要因が、器形に大きな変化が認められない点にあることも明確になってきた。ただし、器形の全体を把握される資料が今後出土すれば、この間の形態変化も求められる可能性はある。

以上、岩崎遺跡出土資料の整理と分析を行った。

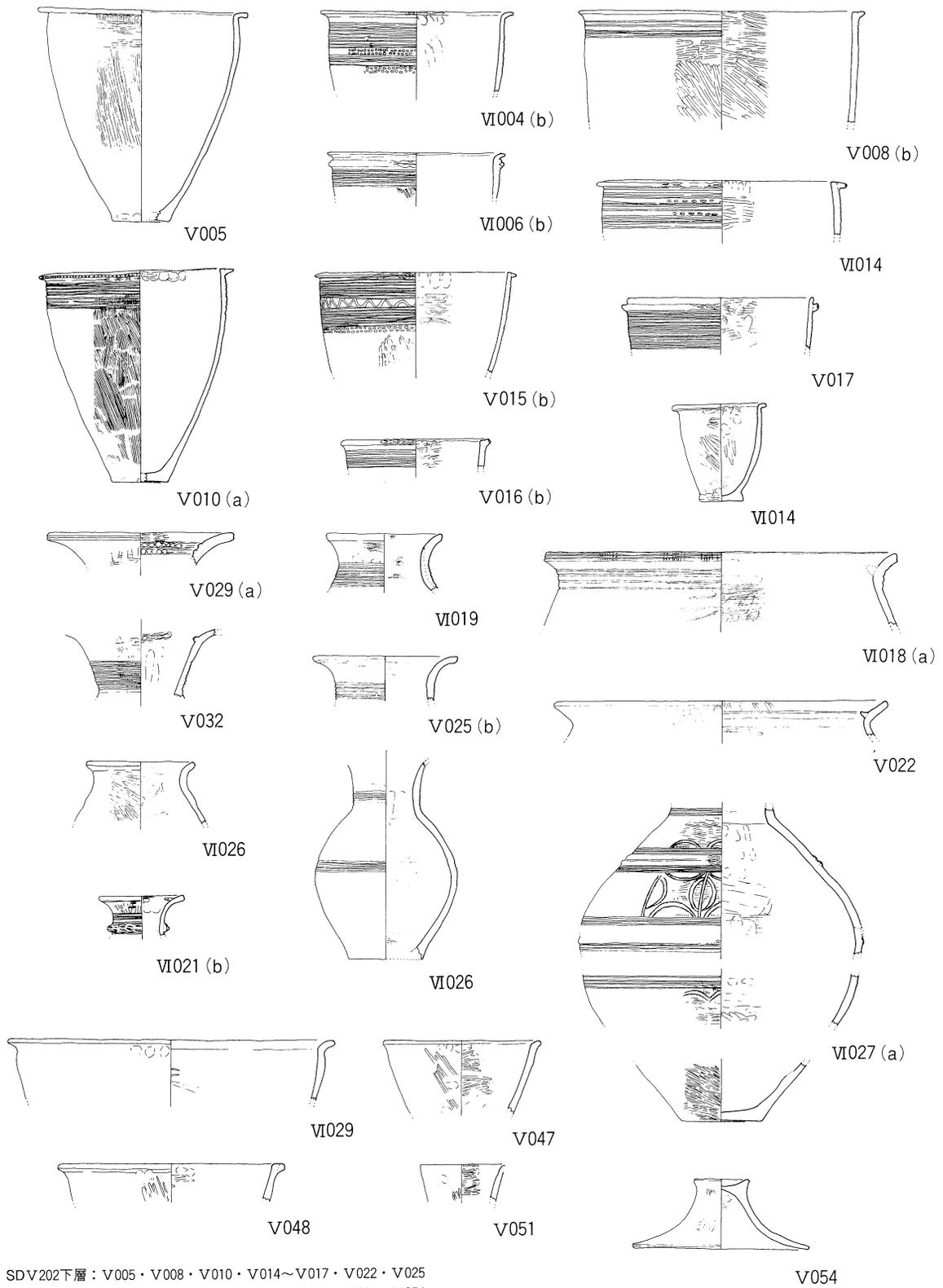
松山平野内では、来住台地上にて、久米高畑遺跡25次調査地や来住廃寺15次調査地などで該期の資料が数多く出土している。今後は、来住台地出土資料との比較を行い、松山平野における弥生時代前期末～中期初頭の土器編年の充実を図る必要がある。

### 〔参考文献〕

名本二六雄 1990 「冠山」『遺跡32』

西尾幸則 1993 『来住廃寺遺跡第15次調査報告書』松山市文化財調査報告書第34集

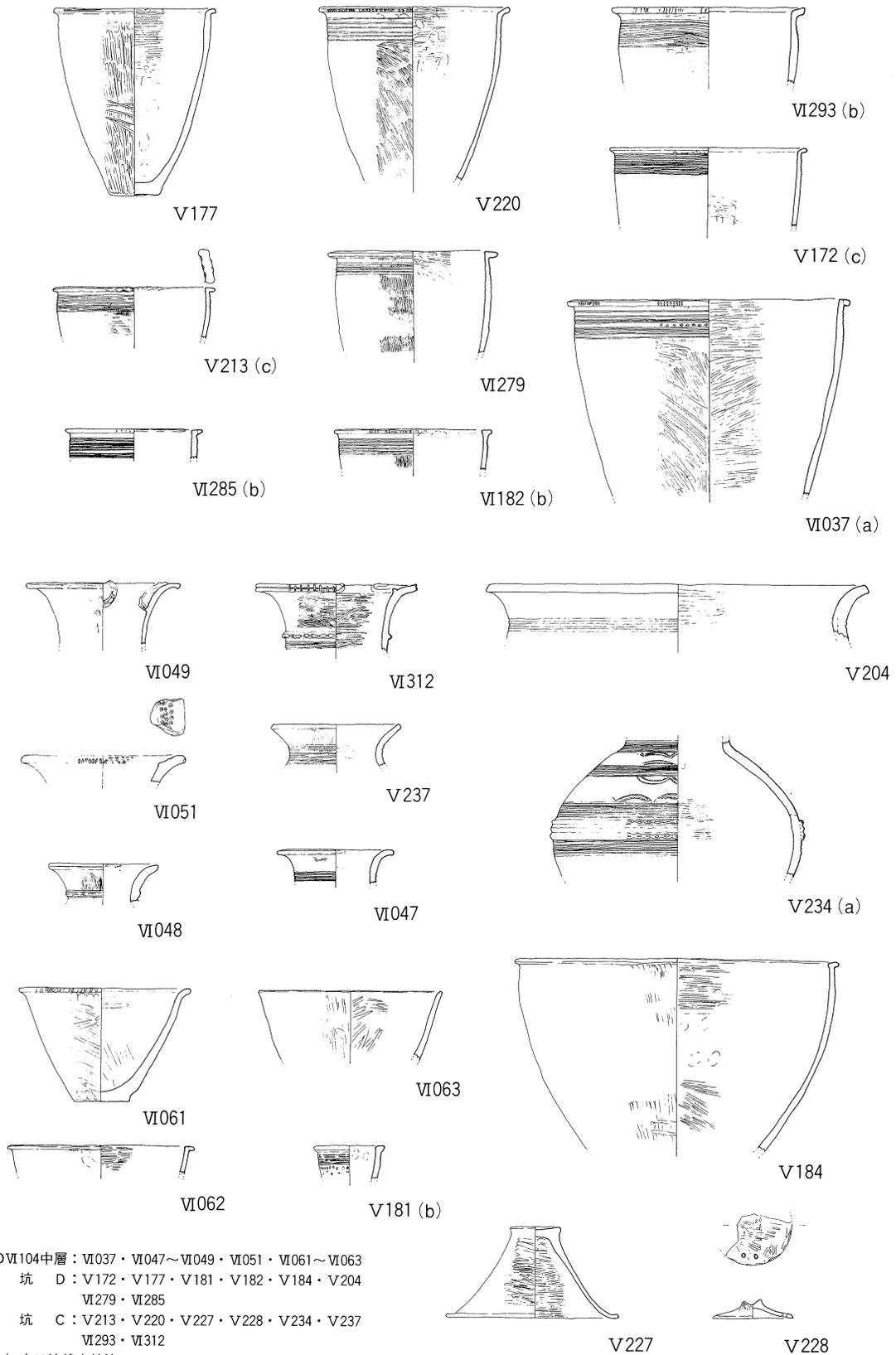
弥生時代前期末～中期初頭の土器



SD V202下層：V005・V008・V010・V014～V017・V022・V025  
 V026・V029・V032・V047・V048・V051・V054  
 SD VI104下層：VI004・VI006・VI014・VI018・VI019・VI021・VI027・VI029  
 ( ) 内は沈線文技法

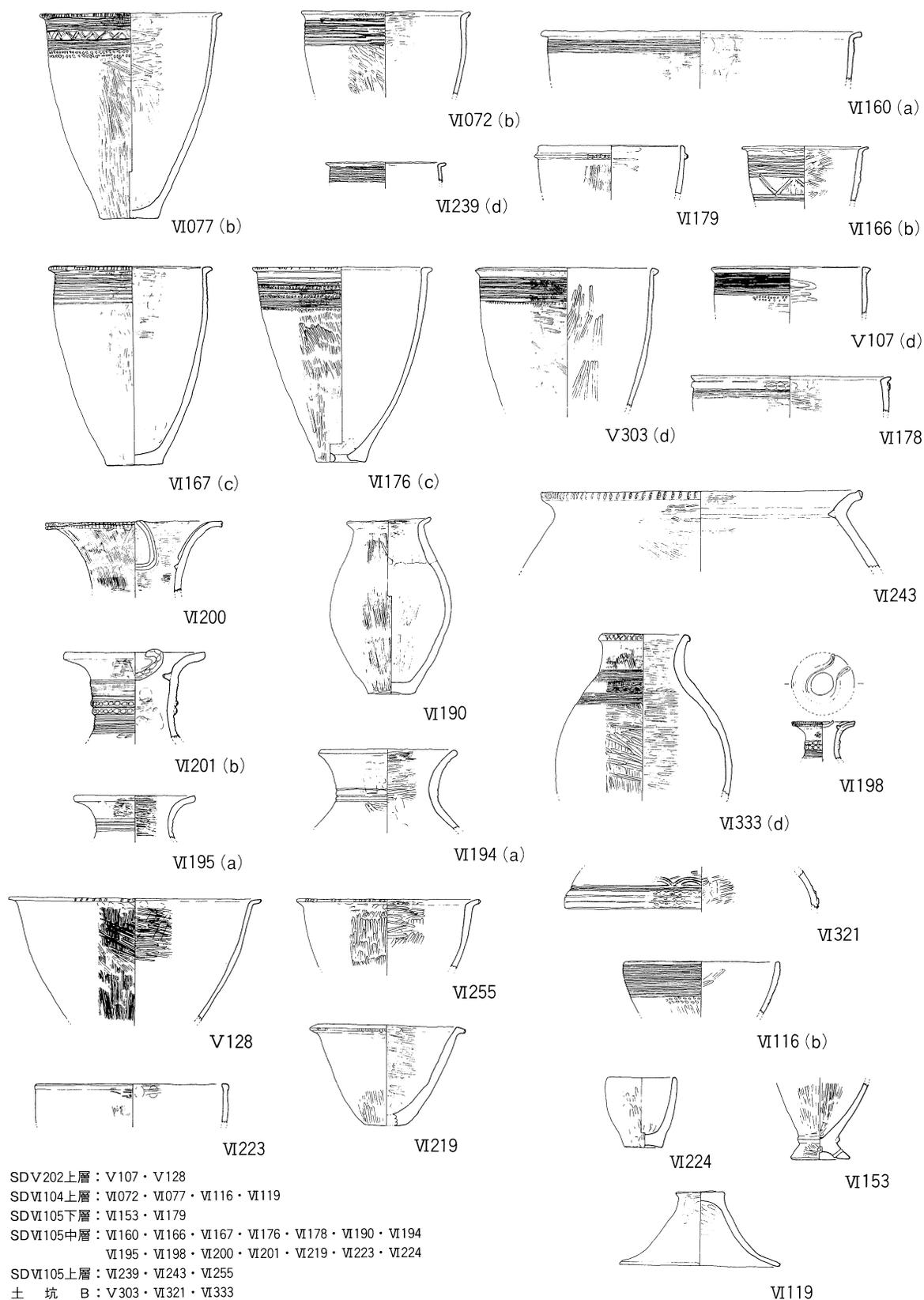
第328図 古相の土器群 (縮尺1/8)

調査の成果



SDVI104中層：VI037・VI047～VI049・VI051・VI061～VI063  
 土坑 D：V172・V177・V181・V182・V184・V204  
 VI279・VI285  
 土坑 C：V213・V220・V227・V228・V234・V237  
 VI293・VI312  
 ( ) 内は沈線文技法

第329図 中相の土器群 (縮尺1/8)



第330図 新相の土器群 (縮尺1/8)

## Ⅳ 貝 殻 施 文 土 器

### 1. はじめに

本調査では、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される遺構や包含層中から、貝殻により文様を施す土器が18点出土した。弥生時代の貝殻文に関する施文は、山口県下関市綾羅木遺跡の調査から、伊東照雄氏が幾つかの論考を提示している。その概要は以下のとおりである。

一般に、貝殻文は、貝の表面や内面の各部位を押圧、回転、引きずって土器の器面に陰刻してできあがった文様である。この貝殻文はすでに縄文時代早期の土器に器面調整や施文具として使用され、地域によって盛衰はあるものの、晩期まで継続して用いられている。弥生時代では山口県綾羅木遺跡の例をとれば第Ⅱ式の段階で出現し、第Ⅲ式（弥生時代前期末）には精緻で装飾性が強調され、第Ⅳ式になり衰退、消滅する。

貝殻文の分布状況は、福岡県遠賀川流域以東から山口県西部の響灘沿岸部に中心をもっており、その影響は九州では大分県、福岡県、佐賀県、熊本県宇土市、長崎県五島列島、鹿児島県西域、日本海側では鳥根県、鳥取県、京都府丹後半島まで北上している。瀬戸内海側では兵庫県、香川県沿岸部から大阪府にまで至っている。

弥生土器に用いられる施文原体は、主として二枚貝の腹縁を用いて、押圧、回転、引きずりながら施文される。特に、鋸歯状の圧痕からベンケイガイ・タマキガイの使用頻度が最も高い。この貝は現在でも響灘沿岸の下関市武久町で、水深5～10mに群をなして生息しているといわれるが、現在まで下関市の弥生時代遺跡からの発見例は少なく、弥生人の食料源の直接の対象からはほど遠いものと推測されている（『弥生文化の研究3』）。

ここでは、岩崎遺跡出土の貝殻文を施した土器を器種や形態、文様のほか、施文原体である貝殻の種類について、整理を行うことにする。

### 2. 資 料（第331図、表46、図版82・83）

調査では、18点の貝殻施文土器が出土し、出土地点は溝4条（SDV201・SDV202・SDVI104・SDVI105）から6点、土坑8基（土坑B～E）から10点、第Ⅵ層中から2点である。出土した貝殻施文土器は第331図と表46にまとめた。

(1) 溝出土品：溝からは、SDV201より蓋形土器（V472）1点が出土している。SDV201は古代、8世紀中～後葉に時期比定される溝であるが、溝基底面から弥生前期末～中期初頭の土坑が検出されたことや、埋土中より該期の土器が出土したことから、蓋形土器はこれらの遺構や遺物に伴うものとみてよい。V472は、天井部外面に貝殻腹縁による縦・横方向の直線文と山形文を施している。

SDV202からは壺形土器の肩部片（V086）1点が出土し、貝殻腹縁による羽状文と、その上下にヘラ描きの直線文を施している。SDVI104からは、壺形土器の肩～胴部片（VI027）が出土した。肩部と胴部には凸帯（連鎖状刻目文）を貼り付け、肩部～胴上部には貝殻腹縁による縦方向の直線文2条と、弧文2条、胴部中位には弧文2条を施している。

SDVI105からは3点が出土した（VI206～208）。VI206は壺形土器の肩部片で、弧文5条を施す。VI207・208は小片で、VI207は弧文2条、VI208は貝殻腹縁による木葉文と、ヘラ描きの直線文を施している。

貝殼施文土器

(2) 土坑出土品：土坑からは10点の貝殼施文土器が出土している。内訳は土坑Eが1点、土坑Dが1点、土坑Cが2点、土坑Bが6点である。

土坑Eでは、S K V 193より壺形土器の胴部片（V275）が出土した。凸帯（連鎖状刻目文）を貼り付け、凸帯上方に2列の押圧文を施し、押圧文の上下に貝殼腹縁による直線文を2条ずつ施している。

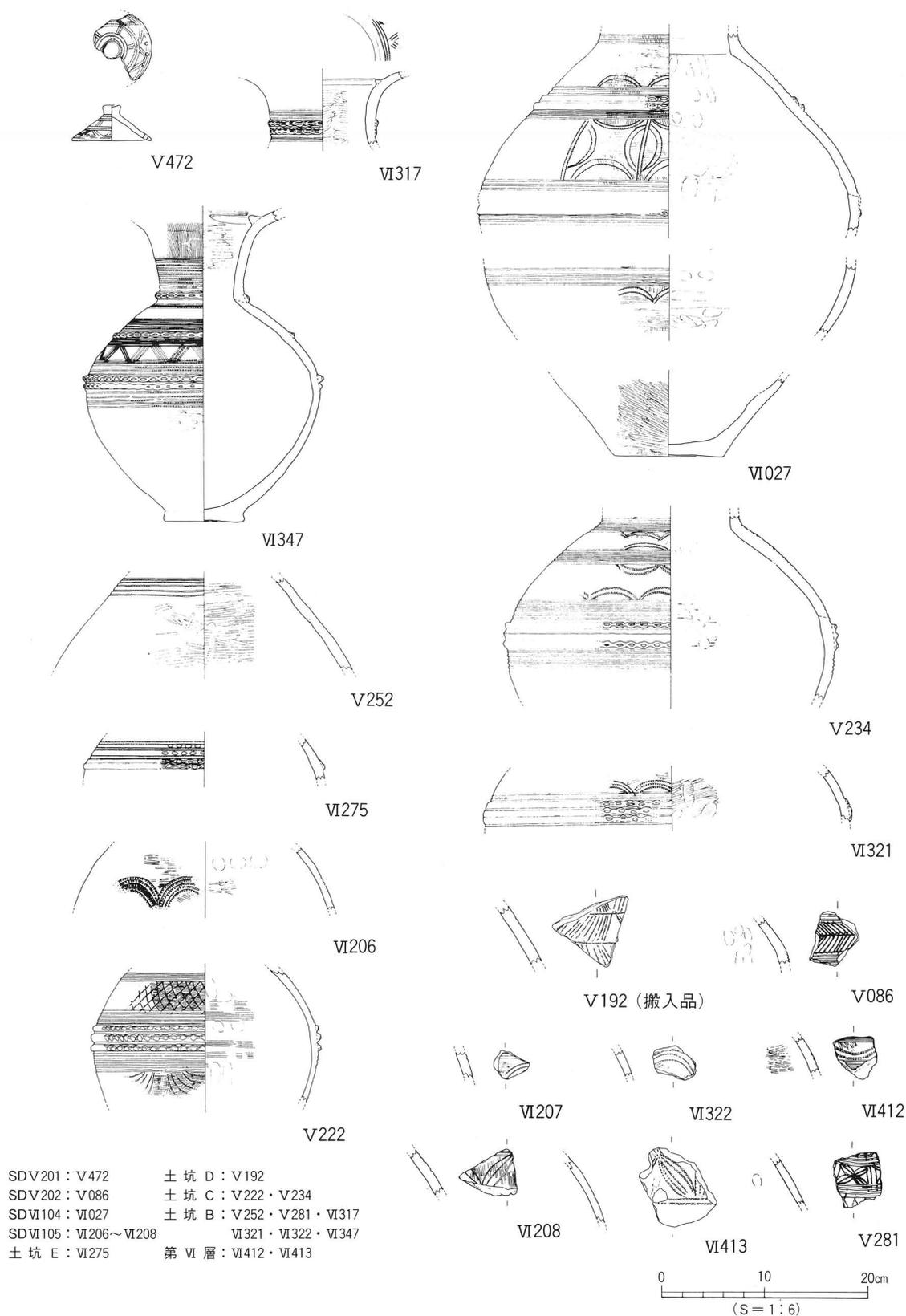
土坑Dでは、S K V 215より壺形土器の肩部小片（V192）が出土した。貝殼腹縁による羽状文と、へら描きの直線文を施す。胎土や色調が在地のものではなく、搬入品である。

土坑Cでは、S K V 221より壺形土器の胴部片（V222）が出土した。胴部中位には3条の凸帯（押圧）を貼り付け、凸帯上方にへら描きの直線文と貝殼腹縁による斜格子目文、凸帯下方にはへら描きの直線文と貝殼腹縁による重弧文を施している。S K V 310からは壺形土器の肩～胴部片（V234）が出土した。胴部中位には凸帯（連鎖状刻目文）を貼り付け、凸帯の上下方、頸部、肩部にはそれぞれへら描きの直線文を施す。直線文間には貝殼腹縁による弧文2条を施している。

土坑Bでは、S K V 202より壺形土器の肩部片（V252）が出土し、頸部付近には直線文5条を施している。S K V 218からは、壺形土器の胴上部の小片（V281）が出土し、へら描きによる直線文と、貝殼腹縁による斜格子目文、直線文間には貝殼腹縁による木葉文と縦方向の直線文を施している。

表46 岩崎遺跡出土の貝殼施文土器一覧

遺物番号	区	出土地点	器種	部位	貝殼施文	貝種	他の施文	備考
V472	V	S D V 201	蓋	天井部外面	縦・横直線文+山形文	タマキガイ		1/2の残存
V086	V	S D V 202(中層)	壺	肩部	羽状文	タマキガイか ペンケイガイ	直線文	小片
VI027	VI	S D VI104(下層)	壺	肩～胴部	縦直線文+重弧文	タマキガイか ペンケイガイ	直線文+凸帯文(連鎖状)	
VI206	VI	S D VI105(中層)	壺	肩部	重弧文	タマキガイ		
VI207	VI	S D VI105(中層)	壺	胴部	重弧文	タマキガイ	直線文	小片
VI208	VI	S D VI105(中層)	壺	肩部	木葉文	タマキガイ	直線文	小片
VI275	VI	S K V 193(土坑E)	壺	胴部	直線文	タマキガイ	凸帯文(連鎖状)	
V192	V	S K V 215(土坑D)	壺	肩部	羽状文	不明	直線文	搬入品
V222	V	S K V 221(土坑C)	壺	胴部	斜格子目文+重弧文	タマキガイ	凸帯文(押圧)	
V234	V	S K V 310(土坑C)	壺	肩～胴部	重弧文	タマキガイ	直線文+凸帯文(連鎖状)	
V252	V	S K V 202(土坑B)	壺	肩部	直線文	タマキガイ		
V281	V	S K V 218(土坑B)	壺	胴部	縦直線文+木葉文+斜格子目文	タマキガイ	直線文	小片
VI317	VI	S K V 183(土坑B)	壺	口縁部内面	直線文+山形文	タマキガイ	直線文+凸帯文(連鎖状)	
VI321	VI	S K V 183(土坑B)	壺	胴部	重弧文	タマキガイ	直線文+凸帯文(連鎖状)	
VI322	VI	S K V 183(土坑B)	壺	胴部	重弧文	タマキガイ		小片
VI347	VI	S K V 189(土坑B)	壺	頸～胴部	直線文+山形文	タマキガイ	凸帯文(連鎖状)	口縁部のみ欠損
VI412	VI	第VI層	壺	胴部	重弧文	タマキガイ	直線文	小片
VI413	VI	第VI層	壺	胴部	直線文+木葉文	タマキガイ		小片



第331図 岩崎遺跡出土の貝殻施文土器

S K VI183からは、壺形土器の口縁部片1点と胴部片2点が出土した。V317は口頸部片で、頸部には凸帯（連鎖状刻目文）と直線文、口縁部内面に凸帯をもつ。口縁部内面の凸帯上方には貝殻腹縁による直線文3条と山形文3条を施す。VI321は胴部片で、凸帯（連鎖状刻目文）を貼り付け、凸帯上方には直線文3条と貝殻腹縁による弧文3条を施す。VI322は胴部小片で、弧文3条を施す。S K VI189からは、ほぼ完形の壺形土器（口縁部を欠損）が出土した。VI347は外反する口縁部をもつもので、頸部と肩部に1条、胴部に2条の凸帯（連鎖状刻目文）を貼り付け、口縁部内面にも凸帯を貼り付ける。凸帯を除く施文は、いずれも貝殻腹縁によるもので、頸部、肩部、胴部には直線文、胴部上位には山形文3条を施す。

(3) 第VI層出土品：第VI層中からは2点が出土した。VI412・VI413は壺形土器の胴部小片で、VI412はヘラ描きの直線文と、直線文間に貝殻腹縁による弧文2条を施す。VI413は貝殻腹縁による木葉文と直線文2条を施す。

### 3. 分析

18点の貝殻施文土器のうち、胎土が在地のものとは明らかに異なるものが1点ある。ここでは、搬入品と在地土器とに分けて、器種、器形、施文部位や文様、貝殻の種類について整理する。

#### (1) 搬入品

S K V215（土坑D）出土の壺形土器の肩部片（V192）は、貝殻腹縁による羽状文とヘラ描きによる直線文を施している。施文原体である貝殻の器種は限定できなかった。胎土や色調、文様の特徴から、山口県綾羅木遺跡出土のものに類例を求めることができる。

#### (2) 在地土器

##### 1) 器種と形態

貝殻文の施された器種は、S D V201出土の蓋形土器を除くと、いずれも壺形土器に限られている。壺形土器の形態は頸部が長く外反、外傾するものに限る。

##### 2) 施文部位

蓋形土器（V472）は壺形土器用で、つまみ部分を除く器面外面に貝殻文を施している。壺形土器は、頸部や肩～胴部に施すものが大半を占め、口縁部内面に施文されているものが1点（VI317）ある。また、胴部の上位から中位までに施文されるものが多く、凸帯（連鎖状刻目文）を貼り付ける土器に施文されるものが6点ある。

##### 3) 文様

文様は直線文・山形文・弧文・羽状文・木葉文・斜格子目文があり、2種類以上の文様を組み合わせたものが17点中7点ある。2種類以上の文様が組み合うものは5種類（A類～E類）がある。

A類は直線文+山形文（3点）、B類は直線文+弧文（1点）、C類は直線文+木葉文（1点）、D類は直線文+木葉文+斜格子目文（1点）、E類は斜格子目文+弧文（1点）となる。

なお、貝殻文のみを施す土器は小片を含めると5点あり、貝殻と貝殻以外の工具による施文と組み合わせるものが12点ある。

#### 4) 貝殻種

施文された線刻形状をみると、いずれも鋸歯状の圧痕が認められる。刻目は小さく、片側のみに圧痕が残っている。線刻形状と弧文の大きさから、本調査出土の貝殻施文に使用された貝は、大半がタマキガイで、このうち2点（V086、VI027）はベンケイガイの可能性がある。

#### 4. まとめ

本調査では、弥生時代前期末～中期初頭の時期に、貝殻文を施した土器が、壺形土器293点中17点（6%）となり、貝殻施文土器は極めて少ないことが判明した。

貝殻施文土器のうち、胴部に凸帯（連鎖状刻目文）を施すものが6点ある。この施文方法は、松山平野、特に来住台地上の遺跡で出土する弥生時代前期末～中期初頭の土器に数多くみられるものである。一方では、貝殻施文土器の中に1点の搬入品と、岩崎遺跡の中に、山口県あるいは東北部九州地方からの壺形土器や鉢形土器の搬入品が認められる。これ等のことは、貝殻による施文方法が、山口県や東北部九州地方から直接的あるいは間接的に伝わり、在地の土器の施文手法に取り入れたものと推測させるものである。

また、施文原体であるタマキガイやベンケイガイは、本調査検出の遺構や包含層からは1点も出土していない。これまで、松山平野における弥生時代遺跡の調査でも、二つの貝の出土例はない。さらに、生物の研究者に聞くと、現在の生息状況は、伊予灘での生存が確認されており、当時、二つの貝が伊予灘に生息していてもおかしくないとの見方もある。したがって、松山平野では、施文用の貝は搬入と採集の二つが考えられてくる。

今後は、弥生時代を通して貝殻施文土器の分析を行う必要がある。

#### 〔参考文献〕

- 伊東照雄 1980 「弥生式土器の文様と施文具」『日本民族文化とその周辺 考古篇』  
金関恕・伊東照雄 1981 『綾羅木郷遺跡Ⅰ』 下関市教育委員会  
金関恕・佐原眞 1986 『弥生文化の研究3 弥生土器Ⅰ』 雄山閣  
伊東照雄 1986 「貝殻文」『弥生文化の研究3 弥生土器Ⅰ』 雄山閣

## V 弥生時代の搬入品・外来系土器

### 1. はじめに

本調査では、弥生時代前期末～中期中頭に時期比定される3条の溝（SDV202・SDVI104・SDVI105）や土坑、土器溜まり、第VI層中から、外来的要素をもつ土器が12点出土した。これらの土器には、形態と胎土が在地のものとは明らかに異なる搬入品と、胎土は変わらないが、形態が在地にみられない外来系土器とがある。

加えて、弥生時代中期～後期の包含層である第V層中からも、外来的要素をもつ土器が3点出土している。ここでは、外来系要素をもつ土器について整理を行うことにする。

### 2. 資料（第333図、表47）

#### (1) 前期末～中期中頭の土器

##### 1) 搬入品

①形態や胎土より、綾羅木遺跡の綾羅木Ⅲ式に比定される土器で、周防灘周辺地域からの搬入品。

溝SDV202下層出土の鉢形土器V050は、口縁外端部に断面長方形の粘土紐を貼り付けて口縁部を成形する。溝SDVI105中層出土の壺形土器VI197は、口縁端部内面に断面三角形の凸帯を貼り付けている。

SKV215（土坑D）出土の壺形土器の肩部片V192は、貝殻腹縁による羽状文と、ヘラ描きの直線文を施す。

土器溜まりSXV301出土の鉢形土器V353は、口縁外端部に断面長方形の粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形し、口縁部下に耳状の把手が付く。

表47 岩崎遺跡出土の搬入品・外来系土器一覧

遺物番号	区	出土地点	器種	部位	搬入品	外来系土器	備考	時期
V050	V	SDV202下層	鉢	口縁部	山口		綾羅木Ⅲ式	前期末～中期中頭
VI016	VI	SDVI104下層	甕	底部		東北部九州	高槻式	前期末
VI197	VI	SDVI105中層	壺	口縁部	山口		綾羅木Ⅲ式	前期末～中期中頭
VI216	VI	SDVI105中層	鉢	口縁部		東北部九州	城ノ越式	中期中頭
V146	V	SKV465（土坑F）	壺	口縁部		東北部九州	城ノ越式	中期中頭
V192	V	SKV215（土坑D）	壺	肩部	山口		綾羅木Ⅲ式	前期末～中期中頭
V244	V	SKV460（土坑B）	甕	底部		東北部九州	城ノ越式	中期中頭
V278	V	SKV218（土坑B）	壺	口縁部		東北部九州	高槻式	前期末
V282	V	SKV218（土坑B）	鉢	口縁部		東北部九州	城ノ越式	中期中頭
V318	V	SKV445（土坑A）	壺	口縁部		東北部九州	城ノ越式	中期中頭～前葉
V353	V	SXV310	鉢	口縁部	山口		綾羅木Ⅲ式	前期末～中期中頭
V409	V	第VI層	壺	口縁部	東北部九州		城ノ越式	前期末～中期中頭
VI526	VI	第V層	高坏	脚部		吉備		中期後半
VI543	VI	第V層	壺	肩部	讃岐			後期
VI548	VI	第V層	壺	口縁部		山陰		後期末

②形態や胎土、色調より東北部九州地方、城ノ越式土器に類例を求めることができる土器。

V区第VI層出土の壺形土器V409は、口縁部は大きく外反し、口縁端部内面に丸味のある断面三角形の凸帯を貼り付ける。胎土は密で、色調は乳黄色を呈する。

2) 外来系土器

①形態的特徴から、東北部九州地方で弥生時代前期末とされる高槻式土器に類似するが、胎土や色調は在地のもの。

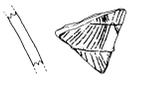
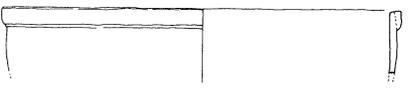
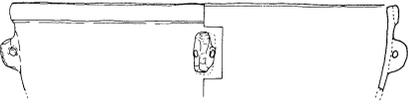
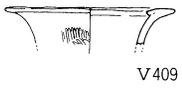
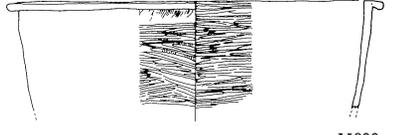
溝S D VI104下層出土の甕形土器VI016は、上げ底を呈し、器壁が厚いものである。

土坑S K V218（土坑B）出土の壺形土器V278は、口縁端部内面に丸味のある断面三角形の凸帯を貼り付ける。胎土は密で、色調は灰褐色を呈する。

②形態的特徴から、東北部九州地方で弥生時代中期初頭とされる城ノ越式土器に類似するが、胎土や色調は在地のもの。

第332図 岩崎遺跡出土の搬入品・外来系土器

(S=1:8)

	甕形土器	壺形土器	鉢形土器	高坏形土器	地域
前 期 末 〜 中 期 初 頭		 V197 ●   V192 ●	 V050 ●   V353 ●		山 口
	 VI016 ▲   V244 ▲	 V409 ●   V278 ▲   V146 ▲   V318 ▲	 VI216 ▲   V282 ▲		
中 期				 VI526 ▲	吉 備
後 期		 VI548 ▲			山 陰
		 VI543 ●			讃 岐

(●：搬入品 ▲：外来系土器)

土坑S K V 465（土坑F）出土の壺形土器V 146は、口縁部内面に丸味のある断面三角形状の凸帯を貼り付ける。凸帯上面は平坦になる。

土坑S K V 460（土坑B）出土の甕形土器V 244の底部は、筒状に延びる厚みのある上げ底となる。

土坑S K V 218（土坑B）出土の鉢形土器V 282は、口縁部が逆「L」字状となり、口縁部外面には、接合の際の指頭痕が顕著に残る。

溝S D VI 105中層出土の鉢形土器VI 216は、口縁部が断面「コ」字状に仕上げるが、胴部の張りが強い点はやや新しい要素をもち、弥生時代中期初頭～前葉のものに類似する。

土坑S K V 445（土坑A）出土の壺形土器V 318は、口縁部が逆「L」字状に折れ曲がり、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。VI 216と同様、弥生時代中期初頭～前葉のものに類似する。

## (2) 中期の土器

1) 搬入品 この時期には搬入土器はない。

2) 外来系土器 VI区第VI層出土の高坏形土器VI 526は、脚端部が跳ね上がり、内面にケズリ痕を持つことより、吉備地方の影響を受けたものであるが、色調や胎土は在地のものである。中期後半。

## (3) 後期の土器

1) 搬入品 VI区第VI層出土の壺形土器VI 543は、細長頸壺の肩部で、波状文を施す。胎土は密で、角閃石を含んでおり、色調は灰色を帯びる褐色である。形態や胎土は、讃岐地方に類例があり、同地方のものか。

2) 外来系土器 VI区第VI層出土の壺形土器VI 548は、複合口縁壺で、口縁部の折り曲げが強く、口縁端部は直立気味に立ち上がる。形態の特徴は山陰地方のものに類似するが、胎土や色調は在地のものである。後期末。

## 3. まとめ

本調査では、弥生時代前期末～中期初頭、中期後半、後期に時期比定される土器の中に、外来的要素をもつ土器が15点出土している。

出土量は、前期末～中期初頭が12点、中期後半が1点、後期が2点であり、前期末～中期初頭が最も出土量が多い。これは、遺跡出土の土器量が関係しているためである。

次に、時期と地域をみると、前期末～中期初頭では、山口地方と東北部九州地方、中期後半では吉備地方、後期では山陰地方と讃岐地方からのものがある。これをみると、前期末～中期初頭は松山平野より西側、中期～後期は松山平野の北・東側の地域と関係していることがわかってくる。

器種は、前期末～中期初頭では壺形土器が6点、鉢形土器が4点、甕形土器が2点あり、壺形土器と鉢形土器の割合が高く、中期～後期では壺形土器と高坏形土器の二種類となり、甕形土器と鉢形土器はない。前者と後者とでは、器種に差が認められてくる。

今回の調査では、前期末～中期初頭には、山口地方や東北部九州地方といった周防灘西岸地域、中期～後期には、中国・四国地方からの搬入品とその影響が認められた。これは、松山平野における他地域との交流・交易を知るうえで貴重な資料となるものである。また、弥生時代前期末～中期初頭の松山平野、下関市一帯、北九州市の土器編年がより詳細になれば、周防灘西岸地域との時間的併行関係は整理がつくものといえる。

## VI 弥生時代前期末～中期初頭の石器

### 1. はじめに

調査では、土器に伴って石器が数多く出土した。特に、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される遺構内からは、様々な器種の石器が多数出土している。ここでは、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される3条の溝（SDV202・SDVI104・SDVI105）と土坑（土坑A～土坑F）から出土した石器を整理・検討し、松山平野における弥生時代前期末～中期初頭の石器の基礎資料を提示するものである。

### 2. 資料

本調査では、弥生時代前期末～中期初頭の溝3条と土坑185基から56点の石器が出土した（表48）。

#### (1) 器種構成と比率

器種には、石鏃、石庖丁、加工斧、伐採斧、砥石、石剣、独鈷石、敲石、磨石、石皿、スクレイパー、石器素材がある。

器種組成は、石鏃6点（溝2点、土坑4点）、石庖丁11点（溝4点、土坑7点）、扁平片刃石斧4点（溝1点、土坑3点）、柱状片刃石斧6点（溝4点、土坑2点）、伐採斧7点（溝4点、土坑3点）、砥石3点（土坑）、石剣2点（溝）、独鈷石1点（溝）、磨石1点（土坑）、敲石1点（土坑）、石皿1点（土坑）、スクレイパー13点（溝7点、土坑6点）、石器素材1点（土坑）となる。各器種の比率をみると、石庖丁が約3割となり、全体の中で占める割合が高い。

表48 溝・土坑出土の石器組成

出土地点	器種	石鏃	石庖丁	扁平片刃石斧	柱状片刃石斧	伐採斧	砥石	石剣	独鈷石	磨石	敲石	石皿	スクレイパー	石器素材	計
SDV202下層		1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	5
SDV202中層		0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	4
SDV202上層		0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
SDVI104下層		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
SDVI104中層		0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3
SDVI104上層		0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3
SDVI105中層		0	2	1	1	0	0	1	1	0	0	0	1	0	7
土坑 F		0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	3
土坑 D		0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5	0	6
土坑 C		1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	6
土坑 B		2	2	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	9
土坑 A		1	3	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	7
計		6	11	4	6	7	3	2	1	1	1	1	13	1	56

#### (2) 器種と形態

本稿では、実測図を掲載した38点を分析対象とし、資料は第333・334図と表49に掲示した。使用する資料は、溝からの18点と土坑からの20点の石器である。

ここでは、器種ごとに材質や形態的特徴、製作過程について整理する。

##### ① 石鏃

石鏃は6点あり、溝からは2点（SDV202下層：V057、SDVI104下層：VI035）、土坑からは4

点（土坑A1点：VI375、土坑B 2点：V261・VI338、土坑C 1点：V225）が出土している。すべて打製の石鏃で、石材はサヌカイトを使用している。形態の特徴より、凹基無茎鏃と平基無茎鏃の2者に分類され、それぞれ3点ずつが出土している。このうち、SDVI104下層出土品VI035は二等辺三角形を呈する小型品で、表・裏面共に全面敲打を施しており、縄文的な特徴を残している。他の5点はいずれも初剝離面を残している。

法量でみると、V057は、長さ4.0cm、幅2.1cm、厚さ4mmを測る大型品であるが、他は長さ1.4～2.4cm、重量0.2～1.0gを測る小型品である。

② 石庖丁

石庖丁は10点あり、溝からは4点、土坑からは6点が出土している。溝出土の4点はすべて製品で、土坑出土品6点のうち、2点は未製品である（土坑A：VI368、土坑B：VI352）。ここでは、製品と未製品とに分けて、形態や製作手法について説明する。

表49 溝・土坑出土の石器一覧

遺物番号	出土地点	器種	石材	形態	製品	未製品	備考
V057	SDV202下層	石鏃	サヌカイト	凹基無茎式	○		
VI035	SDVI104下層	石鏃	サヌカイト	平基無茎式	○		
V225	SKV425(土坑C)	石鏃	サヌカイト	凹基無茎式	○		
V261	SKV217(土坑B)	石鏃	サヌカイト	平基無茎式	○		
VI338	SKVI190(土坑B)	石鏃	サヌカイト	平基無茎式	○		
VI375	SKVI177(土坑A)	石鏃	サヌカイト	凹基無茎式	○		
V058	SDV202下層	石庖丁(打製)	サヌカイト	長方形	○		
VI123	SDVI104上層	石庖丁(磨製)	緑色片岩	長方形	○		偏両刃
VI229	SDVI105中層	石庖丁(磨製)	緑色片岩	外湾刃半月形	○		偏両刃
VI230	SDVI105中層	石庖丁(磨製)	緑色片岩	長方形	○		
VI314	SKVI187(土坑C)	石庖丁(磨製)	緑色片岩	長方形	○		偏両刃
V302	SKV416(土坑B)	石庖丁(磨製)	結晶片岩	杏仁形	○		
VI352	SKVI189(土坑B)	石庖丁(磨製)	緑色片岩	長方形		○	
VI368	SKVI176(土坑A)	石庖丁(磨製)	緑色片岩	杏仁形		○	
VI374	SKVI177(土坑A)	石庖丁(磨製)	変成岩	長方形	○		
VI388	SKVI199(土坑A)	石庖丁(磨製)	緑色片岩	直線刃半月形	○		
VI231	SDVI105中層	扁平片刃石斧	緑色片岩	断面－長方形	○		
V149	SKV204(土坑F)	扁平片刃石斧	緑色片岩	断面－長方形	○		ほぼ完形
V211	SKV201(土坑C)	扁平片刃石斧	緑色片岩		○		
VI332	SKVI158(土坑B)	扁平片刃石斧	緑色片岩		○		
V101	SDV202中層	柱状片刃石斧	緑色片岩		○		
V135	SDV202上層	柱状片刃石斧	緑色片岩		○		挟入り
VI068	SDVI104中層	柱状片刃石斧	緑色片岩	断面－長方形	○		
VI233	SDVI105中層	柱状片刃石斧	緑色片岩		○		
VI290	SKVI144(土坑C)	柱状片刃石斧	緑色片岩	断面－台形	○		偏両刃
V315	SKV433(土坑B)	柱状片刃石斧	変成岩		○		
VI069	SDVI104中層	伐採斧	安山岩	断面－楕円形	○		
VI124	SDVI104上層	伐採斧	変成岩		○		
VI125	SDVI104上層	伐採斧	変成岩	断面－楕円形	○		
VI324	SKVI183(土坑B)	伐採斧	緑色片岩	断面－楕円形	○		
V102	SDV202中層	石剣	層界岩	断面－ひし形	○		搬入品
VI232	SDVI105中層	石剣	緑色片岩		○		転用品
V199	SKV462(土坑D)	砥石	砂岩		○		携帯品
VI342	SKVI180(土坑B)	砥石	石英粗面岩		○		
V215	SKV437(土坑C)	石器素材	緑色片岩				
VI234	SDVI105中層	独鈷石	安山岩		○		
VI070	SDVI104中層	スクレイパー	不明				
VI280	SKVI139(土坑D)	スクレイパー	サヌカイト				

i) 製品

製品は8点あり、溝からはSDV202下層より1点(V058)、SDVI104上層より1点(VI123)、SDVI105中層より2点(VI229・VI230)が出土している。土坑からは、土坑Cより1点(VI314)、土坑Bより1点(V302)、土坑Aより2点(VI374・VI388)が出土している。

平面形態より4種類に分類され、直線刃半月形態1点(VI388)、外湾刃半月形態1点(VI229)、杏仁形態1点(VI368)、長方形態4点(V058・VI123・VI230・VI314・VI374)となる。

石材は、V058はサヌカイトを使用するが、他の7点は、在地産の変成岩を使用している。なお、V058は打製、他はすべて磨製の石庖丁である。

貫孔はすべて敲打により両面から施されているが、貫孔箇所以外にも貫孔に伴うと思われる敲打痕を残すものが2点(V302・VI374)ある。

刃部の作りは、5点(V058・V302・VI230・VI374・VI388)は片刃である。このうち、V058は側部に挟りはなく、両側部共に折れている。刃部には敲打を施すが、背部は層状の剥離がそのまま残る。

第333図 溝出土の石器

(石鏃：S = 1/6、石鏃以外：S = 1/10)

		石 鏃	石 庖 丁	扁平片刃石斧	柱状片刃石斧	代 採 斧	そ の 他
SDV202	下層	V027 ●	V058 ●				
	中層				V101		V102 ■
	上層				V135		
SDVI104	下層	VI035 ●					
	中層				VI068	VI069 ▲	VI070
	上層		VI123			VI124 VI125	
SDVI105	中層	VI229 VI230	VI231	VI233		VI232 VI234 ▲	

(●：サヌカイト ▲：安山岩 ■：層界岩)

したがって、V058は典型的な打製石庖丁とは異なるが、それを意識した作り方になる。他の3点(VI123・VI229・VI314)の刃部は片面の鑄が明瞭で、もう片面にも不明瞭な鑄をもち、いわゆる偏両刃になっている。

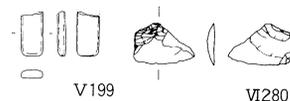
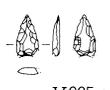
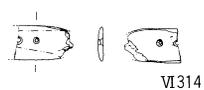
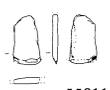
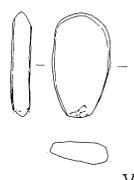
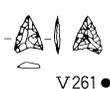
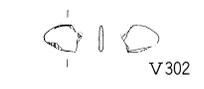
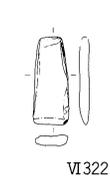
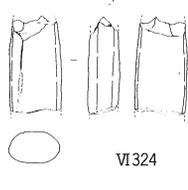
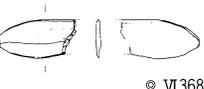
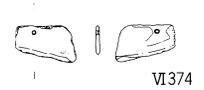
ii) 未製品

未製品は、土坑Bより1点(VI352)と、土坑Aより1点(VI368)のあわせて2点が出土している。平面形態は、VI352は長方形、VI368は杏仁形を呈する。石材は両者共に在地産の変成岩を使用している。

未製品2点は、明らかに敲打段階に破損したと思われるものである。VI352は刃部を製作する前、つまり、打裂が終了する前の段階で、背部寄りに貫孔のための敲打を施している。一方、VI368は刃部を製作した後、貫孔箇所を除き、研磨を施している。これらのことから、石器の製作過程には貫孔(敲打)前に刃部を作り出す方法と、刃部を作り出した後、貫孔を行う方法の2種類を認めることができる。

第334図 土坑出土の石器

(石鏃：S = 1/8、石鏃以外：S = 1/10)

	石 鏃	石 庖 丁	扁平片刃石斧	柱状片刃石斧	代 採 斧	そ の 他
土坑 F			 V149			
土坑 D						 V199 V280
土坑 C	 V225 ●	 VI314	 V211	 VI290		 V215
土坑 B	 V261 ●  VI338 ●	 V302  ● VI352	 VI322	 V315	 VI324	 VI342
土坑 A	 VI375 ●	 ● VI368  VI374  VI388				

(●：サヌカイト ○：未製品)

### ③ 加工斧

加工斧は、扁平片刃石斧4点と柱状片刃石斧6点が出土している。

#### i) 扁平片刃石斧

扁平片刃石斧は、溝から1点（SDVI105中層：VI231）、土坑Fから1点（V149）、土坑Cから1点（V211）、土坑Bから1点（VI332）が出土した。

平面形態は、すべて基部に比べ刃部の幅が広く、側面はやや丸味を帯びている。法量では、VI332は長さ5.8cmを測るやや大型品であるが、他の3点は、長さ2.8～3.8cmを測るものである。厚さは、VI231は7mmを測るが、他の3点は厚さ2～3mmとなる。

刃部は、VI231は明確に作り出されており、鑄は明瞭であるが、他の3点は明確に作り出されていないため鑄は不明である。研磨は、VI231は全面に丁寧に施されているが、他の3点は入念ではない。このうち、V149とVI332の2点は、基部と基部寄りの側面は製作途中で破損しているが、そのまま研磨を施して仕上げている。

4点の扁平片刃石斧のうち、VI231は厚みがあり、鑄は明瞭であることや、全面に丁寧な研磨を施していることから、九州地方の形態を意識した作り方になっている。

石材は、すべて在地産の緑色や青緑色の変成岩類を使用している。

#### ii) 柱状片刃石斧

柱状片刃石斧は、溝から4点（SDV202中層：V101、SDV202上層：V135、SDVI104中層：VI068、SDVI105中層：VI233）、土坑Cから1点（VI290）、土坑Bから1点（V315）が出土した。

出土した6点中3点（V101・V315・VI233）は破損品である。V135は挟りをもつもので、挟りは角が丸く、挟り中央部分はやや膨らんでいる。挟入柱状片刃石斧の形態では、やや新しい段階の特徴を示している。VI290はノミ形の石斧で、基部にまで研磨が及ぶ。総じて側面は丸く、面取りはあまい。石材はいずれも、緑色や青緑色を呈する在地産の変成岩類を使用している。

### ④ 伐採斧

伐採斧は4点出土している。内訳は溝SDVI104中層より1点（VI069）、SDVI104上層より2点（VI124・VI125）、土坑Bから1点（VI324）である。すべて破損品で、断面形態は楕円形状を呈している。VI069のみ、刃部が基部に比べて幅が狭くなっている。4点の伐採斧のうち、VI124は小型品で、基部に敲打痕を残すことから、破損した後、くさびとして使用された可能性がある。

石材は、在地産の変成岩を使用したもの3点（VI124・VI125・VI324）と、安山岩を使用したもの1点（VI069）とがある。

### ⑤ 石剣

石剣はSDV202中層とSDVI105中層より、それぞれ1点ずつ出土している。SDV202出土品V102は、層界岩製の石材を使用したもので、断面形態はひし形を呈するが、片面の鑄は不明瞭である。同様の石材を使用したとみられる石剣が、持田町3丁目遺跡の土坑SK32より出土している。この石材は在地にはみられず、搬入品と考えてよい。SDVI105出土品VI232は、関は認められるが、両側面及び器表面に敲打痕を残すことから、製作途中で破損し、石庖丁に転用したものと推測される。石材は在地産の変成岩を使用している。

⑥ その他

このほか、土坑Dと、土坑Bから砥石が1点ずつ（V199・VI342）と、土坑Cから石器素材1点（V215）が出土し、溝からは独鈷石が1点（SD VI105中層：VI234）とサヌカイトの剥片1点（SD VI104中層：V070）が出土している。また、土坑Dからもサヌカイトの剥片が1点出土している（VI280）。

砥石VI342は平面形態が矩形で、4面の研磨面をもつ。V199は小型品で、携帯用と考えられるものである。石材は、VI342は石英粗面岩、V199は砂岩を使用している。独鈷石VI234は製品で、片側は破損している。中央部に節をもたず、帯状に敲打により凹ませて、突起状の高まりを作り出している。したがって、典型的な独鈷石ではない。石材は安山岩を使用している。

3. まとめ

本稿で扱った資料は、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される溝と土坑に伴うものである。各器種でみると、以下の5点が特筆すべき事柄である。

(1) 磨製石鏃が未出土：石鏃は6点が出土したが、すべてサヌカイト製の打製石鏃であった。縄文時代晩期にはサヌカイトと黒曜石の二者が使用されており、石材の単一化がみられる。

(2) 打製石庖丁と磨製石庖丁が共存し、磨製品は平面形態が多形式化する：石庖丁は平面形態で直線刃半月形態、外湾刃半月形態、杏仁形態、長方形形態の四種類があり、弥生時代前期末～中期初頭には様々な形態が存在するようである。さらに、未製品が出土していることから、石庖丁は集落内で製作されているものと考えられる。また、打製品が存在することは留意しておきたい。

(3) 柱状片刃石斧に挟りをもつものと、もたないものが存在する：これまで、松山平野出土品には、挟りをもつものは出土例が少なく、その時期は明確でないものが多かった。本例は、時期が特定できる良好な資料になる。

(4) 石材の異なる伐採斧が存在する：石器に使用された石材は、石庖丁と加工斧はすべて在地産の変成岩類を使用しているのに対し、伐採斧の中には安山岩を使用したものがある。

(5) 縄文的要素の強い石器（実用的なもの－石鏃、非実用的なもの－独鈷石）と、大陸系磨製石器が共伴する：特に、石剣は在地の石材にみられないものを使用しており、搬入品の可能性が高い。さらに、石庖丁や加工斧の中に九州的な要素をもつものもあり、石剣を含め、他地域の影響を多大に受けたものと考えられる。

今回の調査では、弥生時代前期末～中期初頭にて、石剣を始め、石庖丁、石斧、砥石など多くの器種の石器が存在していることがわかった。これは、松山平野における弥生時代前期末～中期初頭における石器資料を整理していくうえで、ひとつの指標を与えたものといえる。

今後は、資料収集を重ね、石器の編年や制作方法、加えて石材の搬入ルートや他地域との交流・交易についても追求していかねばならない。

さて、本稿では石器の時間的変化を推察しようとして、出土地点を明記して論述した。しかしながら、資料の数量的不足もあり、器種組成や形態の時間的変化は言及するに至らなかった。なお、見通しとしては、この間に大きな変化はないものと思われる。

## Ⅶ 弥生時代前期末～中期初頭の土坑

### 1. はじめに

今回の調査では、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される土坑は185基を検出した。すべて、調査地北側の第3エリアで確認したものであり、V区に100基、VI区に85基がある。埋土の違いにより6種類（土坑A～F）に分類されるが、各土坑内から出土した遺物をみると、時期差はほとんどなく、短期間に掘削と埋め立てが行われたものと推測される。切り合い関係からは、土坑Fが最も古く、土坑E→土坑D…→土坑Aの順に新しくなっている。最も検出数の多い土坑は土坑Cで51基あり、全体の28%を占める。ついで、土坑Bが48基、土坑Dが44基、土坑Aが22基、土坑Eが12基となり、最も検出数の少ないものは、土坑Fで8基である。

V・VI区には、前期末～中期初頭の溝3条（SDV202・VI104・VI105）があり、溝SDV202とSDVI104とで囲まれた地域（環壕内地域）には、185基の土坑のうち、178基が存在し、残る7基は地域外にある。3条の溝と土坑との間には切り合いがみられ、土坑CがSDV202下層部分を切り、土坑C・D・EがSDVI105下層に切られ、土坑AがSDVI105上層を切っている。つまり、SDV202は土坑C埋没以前、SDVI105は土坑C埋没以降に掘削された溝になり、土坑AはSDVI105埋没以降に掘削されたものとなる。

また、これら185基の土坑のうち、壁面が内傾ないし、垂直に立ち上がる、いわゆる貯蔵穴の形態をもつものが20基ある。ここでは、事実報告と同様に貯蔵穴と貯蔵穴以外の土坑とに分けて、平面形態や断面形態、堆積状況、変遷について整理を行うことにする。

### 2. 資料

#### (1) 貯蔵穴

##### ① 立地と切り合い関係

貯蔵穴は、20基中19基が環壕内地域（東西検出幅14m×南北100m、検出面積1,400m<sup>2</sup>）にあり、残る1基（SKVI202）は地域の北側にある。立地条件は、V・VI区は縄文時代後期以前に多数の流路が流れ、これらの流路の浸食作用により地山が形成されるが、その際に両地区には残留物が堆積し、微高地となる。その上に第Ⅶ層明黄褐色シルトが堆積し、貯蔵穴の坑底はこの第Ⅶ層に達している。

貯蔵穴の切り合い関係は、土坑Fと土坑Dが切り合い、貯蔵穴と他の土坑との切り合い（最多3回）が認められることから、短期間のうちに作り替えがなされたことを示している。いいかえれば、1基の貯蔵穴が機能した期間は非常に短いものといえる。

##### ② 分類

検出した20基の貯蔵穴は、平面形態と断面形態により分類される。

まず、平面形態では、円形と楕円形の2種類があり、それぞれをA類、B類とした。次に断面形態では、Ⅰ～Ⅲ類に分類し、Ⅰ類は壁体が基底面から外傾して立ち上がり、土坑の中～下位で内傾して、上位に続き、壁体全面がいわゆる「袋状」を呈するもの、Ⅱ類は壁体が基底面から内傾して立ち上がり、壁体全面がいわゆる「フラスコ状」を呈するもの、Ⅲ類は壁体が基底面から直立気味に立ち上がり、壁体全面がいわゆる「筒状」を呈するものである（第335図）。

そこで、平面形態と断面形態とを合わせて、貯蔵穴20基は次のように分類し、表50にまとめた。

第335図 貯蔵穴の断面形態分類

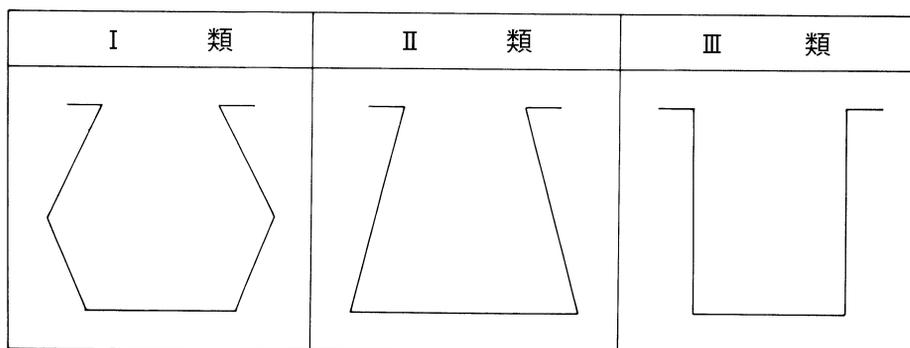


表50 貯蔵穴一覧

番号	平面形態	断面形態	分類	規模 長径×短径×深さ(m)	出土遺物	備考	埋土
SKV465	円形	筒(東壁逆台形)	A III	2.00×2.00×0.60	弥生・石		F
SKV423	楕円形	筒(東壁フラスコ)	B III	1.40×0.90×0.38	弥生・石		F
SKV463	円形	袋(西壁逆台形)	A I	1.66×(1.44)×0.56	弥生		E
SKVI172	円形	筒(東壁フラスコ)	A III	1.00×(0.94)×0.63	弥生	小ピット	E
SKVI202	円形	フラスコ(北壁袋)	A II	1.17×1.16×0.40	弥生・石		D
SKV424	円形	筒(西壁逆台形)	A III	1.90×(0.90)×0.60	弥生・焼土・炭化物		D
SKVI143	円形	筒(北壁フラスコ)	A III	1.30×1.24×0.60	弥生	小ピット	D
SKVI178	楕円形	フラスコ(北壁逆台形)	B II	0.90×(0.70)×0.35	弥生		D
SKV427	楕円形	筒	B III	1.64×1.44×0.48	弥生・石		D
SKV304	楕円形	袋(東壁逆台形)	B I	1.82×1.08×0.93	弥生		D
SKVI104	円形	袋(西壁不明)	A I	1.40×1.30×0.60	弥生・焼土・炭化物		C
SKVI162	円形	袋(北壁逆台形)	A I	1.20×1.00×0.80	弥生・石・焼土・炭化物	焚火	C
SKVI160	円形	袋(東壁逆台形)	A I	1.00×0.90×0.90	弥生・炭化物		C
SKV201	円形	筒(東壁フラスコ)	A III	1.64×1.62×0.50	弥生・加工斧		C
SKVI144	円形	筒(東壁フラスコ)	A III	0.90×0.80×0.70	弥生・加工斧		C
SKV437	楕円形	筒(東壁フラスコ)	B III	1.80×1.50×0.85	弥生・石・焼土・炭化物	基底面再利用 小ピット	C
SKVI183	円形	筒(東壁フラスコ)	A III	1.00×0.90×0.60	弥生・伐採斧	小ピット	B
SKV460	不整楕円形	筒(西壁フラスコ)	B III	1.68×0.60×0.50	弥生・石・炭化物		B
SKVI167	不整円形	フラスコ	A II	1.00×0.90×0.90	弥生		A
SKV417	不整楕円形	袋	B I	1.34×0.90×0.66	弥生		A

- A I 類：平面形態が円形で、断面形態が袋状のもの
- A II 類：平面形態が円形で、断面形態がフラスコ状のもの
- A III 類：平面形態が円形で、断面形態が筒状のもの
- B I 類：平面形態が楕円形で、断面形態が袋状のもの
- B II 類：平面形態が楕円形で、断面形態がフラスコ状のもの
- B III 類：平面形態が楕円形で、断面形態が筒状のもの

③ 分 析

i) 形態と変遷 (第336図、表51)

上記の分類によると、平面形態ではA類 (円形) が13基、B類 (楕円形) が7基となり、断面形態ではI類 (袋状) が6基、II類 (フラスコ状) が3基、III類 (筒状) が11基となる。

平面形態をみると、土坑E段階を除き、いずれの段階にもA類とB類が共存する。

断面形態をみると、最も古い段階の土坑Fに、筒状を呈するIII類が2基 (A III・B III類) みられる。ただし、この2基は、壁面の一部がフラスコ状や逆台形状を呈している。

次に、土坑Eの段階で壁面の一部が袋状を呈するI類が1基 (A I類) 出現し、つづく、土坑Dの段階になり、壁面の一部がフラスコ状を呈するII類が2基出現するが、壁面の一部は逆台形状になっている。土坑Cの段階には、壁面の大半が袋状を呈するI類が3基 (A I類) みられるようになるが、壁面の一部は逆台形状となる。土坑Bの段階には、筒状を呈するIII類が2基 (A III・B III類) 存在するが、壁面の一部はフラスコ状になる。その後、土坑Aの段階には2基の貯蔵穴がみられ、両者は、壁面全体が袋状とフラスコ状を呈するものになっている。したがって、断面形態ではIII類が最も早く出現し、その後、II類、I類の順で作られることになる。

平面形態と断面形態をあわせみると、断面形態が筒状を呈するIII類のものは、A類、B類共に、土坑Fから土坑Bの段階にはほぼみられる。ただし、これらは、壁面全体が筒状となるものではない。

また、壁面全体がフラスコ状と袋状になるものは、土坑Aの段階になり、A類、B類共にみられている。これらのことから、平面形態と断面形態との間には、あまり規制はないものと判断される。

表51 貯蔵穴分類

	A I	A II	A III	B I	B II	B III	計
土 坑 F	0	0	1	0	0	1	2
土 坑 E	1	0	1	0	0	0	2
土 坑 D	0	1	2	1	1	1	6
土 坑 C	3	0	2	0	0	1	6
土 坑 B	0	0	1	0	0	1	2
土 坑 A	0	1	0	1	0	0	2
計	4	2	7	2	1	4	20

弥生時代前期末～中期初頭の土坑

第336図 貯蔵穴一覧

(S = 1 : 120)

	A I 類	A II 類	A III 類	B I 類	B II 類	B III 類
土坑 F			<p>SKV 465</p>			<p>SKV 423</p>
土坑 E	<p>SKV 463</p>		<p>SKV 172</p>			
土坑 D		<p>SKV 202</p>	<p>SKV 424</p> <p>SKV 143</p>	<p>SKV 304</p>	<p>SKV 178</p>	<p>SKV 427</p>
土坑 C	<p>SKV 140</p> <p>SKV 162</p> <p>SKV 160</p>		<p>SKV 201</p> <p>SKV 144</p>			<p>SKV 437</p>
土坑 B			<p>SKV 183</p>			<p>SKV 460</p>
土坑 A		<p>SKV 167</p>		<p>SKV 417</p>		

ii) 分布

検出数と分布との時間的変化をみてみることにする。

土坑Fの段階には、環壕内地域のほぼ中央部に、AⅢ類とBⅢ類とがそれぞれ1基存在する。

土坑Eの段階には、土坑F段階と同様に、ほぼ中央部にAⅠ類が1基、地域の北側にAⅢ類が1基存在する。

土坑Dの段階になると、貯蔵穴以外の土坑も増加してくる。6基の貯蔵穴が存在し、土坑FやEの段階に比べ広がりを見せ、地域のほぼ中央部に2基（AⅢ類・BⅢ類）、地域南側に1基（BⅢ類）、地域北側に2基（AⅢ類・BⅡ類）が存在する。

土坑Cの段階には、土坑Dと同様の分布状況をなすが、地域北側に集中する傾向がある。地域中央部に1基（BⅢ類）、地域南側に1基（AⅢ類）、地域北側に4基（AⅠ類3基・AⅢ類1基）が存在する。

土坑Bの段階になると、地域中央部から北側に2基（AⅢ類・BⅢ類）が存在する。

土坑Aの段階では、地域中央部に1基（BⅠ類）、地域北側に1基（AⅡ類）が存在する。

iii) 規模

次に、規模をみる。ここでは、床面積に着目して整理をしていく。

円形土坑13基では、床面積0.5~0.9m<sup>2</sup>のものが6基、床面積1.0~1.4m<sup>2</sup>のものが4基、1.5m<sup>2</sup>以上のものが3基となる。SKVI144（土坑C：AⅢ類）は床面積0.50m<sup>2</sup>を測り、本調査検出の貯蔵穴のうち、最も規模の小さなものである。次いで、SKVI167（土坑A：AⅡ類）が床面積0.58m<sup>2</sup>となる。一方、SKV465（土坑F：AⅢ類）は床面積3.14m<sup>2</sup>となり、最も規模が大ききものである。

楕円形土坑7基では、床面積1.0~1.2m<sup>2</sup>のものが5基、1.6~1.8m<sup>2</sup>のものが2基ある。ただし、床面積1.0~1.2m<sup>2</sup>の土坑のうち、全体像の不明なものが4基あり、本来は、規模がやや大きくなるものと考えられる。床面積の最も大ききものは、SKV427（土坑D：BⅢ類）とSKV437（土坑C：BⅢ類）で、床面積1.65m<sup>2</sup>を測る。最も小さなものはSKVI178（土坑D：BⅡ類）で、床面積1.0m<sup>2</sup>となる。

iv) 内部施設

20基の貯蔵穴のうち、基底面と壁体にピットを検出したものが4基ある。

土坑Bは1基（AⅢ類：SKVI183）、土坑Cは1基（BⅢ類：SKV437）、土坑Dは1基（AⅢ類：SKVI143）、土坑Eは1基（AⅢ類：SKVI172）となる。

土坑Bと土坑Eでは、径5cm大の小ピットが1基、基底面中央部付近にあり、土坑D（SKVI143）では、短径10~30cm、長径30~50cmの楕円形状のピット3基が基底面壁体沿いに並ぶ。土坑C（SKV437）では、遺構中央部に埋土中位から掘り込まれたピットが1基あり、径20cm大のピット1基が、遺構南西部の壁体上位に、斜め方向に掘り込まれている。

v) 出土遺物

貯蔵穴から出土した遺物は、土製品が多数を占め、少量の石器もある。

土坑B（SKVI183）と土坑D（SKV427）からは、復元すると完形になる土器が出土し、土坑Bと土坑Fからは、外来系土器（東北部九州地方）の出土がある。

石器は、土坑Bから伐採斧の破損品が1点、土坑Cからは加工斧の破損品が2点出土している。

このほか、埋土中と基底面から焼土や炭化物を検出したものが6基ある。土坑Cでは、埋土中に炭化物や焼土が層をなしている土坑や、坑底に焼けた痕跡を残す土坑があることから、基底面の再利用や、土坑内での焚火を推測させる。

#### ④ 小 結

20基の貯蔵穴は、平面形態にA類（円形）とB類（楕円形）とがあり、この2つが弥生時代前期末～中期初頭における貯蔵穴の平面形態と考えられる。規模は、土坑Fと土坑Dの段階には、床面積1.6㎡前後のものや、3㎡を越えるものがあり、大型土坑が多くみられるのに対して、土坑Cから土坑Aの段階には、床面積0.5㎡前後のものも多くみられ、時期が下がるにつれ、規模が小さくなる傾向がある。断面形態では、I類（袋状）、II類（フラスコ状）、III類（筒状）の3種類の形態が存在する。整理の結果、III類が最も古い段階で出現し、次いでII類が出現し、I類がやや後出するようである。そして、壁面全体がI類とII類のものは、土坑Aの段階に限られていた。

出土遺物をみると、わずかに2基の土坑内からは復元完形品となる土器が出土しているが、本稿で貯蔵穴と判断したものうち、明らかに貯蔵用として使用された痕跡を残すものは見当たらない。

#### (2) その他の土坑

##### ① 立 地

調査では、貯蔵穴20基以外に165基の土坑を検出している。すべて、調査地北側、第3エリアのV区・VI区にて確認したもので、V区では90基、VI区では75基を検出した。内訳は、V区第2地区で20基、第3地区で17基、第4地区で53基、VI区第1地区で70基、第2地区で3基、第3地区で2基となる。

ここでは、埋土と切り合い関係をもとに、平面形態や断面形態、堆積状況について、165基の土坑を整理し、検討する。

##### ② 分 類

165基の土坑は、平面形態を基軸に断面形態と堆積状況をも分類してみた。なお、前項の貯蔵穴との比較をするために、記号化は貯蔵穴の分類に準じ、新たに加えたものもある。

平面形態には、円形A類と楕円形B類に加え、方形C類、長方形D類、不定形E類の5種類がある。断面形態は、逆台形状と皿状をIV類、舟底状とすり鉢状をV類として大別した。

堆積状況は、単一堆積をa類、放物線型凹堆積をb類、水平堆積をc類、斜堆積をd類として、4分類した。

なお、記述では平面形態が円形（A類）で、断面形態が逆台形（IV類）のものをAIV類、平面形態が楕円形（B類）で、堆積状況が単一堆積のもの（a類）をBa類と呼称する。

##### ③ 整 理

###### i) 形態と変遷（表52・53）

平面形態は、A類が51基、B類が58基、C類が17基、D類が37基、E類が2基となり、A類とB類とで全体の65%を占めている。

断面形態では、IV類は151基（逆台形状：97基、皿状：54基）、V類は14基（舟底状：11基、すり鉢状：3基）となり、IV類が全体の92%を占める。

平面形態と断面形態とを合わせみると、BIV類が最も多く51基（31%）、次いでAIV類が47基（28%）、DIV類が36基（22%）、CIV類が15基（9%）となる。

堆積状況では、a類が141基あり全体の85%を占める。次いで、b類が12基（7.3%）、c類が11基（6.7%）、d類が1基（1%）となる。

表52 断面形態別一覧

	A IV	A V	B IV	B V	C IV	C V	D IV	D V	E IV	計
土坑 F	0	0	4	0	2	0	0	0	0	6
土坑 E	5	0	1	0	2	0	2	0	0	10
土坑 D	9	2	10	0	3	2	10	1	1	38
土坑 C	15	1	17	5	5	0	2	0	0	45
土坑 B	11	0	12	2	2	0	18	0	1	46
土坑 A	7	1	7	0	1	0	4	0	0	20
計	47	4	51	7	15	2	36	1	2	165

表53 推積状況別一覧

	Aa	Ab	Ac	Ba	Bb	Bc	Bd	Ca	Cb	Da	Db	Dc	Ea	計
土坑 F	0	0	0	4	0	0	0	2	0	0	0	0	0	6
土坑 E	5	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	1	0	10
土坑 D	9	2	0	10	0	0	0	5	0	10	0	1	1	38
土坑 C	13	1	2	19	0	3	0	5	0	2	0	0	0	45
土坑 B	10	1	0	10	3	0	1	2	0	15	1	2	1	46
土坑 A	7	1	0	5	1	1	0	1	0	3	1	0	0	20
計	44	5	2	48	4	5	1	16	1	31	2	4	2	165

時間的変遷をみると、最も古い段階に出現する土坑FにはB IV類とC IV類がみられ、次の土坑E段階以降には、A～D類の4種類がすべてみられるようになる。そして、A類とB類とは土坑の増減に伴い、検出数も変化する。一方、D類は土坑Dと土坑Bの段階には全体に占める割合が高くなっていく。

断面形態では、IV類は土坑F段階から、V類は土坑D段階から出現し、土坑D段階以降はIV類とV類とが共存することになる。

#### ii) 分布

分布は、最も古い段階に出現した土坑FはV区第4地区、つまり、環壕内地域の中央部にほぼ集中する。土坑Eの段階では、地域中央部と地域北側のVI区第1地区にほぼ同数が点在する。土坑Dの段階になると前段階に比べ検出数が約4倍になり、分布は地域全域に散在する。土坑Cの段階では、前段階より検出数がやや増加するが、分布は土坑Dとほぼ同じ状況を示す。特に、土坑Dと切り合うものが多数みられる。

引き続き、土坑Bの段階では前段階とほぼ同数の検出数で、分布は地域中央部から北側に集中する傾向がある。特に、平面形態がD類（長方形）の土坑が地域中央部付近に集中し、土坑の長軸方向を北西－南東に向け、列をなすものが5基みられる。最も新しい段階に出現する土坑Aは、前段階に比べ約半数になるが、分布は地域南側では検出されず、中央部から北側に点在するようになる。

iii) 規模

規模でみると、平面形態の違いで大小の差異がみとめられる。

まず、A類（円形）では径1.0～1.3mの土坑が全体の約50%を占め、径1.6～1.8mと、径0.6～0.8mの土坑がそれぞれ20%ずつある。また、径2mを越える大型のものが10%程度存在するが、土坑Aと土坑Bの段階に多くみられる。

B類（楕円形）では長径1.0～1.4mと、長径1.6～1.9mの土坑とがそれぞれ35%あり、長径2.0～2.2mの土坑が15%、2.4mを越える大型土坑が10%存在する。土坑Dから土坑Aの段階には、これら長径の異なる土坑が先の比率で共存している。

D類（長方形）では、長軸1.6～1.8mの土坑が40%と最も多く、長軸1.2～1.3mのやや小型、長軸が2.0～2.3mの中型、長軸が2.5mを越える大型土坑が、それぞれ20%ずつある。なお、短軸長は、長軸1.6～1.8mでは1.1～1.3m、2.0～2.3mでは1.3～1.5m、1.2～1.3mでは0.7～0.9mとなる。

これを床面積でみると、以下のようになる。

A類土坑は、床面積1.2～1.5m<sup>2</sup>が最も多く、0.5m<sup>2</sup>前後と2.0m<sup>2</sup>前後がそれに続く。B類土坑では、床面積1.6～2.0m<sup>2</sup>と0.8～1.0m<sup>2</sup>とが同数あり、2.2～2.4m<sup>2</sup>がそれに続く。D類土坑では、床面積1.6～1.9m<sup>2</sup>が最も多く、0.8～0.9m<sup>2</sup>と2.1～2.5m<sup>2</sup>がそれに続く。

iv) 内部施設

165基の土坑のうち、基底面にてピットを検出したものが43基ある。

ピットは径5cm大のものから、最大で30cm前後のものまでがある。埋土別にみると、土坑Aには8基、土坑Bには16基、土坑Cには8基、土坑Dには7基、土坑Eには4基がある。土坑の平面形態とピットとの関係は、A類土坑の場合、基底面中央部にピットが位置するものが5基、基底面壁体沿いと中央部付近とに5基以上のピットをもつものが2基ある。B類土坑では、長軸の壁体と基底面中央部にピットをもつものが3基、D類土坑では、長軸の壁体と基底面中央部にピットをもつものが2基ある。このほか、基底面にて10基以上の小ピットを検出した土坑が3基ある。

v) 出土遺物

土坑内からは土製品のほか、石器や骨、炭化物や焼土が出土した。

遺物の出土状況を見ると、土坑Cと土坑Dでは、他の埋土の土坑に比べ、比較的大型の土器片が出土している。

また、土坑内からは他地域からの搬入品もしくは外来系と考えられる土器が3点出土している。

搬入品は、土坑D（SKV215）から山口県地方の綾羅木Ⅲ式に相当する土器が1点出土している。

外来系土器は土坑A（SKV445）と土坑B（SKV218）から、城ノ越式土器に類似する土器が1点ずつ出土している。

石器は土坑Eを除く土坑から、様々なものが出土している。

器種は石鏃、石庖丁、加工斧、伐採斧、砥石があり、出土量は石鏃4点（土坑A1点、土坑B2点、土坑C1点）、石庖丁6点（土坑A3点、土坑B2点、土坑C1点）、加工斧5点（土坑B2点、土坑C2点、土坑F1点）、伐採斧1点（土坑B）、砥石2点（土坑B、土坑D）である。

165基の土坑のうち、動物遺存体（骨）が出土したものは4基（土坑B 3基、土坑C 1基）ある。分析の結果、種別は猪と鹿であることが判明している。このうち、土坑BのSKV309出土の骨は鹿で、表面が焼けており、土坑BのSKVI204出土の骨は猪の歯で、埋土中位付近に列をなして出土している。動物遺存体の詳細は、本章の「X 動物遺存体」で記述する。

このほか、18基の土坑内からは、焼土や炭化物が検出された。

#### ④ 小 結

貯蔵穴以外の土坑165基には、平面形態にA類（円形）、B類（楕円形）、C類（方形）、D類（長方形）、E類（不定形）の5種類がある。このうち、A類とB類をあわせると全体の6割を占め、この2者が主体をなしている。

断面形態はIV類（逆台形状・皿状）とV類（舟底状・すり鉢状）の2種類があり、IV類が全体の9割以上を占めている。

一方で、平面形態と断面形態との関係では、規制が弱いことが分かった。

土坑の存続期間は、a類の単一堆積をなすものが全体の8割以上を占め、さらには各土坑の切り合いが数多くみられることから、短期間の掘削や埋め立てがなされたものと判断される。

時間的変化では、いずれの平面形態をなす土坑にも、床面積1㎡未満の小型土坑と、1.5㎡前後の中型土坑、2㎡を越える大型土坑があるが、時期が下がるにつれ、やや大型土坑の割合が増加する傾向にあった。

注目すべきは、土坑B段階でみられるD類（長方形）土坑である。この段階にはD類の割合が他の段階に比べ多く、しかも、土坑の長軸方向が一定している（北西－南東方向）ものが5基存在している。これは、他の段階にはみられない事象であり、特異な性格をもった土坑の可能性はある。現時点では、機能や性格は保留しておく。

### 3. まとめ

今回の調査では、貯蔵穴を含む185基の土坑を検出したが、切り合いが多数みられることや、調査期間の関係上、すべての土坑を厳密に調査することは非常に困難であった。ここでは、貯蔵穴とその他の土坑とに分けて、平面形態・断面形態・堆積状況・規模などをまとめてみた。

その結果、貯蔵穴では平面形態に円形と楕円形の2種類がある。法量では、小型・中型・大型の3者があるが、床面積1.0～1.4㎡の中型が主体をなしている。断面形態では筒状・フラスコ状・袋状の3種類があり、最初に筒状のものが出現し、その後、フラスコ状、袋状と形態が変化するようである。

断面形態からは様々な状況がみえてくる。北部九州地方の弥生時代前期にみられる貯蔵穴と比較すると、壁面全体ではなく、一部が筒状やフラスコ状をなすものが非常に多く、壁体の崩落があったにしろ、本調査検出の貯蔵穴の形態は、伝播による地域的な特色のあらわれではないかと考えている。

その他の土坑では、円形・楕円形のほかに、方形・長方形・不定形をなすものがある。法量をみると貯蔵穴と同様、中型が主体をなす。

断面形態では、逆台形状・皿状・舟底状・すり鉢状の4種類があるが、逆台形状と皿状のものが大半を占めている。

貯蔵穴とその他の土坑との共通点は、両者共に単一堆積をなすものが大半を占めていることである。つまり、個々の土坑の存続期間が非常に短いことがわかる。

一方、両者の差異は、平面形態と法量変化にある。

貯蔵穴には、平面形態が方形や長方形をなすものはみられない。法量をみると、両者共に小型・中型・大型の土坑があるが、貯蔵穴は時期が下がるにつれ、小型化するのに対し、その他の土坑は、やや大型化する傾向がある。

課題は、貯蔵穴以外の土坑にみられる長方形土坑の性格や、土坑基底面検出のピットの性格付けがあげられる。また、本稿では、断面形態を基準に貯蔵穴を設定してみたが、それ以外の165基の土坑の中にも、貯蔵穴とすべき土坑が存在しているものと考えている。

今後は、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定されている土坑の資料収集を重ね、構造や機能を明確にし、松山平野における当該期の貯蔵穴形態や推移を考えていきたい。

〔参考文献〕

山本一朗 「弥生時代の食糧貯蔵形態をめぐって」 『周防古王国の研究』

## Ⅷ 弥生時代前期末～中期初頭の集落変化

### 1. はじめに

第Ⅶ節までに、弥生時代前期末～中期初頭の遺構と遺物について、個別に整理と分析を進めてきた。ここでは、これ等の成果を用いて、同時期の細かな集落変遷を考えてみることにする。

まず、論考を進めていくうえで、3条の溝（SDV202・SDVI104・SDVI105）と土坑との関係が重要になるが、この点は発掘調査と整理作業により、両者は密接な関係にあることが明らかになってきた。つまり、本調査検出の3条の溝は、土坑構築のために掘削されたものと考えられ、土坑は埋土や切り合い関係から土坑Fが最も古く、土坑E→土坑D…→土坑Aの順に構築されるという変遷が判明している。したがって、集落変遷は土坑の時間的变化（変遷）を基軸としてみていくことにする。

### 2. 集落変遷（第337・338図、表54）

#### 1期＝土坑Fの段階

調査地北側、第3エリアのV区とVI区では、縄文時代後期に第Ⅶ層明黄褐色シルトが堆積し、基盤面を形成する。その後、弥生時代前期末～中期初頭には、V区第2地区に溝SDV202、VI区第1地区に溝SDVI104が掘削される。両者は溝幅5m前後、深さは1.3～1.5mを測り、規模の大きな遺構になる。

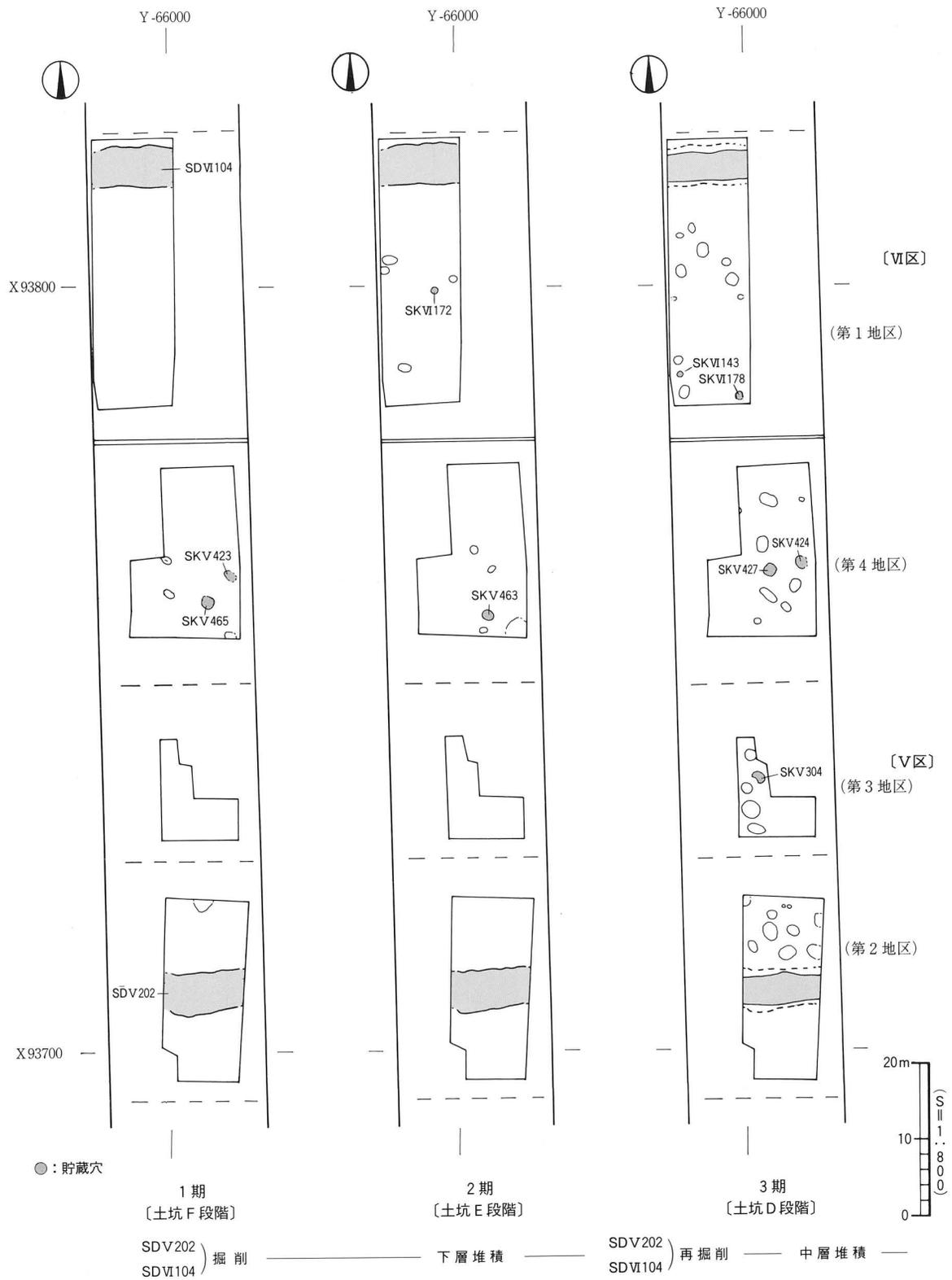
両者の掘削により、調査地内には溝で囲まれた地域（以下、「環壕内地域」と呼称、溝と溝との内径100m）が出現する。そして、環壕内地域中央部付近（V区第4地区）と同地域南側（V区第2地区）には、灰オリーブ色土を埋土にもつ土坑F6基（貯蔵穴2基、土坑4基）が構築されることになる。

1期には、土坑と溝から搬入土器1点（綾羅木Ⅲ式）と外来系土器2点（高槻式・城ノ越式古相）が出土し、東北部九州地方～山口地方との関係が認められる。

表54 集落変遷と土器編年

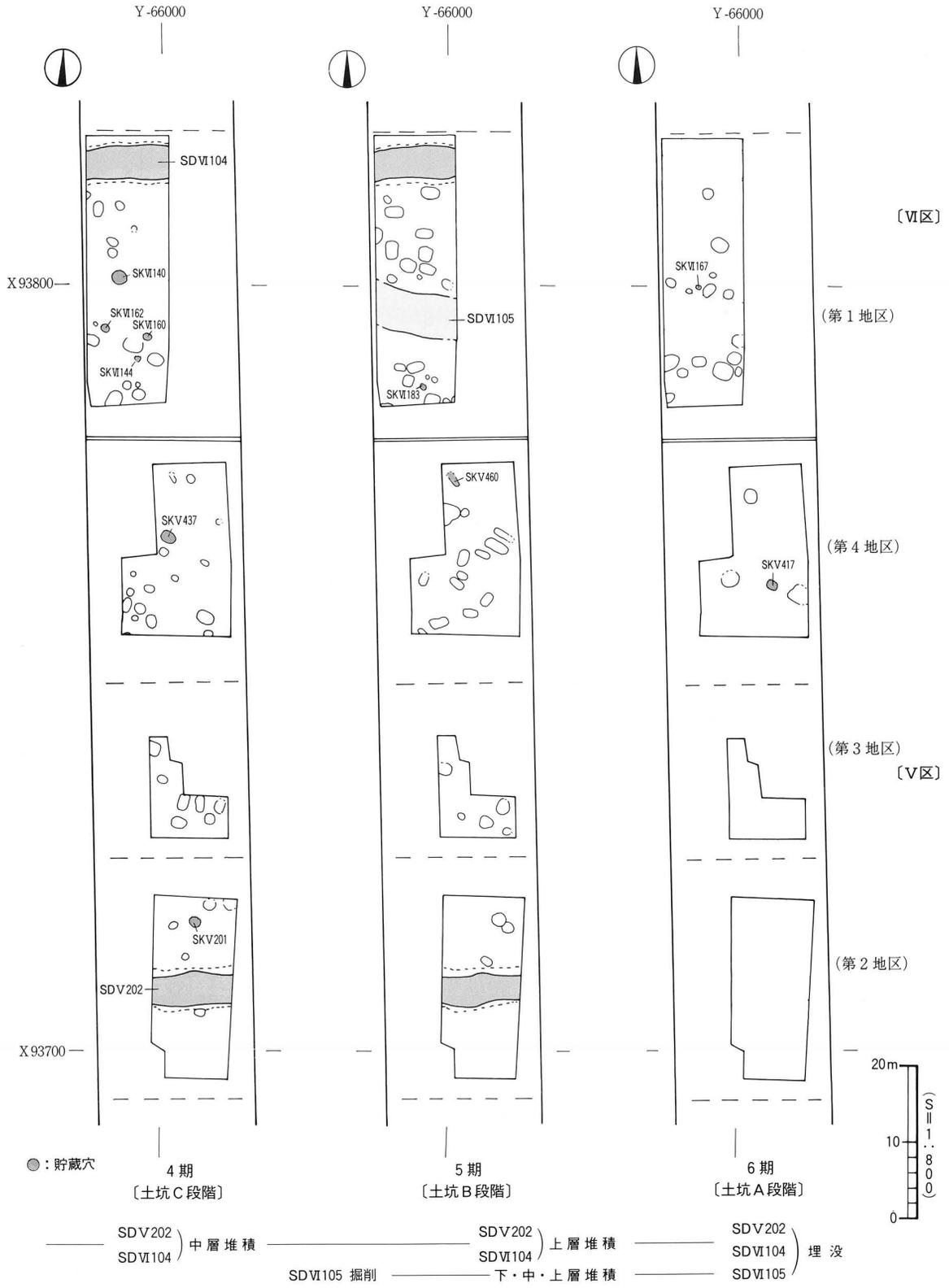
	溝		土坑	土器	搬入品・外来系土器	九州	畿内
1期	環壕掘削		F	古相	綾羅木Ⅲ(SDV202下層) 高槻式(SDVI104下層) 城ノ越式古相(SKV465)	高槻式 城ノ越式 (前期末～) 中期初頭)	第I 様式 新 段階
2期	SDV202 SDVI104 下層堆積		E				
3期	SDV202 SDVI104 再掘削		D	中相	綾羅木Ⅲ(SKV215)		
4期	SDV202 SDVI104 中層堆積		C				
5期	SDV202 SDVI104 上層堆積	SDVI105掘削	B	新相	綾羅木Ⅲ(SDVI105中層) 高槻式(SKV218) 城ノ越式古相(SDVI105中層) (SKV218)	第II 様式	
6期	環壕埋没後		A				城ノ越式新相(SKV445)

弥生時代前期末～中期初頭の集落変化



第337図 溝・土坑変遷図(1)

調査の成果



第338図 溝・土坑変遷図(2)

## 2期＝土坑Eの段階

その後、灰オリーブ色土と明黄褐色土との混合土を埋土にもつ土坑Eが、環壕内地域中央部と北側（Ⅵ区第1地区）に12基（貯蔵穴2基、土坑10基）構築される。切り合いがⅤ区第4地区であり、土坑Eが土坑Fを切っている。ただし、土坑Fと土坑Eとは埋土が比較的類似することから、両者の構築にはあまり時間差がないものと考えている。両土坑が存在している間、溝SDV202とSDVI104は、溝中位付近から壁体付近まで、砂を含む灰黄～灰オリーブ色土（下層）が堆積し、溝幅と深さは縮少する。溝の縮少化に伴い、両溝は二次的な掘削（再掘削）が施されることになる。

## 3期＝土坑Dの段階

オリーブ褐色土を埋土にもつ土坑D41基（貯蔵穴5基、土坑36基）が、環壕内地域のほぼ全域に構築されるが、地域の外側にも土坑は構築され、Ⅵ区第2地区に貯蔵穴1基、Ⅵ区第3地区に土坑2基が存在する。前段階に比べ、検出数のうえでは約4倍に増加する。このなかには、土坑Fと切り合うものが2基存在する。3期には、SKV215から綾羅木Ⅲ式に比定される搬入土器が1点出土し、山口地方との関係が認められる。

## 4期＝土坑Cの段階

続いて、オリーブ褐色土と明黄褐色土との混合土を埋土にもつ土坑C49基（貯蔵穴6基、土坑43基）が、土坑Dと同様に、環壕内地域全域に構築され、地域外のⅤ区第2地区とⅥ区第2地区とにも、1基ずつの土坑が存在する。検出数のうえでは、3期よりやや増加し、この中には土坑Dと切り合うものが8基存在する。なお、Ⅴ区第2地区検出の土坑SKV221は、SDV202下層部分を切っている。

土坑Cと土坑Dは、土坑E・Fと同様に、埋土が比較的類似することと、切り合いが数多くみられることから、両者の構築には、時間差が少ないものと推測される。

## 5期＝土坑Bの段階

その後、褐色土を埋土にもつ土坑B48基（貯蔵穴2基、土坑46基）が構築されるが、4期に比べ、地域中央部から北側に比較的多く分布するようになる。溝SDVI105と土坑Bとの切り合い関係はなく、SDVI105の構築時期は明確にはわからない。ただし、SDVI105は土坑Cを切っていることから、土坑C埋没以降に掘削された溝になる。おそらく、土坑B構築に伴い、それと前後して掘削されたものと推測される。

注目されるのは、5期には地域中央部のⅤ区第4地区で長方形土坑が数多くみられ、一部が長軸方向を北西－南東にとるものが列をなしていることである。

土坑Dから土坑Bが地域内に存在する間、SDV202とSDVI104は中層～上層部分、SDVI105は土坑C構築以降、上・中・下層部分が徐々に堆積している。溝の埋土をみると、3条共に上層埋土は類似しており、3者はほぼ同時期に埋没したものとみられる。5期には土坑と溝から搬入土器1点と外来系土器4点出土し、山口地方及び東北部九州との関係が認められる。

## 6期＝土坑Aの段階

溝が埋没した後、黒褐色土を埋土にもつ土坑A20基（貯蔵穴2基、土坑18基）が構築されることになる。土坑Aは、地域中央部から北側に分布が限られる。6期にはSKV445から城ノ越式土器の模倣品1点出土している。この土器はやや新しい要素をもつものであり、中期初頭から前葉に時期比定される可能性がある。

### 3. 画期

土坑からみた集落変遷は、1期と2期では土坑数はわずかであるが、3期、つまりSDV202・SDVI104再掘削後に土坑数が急激に増加し、その分布も環壕内地域全域に点在する。続く、4期においても、3期と同様の分布状況がみられる。5期には、おそらくSDV202とSDVI104のほかに、SDVI105が掘削されているものと考えられる。環壕内中央部付近には長方形土坑が集中し、さらに、SDVI104とSDVI105とで囲まれた地域には、円～楕円形状土坑が比較的多く分布する。その後、6期、つまり、3条の溝が埋没した後は、環壕内地域の北側に土坑が比較的多く分布する。

土器による相対関係では、3条以上を1組とする工具を使用する技法cは土坑D段階にみられることから、中相の土器群は3期、クシ状工具を使用する、いわゆる技法dは土坑B段階にみられることから、新相の土器群は5期に所属することになる。さらに、溝出土品では、中相がSDVI104中層、新相はSDV202中層・SDVI104上層、SDVI105下層堆積時にみられる。

### 4. まとめ

調査では、弥生時代前期末～中期初頭に道後城北地区において環壕集落が存在することが明らかになった。しかも、竪穴式住居址は未検出であり、土坑のみを伴った環壕である可能性が高い。

SDV202とSDVI104は形状や断面形態、埋土、堆積状況から、同一の溝と判断され、両溝が環壕としての機能を持ち、両溝で囲まれた地域内には土坑を構築している。一方、SDVI105はSDV202・SDVI104とは断面形態や堆積状況、掘削時期が異なっており、環壕内を区切る仕切溝としての機能を持つ可能性がある。

環壕内で検出した土坑は、時期が下るにつれ、その数は増加し、分布範囲も地域全域に広がりを見せる。ひとつの土坑が存在した期間は比較的短く、頻繁に埋め立て、掘り直しがなされている。土坑の中には断面形態より、貯蔵穴と類似されるものがあるが、本来、貯蔵穴としての機能を有していたものが、廃絶時には「ゴミ捨て穴」として使用されたものもある。土坑内から出土した遺物を見ると、溝と同様、大幅な時期差は認められない。

溝と土坑からみた集落変遷では、SDV202・SDVI104を再掘削する時期と、SDVI105を掘削する時期、つまり、2期と3期、4期と5期との間に、集落の画期が認められる。

また、出土した土器からみると、以下のように整理できる。

SDV202・SDVI104掘削後+下層堆積時=土坑F+土坑E=1期+2期=古相

SDV202・SDVI104再掘削後+中層堆積時=土坑D+土坑C=3期+4期=中相

SDV202・SDVI104上層堆積時+SDVI105掘削・埋没時=土坑B+土坑A=5期・6期=新相

つまり、1・2期では2条1組の工具が使用され、3期になって、3条以上を1組とする工具が出現し、さらに5期になると、クシ状工具が使用されはじめることになる。

この現象を畿内編年と比較すると、クシ状工具の出現する5期に画期が求められ、1～4期が畿内の前期新段階、5期以降は中期となる。しかしながら、畿内のクシと松山平野のクシとは手法のみが同じであり、工具や開始時期が同一であるかは断定しえない。そのため、畿内第Ⅱ様式期が必ずしも本調査の5期に一致するとは限らない。

一方、九州編年と比較すると、搬入土器及び外来系土器（模倣品）から判断すれば、5期までは高槻式土器（前期末）と城ノ越式土器（中期初頭）の両者があり、6期になり、やや新しい要素をもつ

城ノ越式土器（中期初頭～前葉）がみられる。つまり、5期以前には前期末～中期初頭、6期段階には、中期初頭～前葉の土器が出土したことになる。九州編年との対比では、搬入土器が含まれていることから、松山平野との土器編年上の併行関係は、概ね間違いないものと考えている。

これらのことから、土坑B構築段階（おそらくSDVI105も掘削済）、つまり5期に、集落は前期から中期への過渡期にあり、6期には集落様相も土器様相も変化し、中期化することになる。

〔参考文献〕

岩井龍彦 1984 「高槻式土器について」 『西部瀬戸内における弥生文化の研究』

## Ⅸ 古代の土器

### 1. はじめに

本調査では、古代に時期比定される遺構や遺物が数多く検出された。出土した遺物の中には、暗文を施す土師器や施釉陶器（緑釉陶器・灰釉陶器）が含まれている。これ等の土器は、松山平野において近年資料数が増加しつつある。

本稿では、松山平野における古代土器研究の基礎資料を提示することを目的として、古代の土器を分析する。具体的には、暗文土師器は器種・形態・調整技法・暗文手法、施釉陶器は釉調・胎土・焼成について整理を行うことにする。なお、出土したこれらの土器は、第339・340図と表55・56にまとめた。

### 2. 暗文土師器（第339図、表55）

本調査では、暗文を施す土師器が14点出土した。内訳は、V区検出の古代の溝SDV201から11点、Ⅲ区検出の第Ⅲ層中から1点、第Ⅳ層中から2点である。このうち、畿内産とみられる土師器は3点出土し、他は、畿内産土師器に類似するものである。

(1) 畿内産土師器：Ⅲ区第Ⅲ層中から1点（Ⅲ079）、V区SDV201から2点（V451・V465）が出土している。Ⅲ079は坏の口縁部片で、口縁端部を丸くおさめた後、内側に沈線を施すものである。調整方法は、口縁部外面にヘラミガキを施す。内面には、口縁端部付近を除き、放射状の暗文がみられる。V451は坏の底部片で、外面は手持ちのヘラケズリにより平らである。内面には、放射状文とラセン文を施す。V465は高坏の坏部片で、口縁端部を丸くおさめた後、内側に沈線を施す。調整方法は、口縁端部付近を除きヘラミガキを施す。内面には、放射状文と連弧文を施す。

これら3点は、形態や調整方法、暗文手法から、畿内産土師器とみられるものである。Ⅲ079とV451は坏A形態を呈し、飛鳥・平城編年ではV451は平城I期、Ⅲ079とV465は平城Ⅲ期に相当するものであろう。

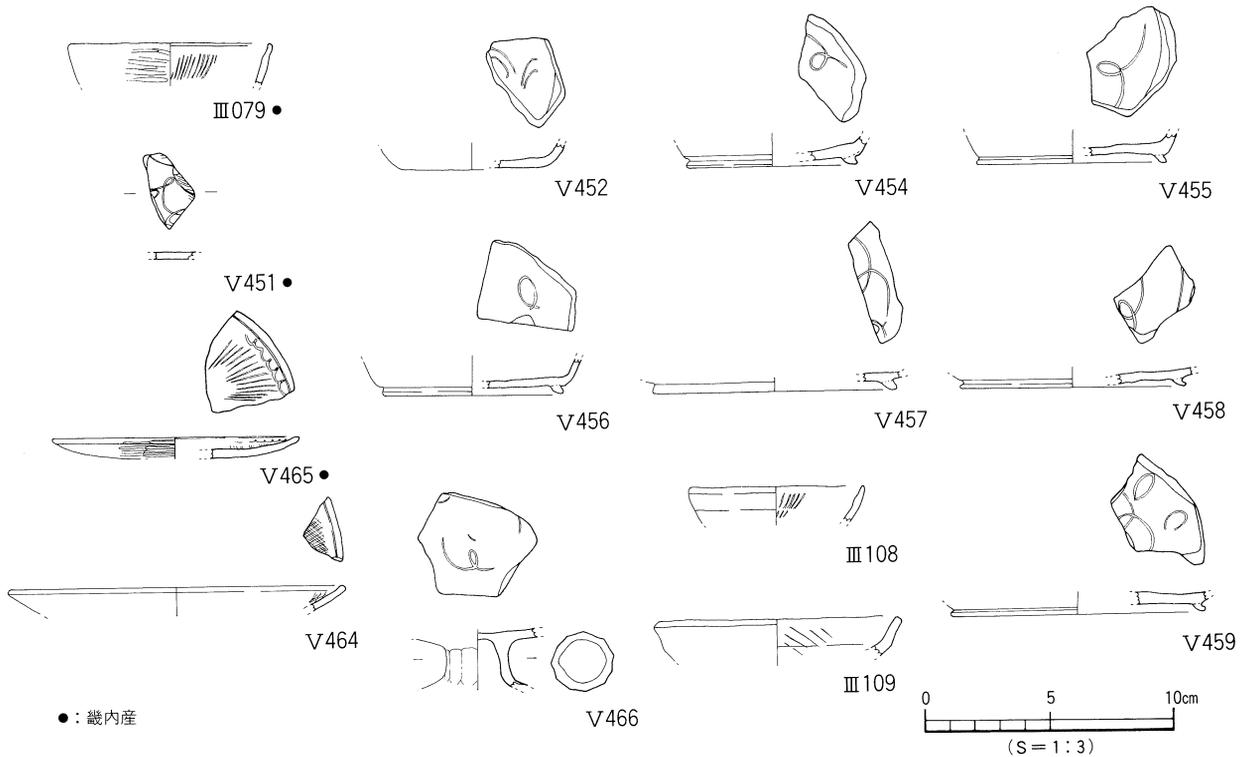
(2) 類似品：畿内産土師器3点を除く11点のうち、暗文手法は畿内産土師器に似ているが、調整方法や色調、形態がやや異なるものが9点ある。

SDV201出土の有台坏7点（V452・V454～V459）は、底部の形態や暗文手法は似ているが、調整方法が畿内産土師器とは異なっている。一般に、畿内産土師器の場合、底部外面は手持ちのヘラケズリ、もしくは削らないが、これら7点はすべて回転ヘラケズリを施している。また、SDV201出土の高坏2点（V464・V466）では、V464は坏部内面に斜格子目状の暗文がみられるが、色調が赤橙色を呈している。V466は、柱部を面取りし、坏部内面にはラセン状の暗文を施すが、畿内産土師器の中には、このような低脚のタイプはみられない。

このほか、Ⅲ区出土の坏2点（Ⅲ108・Ⅲ109）は、形態は畿内産土師器に類似するが、暗文が沈線状の凹みにより表現されている。在地の土師器にはあまりみられない形状であり、畿内産土師器を真似た土器が搬入された可能性がある。近年の調査では、松山大学構内遺跡3次調査地において、同タイプの出土例がある（参考文献1）。

表55 岩崎遺跡出土の暗文土師器一覽

遺物番号	区	出土地点	器種	部位	暗文	調整	備考	時期
Ⅲ079	Ⅲ	第Ⅲ層	坏	口縁部	放射状文(1段)	口縁部外面-ヘラミガキ	畿内産	8世紀中葉
Ⅲ108	Ⅲ	第Ⅳ層	坏	口縁部	放射状文(沈線状)			7~8世紀
Ⅲ109	Ⅲ	第Ⅳ層	坏	口縁部	放射状文(沈線状)			7~8世紀
V451	V	SDV201	坏	底部	放射状文+ラセン文	底部外面-手持ヘラケズリ	畿内産	8世紀前葉
V452	V	SDV201	坏	底部	ラセン文	底部外面-回転ヘラケズリ		8世紀中~後葉
V454	V	SDV201	坏	底部	ラセン文	底部外面-回転ヘラケズリ		8世紀中~後葉
V455	V	SDV201	坏	底部	ラセン文	底部外面-回転ヘラケズリ		8世紀中~後葉
V456	V	SDV201	坏	底部	ラセン文	底部外面-回転ヘラケズリ		8世紀中~後葉
V457	V	SDV201	坏	底部	ラセン文	底部外面-回転ヘラケズリ		8世紀中~後葉
V458	V	SDV201	坏	底部	ラセン文(2列)	底部外面-回転ヘラケズリ		8世紀中~後葉
V459	V	SDV201	坏	底部	ラセン文(2列)	底部外面-回転ヘラケズリ		8世紀中~後葉
V464	V	SDV201	高坏	坏部	斜格子目文			8世紀中~後葉
V465	V	SDV201	高坏	坏部	放射状文+連弧文	外面-ヘラミガキ	畿内産	8世紀中葉
V466	V	SDV201	高坏	脚部	ラセン文			8世紀中~後葉



第339図 岩崎遺跡出土の暗文土師器

## 3. 施釉陶器 (第340図、表56)

調査では、施釉陶器が12点出土した。緑釉陶器9点と灰釉陶器3点である。

ここでは、形態・胎土・焼成・施釉・調整方法から、産地と時期を想定する。

## (1) 緑釉陶器

調査で出土した緑釉陶器は、すべて破片であり、報告では6点の実測図を掲載し、残りの3点は小片のため、巻頭図版にて写真のみを掲載した(写真図版3、A・B・C)。

緑釉陶器は、調査地中央部Ⅲ区とⅣ区、調査地北側Ⅴ区で出土した。すべて、古代の遺物包含層になる第Ⅲ層中から出土したものである。実測図を掲載したものは、すべて碗の底部片であり、削り出しによる輪高台を有するもの5点(Ⅲ081、Ⅳ048~050、Ⅴ541)と、円盤高台を呈するもの1点(Ⅳ051)とがある。

Ⅲ081とⅤ541の2点は硬質で、底部内外面共に釉を施す。京都産で、9世紀後半頃に比定される。

Ⅳ051は、削り出しの円盤高台をもち、やや軟質で、底部外面に釉を施し、底部の回転糸切りを2次調整で消していることから、京都産で、9世紀後半~10世紀前半のものと考えられる。

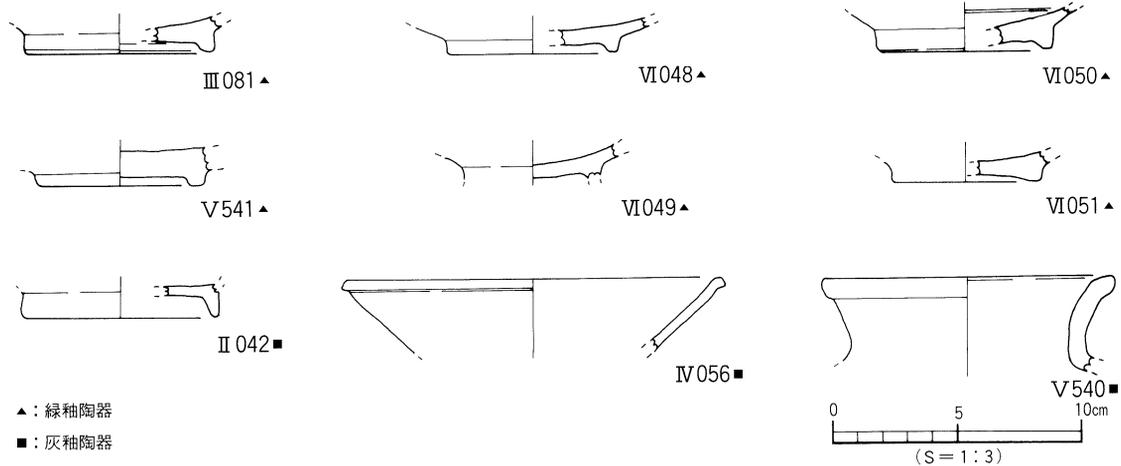
Ⅳ048~Ⅳ050の3点は、削り出しの輪高台をもち、底部外面に施釉をしないことと、底部外面の回転ヘラケズリの範囲が狭いことから、京都産で、10世紀前半に比定される。これら3点の緑釉陶器は、京都洛西古窯跡群の前山3号窯出土品に類例を求めることができる(参考文献2)。

写真図版で掲載した小片3点(A・B・C)は、焼成がAは軟質、B・Cはやや軟質である。胎土は精良で、色調はAが黄灰色、B・Cは灰白色を呈する。釉調はすべて薄緑色を呈する。小片のため産地や時期は特定できなかった。

表56 岩崎遺跡出土の施釉陶器一覧

遺物番号	区	出土地点	種類	器種	部位	胎土	焼成	釉調	施釉	備考	時期
Ⅲ081	Ⅲ	第Ⅲ層	緑釉	碗	底部	灰色	硬質	薄緑色	内外面施釉	削出輪高台	9世紀後半
Ⅳ048	Ⅳ	第Ⅲ層	緑釉	碗	底部	灰色	硬質	淡黄緑色	底部外面なし	削出輪高台	10世紀前半
Ⅳ049	Ⅳ	第Ⅲ層	緑釉	碗	底部	灰白色	やや硬質	薄緑色	底部外面なし	削出輪高台	10世紀前半
Ⅳ050	Ⅳ	第Ⅲ層	緑釉	碗	底部	黄灰色	軟質	薄緑色	底部外面なし	削出輪高台	10世紀前半
Ⅳ051	Ⅳ	第Ⅲ層	緑釉	碗	底部	灰白色	やや軟質	薄緑色	外面施釉	円盤高台	9世紀後半~ 10世紀前半
Ⅴ541	Ⅴ	第Ⅲ層	緑釉	碗	底部	灰色	硬質	深緑色	内外面施釉	削出輪高台	9世紀後半
A	Ⅴ	第Ⅲ層	緑釉	不明	体部	黄灰色	軟質	薄緑色	内外面施釉	巻頭図版掲載	不明
B	Ⅴ	第Ⅲ層	緑釉	不明	体部	灰白色	やや軟質	薄緑色	内外面施釉	巻頭図版掲載	不明
C	Ⅴ	第Ⅲ層	緑釉	不明	体部	灰白色	やや軟質	薄緑色	内外面施釉	巻頭図版掲載	不明
Ⅱ042	Ⅱ	第Ⅲ層	灰釉	碗	底部	灰色	硬質	灰白色	底部内面のみ	貼付輪高台	9世紀後半
Ⅳ056	Ⅳ	第Ⅳ層	灰釉	皿	口縁部	灰白色	硬質	灰白色	内外面施釉		9世紀後半
Ⅴ540	Ⅴ	第Ⅲ層	灰釉	壺	口縁部	灰色	硬質	灰白色	内外面施釉		不明

古代の土器



第340図 岩崎遺跡出土の施釉陶器

(2) 灰釉陶器

調査では、3点の灰釉陶器が出土した。すべて破片であり、調査地南側Ⅱ区、中央部Ⅳ区、北側Ⅴ区で出土したものである。Ⅱ区とⅤ区では第Ⅲ層、Ⅳ区では第Ⅳ層中から、それぞれ出土している。器種は椀・皿・壺の3種類である。

Ⅱ042は椀の底部片で、断面三日月状の高台を貼り付け、底部内面にわずかに釉がみられる。Ⅳ056は皿の口縁部片で、口縁端部はやや外反する。内外面共に釉を施す。これら2点は、形態や施釉方法から、猿投の黒笹90号窯式に類例を求めることができる(参考文献3)。時期は、9世紀後半である。

V540は壺の口縁部片で、口縁端部は内傾する。内外面共に釉を施す。産地や時期は不明である。

4. まとめ

調査では、暗文土師器と施釉陶器が古代の遺構や包含層中から出土した。

近年の調査では、暗文を施す土師器は、松山平野内で出土例が増加しているが、畿内産土師器の出土は報告例は少ない。岩崎遺跡が所在する道後城北地区では、松山大学構内遺跡3次調査地において2点(坏C形態：飛鳥Ⅱ期、坏A形態：平城Ⅲ期)が報告されている。

今回の調査では、畿内産土師器、畿内産土師器と調整方法や形態がやや異なる土師器、他地域で作られた畿内産土師器を模倣したと考えられる土師器の3種類が出土したことになる。現在までのところ、平野内における古代の土師器編年は確立しておらず、これらのことをふまえながら土師器編年を考えていかねばならないであろう。

施釉陶器は分析の結果、ほとんどが京都産であることが判明した。このうち、緑釉陶器は1998年7月現在までに、岩崎遺跡を含め愛媛県内では25遺跡から出土しているが、その大半は集落跡からの出土である(表57)。25遺跡のうち、19遺跡は京都産の緑釉陶器で、近江産が7遺跡、東濃産4遺跡、畿内産2遺跡が報告されている。器種では、椀が主体を占め、皿、段皿、耳皿、小壺がみられる。松山市内の遺跡に限ると14遺跡から出土しているが、来住廃寺を含む来住台地周辺では全体の半数となる7遺跡で出土が確認されている。

今回出土した畿内産土師器と施釉陶器は、畿内から松山平野への搬入時期が知られる資料であり、古代における畿内と松山平野との交流・交易を考えるうえで貴重な資料となるものである。

表57 緑釉陶器一覧

(日本三彩と緑釉：愛知県陶磁資料館編 1998より引用)

遺跡名	所在地	遺跡種類	椀		皿			小 壺	器 種 不 明	文 献
			椀	小椀	皿	耳皿	段皿			
岩崎遺跡	松山市持田町1丁目・岩崎町2丁目	集落址	●							
久米窪田森元遺跡 (3次)	松山市久米窪田町856-1	集落址	● ○							5
古照遺跡 (8・9次)	松山市南江戸3丁目912他	河川・ 集落址	●			●				6
座拝坂遺跡	松山市谷町甲325-1他	集落址	●							7
石井幼稚園遺跡 (1次)	松山市西石井町9番地	集落址	● ○ ○		●	●	●			8
川附遺跡	松山市福音寺町567-11	集落址	●							9
前川I遺跡	松山市南久米町	集落址	●							10
素鷲小学校構内遺跡 (1次)	松山市小坂1丁目4-48	集落址	●							11
樽味高木遺跡 (2次)	松山市樽味4丁目239他	集落址	○							12
樽味四反地遺跡 (1次)	松山市樽味4丁目204-1他	集落址	● ○	●				●		13
辻遺跡	松山市朝日ヶ丘1丁目1376他	集落址	●							14
道後今市遺跡 (9次)	松山市道後北代1292-1他	集落址	●							15
南久米才歩行遺跡 (1次)	松山市南久米町503-1他	集落址	● ○ ○ ○	●	●		●	●		16
南久米片廻り遺跡 (2次)	松山市南久米町534-1・3	集落址	●							17
郷桜井八反地遺跡	今治市桜井3丁目	集落址	●							
四村額ヶ内遺跡	今治市四村	集落址	●							18
四村日本遺跡	今治市四村	集落址		●	●					19
糸大谷遺跡	今治市砂場町2丁目	集落址	● ○		●					20
中寺馬之丞遺跡	今治市四村	集落址	○		●			●		21
日高19地点	今治市小泉1丁目625-4	集落址	●							22
八町1号遺跡	今治市八町西3丁目606-1	集落址	● ○ ○ ○		● ○ ○ ○	●				23
八町遺跡	今治市中寺	集落址	● ○ ○ ○							24
天神山遺跡	西条市下島山	集落址	●		●					
火内遺跡	越智郡吉海町椋名	集落址	● ○							25
赤岸鼻遺跡	越智郡吉海町大字名1462-2他	集落址	●							26

※産地——N=畿内 K=京都 O=近江 G=東濃 ※記号の大小——●=1~9個数 ●=10個数以上

〔参考文献〕

- 1 宮内慎一 1995 『松山大学構内遺跡Ⅱ』 松山市文化財調査報告書第49集
- 2 前川 要 1989 「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」 『古代文化』 第41巻第5号
- 3 斎藤孝正 1981 「猿投窯・尾北窯・尾濃窯における灰釉陶器の変遷」 『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』 多治見市教育委員会

- 4 愛知県陶磁資料館編 1998 『日本三彩と緑釉』開館20周年記念特別企画展
- 5 山本健一 1994 「久米窪田森元遺跡3次調査地」『来住・久米地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書第44集
- 6 栗田正芳 1996 『古照遺跡―第8・9次調査―』松山市文化財調査報告書第53集
- 7 松村 淳 1993 「座拝坂遺跡」『和気・堀江地区の遺跡』松山市文化財調査報告書第36集
- 8 栗田茂敏 1994 「石井幼稚園遺跡」『石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡―第2次調査』松山市文化財調査報告書第45集
- 9 松村 淳 1996 「川附遺跡」『福音寺地区の遺跡』松山市文化財調査報告書第52集
- 10 森 光晴 1981 「前川Ⅰ遺跡」『一般国道11号線松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』埋蔵文化財調査報告書第5集 愛媛県教育委員会
- 11 西尾幸則 1987 「素鷲小学校構内遺跡1次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』
- 12 栗田正芳 1994 「樽味高木遺跡2次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書第46集
- 13 梅木謙一 1992 「樽味四反地遺跡」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書第26集
- 14 栗田正芳 1989 「辻遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
- 15 橋本雄一 1994 「道後今市遺跡9次調査地」『道後城北遺跡群Ⅱ』松山市文化財調査報告書第37集
- 16 宮崎泰好 1989 「南久米才歩行遺跡」『松山市文化財調査年報Ⅱ』
- 17 松村 淳 1996 「南久米片廻り遺跡2次調査地」『小野川流域の遺跡』松山市文化財調査報告書第57集
- 18 廣田秀久他 1997 『四村額ヶ内遺跡』今治市埋蔵文化財調査報告書第33集 今治市教育委員会
- 19 谷若倫郎他 1998 『四村日本遺跡』埋蔵文化財調査報告書第71集 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 20 阿部勝行他 1996 『糸大谷遺跡』埋蔵文化財調査報告書第63集 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 21 廣田秀久他 1996 『中寺馬之丞遺跡』今治市埋蔵文化財調査報告書第25集 今治市教育委員会
- 22 廣田秀久他 1997 「日高19地点」『市内遺跡試掘確認調査報告書Ⅳ』今治市埋蔵文化財調査報告書第34集 今治市教育委員会
- 23 中野良一他 1995 『八町1号遺跡』今治市埋蔵文化財調査報告書第22集 今治市教育委員会
- 24 大瀧雅嗣 1989 「八町遺跡」『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 25 阿部勝行他 1998 『火内遺跡・臥間遺跡』埋蔵文化財調査報告書第70集 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 26 谷若倫郎 1984 「赤岸鼻遺跡」『国道317号道路改良事業関連埋蔵文化財調査報告書』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

## X 動物遺存体

### 1. はじめに

本調査では、遺構や包含層中より各種の動物遺存体（骨）が出土した。ここでは、時代別に動物遺存体の出土地点や種別、種類についてまとめてみる。調査で出土した動物遺存体は表58にまとめた。

なお、種別や部位の鑑定には、奈良国立文化財研究所 松井章氏にご助言を賜った。

### 2. 分析

#### (1) 弥生時代前期末～中期初頭

弥生時代前期末～中期初頭では、遺構内より8点の動物遺存体が出土した（NO.1～8）。すべて、調査地北側、V・VI区から出土したもので、溝内3点、土坑内5点である。

溝SDV202からは、3点の動物遺存体が出土し、（NO.1～3）すべて、猪の臼歯であった。

土坑内からは、猪と鹿の骨が出土している。埋土別にみると、土坑Bが4基（NO.4～7）、土坑Cが1基（NO.8）となる。特に、SKVI204（土坑B）からは、猪の下顎第一～三臼歯が列をなして出土した。また、SKV473（土坑B）からは、鹿もしくは猪の頭蓋骨の破片が出土し、SKV309（土坑B）からは、表面が焼けた鹿の骨が出土した（部位は不明）。

#### (2) 弥生時代中期～後期

弥生時代中期～後期では、調査地北側、VI区の包含層である第V層中より、猪の臼歯が1点出土した（NO.9）。

#### (3) 中世

中世では、調査地南側、I区の第IIA-③層中より、馬の臼歯が1点出土している（NO.10）。

#### (4) 時期不明

時期の特定できないものが3点ある。調査地中央部、III区検出のNO.11は、近現代坑から出土したもので、種別は判断できなかった。また、調査地北側、V区のピット内より2点（NO.12・13）の種別不明品が出土し、NO.12は表面に切り傷が残っていた。

### 3. まとめ

本調査では、弥生時代～中世の遺構や包含層中より、動物遺存体が8点出土した。注目されるのは、弥生時代前期末～中期初頭の溝や土坑内から出土した猪や鹿の骨である。松山平野内では、これらの資料は最も古い時期のものとなり、愛媛県内でも、阿方・片山遺跡出土（注1）のものとならび、弥生時代最古の資料となる。

松山平野内では動物遺体の遺存例は少なく、今回の資料は各時代の基礎資料になるものである。

（注1）

杉原荘介 1994 「平成6年度速報展とその資料より」（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

動物遺存体

表58 岩崎遺跡出土の動物遺存体一覧

No.	区	地区	出土地点	種別	部位	年齢・性別	備考	時期
1	V	2	SDV202 下層	猪	第三大白歯 (上顎・左)	不明		弥生前期末 ～中期初頭
2	V	2	SDV202 下層	猪	第三白歯 (左)	不明		弥生前期末 ～中期初頭
3	V	2	SDV202 中層	猪	白歯	不明		弥生前期末 ～中期初頭
4	V	3	SKV309 (土坑B)	鹿		不明	表面が焼けている	弥生前期末 ～中期初頭
5	V	4	SKV473 (土坑B)	鹿or猪	頭蓋骨	不明		弥生前期末 ～中期初頭
6	VI	2	SKVI204 (土坑B)	猪	第一～三白歯 (下顎・左)	成年・雄	列長7.53cm	弥生前期末 ～中期初頭
7	VI	2	SKVI204 (土坑B)	猪	第三白歯 (下顎・左)	不明	未摩耗	弥生前期末 ～中期初頭
8	V	4	SKV474 (土坑C)	不明		不明		弥生前期末 ～中期初頭
9	VI	1	第V層	猪	白歯	不明		弥生中期～後期
10	I	2	第II A-③層	馬	白歯	不明		13～15世紀
11	III	2	近現代坑	不明		不明		不明
12	V	4	SPV008	不明		不明	切り傷あり	不明
13	V	4	SPV106	不明		不明		不明

# 第11章 おわりに

岩崎遺跡の調査は、道後城北遺跡群東部地域における、弥生時代から中近世までの集落構造解明と古地形復元を主目的として実施した。

## 1. 古地形復元

調査地内には、堆積物・堆積環境・検出遺構の違いにより大きく3つのエリア（第1～3エリア）が存在し、それぞれのエリアで時代毎に地形環境と集落様相が異なっていた。

調査では、約4万年前の石手川の洪積礫層を全エリアで検出した。この礫層上面には、砂や砂礫層が堆積し、第1エリアでは石手川の本流が流れ、第2・第3エリアでは石手川の氾濫に伴う堆積物が残り、その上面を多数の流路が流れている。砂や砂礫層上面には、第3エリアのみに明黄褐色シルトが堆積し、この土層は、道後城北遺跡群内でみられる縄文時代後～晩期の包含層となる黄色シルトに対応している。明黄褐色シルト堆積時点で、第3エリアは地盤が安定化し、岩崎遺跡一帯には弥生時代前期の集落が営まれるようになってくる。

弥生時代以降の集落立地をエリア別にみると、北側の第3エリアでは弥生時代～中世に居住地として集落が営まれることになる。第2エリアでは古墳時代後期になり集落活動が始まり、古代になると集落遺構が散見され、その後、中近世を通して集落が営まれることになる。

一方、第1エリアは12世紀頃になり、土地が安定化し、人々は水田や畑を営むようになる。ただし、第1エリアからは建物址や土坑などの居住に関する遺構は検出されていない。

したがって、中世には第1エリアは生産域、第2・第3エリアは居住域として、土地利用法が明確に区別されていたことがわかる。

調査・研究の結果、集落の立地と地形環境とが密接に関係することを明らかにした。

## 2. 集落変遷

### (1) 縄文時代

縄文時代は、明確な遺構は検出されていない。ただし、弥生時代前期末～中期初頭に時期比定される遺構や包含層中から、当該期の遺物が出土している。遺構はないが、遺物の出土状況から、調査地北東部、石手川上流域に居住域が存在するものと推測される。

### (2) 弥生時代

#### 1) 弥生時代前期～中期初頭

弥生時代では、集落構造とその変遷及び土器様相の変遷を追うことができた。道後城北遺跡群内では、該期の遺構の検出例は少ない。竪穴式住居址は、文京遺跡4次調査地にて2棟（前期前半）が検出されているにすぎず、この時期の道後城北地区の集落構造は不明な点が多い。

今回の調査では、竪穴式住居址は検出されなかったものの、道後地区における溝を伴った集落址の存在が明らかになった。溝は3条あり、幅5m前後、深さ1.3～1.5mを測る大型のものである。このうちの2条は、同一の溝と思われ、環壕としての機能を持つことになる。他の1条は、2条の溝で囲まれた地域内を仕切る溝と考えられた。

環壕内地域では、検出遺構は土坑に限られる。その数は貯蔵穴が20基と、性格が判断しえない土坑は165基を数え、埋土から6種類の土坑に区別できた。

溝と土坑との時間的關係では、埋土や切り合いから6段階の遺構変遷が追えた。

溝と土坑から出土した遺物をみると、土器と石器には形態の著しい変化はあまり認められない。ただし、土器に施文される沈線施文技法には様々なものがみられ、沈線文技法からは大きく2つの画期が認められた。

そこで、遺構の変遷と、土器施文技法の変遷とを対応させると、最初の画期はS D V 202・S D VI 104再掘削時、2回目の画期はS D VI 105掘削時にある。

S D V 202・S D VI 104再掘削時以前、つまり下層堆積時には土坑EとFが環壕内に存在し（集落変遷1・2期）、ヘラ状工具（技法a）と2条1組の工具（技法b）による沈線文技法がみられる（土器群—古相）。

次に、S D V 202・S D VI 104再掘削以降、中層堆積時には土坑CとDが環壕内に存在し（集落変遷3・4期）、2条1組の工具に加え、3条以上を1組とする工具（技法c）による沈線文技法がみられる（土器群—中相）。

その後、S D VI 105掘削後、S D V 202・S D VI 104中～上層堆積時に、土坑Bが環壕内に存在し（集落変遷5期）、クシ状工具（技法d）による沈線文技法がみられるようになる（土器群—新相）。

この結果、施文手法に注目すると、弥生時代前期末～中期初頭には沈線文技法に技法a～dの4種類があり、時間の経過とともに、その組合せは多くなり、最終期には、これらの4種類が同時に使用されるにいたる、いわゆる中期化の経緯が詳細にわかってきた。

一方、他地域との併行関係では、山口県・東北部九州地方からの搬入土器や外来系土器の出土があり、山口県からは綾羅木Ⅲ式に相当する土器が集落変遷の1・3・5期にみられ、東北部九州地方からは高槻式土器と城ノ越式土器模倣品が集落変遷の1期と5・6期とにみられる。

土器編年に照らし合わせると、1期にみられる高槻式土器は前期末、5・6期にみられる城ノ越式土器は中期初頭に時期比定されるものであり、これらは、松山平野と九州地方との土器の編年的研究及び交流・交易を知るうえで貴重な資料といえる。

ところで、松山平野内の同時期の溝（環壕）には、調査地南東4kmの来住台地上に久米高畑遺跡25次調査地、西方5kmの丘陵上に齊院烏山遺跡があり、平野内には同時に幾つかの環壕集落が存在していたことになる。

高知県では、田村遺跡において土坑のみを伴った環壕集落が存在しており、松山平野においても、このような機能をもった環壕集落の存在がクローズアップされる。

## 2) 弥生時代中期～後期

弥生時代中期から後期では、中期前葉と中葉の遺構は検出されず、中期後葉になり集落遺構が調査地北側に展開するようになる。道後城北遺跡群内では、遺跡群中央部から西部地域に、文京遺跡をはじめ、松山大学構内遺跡や松山北高等学校遺跡などが所在し、該期の集落址が多数検出されている。本調査では、遺跡群東部地域においても、これらと同時期の集落存在を新たに確認したことになる。

竪穴式住居址は、全体像のわかるものが2棟検出されている。S B VI 101は後期前葉、S B VI 102は後期後葉に時期比定される住居址で、平面形態は前者が円形、後者が長方形を呈するものである。松山平野内において、後期の住居址は円形と長方形の2者があり、今回検出の竪穴式住居址にも同様の状況がみてとれる。

出土遺物には、前期末～中期初頭と同様に、他地域からの搬入品もしくは外来系土器の出土がある。

中期後半では吉備地方（外来系）、後期では讃岐地方（搬入品）や山陰地方（外来系）からのものがあり、当時の他地域との交流を知るうえで好資料といえる。

また、包含層中からは、炭化種実（コナラ属堅果）が出土している。コナラ属の堅果は優良な食物であり、当時の人々の食生活を考えるうえで貴重な資料といえる。

### (3) 古墳時代

古墳時代の遺構・遺物は、古墳時代後期、6～7世紀に限られる。竪穴式住居址は検出されなかったものの、溝や土坑及び当該期の遺物の検出は、調査地周辺に居住域が存在することを物語っている。道後城北遺跡群内では、道後今市遺跡や文京遺跡、松山大学構内遺跡などで、該期の集落遺構が多数検出されている。遺跡群東部地域においても、該期の集落が広く展開しているものと推測される。

### (4) 古代

道後城北遺跡群内では、古代の遺構検出例は少なく、集落様相は不明な点が多い。岩崎遺跡が所在する道後地区には、白鳳期の寺院址である内代廃寺や湯ノ町廃寺が古くから知られているが、詳細な調査は実施されておらず、全容は定かでない。

今回の調査では、奈良時代の「L」字状に折れ曲がる溝SDV201・SDV401が特筆すべき遺構である。両溝からは、硯の破片をはじめ、畿内産土師器や土馬などが出土しており、単なる区画溝とは考えがたい。平野内では、来住台地上に展開する古代の官衙・寺院施設に伴う方形区画溝の存在が、近年の調査で明らかになっている。このことを考慮すると、今回検出した溝も官衙や寺院に伴う可能性は高く、来住地区と同様、道後地区においても官衙施設が存在した可能性は充分考えられる。古代における道後城北遺跡群の集落様相を改めて考えていく必要があるだろう。

平安時代の遺構は掘立柱建物址1棟を検出し、遺物には9世紀後半から10世紀前半の京都産緑釉陶器、灰釉陶器、平安期の瓦片が出土している。したがって、奈良時代だけでなく、平安時代にも官衙や寺院に伴う施設が、調査地や周辺地域に展開している可能性は高い。

### (5) 中世

中世においては、湯築城築城時に関連する資料は得ることができなかったものの、築城以前、16世紀前半以前の道後城北遺跡群東部地域の集落様相が、多少なりとも判明してきた。

最大の成果は、中世における調査地内の土地利用方法が確認されたことである。調査地南側は生産エリア、北側は居住エリアとして、土地利用がなされていたものと判断される。

なお、水田や畑土壌の分析から、当時の生産体制は二毛作を取り入れていた可能性が高い。

微高地上に展開する建物址は、1×2間の比較的小規模のものが点在している。遺跡群東部地域では、中世の遺構はこれまでに、調査地北西0.5kmの道後今市遺跡において検出例がある。同4次調査では、12～13世紀の建物址が検出され、SB01は桁行8m、梁行4.5mを測る大型の建物址になり、同10次調査では、13～16世紀前半の建物址が検出され、桁行7mを越える建物址も存在する。岩崎遺跡検出の建物址と比較すると、大型の建物址が道後今市遺跡内にみられることから、当時の集落の中心は道後今市にあったと推測され、岩崎遺跡近隣には一般民衆、もしくは農村集落が営まれていたのである。

### (6) 近世

近世の遺構は溝1条を検出した。東西方向に延びる溝で、遺物の出土状況から石組み溝とみられる。溝内からは陶磁器（備前焼）が出土しており、時期は18世紀頃になる。道後城北遺跡群内では、近

世遺構の検出例は少なく、集落の全容は未だに判明しない。

岩崎遺跡の調査では、弥生時代前期末～中世における地形形成と、集落変遷との関係が明らかになった。弥生時代、古墳時代～古代、中世の各時代における集落の立地には、地形環境が多大の影響を与えることになる。

弥生時代では、明黄褐色シルトの堆積が集落形成に大きく起因し、中世では、低地部に生産域、微高地に居住域という、目的の異なった土地利用がなされている。このうち、中世の水田や畑は、区画や形状が確定することができず、今後に課題を残す結果となった。

また、今回の調査では最大の成果として、弥生時代前期末～中期初頭における集落様相と、その変遷の解明があげられる。松山平野内では、来住台地上に該期の集落遺構は多数検出されているが、その様相は判然としない。もちろん、道後城北遺跡群内においても、前期末～中期初頭の集落遺構はこれまで希薄であり、道後城北遺跡群の集落変遷を補充する資料になっている。

一方では、土坑の性格、居住域の位置、環壕内に設置された溝で区切られたエリアとその使用方法などは課題を残すものになった。

土器については、ヘラ状工具と2条1組の工具、3条以上を1組とする工具、及びクシ状工具により施文された土器が併存することから、ヘラ描きからクシ描きへと変化する施文方法の転換期や、時期区分（編年）論に課題を投げかけるものとなった。

今後は、道後城北遺跡群内における弥生時代～中世までの詳細な遺跡の様相を明らかにし、集落論を充実していかねばならない。

#### 〔参考文献〕

財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000 『田村遺跡群現地説明会資料』

## 一 凡 例 一

1. 付図に使用した岩崎遺跡の遺構は、最終検出面でみつかったものを掲載している。Ⅰ・Ⅱ区は主に中世、Ⅲ・Ⅳ区は古墳時代から古代、Ⅴ・Ⅵ区は弥生時代前期末から中期初頭の遺構である。
2. 分布・立会・確認調査は、愛媛大学が実施した『愛媛大学構内遺跡調査集報Ⅰ（愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅴ）』より引用したものである。

表59 分布・立会・確認調査一覧

番号	遺 跡 名	調査種別	所 在 地	調査年度	備 考	参考文献
①	持田・岩崎遺跡	確 認	持田町1丁目5番22号	平成5年度	1993年度愛媛大学構内遺跡確認調査	1・2
②	持田・岩崎遺跡	立 会	持田町1丁目5番22号	平成4年度	愛媛大学附属小学校給水設備工事に伴う調査	1・2
③		立 会	道後町2丁目815	平成59年度	調査データの詳細は不明	1・2
④	道後公園山麓遺跡	分 布	道後湯築	昭和38年度	平形銅剣出土推定値	1・2・3
⑤	持 田 遺 跡	分 布	南町1丁目2・3番地	昭和38年度	弥生中期の土器が出土	1・2・3
⑥	持 田 遺 跡	不時発見	持田市営アパート北側道路		弥生前期の木葉文壺が井戸掘り中に出土	1・2・4
⑦	道後南町2丁目遺跡	不時発見	岩崎町2丁目7 NHK道後寮敷地内		弥生前期～後期の土器が出土	1・2・4

### 【参考文献】

1. 愛媛大学埋蔵文化財調査室 1997 『愛媛大学構内遺跡調査集報Ⅰ』
2. 愛媛大学埋蔵文化財調査室 1995 『愛媛大学構内遺跡調査集報Ⅰ（図版編）』
3. 愛媛県教育委員会 1963 愛媛県埋蔵文化財調査カード
4. 西田 栄 1957 「道後土居窪弥生遺跡の発掘報告」『伊予史談会 150』

# 報告書抄録

ふりがな	いわさきいせき							
書名	岩崎遺跡							
副書名								
巻次	— 本文編 —							
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第71集							
編著者名	宮内 慎一・相原 秀仁							
編集機関	松山市教育委員会 財団法人 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL089-948-6605 〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6 TEL089-923-6363							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いわさきいせき 岩崎遺跡	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 もちだちょう いわさきちょう 持田町・岩崎町	38201		33° 50' 28"	132° 47' 13"	19960603～ 19980331	13,000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩崎遺跡	集落	弥生	竪穴式住居址・溝・自然流路・土坑	弥生土器・石器・鉄器・動物骨・種実・分期銅形土製品・ガラス玉	弥生時代前期末から中期初頭の環壕集落
		古墳	溝・自然流路・土坑	土師器・須恵器・鉄器	
		古代	掘立柱建物址・溝・自然流路・土坑	土師器・須恵器・瓦・緑釉陶器・灰釉陶器・鉄器・銅銭・土馬	L字状に折れ曲がる溝(土馬出土)
		中世	掘立柱建物址・溝・自然流路・水田址・畑址	土師器・須恵器・鉄器・木器・輸入陶磁器	土地利用方法
		近世	溝	土師器・陶磁器	

松山市文化財調査報告書 第71集

# 岩 崎 遺 跡 一 本 文 編 一

---

平成11年3月31日 発行

編 集 松 山 市 教 育 委 員 会  
〒790-0003 松山市二番町4丁目7-2  
TEL (089) 948-6605

発 行 財団法人 松山市生涯学習振興財団  
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー  
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6  
TEL (089) 923-6363

印 刷 岡 田 印 刷 株 式 会 社  
〒790-0012 松山市湊町7丁目1-8  
TEL (089) 941-9111

---